秋田県文化財調査報告書第298集

館の上遺跡

――一般国道７号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ―

２０００・３

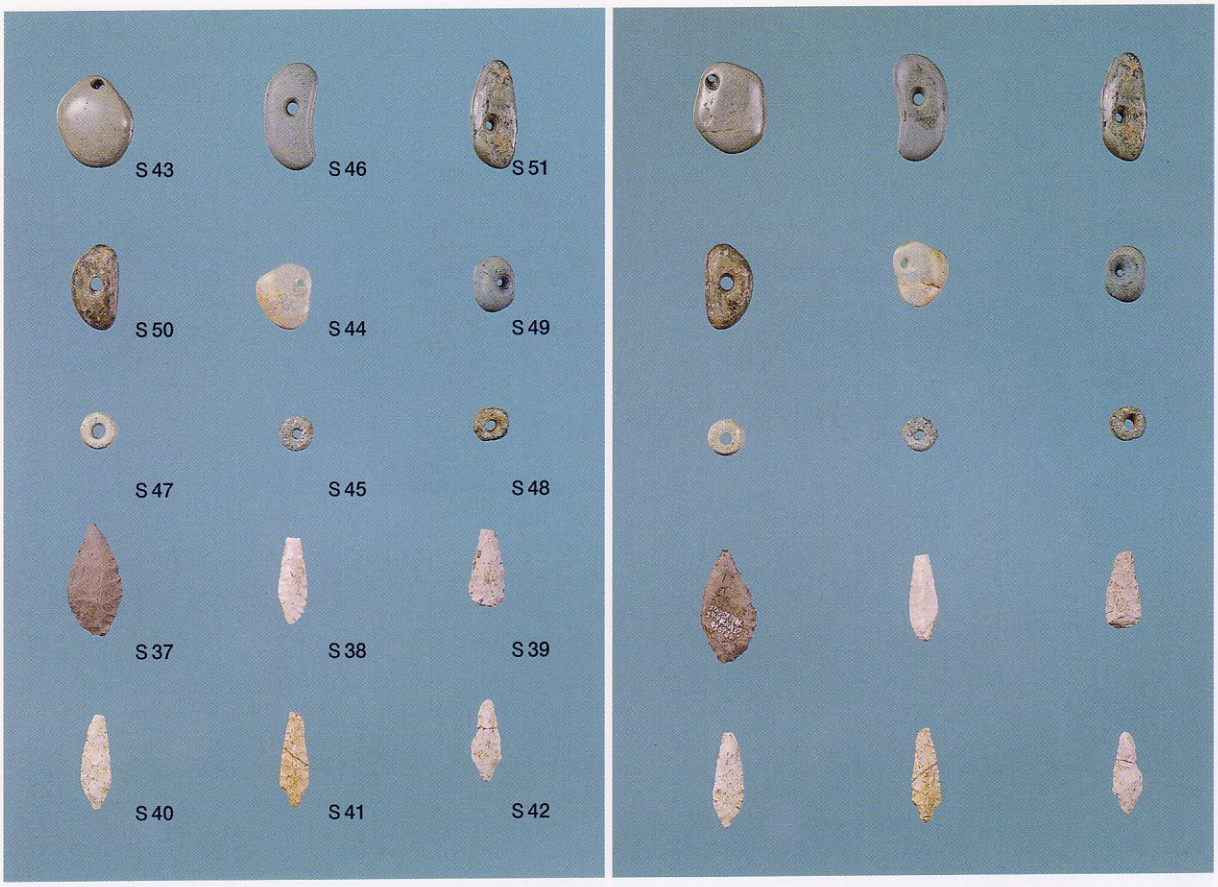
秋田県教育委員会

館（たて）の上（うえ）遺跡

——一般国道７号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ—

２０００・３

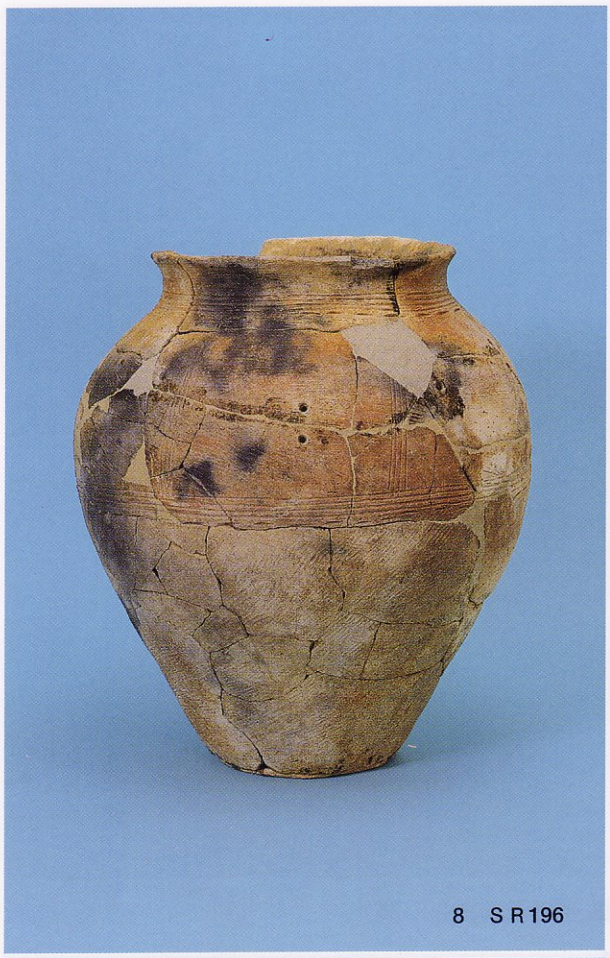
秋田県教育委員会



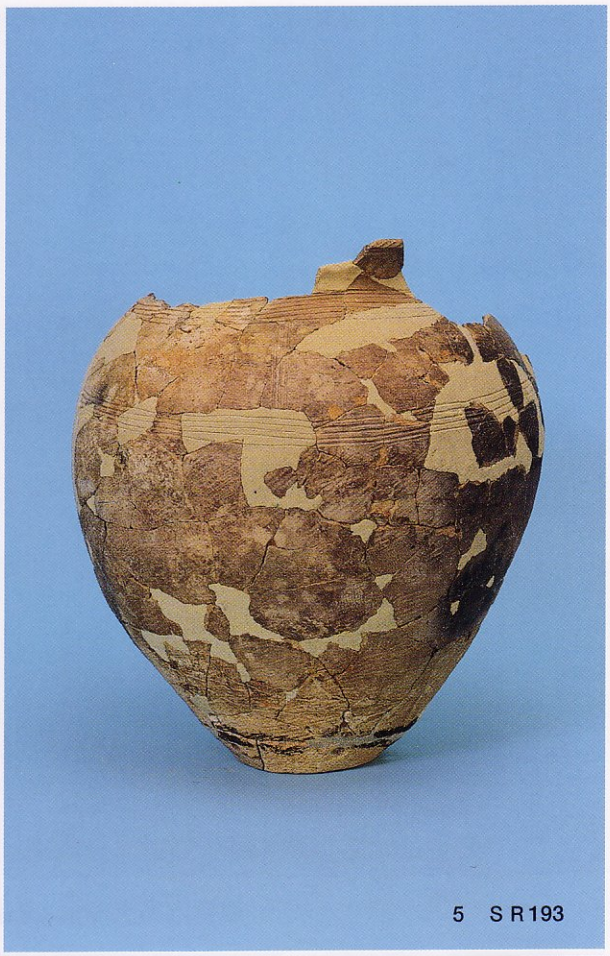
遺構内出土の玉と石鏃（左：表、右：裏）

土器埋設遺構の集合状態（北▷）

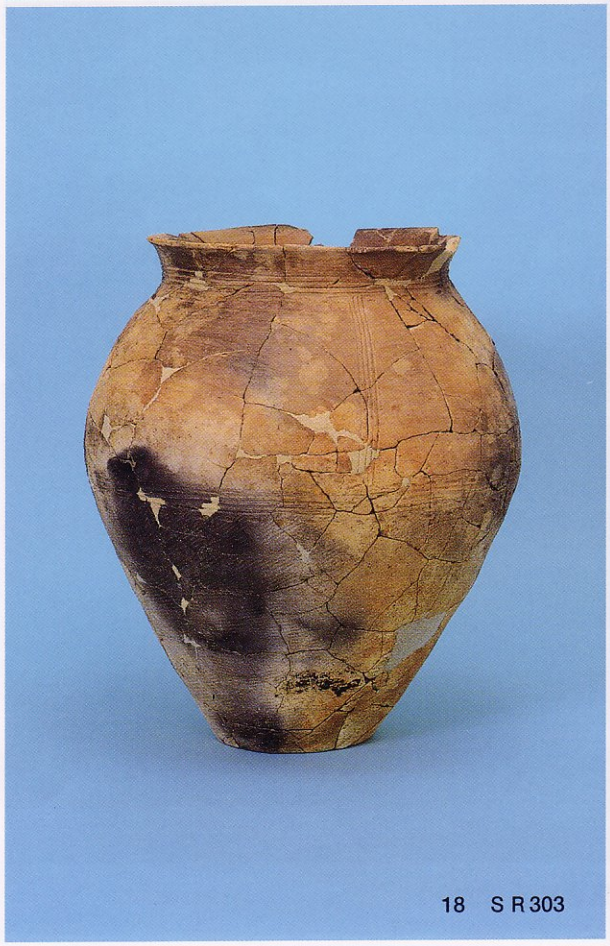
巻頭図版2　弥生時代の土器(1)



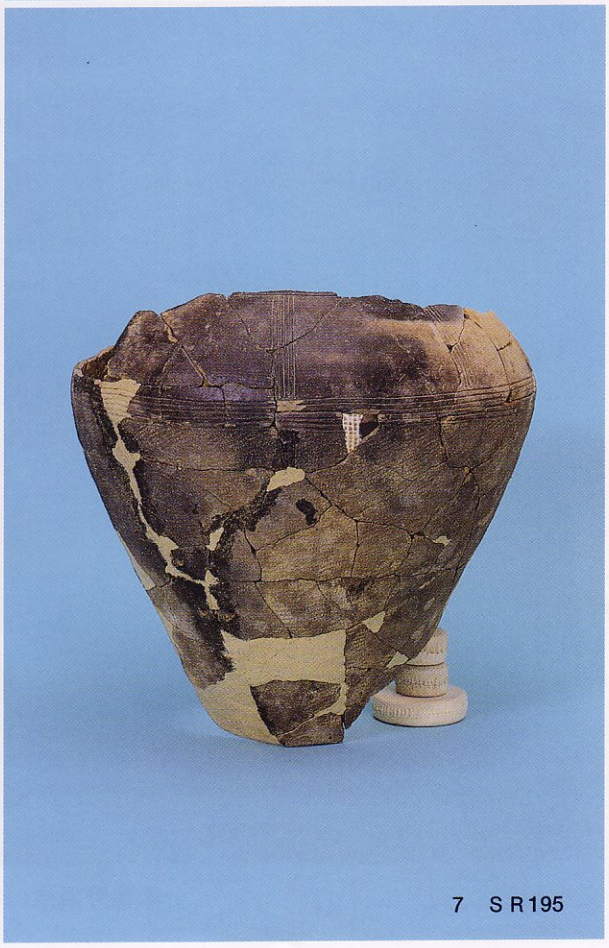
8　ＳＲ196



5　ＳＲ193

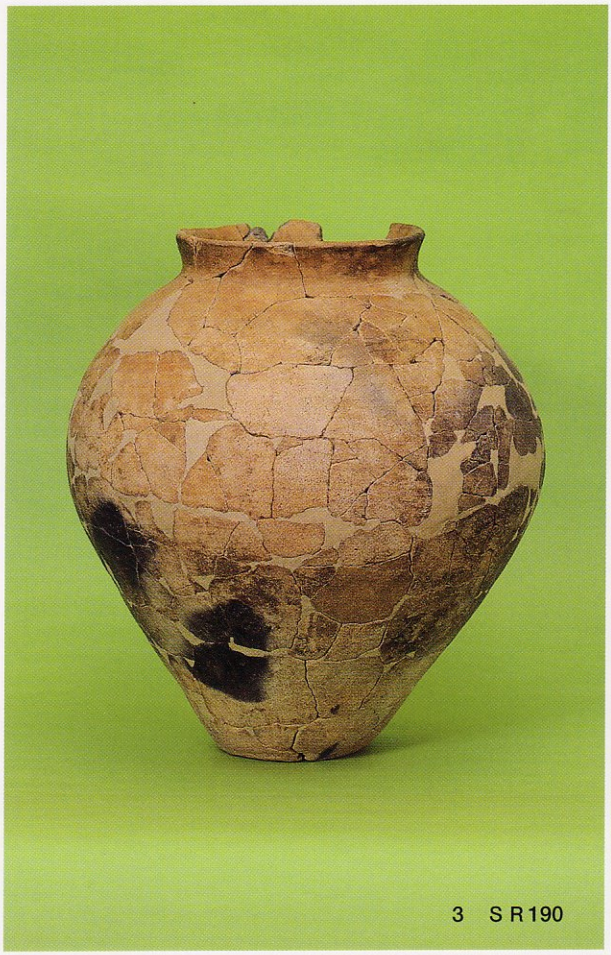


18　ＳＲ303

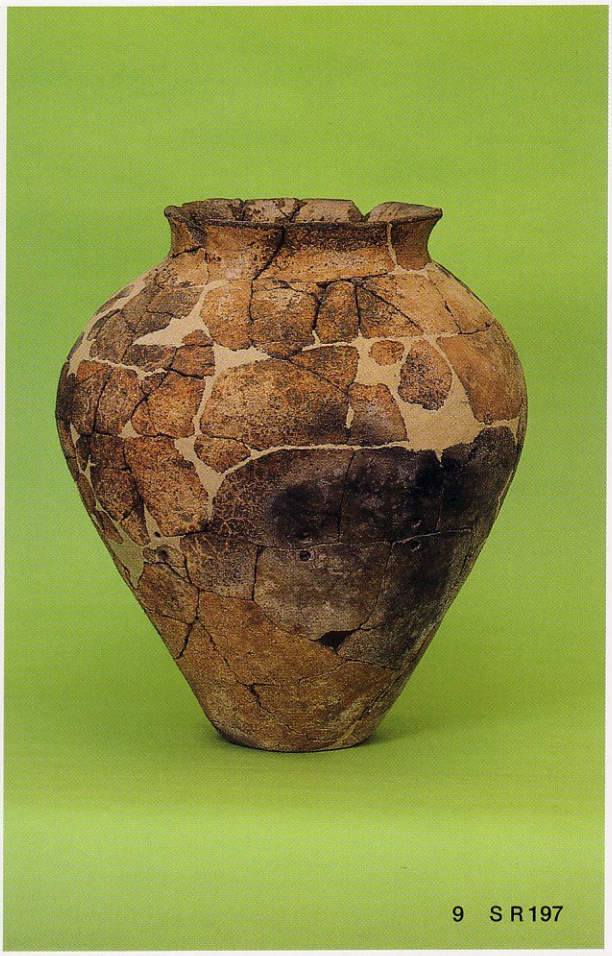


7　ＳＲ195

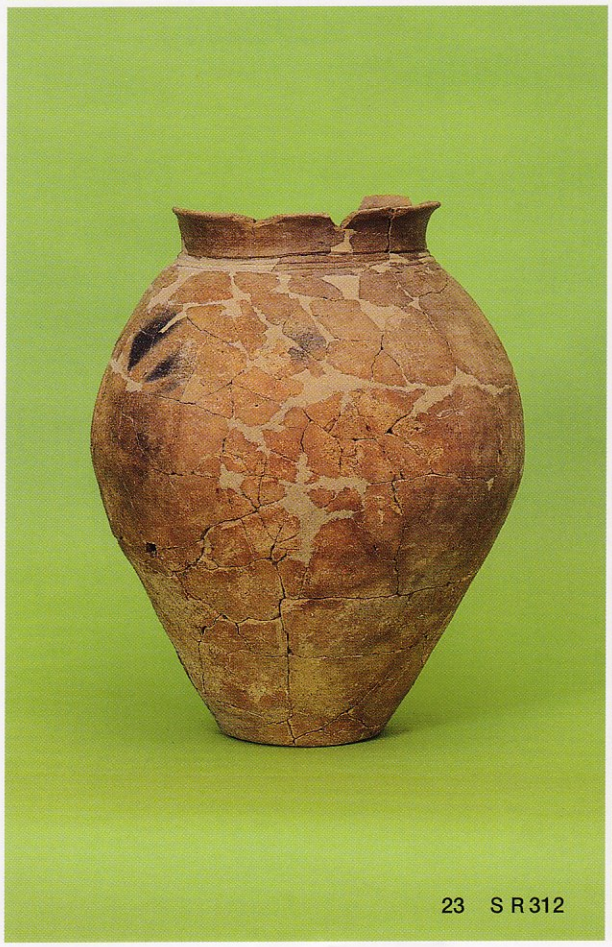
巻頭図版3　弥生時代の土器(2)



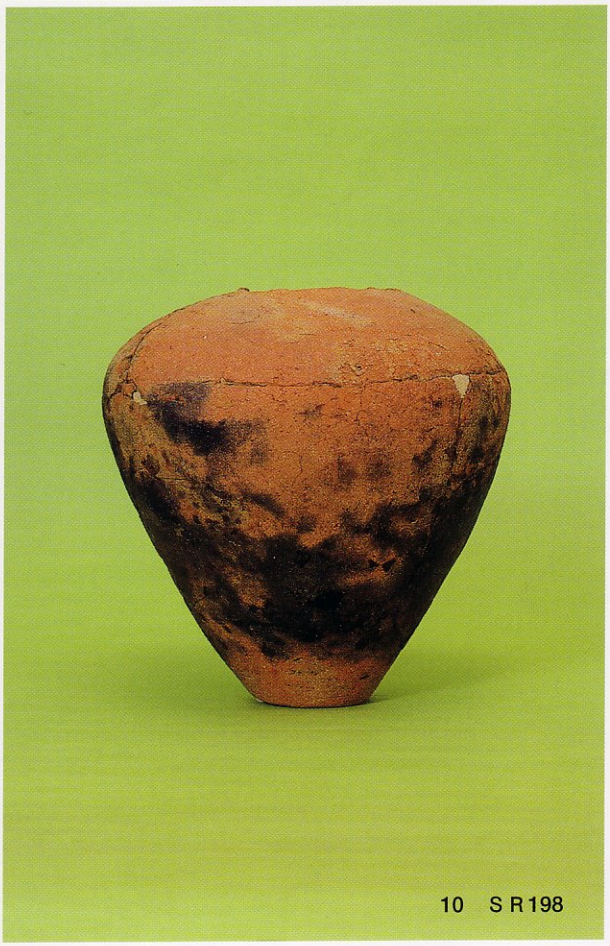
3　SR190



9　SR197

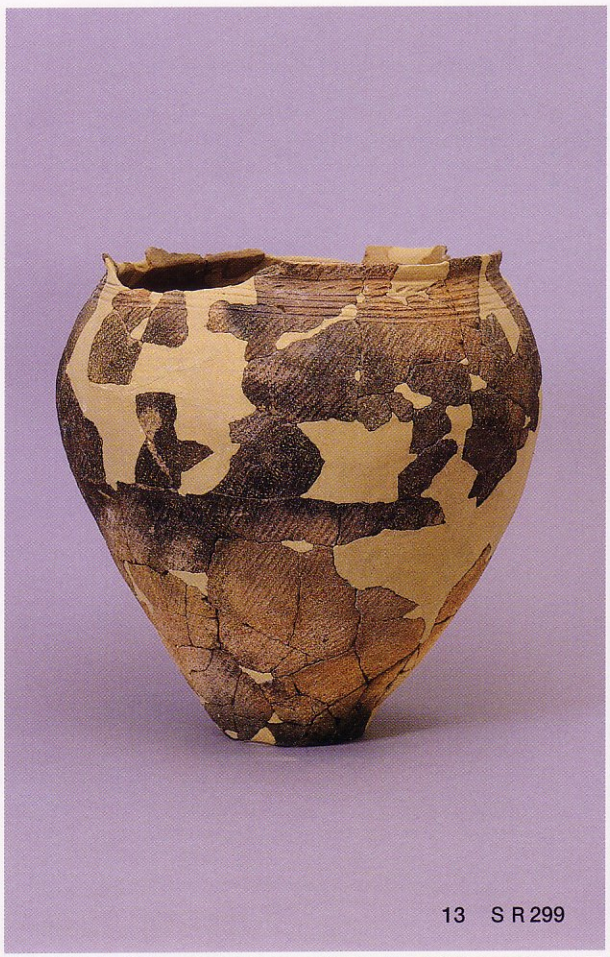


23　SR312

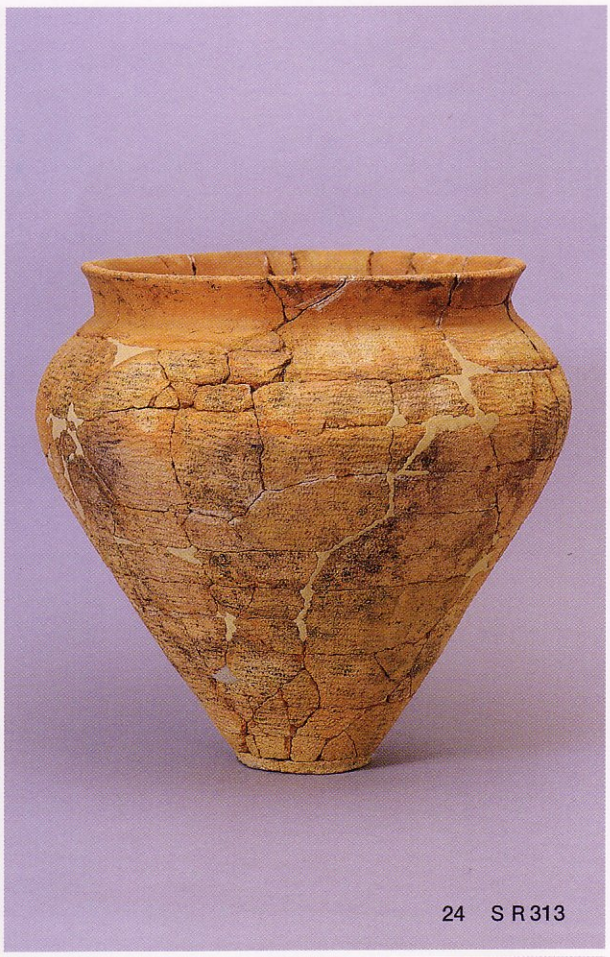


10　SR198

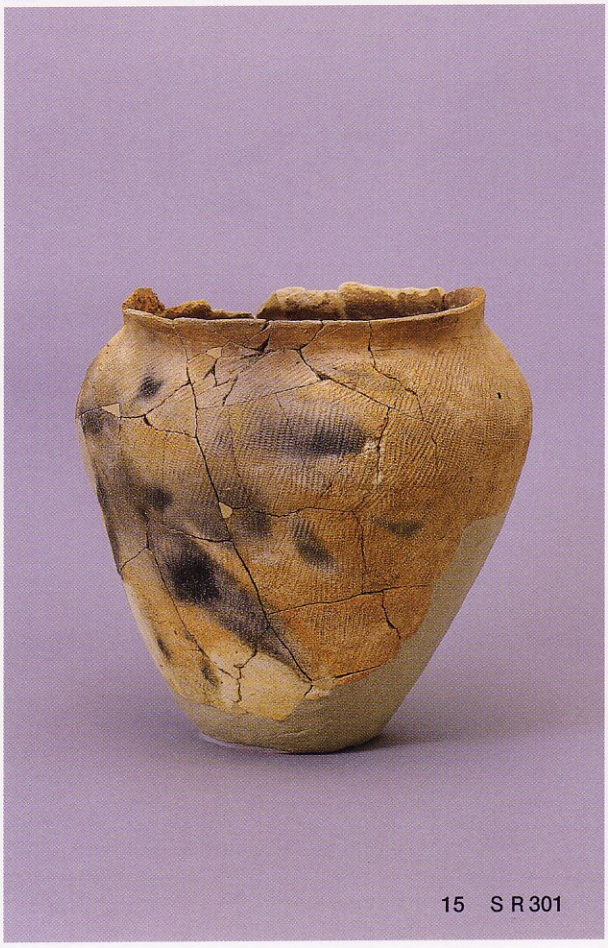
巻頭図版4　弥生時代の土器(3)



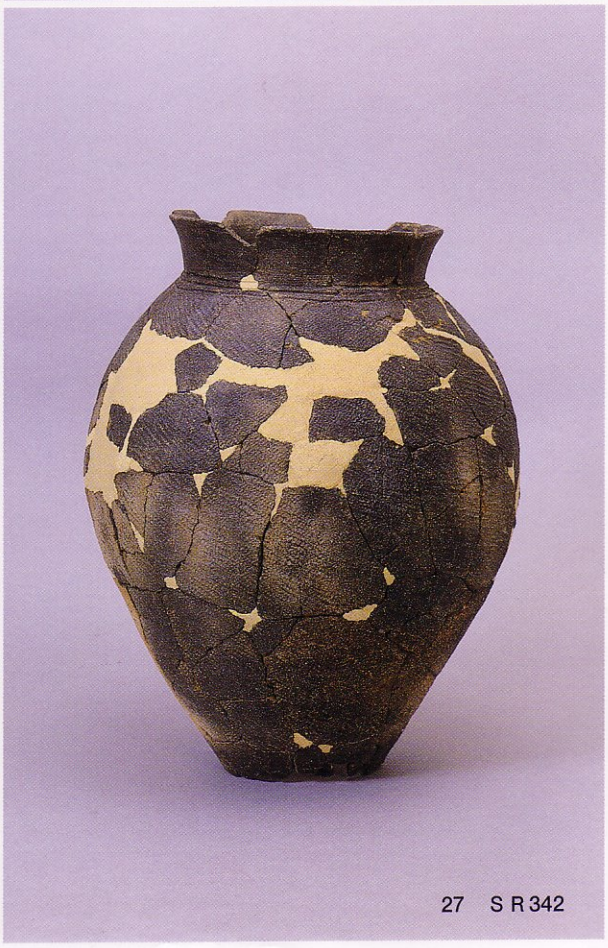
13　S R 299



24　S R 313

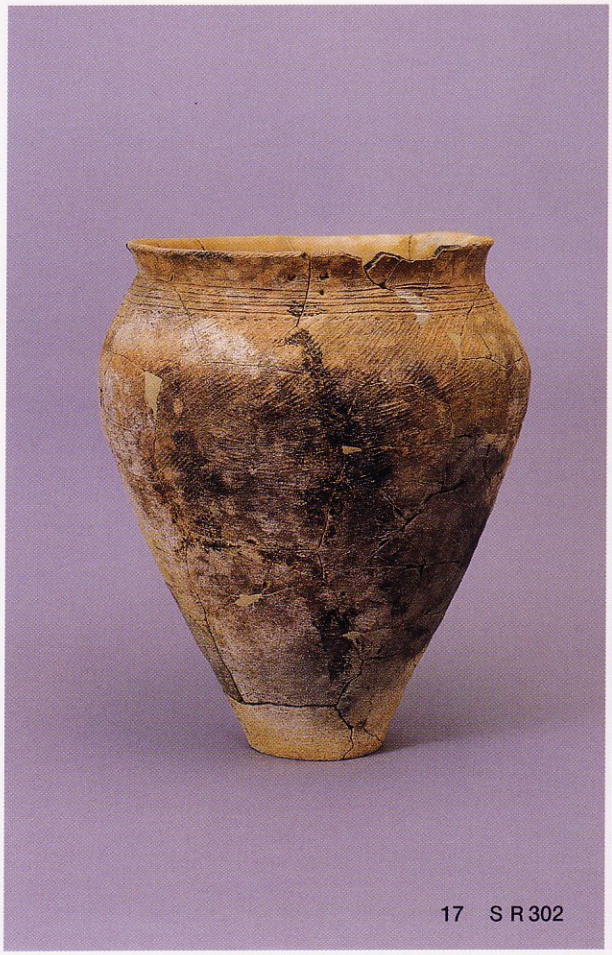


15　S R 301

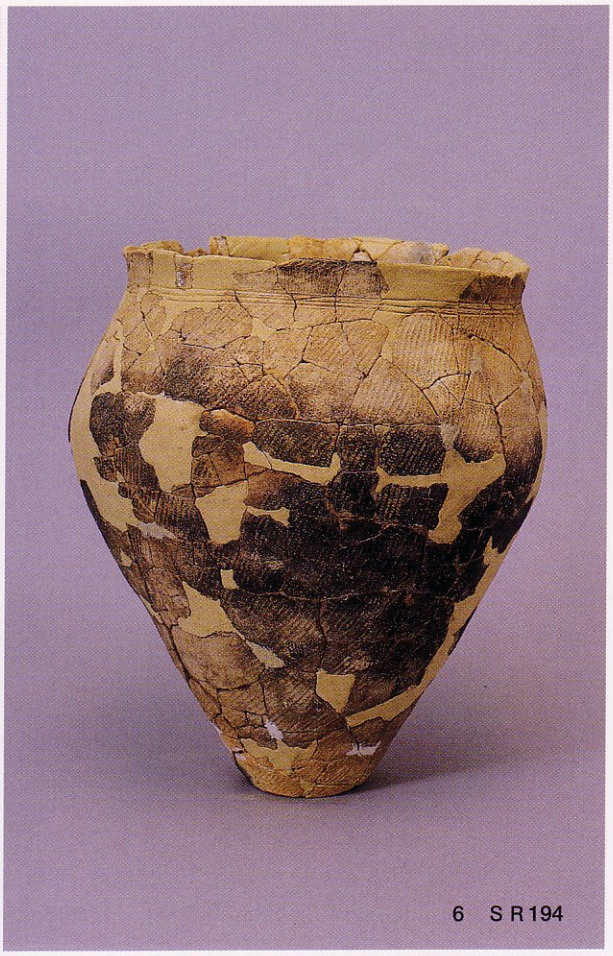


27　S R 342

巻頭図版5　弥生時代の土器(4)

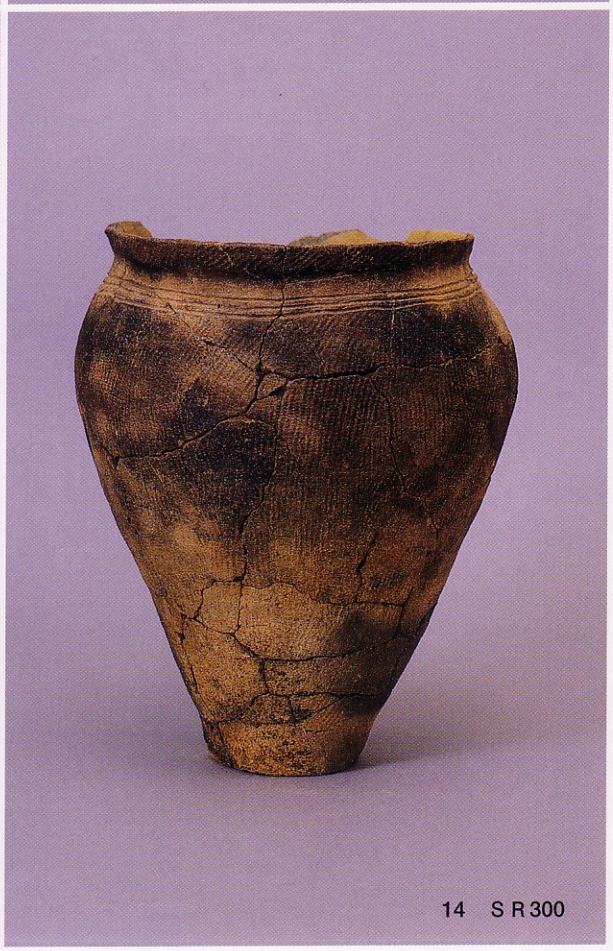


17　ＳＲ302



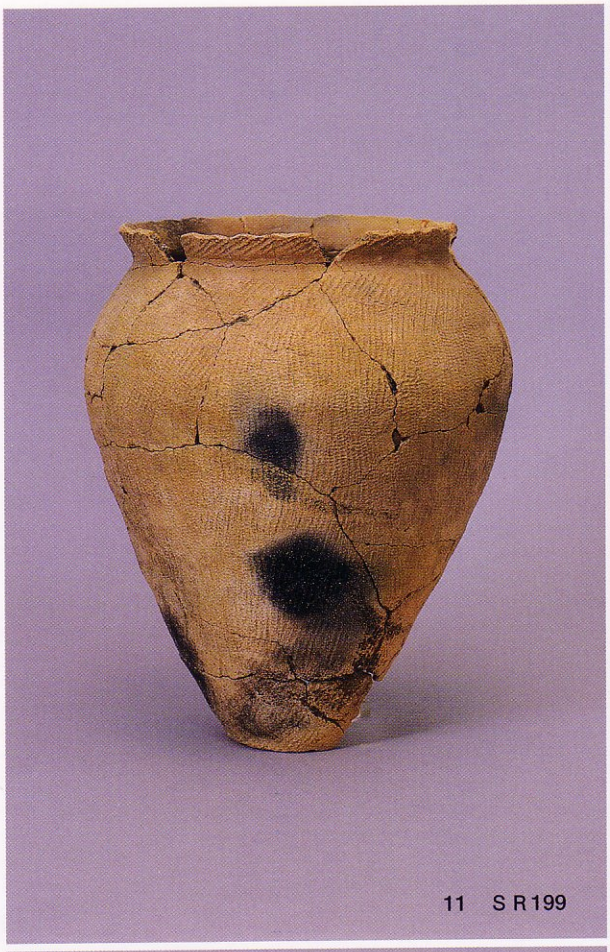
6　ＳＲ194

ＫＡ38区

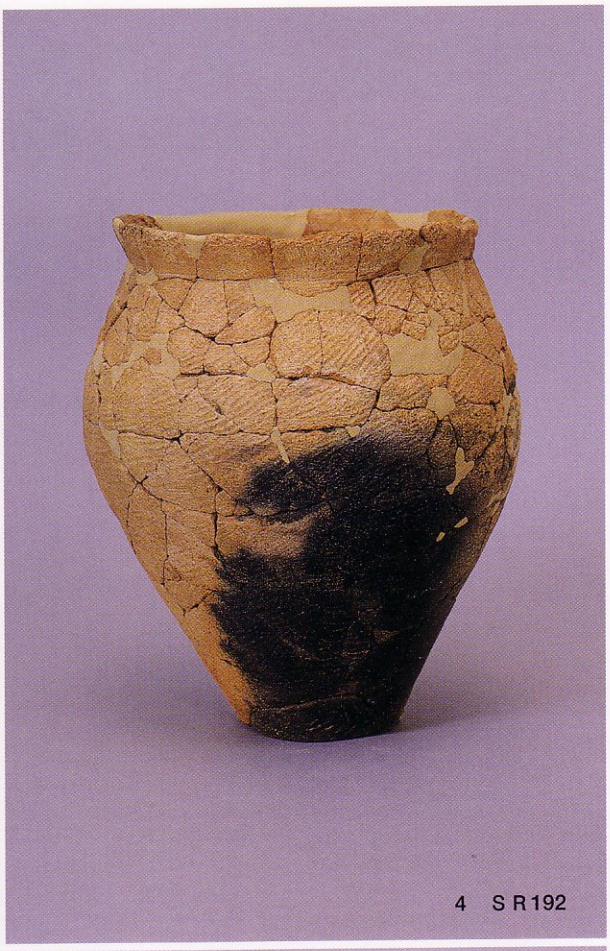


14　ＳＲ300

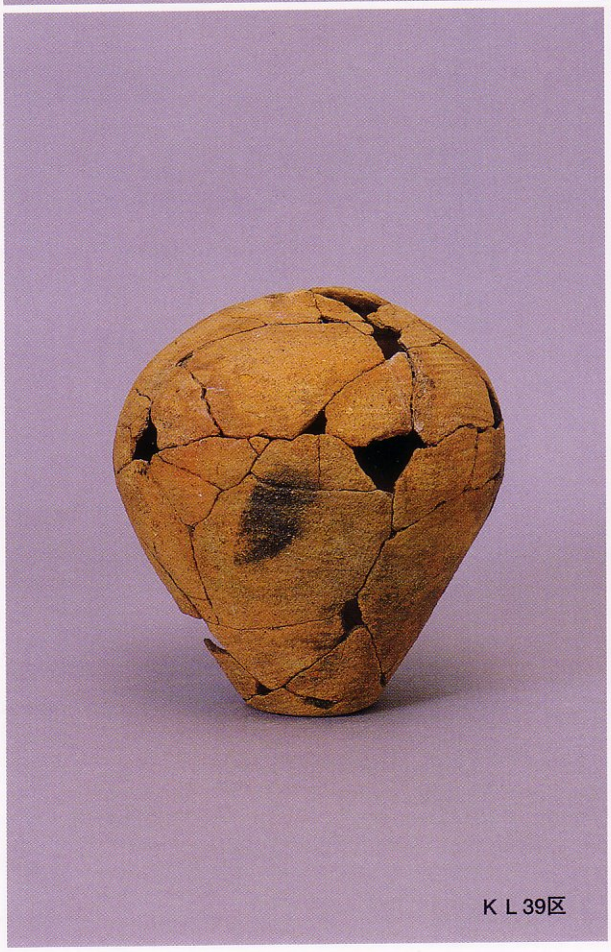
巻頭図版6　弥生時代の土器(5)



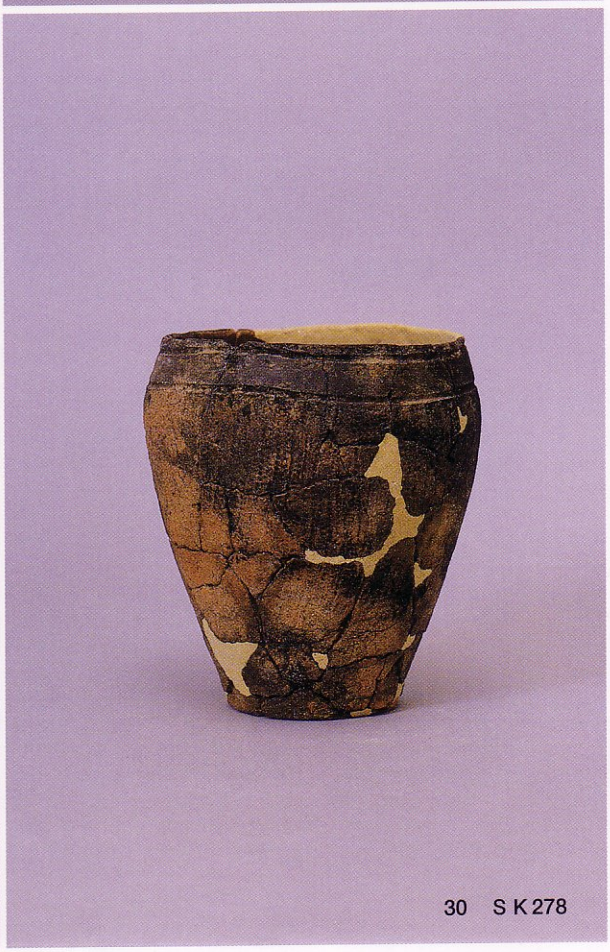
11　ＳＲ199



4　ＳＲ192



ＫＬ39区



30　ＳＫ278

序

郷土の歴史と文化は、未来をよりよく生きるための糧であり、埋蔵文化財の保護と活用はそれを継承する現代人の責務であります。

さて、一般国道７号琴丘能代道路は、高速交通時代を迎えた本県北部の沿岸と内陸を結ぶ基幹道路として計画された自動車専用道路でありますが、計画路線上には多数の遺跡のあることがわかりました。このため、秋田県教育委員会は、工事に先立ち、昭和61年度からそれらの遺跡の発掘調査を進めて参りました。その調査成果は、昭和62年度から平成10年度にかけて６冊の報告書として刊行され、各年度の発掘調査報告会でも県民に速報してきたところであります。

そのような遺跡の一つである館の上遺跡は、八竜町鵜川地区に所在する広大な遺跡で、平成５年度・６年度・10年度の三箇年にわたって発掘調査を実施いたしました。調査の結果、縄文時代では、フラスコ状土坑や陥し穴が見つかり、貯蔵と狩猟の場であることが分かりました。弥生時代には、遠賀川系土器を伴う土器埋設遺構や土坑が作られ、集団墓地であることが判明しました。また、平安時代の集落の様子も知ることができました。

本書は、これまでの館の上遺跡の発掘調査成果をまとめたものであります。本書が学術の振興はもとより郷土愛を育む資料として利用いただければ幸いです。

最後に、本調査の実施から報告書刊行に至るまで御協力をいただきました建設省東北建設局能代工事事務所、八竜町教育委員会並びに関係各位に対し厚くお礼申し上げます。

平成12年３月

秋田県教育委員会

教育長　小　野　寺　清

例　　言

1．本書は、一般国道７号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書の７冊目に当たる報告書である。

2．本書は、平成５・６・10年度に発掘調査した館の上遺跡の調査成果を収めたものである。

3．本調査区は、平成５・６・10年度調査区に関して、便宜的にＡ区、Ｂ区、Ｃ区の名称を付した。

4．本書は、第５章を除いて利部修が執筆し編集した。また、平成５・６年度の遺構作図は、磯村亨と松岡忠恭が中心になり、浄書は高橋俊幸と本多高生の協力を得た。

5．第５章のうち、第１節の「館の上遺跡から出土した遺構、遺物に残存する脂肪の分析」は株式会社ズコーシャ総合科学研究所に、第２節の「秋田県、館の上遺跡出土土器胎土の植物珪酸体分析」は、株式会社古環境研究所に委託し、その報告を掲載した。

6．遺物のトレースおよび写真撮影は、株式会社シン技術コンサルに業務委託した。

7．土層や遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』(1994年版)によった。

8．本書に使用した地形図は、国土地理院発行の２万５千分の１『森岳』である。

9．本書挿図中の方位は、座標北を表している。

10．本文では、グリッドを区と表記してある。

11．石器、石製品の石質鑑定は、日本第四紀学会会員佐藤三七氏による。

12．本報告書を作成するにあたり、以下の方々よりご指導、ご助言を賜った。記して感謝申し上げます。

（五十音順、敬称略）和泉昭一　江口浩文　岡安雅彦　加藤良彦　川崎吉剛　川尻真　木村将来　小林喜兵　七田忠昭　武田孝義　立石泰久　田中敏　永瀬福男　藤原妃敏　松村道博　柳沼仁克　山崎和夫　若松鉄四郎

凡　　例

1．遺構番号は、検出順に番号と略記号を付した。略記号は以下の通りである。

ＳＩ…竪穴住居跡　ＳＫＩ…竪穴状遺構　ＳＢ…掘立柱建物跡　ＳＫ…土坑　ＳＫＦ…フラスコ状土坑　ＳＫＴ…陥し穴状土坑　ＳＲ…土器埋設遺構　ＳＱ…集石遺構　ＳＥ…井戸　ＳＨ…郭　ＳＮ…焼土遺構　ＳＤ…溝・空堀　ＳＫＰ…柱穴様ピット　ＳＸ…性格不明遺構

2．土層の表記は、色調、含有物の種類と状態、粘性、しまりに基準をおいた。

3．遺構は、小型の場合は1/40、大型の場合は1/60を基本にしたが、そうでないものもある。遺物は、1/2と1/3を基本にしたが、適宜任意の縮尺を与えたものもある。

4．挿図中の遺物番号は、土器と石器のそれぞれを通し番号にしたが、石器についてはＳを付した。

5．遺物観察表の、大きさの単位はmmである。また、(　)の表記は推定値もしくは現存値を表す。

6．土器の実測は右断面とし、必要なものには拓本を添えてある。

7．図版中の遺物には、挿図中の遺物番号をそのまま用いてある。また挿図、図版共に、グリッド表記は遺構外出土遺物を表す。

目　　次

序 …… i
例言 …… ii
凡例 …… ii
本文目次 …… iii
挿図目次 …… iv
表目次 …… viii
巻頭図版目次 …… ix
図版目次 …… ix

本 文 目 次

第１章　はじめに …… 1
　第１節　調査に至る経過 …… 1
　第２節　調査要項 …… 1
第２章　遺跡の環境 …… 3
　第１節　遺跡の位置と立地 …… 3
　第２節　歴史的環境 …… 3
第３章　発掘調査の概要 …… 7
　第１節　遺跡の概観 …… 7
　第２節　調査の方法 …… 10
　第３節　調査の経過 …… 11
　第４節　整理作業の方法と経過 …… 12
第４章　調査の記録 …… 13
　第１節　縄文時代の遺構と遺物 …… 13
　　1　陥し穴状土坑 …… 13
　　2　フラスコ状土坑 …… 13
　　3　土坑 …… 18
　　4　集石遺構 …… 23
　　5　遺構外出土石器 …… 23
　第２節　弥生時代の遺構と遺物 …… 30
　　1　土器埋設遺構 …… 30
　　2　土坑 …… 64
　　3　遺構外出土土器 …… 85
　第３節　平安時代の遺構と遺物 …… 86
　　1　竪穴住居跡 …… 86
　　2　竪穴状遺構 …… 108

3　掘立柱建物跡…… 116
4　井戸…… 118
5　土坑…… 118
6　性格不明遺構…… 133
第４節　中世の遺構…… 136
1　郭…… 136
2　空堀…… 136
第５節　時代不明遺構…… 137
1　掘立柱建物跡…… 137
2　土坑…… 137
3　焼土遺構…… 139
4　溝…… 139
5　柱穴様ピット…… 149
6　性格不明遺構…… 150
第６節　時代不明の遺構外出土遺物 …… 150
1　石製品…… 150
2　土製品…… 150
第５章　自然科学的分析…… 153
第１節　館の上遺跡から出土した遺構、遺物に残存する脂肪の分析 …… 153
第２節　秋田県、館の上遺跡出土土器胎土の植物珪酸体分析 …… 175
第６章　まとめ…… 177

挿　図　目　次

第１図　遺跡の位置と周辺遺跡の分布…… 4
第２図　平成５・６年度調査区 …… 8
第３図　平成10年度調査区…… 9
第４図　平成10年度基本土層図…… 9
第５図　土坑（１）縄文①ＳＫＴ106・166・471…… 14
第６図　土坑（２）縄文②ＳＫＦ66・136・137 …… 15
第７図　土坑（３）縄文③ＳＫＦ138・142・155…… 16
第８図　土坑（４）縄文④ＳＫＦ396・473・475…… 17
第９図　土坑（５）縄文⑤ＳＫＦ476・477、ＳＫ130・131…… 19
第10図　土坑（６）縄文⑥ＳＫ135・143・147・150・151…… 21
第11図　土坑（７）縄文⑦ＳＫ152～154・159・170、集石遺構ＳＱ68…… 22
第12図　遺構外出土石器（１）縄文①Ｓ１～Ｓ10…… 24
第13図　遺構外出土石器（２）縄文②Ｓ11～Ｓ18 …… 25
第14図　遺構外出土石器（３）縄文③Ｓ19～Ｓ27 …… 26

第15図　遺構外出土石器（４）縄文④Ｓ28～Ｓ33 …… 27
第16図　遺構外出土石器（５）縄文⑤Ｓ34～Ｓ36 …… 28
第17図　土器埋設遺構の配置…… 31
第18図　土器埋設遺構（１）弥生①ＳＲ188・190・192…… 32
第19図　遺構内出土土器（１）弥生①ＳＲ188…… 33
第20図　遺構内出土土器（２）弥生②ＳＲ190…… 34
第21図　遺構内出土土器（３）弥生③ＳＲ192・193…… 35
第22図　土器埋設遺構（２）弥生②ＳＲ193～195 …… 37
第23図　遺構内出土土器（４）弥生④ＳＲ194・195…… 38
第24図　土器埋設遺構（３）弥生③ＳＲ196～198 …… 40
第25図　遺構内出土土器（５）弥生⑤ＳＲ196…… 41
第26図　遺構内出土土器（６）弥生⑥ＳＲ197・198…… 42
第27図　土器埋設遺構（４）弥生④ＳＲ199・298・299…… 44
第28図　遺構内出土土器（７）弥生⑦ＳＲ199・298…… 45
第29図　土器埋設遺構（５）弥生⑤ＳＲ300～302 …… 47
第30図　遺構内出土土器（８）弥生⑧ＳＲ299・300…… 48
第31図　遺構内出土土器（９）弥生⑨ＳＲ301…… 49
第32図　遺構内出土土器(10) 弥生⑩ＳＲ302…… 50
第33図　遺構内出土土器(11) 弥生⑪ＳＲ302…… 51
第34図　土器埋設遺構（６）弥生⑥ＳＲ303・306・307…… 53
第35図　遺構内出土土器(12) 弥生⑫ＳＲ303…… 54
第36図　遺構内出土土器(13) 弥生⑬ＳＲ306・307・309…… 56
第37図　土器埋設遺構（７）弥生⑦ＳＲ309・311・312…… 57
第38図　遺構内出土土器(14) 弥生⑭ＳＲ311…… 58
第39図　遺構内出土土器(15) 弥生⑮ＳＲ312…… 59
第40図　土器埋設遺構（８）弥生⑧ＳＲ313・330・342…… 61
第41図　遺構内出土土器(16) 弥生⑯ＳＲ313…… 62
第42図　遺構内出土土器(17) 弥生⑰ＳＲ330・342…… 63
第43図　遺構内出土石器 弥生Ｓ37～Ｓ42 …… 64
第44図　遺構内出土石製品 弥生Ｓ43～Ｓ51 …… 65
第45図　土坑（８）弥生①ＳＫ224・227・228…… 67
第46図　土坑（９）弥生②ＳＫ229・235～237・239・241 …… 68
第47図　土坑(10) 弥生③ＳＫ242～247 …… 70
第48図　土坑(11) 弥生④ＳＫ248・251～253・255 …… 71
第49図　土坑(12) 弥生⑤ＳＫ256・261～263・266 …… 73
第50図　土坑(13) 弥生⑥ＳＫ268～270・272・274・275 …… 75
第51図　土坑(14) 弥生⑦ＳＫ276・278～280・282 ……76

第52図　遺構内出土土器(18) 弥生⑱28～31、遺構外出土土器 弥生32～34 …… 77
第53図　土坑(15) 弥生⑧ＳＫ283～288 …… 79
第54図　土坑(16) 弥生⑨ＳＫ289～293 …… 81
第55図　土坑(17) 弥生⑩ＳＫ294～296・325 …… 83
第56図　土坑(18) 弥生⑪ＳＫ327・329・333・334・348…… 84
第57図　竪穴住居跡(１) 古代①ＳＩ71・122 …… 87
第58図　遺構内出土土器(19) 古代①35～48 …… 88
第59図　遺構内出土土器(20) 古代②49～56 …… 89
第60図　遺構内出土土器(21) 古代③ＳＩ57～71 …… 90
第61図　竪穴住居跡(２) 古代②ＳＩ107・109…… 92
第62図　遺構内出土土器(22) 古代④72～87 …… 93
第63図　遺構内出土土器(23) 古代⑤88～96 …… 95
第64図　遺構内出土土器(24) 古代⑥97～105…… 96
第65図　竪穴住居跡(３) 古代③ＳＩ125、竪穴状遺構(１)古代①ＳＫＩ362…… 97
第66図　竪穴住居跡(４) 古代④ＳＩ363…… 98
第67図　遺構内出土土器(25) 古代⑦106～123 …… 99
第68図　遺構内出土土器(26) 古代⑧124～138 …… 100
第69図　遺構内出土土器(27) 古代⑨139～143 …… 101
第70図　遺構内出土土器(28) 古代⑩144～146 …… 102
第71図　竪穴住居跡(５) 古代⑤ＳＩ364…… 104
第72図　遺構内出土土器(29) 古代⑪147～161 …… 105
第73図　竪穴住居跡(６) 古代⑥ＳＩ365・369…… 106
第74図　遺構内出土土器(30) 古代⑫162～176 …… 107
第75図　竪穴住居跡(７) 古代⑦ＳＩ370・371…… 109
第76図　遺構内出土土器(31) 古代⑬177～192 …… 110
第77図　遺構内出土土器(32) 古代⑭193～202 …… 111
第78図　遺構内出土土器(33) 古代⑮203～217 …… 112
第79図　竪穴状遺構(２) 古代⑧ＳＫＩ54・413・377 …… 117
第80図　掘立柱建物跡(１) 古代①ＳＢ70 …… 119
第81図　掘立柱建物跡(２) 古代②ＳＢ200…… 120
第82図　掘立柱建物跡(３) 古代③ＳＢ440・450…… 121
第83図　掘立柱建物跡(４) 古代④ＳＢ459…… 122
第84図　掘立柱建物跡(５) 古代⑤ＳＢ453・454…… 123
第85図　井戸 古代ＳＥ465…… 123
第86図　土坑(19) 古代①ＳＫ04・44・102・116…… 125
第87図　土坑(20) 古代②ＳＫ123・124・126…… 126
第88図　土坑(21) 古代③ＳＫ129・366～368・373 …… 127

第89図　土坑(22) 古代④ＳＫ376・378・379・383…… 129
第90図　土坑(23) 古代⑤ＳＫ386～391 …… 130
第91図　土坑(24) 古代⑥ＳＫ407～409・411・414 …… 132
第92図　土坑(25) 古代⑦ＳＫ415～417・424・426 …… 134
第93図　土坑(26) 古代⑧ＳＫ427・428・439、性格不明遺構(1)古代ＳＸ393 …… 135
第94図　掘立柱建物跡(６) ＳＢ460…… 136
第95図　土坑(27) 古代⑨ＳＫ127・128・222・384・406・425…… 138
第96図　土坑(28) 古代⑩ＳＫ467、焼土遺構ＳＮ474、性格不明遺構(２)ＳＸ472・479…… 140
第97図　溝状遺構(１) ＳＤ17・18・58・59…… 141
第98図　溝状遺構(２) ＳＤ62・63・110～112・117・118 …… 143
第99図　溝状遺構(３) ＳＤ398…… 145
第100図　溝状遺構(４) ＳＤ399・408・410 …… 146
第101図　溝状遺構(５) ＳＤ412・434、柱穴様ピットＳＫＰ429・432・480～483・484～487 …… 148
第102図　遺構外出土石器(６) Ｓ52～Ｓ57…… 151
第103図　遺構外出土土製品 218～227…… 152
第104図-１　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成…… 162
第104図-２　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成…… 162
第104図-３　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成…… 163
第104図-４　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成…… 163
第104図-５　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成…… 163
第104図-６　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成…… 163
第104図-７　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成…… 163
第104図-８　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成…… 164
第104図-９　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成…… 164
第104図-10　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成…… 164
第104図-11　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成…… 164
第104図-12　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成…… 164
第104図-13　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成…… 165
第104図-14　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成…… 165
第104図-15　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成…… 165
第104図-16　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成…… 165
第104図-17　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成…… 165
第104図-18　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成…… 166
第104図-19　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成…… 166
第104図-20　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成…… 166
第104図-21　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成…… 166
第105図-１　試料中に残存する脂肪のステロール組成…… 167

第105図-2　試料中に残存する脂肪のステロール組成…… 167
第105図-3　試料中に残存する脂肪のステロール組成…… 167
第105図-4　試料中に残存する脂肪のステロール組成…… 168
第105図-5　試料中に残存する脂肪のステロール組成…… 168
第105図-6　試料中に残存する脂肪のステロール組成…… 168
第105図-7　試料中に残存する脂肪のステロール組成…… 169
第105図-8　試料中に残存する脂肪のステロール組成…… 169
第105図-9　試料中に残存する脂肪のステロール組成…… 169
第105図-10　試料中に残存する脂肪のステロール組成…… 170
第105図-11　試料中に残存する脂肪のステロール組成…… 170
第105図-12　試料中に残存する脂肪のステロール組成…… 170
第105図-13　試料中に残存する脂肪のステロール組成…… 171
第106図-1　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図…… 171
第106図-2　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図…… 172
第106図-3　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図…… 172
第106図-4　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図…… 173
第107図-1　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関…… 173
第107図-2　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関…… 173
第107図-3　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関…… 174
第107図-4　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関…… 174
第107図-5　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関…… 174

表　目　次

第１表　館の上遺跡と周辺の遺跡一覧…… 5
第２表　石器の観察…… 29
第３表　弥生土器の観察…… 78
第４表　古代の土器の観察（１）…… 113
第５表　古代の土器の観察（２）…… 114
第６表　古代の土器の観察（３）…… 115
第７-１表　土壌試料の残存脂肪抽出量 …… 160
第７-２表　土壌試料の残存脂肪抽出量 …… 160
第７-３表　土壌試料の残存脂肪抽出量 …… 160
第７-４表　土壌試料の残存脂肪抽出量 …… 160
第７-５表　土壌試料の残存脂肪抽出量 …… 161
第８-１表　試料中に分布するコレステロールとシトステロールの割合 …… 161
第８-２表　試料中に分布するコレステロールとシトステロールの割合 …… 161
第８-３表　試料中に分布するコレステロールとシトステロールの割合 …… 161

第８-４表　試料中に分布するコレステロールとシトステロールの割合 …… 162
第８-５表　試料中に分布するコレステロールとシトステロールの割合 …… 162
第９表　供試試料一覧…… 175
第10表　館の上遺跡出土土器の植物珪酸体分析結果…… 176

巻頭図版目次

巻頭図版１　弥生時代の遺物と遺構
巻頭図版２　弥生時代の土器（１）
巻頭図版３　弥生時代の土器（２）
巻頭図版４　弥生時代の土器（３）
巻頭図版５　弥生時代の土器（４）
巻頭図版６　弥生時代の土器（５）

図　版　目　次

図版１　縄文時代の土坑（１）
図版２　縄文時代の土坑（２）
図版３　縄文時代の土坑（３）
図版４　縄文時代の石器（１）
図版５　縄文時代の石器（２）
図版６　弥生時代の土器埋設遺構（１）
図版７　弥生時代の土器埋設遺構（２）
図版８　弥生時代の土器埋設遺構（３）
図版９　弥生時代の土器埋設遺構（４）
図版10　弥生時代の土器埋設遺構（５）
図版11　弥生時代の土器埋設遺構（６）
図版12　弥生時代の土坑（１）
図版13　弥生時代の土坑（２）
図版14　弥生時代の土坑（３）
図版15　弥生時代の土坑（４）
図版16　弥生時代の土坑（５）
図版17　弥生時代の土坑（６）
図版18　弥生時代の土器（１）
図版19　弥生時代の土器（２）
図版20　弥生時代の土器（３）
図版21　弥生時代の土器（４）
図版22　弥生時代の土器（５）
図版23　弥生時代の土器（６）

図版24　弥生時代の土器(７)
図版25　弥生時代の土器(８)
図版26　弥生時代の土器(９)
図版27　弥生時代の土器(10)
図版28　弥生時代の土器(11)
図版29　弥生時代の土器(12)
図版30　弥生時代の土器(13)
図版31　弥生時代の土器(14)
図版32　古代の竪穴住居跡(１)
図版33　古代の竪穴住居跡(２)
図版34　古代の竪穴住居跡(３)
図版35　古代の竪穴住居跡(４)
図版36　古代の竪穴状遺構
図版37　掘立柱建物跡(１)
図版38　掘立柱建物跡(２)
図版39　古代の土坑(１)
図版40　古代の土坑(２)
図版41　古代の土坑(３)
図版42　古代の土坑(４)
図版43　古代の井戸と性格不明遺構
図版44　古代の土器(１)
図版45　古代の土器(２)
図版46　古代の土器(３)
図版47　古代の土器(４)
図版48　古代の土器(５)
図版49　古代の土器(６)
図版50　古代の土器(７)
図版51　古代の土器(８)
図版52　時代不明遺構(１)
図版53　時代不明遺構(２)
図版54　時代不明遺構(３)

第１章　はじめに

第１節　調査に至る経過

一般国道７号琴丘能代道路は、建設省能代工事事務所の作成した『1999事業概要　能代』によれば、山本郡琴丘町鹿渡地内を起点とし、二ツ井町駒形を結ぶ延長33.8㎞の自動車専用道路である。この事業の発端は、現在の国道７号線に代わる輸送幹線道路の機能を拡充する目的で、建設省東北建設局能代工事事務所から計画が提出されたことに始まる。当初、一般国道７号八竜能代道路（延長７㎞、幅員22m）と称し、昭和58年度に一般バイパス路線として能代八竜間が事業化された。その後、県都市秋田と県北主要都市の連絡を視野に入れた高速交通体系の一部を担うことから、平成元年度に事業計画が変更され、琴丘町まで延伸された自動車専用道路となった（延長17㎞、幅員23.5m）。

予定路線区域には、当初から埋蔵文化財包蔵地の存在が予想されていた。そのため、計画路線が示された時点で、秋田県教育委員会と工事実施者である建設省東北建設局能代工事事務所が協議を行い、路線内の遺跡分布調査を実施し、現状保存をはかることの困難な遺跡については、遺跡範囲確認調査実施後、発掘調査を行い記録保存をはかることとした。現在までの凡その経緯は以下のとおりである。

八竜能代間の遺跡分布調査は昭和60年度に実施し、北より寒川Ⅰ・Ⅱ遺跡、十二林遺跡、石丁遺跡、福田遺跡、萱刈沢Ⅰ・Ⅱ遺跡、館の上遺跡の８遺跡を確認した。翌年度に寒川Ⅰ・Ⅱ遺跡を調査し、十二林遺跡、石丁遺跡、福田遺跡の範囲確認調査も実施した。その際、十二林遺跡に含む蟹子沢遺跡を分離した。

平成元年度の５月中には、萱刈沢Ⅰ・Ⅱ遺跡の範囲確認調査を実施した。その結果、萱刈沢Ⅰ遺跡は翌年度調査し、萱刈沢Ⅱ遺跡は盛土工法の採用により、削平される工事用道路部分と橋脚部分のみの調査を行うことにした。また、同年には建設計画変更によって、インターチェンジと取り付け道路部分に、それぞれ鴨子台遺跡と八幡台遺跡の２遺跡が新たに見つかった。これを受けて、翌年度２遺跡の調査を優先することにし、萱刈沢Ⅰ遺跡の調査は平成３年度に変更した。

平成４年度には、八竜町より南の山本町にかけて分布調査を開始したが、同年には館の上遺跡の範囲確認調査も実施した。その結果、24,000㎡が調査対象範囲として括られ、平成５年度に8,000㎡を、翌６年度に7,400㎡を調査した。その後工事区域の変更があり、館の上遺跡の残余の調査は平成10年度に実施することになった。

路線や工事計画の変更などが度々あったものの、琴丘能代道路の調査は順調に進み、能代市から山本町にかけての区間では現在までに、遺跡の調査内容を６冊の報告書として刊行した。

第２節　調査要項

遺　跡　名　館の上遺跡（略記号：３ＴＮＵ）

遺跡所在地　秋田県山本郡八竜町鵜川字館の上50-２外

調 査 期 間　平成５年４月26日～11月12日、６年５月９日～10月14日、10年５月19日～９月16日

調 査 面 積　平成５年度8,000㎡、平成６年度7,400㎡、平成10年度8,600㎡

調査主体者　秋田県教育委員会

調査担当者

平成５年度　小林　　克(秋田県埋蔵文化財センター調査課文化財主任)
磯村　　亨(秋田県埋蔵文化財センター調査課学芸主事)
山崎　和夫(能代市教育委員会派遣)

平成６年度　小林　　克(秋田県埋蔵文化財センター調査課文化財主任)
磯村　　亨(秋田県埋蔵文化財センター調査課学芸主事)

平成10年度　利部　　修(秋田県埋蔵文化財センター調査課秋田北分室学芸主事)
和田　哲郎(秋田県埋蔵文化財センター調査課秋田北分室非常勤職員)
松岡　忠恭(秋田県埋蔵文化財センター調査課秋田北分室非常勤職員)

総務担当者

平成５年度　佐々木　眞(秋田県埋蔵文化財センター総務課主査)
佐藤　広文(秋田県埋蔵文化財センター総務課主事)

平成６年度　藤肥　良清(秋田県埋蔵文化財センター総務課主査)
佐藤　広文(秋田県埋蔵文化財センター総務課主任)
須田　輝樹(秋田県埋蔵文化財センター総務課主事)

平成10年度　菅原　　晃(秋田県埋蔵文化財センター総務課主査)
荒井　信行(秋田県埋蔵文化財センター秋田北分室主査)
佐々木敬隆(秋田県埋蔵文化財センター総務課主事)
八文字　隆(秋田県埋蔵文化財センター総務課主事)

調査協力機関等　建設省東北地方建設局能代工事事務所　八竜町教育委員会

参考文献

建設省東北地方建設局能代工事事務所　『1999事業概要　能代』　1999(平成11)年

秋田県教育委員会　『一般国道７号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ―寒川Ⅰ遺跡・寒川Ⅱ遺跡―』　秋田県文化財調査報告書第167集　1988(昭和63)年

秋田県教育委員会　『一般国道７号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ―福田遺跡・石丁遺跡・蟹子沢遺跡・十二林遺跡―』　秋田県文化財調査報告書第178集　1989(平成元)年

秋田県教育委員会　『一般国道７号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ―鴨子台遺跡・八幡台遺跡―』　秋田県文化財調査報告書第230集　1992(平成４)年

秋田県教育委員会　『一般国道７号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ―萱刈沢Ⅰ遺跡・萱刈沢Ⅱ遺跡―』　秋田県文化財調査報告書第231集　1992(平成４)年

秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第239集　1993(平成５)年

秋田県教育委員会　『一般国道７号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ―館の上館跡―』　秋田県文化財調査報告書第249集　1994(平成６)年

秋田県教育委員会　『扇田谷地遺跡――般国道７号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ―』　秋田県文化財調査報告書第283集　1999(平成11)年

第２章　遺跡の環境

第１節　遺跡の位置と立地

館の上遺跡は、八竜町大曲地区の集落の端から東側に約250mの地点で、北緯40°　5’10”、東径140°　1’10”にある。県北部日本海側に近い台地上に位置する。この台地は成合台地と呼ばれ、東西約2.3km、南北は約８kmで、日本海汀線より３～４kmの距離にある。台地の西側は海の侵蝕によるが、東側は鵜川川の侵蝕によるもので、東側は櫛歯状の小開析谷が細かに入り込んでいる。

成合台地の東側で三種川より北側には、北にある志戸橋野台地と、この南でやや狭い範囲の金光寺野台地がある。関東地方の段丘に対比させれば、志戸橋野台地は一部海成段丘の下末吉面と陸成の武蔵野面の複合相当面である。金光寺野台地と成合台地は、武蔵野相当面である。成合台地の縁辺には、リング状に囲む立川面相当面がある。

遺跡の西側には、幅1.1～1.5kmの浅内低地を挟んで延長25kmに及ぶ能代砂丘が海岸沿いに形成される。浅内低地の北側には米代川の氾濫原で形成された沖積低地があり、南側には三種川・鵜川川と八郎潟湖で形成された低地がある。八郎潟湖は現在、広大な八郎潟の干拓地に変身してしまった。

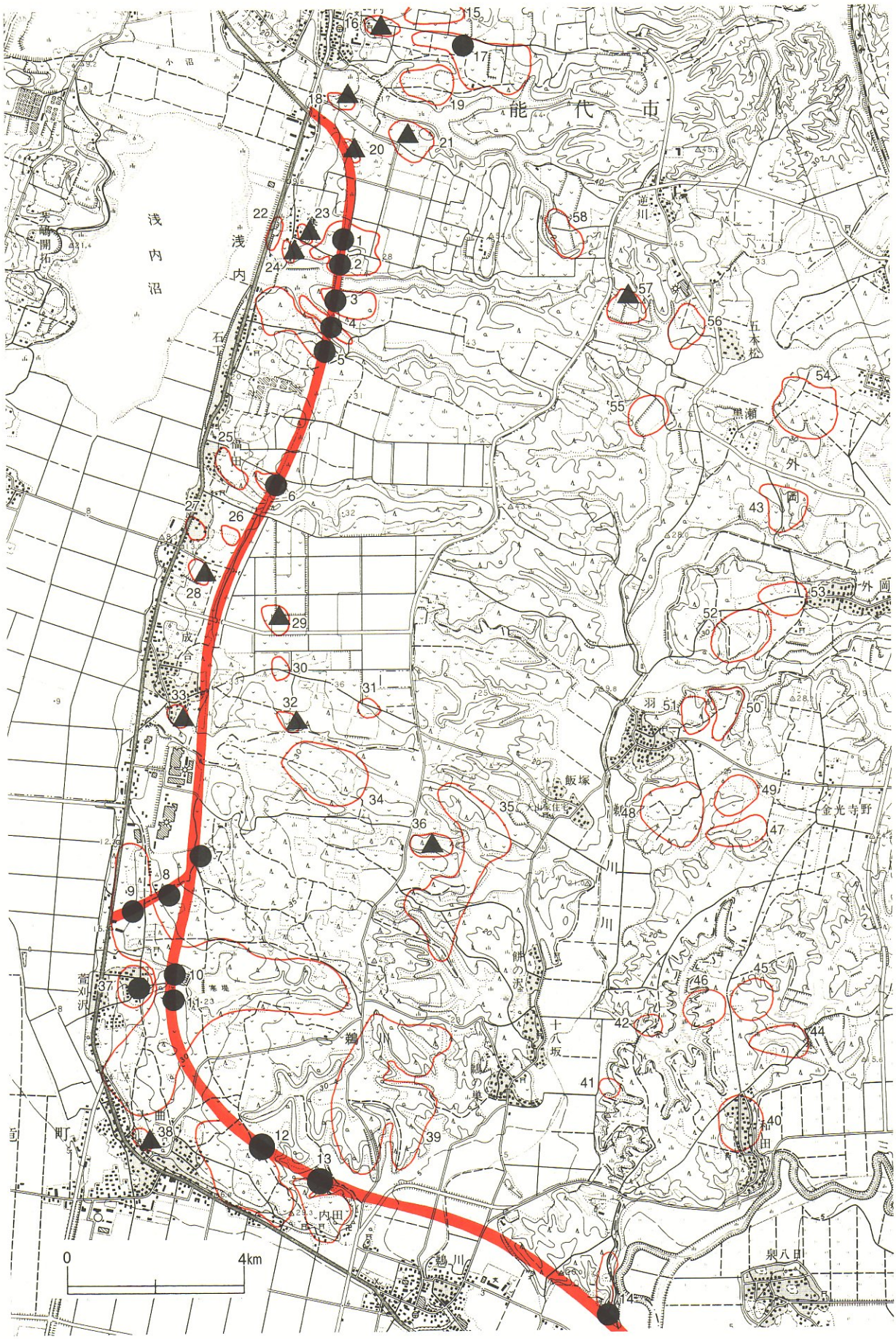
遺跡の位置する成合台地の南端は、低地が眺望できる適地にあり、低く平坦な台地と共に、遺跡が立地する条件を兼ね備えていたものであろう。

第２節　歴史的環境

館の上遺跡を中心にした半径７km圏内には、能代琴丘区間のうち調査が済み報告書の刊行された12の遺跡がある。本事業関係で最も北に位置する寒川Ⅰ・Ⅱ遺跡（２・１）を皮切りに、３～10・12の順序で調査されてきた。14の扇田谷地遺跡は、平成７・８年に調査され平成11年に報告書が刊行された。遺跡は成合台地を西側で区切る国道７号線を境に、西と南側の低湿地には殆ど認められず、台地の西縁と鵜川川流域に近い台地上に集中している。以下、本事業に関連した遺跡を中心に述べる。

旧石器時代の遺跡として、鴨子台遺跡（７）と此掛沢Ⅱ遺跡(15)がある。鴨子台遺跡からは、石器の集中する部分が５ブロック確認され、新旧で第Ⅰ群石器と第Ⅱ群石器（Ａ～Ｄブロック）に分けている。前者からは、両面調整石器の削片、掻器、二次加工ある剥片、剥片が出土した。後者の各ブロックからは、各々ナイフ形石器、彫器、削片、石核、掻器、削器、錐器、剥片等が出土している。Ａブロックでは環状石製品が見つかった。此掛沢Ⅱ遺跡からは、ナイフ形石器、彫器、局部磨製石斧、台形石器、石刃、核、剥片が出土している。

縄文時代の遺跡としては、草創期の資料として鴨子台遺跡（７）出土の局部磨製石斧がある。長さ19.8cm、幅5.8cm、厚さ2.5cmの大型品で、表面の研磨が器長の1/3以上に及び裏面の研磨が刃縁から２cm程まで及ぶ特徴がある。早期末葉から前期初頭の遺跡には寒川Ⅰ遺跡（２）があり、竪穴住居跡７軒と陥穴３基を検出した。前期から後期にかけては、県指定史跡の萱刈沢貝塚(37)や萱刈沢Ⅰ・Ⅱ遺跡(11、10)等がある。



第１図　遺跡の位置と周辺遺跡の分布

第１表　館の上遺跡と周辺の遺跡一覧

番号	遺跡名	所在地	時代
1	寒川Ⅱ	能代市浅内字寒川家上	縄・続縄・古
2	寒川Ⅰ	〃　字寒川家上	縄・古
3	十二林	〃　字十二林	縄・古
4	蟹子沢	〃　字蟹子沢	縄
5	石丁	〃　字石丁	縄
6	福田	〃　字福田上野	縄・古
7	鴨子台	八竜町鵜川字鴨子台	旧・縄・古
8	八幡台Ａ	〃　字八幡台	縄
9	八幡台Ｂ	〃　字八幡台	縄
10	萱刈沢Ⅱ	〃　字萱刈沢	縄・古
11	萱刈沢Ⅰ	〃　字萱刈沢	縄
12	館の上	〃　字館の上	縄・古
13	館の上館	〃　字館の上	中
14	扇田谷地	〃　字扇田谷地	縄
15	此掛沢Ⅱ	能代市浅内字此掛沢	旧・縄・古
16	上の山Ⅰ	〃　字上の山	縄・古
17	上の山Ⅱ	〃　字上の山	古
18	横長根Ｂ	〃　字横長根	縄
19	ムサ台	〃　字ムサ台	古
20	清水上	〃　字清水上	縄
21	横長根Ａ	〃　字横長根	縄・古
22	寒川家下	〃　字寒川家下	縄
23	寒川家上Ｂ	〃　字寒川家上	縄・古
24	寒川家上Ｃ	〃　字寒川家上	縄・古
25	福田上野	〃　字福田上野	古
26	頭無上Ⅰ	〃　字頭無上	古
27	頭無上Ⅱ	〃　字頭無上	古
28	向山	〃　字向山	弥
29	成合Ｃ	〃　字成合	縄
30	成合Ｄ	〃　字成合字沢辺	古
31	成合Ｅ	能代市浅内字成合	縄
32	成合Ｂ	〃　字沢辺	縄
33	成合Ａ	〃　字沢辺	縄
34	雛沢	八竜町鵜川字雛沢	縄
35	舞台沢Ⅱ	〃　字舞台沢	縄
36	舞台沢Ⅰ	〃　字舞台沢	縄
37	萱刈沢貝塚	〃　字萱刈沢	縄
38	大曲家の上	〃　字家の上	縄・弥・古
39	苗代沢台	〃　字苗代沢台	縄
40	和田部落	山本町豊岡金田字和田	縄
41	放龍	八竜町鵜川字放龍	続縄
42	上大沢	〃　字上大沢	弥
43	黒瀬	山本町外岡字根岸道下	縄
44	和田Ⅲ	〃　豊岡字金田字駒崎	縄
45	和田Ⅱ	〃　字駒崎	縄
46	和田Ⅰ	〃　字駒崎	縄
47	保竜Ⅲ	〃　豊岡字金田字保竜	古
48	保竜Ⅱ	〃　字保竜	古
49	保竜Ⅰ	〃　字保竜	古
50	保竜館	〃　字保竜	中
51	館城	〃　字保竜	縄
52	窪ノ沢	〃　外岡字窪ノ沢	古
53	外岡	〃　字長者屋敷	古
54	中嶋	〃　字中嶋	縄
55	渡道	〃　字渡道	縄
56	五本松	〃　字渡道	縄
57	逆川	〃　字渡道	旧・縄
58	大館南沢	能代市浅内大館南沢	古

萱刈沢貝塚は、円筒上層式を主体とした中期前葉の貝塚遺跡で、フラスコ状土坑からは人骨、埋葬された犬の骨、ヤマトシジミの貝層が検出された。萱刈沢Ⅱ遺跡では前期から中期の竪穴住居跡が、萱刈沢Ⅰ遺跡では後期の捨て場が見つかっている。晩期の遺跡は、貝塚で人骨を伴う土坑墓が見つかった能代市柏子所遺跡や土笛が出土した琴丘町高石野遺跡が有名だが、周辺では纏まった資料に欠ける。

晩期末葉から弥生時代にかけては、館の上館跡(13)や寒川Ⅰ遺跡(２)がある。館の上館跡は、本遺跡と一部重複しながら隣接し、そこからは館の上遺跡を特徴づけた遠賀川系土器が出土する。ここでは、弥生時代終末に位置づけられる天王山式土器も出土している。寒川Ⅰ遺跡からは捨て場が検出され、前葉の土器が出土した。また続縄文文化の遺跡として、寒川Ⅱ遺跡(１)がある。ここからは６基の土坑墓が検出され、その形態や配置の具合、良好な出土遺物から北方地域との交流が想定される。古墳時代の遺跡は確認されていない。

古代では周辺に明確な奈良時代の資料はなく、平安時代の遺跡として寒川Ⅱ遺跡(１)、十二林遺跡(３)、福田遺跡(６)、扇田谷地遺跡(14)等がある。これらの遺跡からは、竪穴住居跡、掘立柱建物跡の他、土器焼成遺構が検出され、土師器や須恵器が出土している。十二林遺跡では、板塀と考えられた痕跡が多く見つかり、地下式の須恵器窯跡と半地下式穴窯の炭窯も見つかった。窯跡から出土した須恵器には、坏、長頸瓶、甕、大甕がある。また製鉄炉が、寒川Ⅱ遺跡、扇田谷地遺跡で確認されている。

中世、近世の遺跡として、館の上館跡、館の上遺跡や扇田谷地遺跡が上げられる。館の上館跡は、成合台地の南端部分が３つの空堀によって区切られ、第Ⅰ郭から第Ⅳ郭まで確認できる。第Ⅳ郭は、館の上遺跡のＡ区南東端の平坦な区域に当たっている。これら３遺跡からは、珠洲系陶器の壺、甕、擂鉢、鉢の他に、瓦質土器、中国産青磁、施釉陶器等の中世陶磁器が出土した。また、近世では肥前や唐津の陶磁器が出土した。なお、第１表中の旧・縄・弥・続縄・古は、それぞれ旧石器・縄文・弥生・続縄文・古代を表す。

参考文献

八竜町教育委員会　『山本郡八竜町萱刈沢貝塚発掘調査略報』　1972(昭和47)年

八竜町教育委員会　『第２次概報萱刈沢貝塚』　1973(昭和48)年

八竜町教育委員会　『第３・４次概報萱刈沢貝塚』　1974(昭和49)年

八竜町教育委員会　『萱刈沢貝塚―山本郡八竜町萱刈沢貝塚発掘調査報告書』　1979(昭和54)年

潟西層団体研究グループ　「男鹿半島北東部潟西地域における潟西層」『地球科学』　第37巻２号　1983(昭和58)年

秋田県農政部農地整備課　「森岳・羽後浜田」『土地分類基本調査』　1984(昭和59)年

秋田県教育委員会　『一般国道７号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ―寒川Ⅰ遺跡・寒川Ⅱ遺跡―』　秋田県文化財調査報告書第167集　1988(昭和63)年

秋田県教育委員会　『一般国道７号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ―福田遺跡・石丁遺跡・蟹子沢遺跡・十二林遺跡―』　秋田県文化財調査報告書第178集　1989(平成元)年

秋田県教育委員会　『一般国道７号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ―鴨子台遺跡・八幡台遺跡―』　秋田県文化財調査報告書第230集　1992(平成４)年

秋田県教育委員会　『一般国道７号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ―萱刈沢Ⅰ遺跡・萱刈沢Ⅱ遺跡―』　秋田県文化財調査報告書第231集　1992(平成４)年

秋田県教育委員会　『一般国道７号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ―館の上館跡―』　秋田県文化財調査報告書第249集　1994(平成６)年

秋田県教育委員会　『扇田谷地遺跡――般国道７号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ―』　秋田県文化財調査報告書第283集　1999(平成11)年

第３章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観(第２～４図)

遺跡の調査地区は、平成５・６・10年度の調査対象区域によって、各々Ａ区(8,000㎡)、Ｂ区(7,400㎡)、Ｃ区(8,600㎡)と区分した。

Ａ区では、東端が中世の空堀で区切られ、その東に館の上館の郭が形成され、そこに弥生時代の土器棺墓や土坑墓が集中している。堀のすぐ西側は低い痩せ尾根になり、この西側にも弥生時代の土坑墓が集中し、土器棺墓も少数検出した。土器棺墓は、縄文時代末葉と弥生時代初頭のもので、遠賀川系土器が主体的に用いられている。土坑の中には、玉や石鏃を共伴するものがあり、痩せ尾根の両側に認められる。痩せ尾根の東端部には、東西に主軸をもつ時代不明の掘立柱建物跡が１棟あり、弥生時代の遺構がこれを取り巻くように配置している。

痩せ尾根の西側では、中央区域に縄文時代の土坑が集中し、北側斜面上端にはフラスコ状土坑が並んでいる。これらのやや西側には、２基のＴピットが検出されており、ここで縄文の遺構が途切れる。古代では、７軒の竪穴住居跡と３棟の掘立柱建物跡や土坑が見つかった。竪穴住居跡は中央部に纏まりがある。全域には近世を主体に、平安時代の可能性もある溝跡が配置している。

Ａ区から連続するＢ区では、東側に平安時代の竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑等が検出され、Ａ区との境には竪穴住居跡２軒、掘立柱建物跡、土坑が密集している。Ａ区の中央から続く平安時代の集落は、Ｂ区の東側が纏まりの限界である。溝跡は全域に検出され、Ａ区から連続するものもあり、一部は複雑に重複している。

Ｂ区から連続するＣ区は、南側と(南区)と北側(北区)地区に分かれる。南区では、平安時代と考えられる大型の井戸跡が検出された。他に、Ｂ区から連続する溝跡が見つかっている。北区では、西側にフラスコ状土坑が連続的に配置されている。陥穴状土坑の他に、溝跡が一部に検出された。

各地区の基本土層は、以下のようである。

Ａ区、Ｂ区及びＣ区の南区中央部を除いたＣ区は、全体が大きな削平を受けており、斜面を除く平坦面のⅠ層が耕作土、Ⅱ層が地山土である。耕作土は平均して20～30cmと薄く、これを除去するとすぐに遺構が現れた。

Ｃ区南区中央部は、本来は広範に緩い窪み状を呈した地形で、この部分では盛土を厚く堆積させた平坦面を形成していた。そのため、Ａ・Ｂ地区と異なり自然堆積層を観察できる部分もあった。一方、ゴミ貯めとして利用している部分があり、表土を含め攪乱層が１ｍに及ぶ部分もあった。

Ⅰ層:表土及び攪乱層…黒褐色土(10ＹＲ3/2)…地山ブロックを多量に含む。

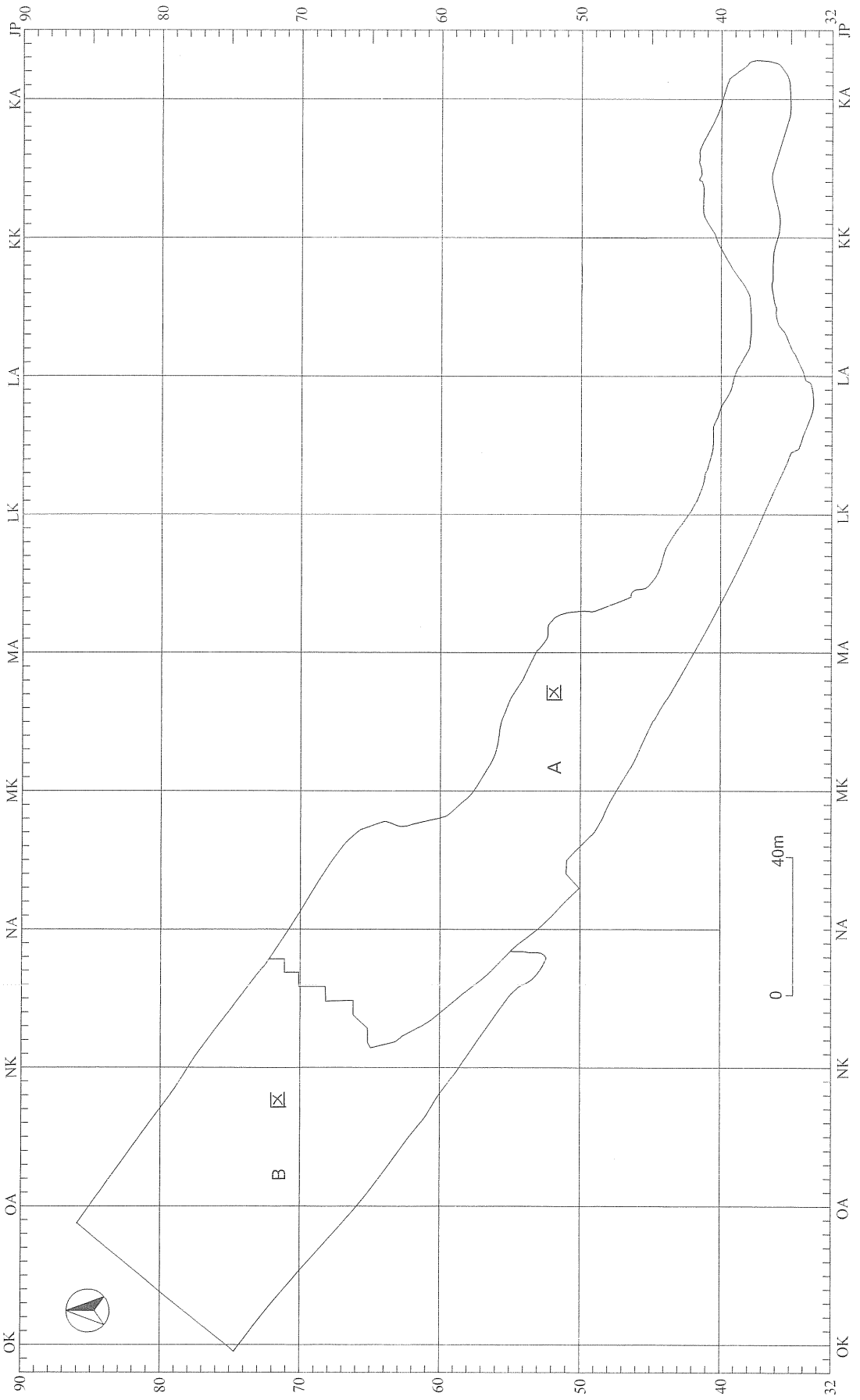
Ⅱ層:黒褐色土(10ＹＲ3/1)…地山粒を少量含む。粘性、締まりは普通。近世文化層。

Ⅲ層:黒色土(10ＹＲ1.7/1)…地山粒を僅かに含む。粘性、締まりは普通。

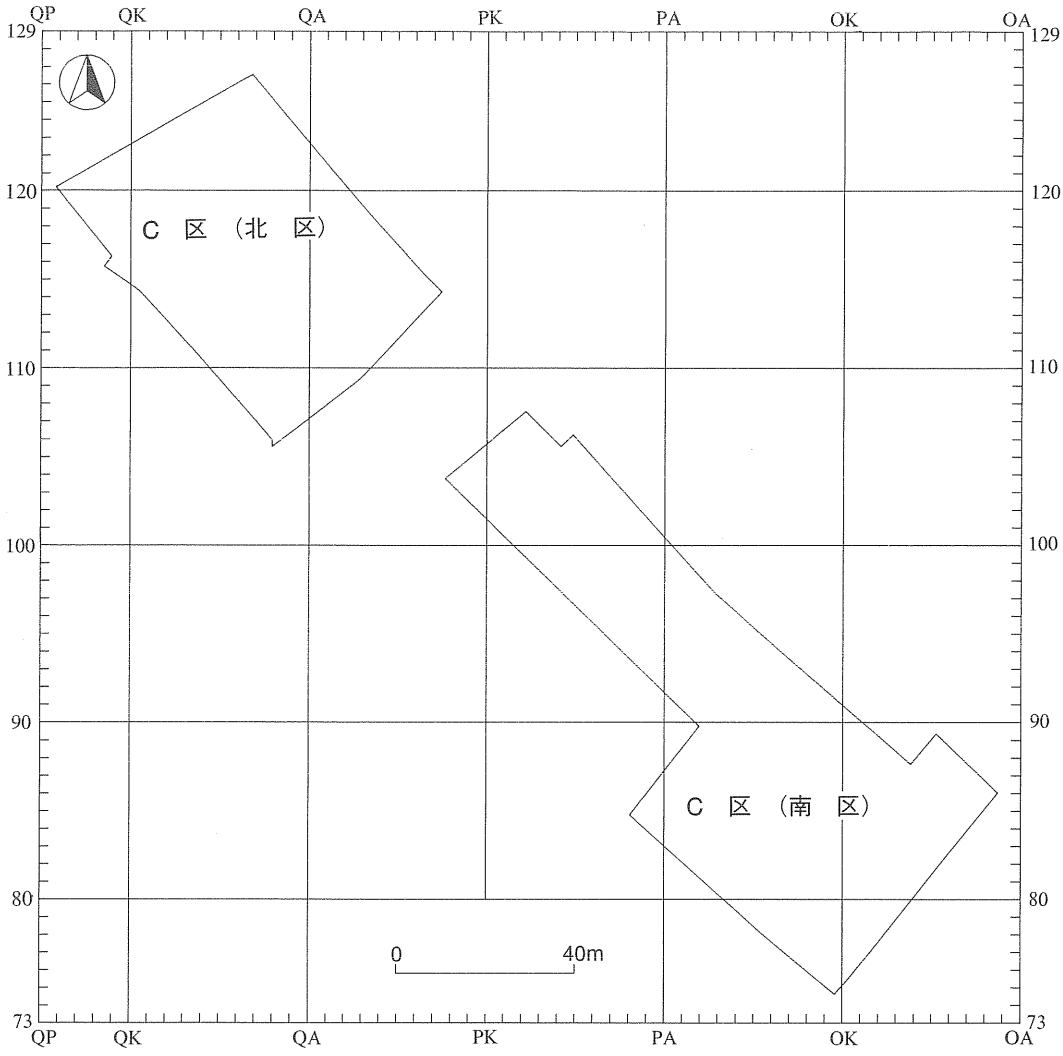
Ⅳ層:黒褐色土(7.5ＹＲ2/2)…地山粒を僅かに含む。粘性、締まりともやや強い。縄文文化層。

Ⅴ層:暗褐色土(10ＹＲ3/3)…漸移層でⅣ・Ⅴ層が混在する。粘性、締まりとも強い。

Ⅵ層:褐色土(10ＹＲ4/6)…地山土。粘性締まりとも強い。

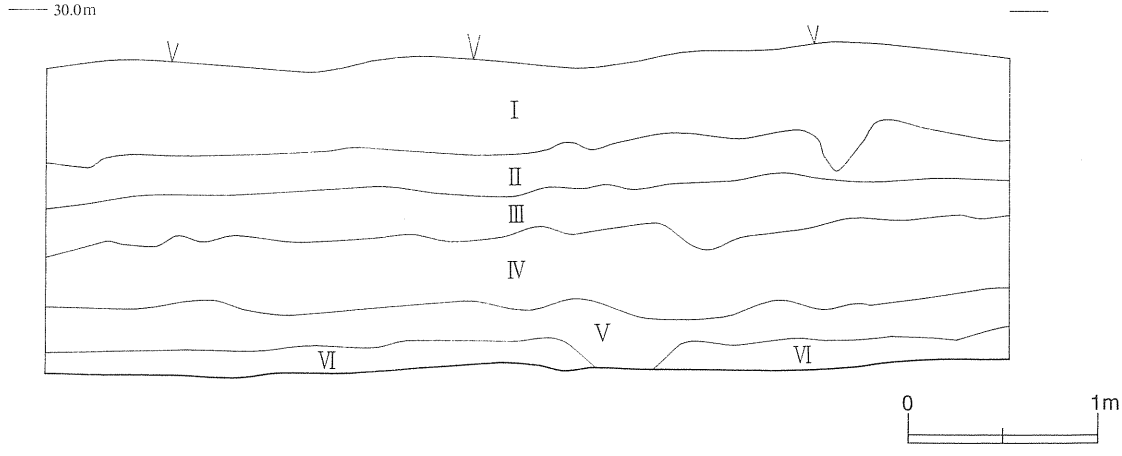


第２図　平成５・６年度調査区



第３図　平成10年度調査区

OP ライン基本土層図（西壁）



第４図　平成10年度基本土層図

第２節　調査の方法

発掘調査は、路線内の調査区全域に４ｍ×４ｍのメッシュをめぐらすグリッド法によった。北西―南東方向に細長い調査区のうち、調査初年度のＡ区については遺構、遺物の密度が濃いため、その中央部に基準点（ＭＡ50）を設定した。基準点より座標北に設定された基準線と、これに直交する東西の基準線を基に両軸に４ｍごとの刻みを設けた。東西方向は東から…ＬＳ・ＬＴ・ＭＡ・ＭＢ・ＭＣ…と２文字のアルファベットで表し、南北方向は南から…48・49・50・51…と２桁の算用数字で表している。各グリッドの名称は、南東部のアルファベットと数字の組み合わせで示し、測量杭を打設して名称を付した。平成６年度と平成10年度のＢ・Ｃ調査区については、先のＭＡ50の基準を延長して用いた。

５年度と６年度の調査は、表土層が薄く地山がすぐに現れたが、10年度の調査ではその調査区の約1/2に当たる南西地区での表土層が厚く、重機を使用した表土除去を行った。調査はグリッド毎の粗掘りを行い、遺構や遺物の有無を確かめながら進め、個別の遺構毎に精査を行う。その際の排土は、ベルトコンベアを繋いで排土置き場まで移動した。

遺構の名称は検出した順番に算用数字を用い、その性格が判明した時点でＳＩ（竪穴住居跡）、ＳＫ（土坑）、ＳＲ（土器埋設遺構）等と略記号を付してある。つまり、略記号と数字の組み合わせが各遺構の名称になる。ただし調査の進捗に伴い、遺構の性格が変わり略記号を変更した場合があったし、調査途中で遺構でないことが分かり略記号を抹消した場合もある。また、ＳＫＰ（柱穴様ピット）が幾つかまとまって後に掘立柱建物跡になる場合は、どれかの番号を代表させてある。抹消した番号は欠番にしてあり、番号の大きさはそのまま遺構の数量を表すものではない。

遺構の調査にあたっては、平面図、断面図、エレベーション図等の図面を作成し、必要な事項は手帳に記録した。ただし、平面図に限っては調査の迅速化を図るために、平成５年度には遺構の真上にカメラを設置して撮影しプリントしたものを図化する、写真実測を試みた。具体的には、東西と南北の平面距離を測定した複数の対標を設けて垂直撮影し、その対票間の関係から遺構の縮尺を導き出す方法である。直径１ｍ内外の土坑であれば１回の撮影で、大型の遺構は複数回の撮影を行った。

平成６年度には、トータルステーションを用いて遺構の輪郭を押さえて図化する方法を採用した。この場合は、測点の座標値がパソコンに入力されており、それを曲線的に繋ぎ合わせた。平成10年度は、従来の人手による実測とトータルステーションによるデータ化を併用した。断面図は、いづれの年も人手による実測を行ったが、エレベーションを含むこれらの資料は、すべてパソコン上で組み合わせることにした。遺構の作図にあたっては、1/20の縮尺を基本としたが、1/10の縮尺を用いた場合もある。遺構配置図や区域を表す場合は、適宜適当な縮尺を用いてある。

写真撮影は、35㎜判のモノクロとリバーサルフィルムを基本に用い、１カットにつき適正、オーバー、アンダーでデータ写し込みの後撮影した。必要に応じて６㎝×4.5㎝判のカメラを使用し、メモ的な記録も兼ねてネガカラーフィルムも多用している。

遺物の整理は、洗浄、注記、接合の後エポキシ樹脂による復元を行った。選別した遺物は、実測、拓本の記録を作成して、写真撮影を行った。遺物のトレースや写真撮影は委託した。

遺跡の発掘調査は３カ年度にわたっており、調査方法も担当者も年度によって異なる場合があり、写真実測や測点データを図化するシステム作りが課題として残った。

第３節　調査の経過

館の上遺跡の発掘調査は、平成５(1993)年、平成６(1994)年、平成10(1998)年の３カ年度にわたっており、Ａ地区→Ｂ地区→Ｃ地区の順に行った。以下に年度順の経過を抜粋する。

平成５年度は、４月26日からＡ地区の草刈り作業を開始した。５月10日、測量、ベルトコンベアの設置配線など諸準備を整えて、北西側の表土除去作業を行う。縄文土器、土師器、須恵器が出土した。能代市教育委員会の永瀬福男氏が来跡し、同山崎和夫氏が研修目的で発掘調査に参加した。

５月26日、すでに検出していた柱穴列の両端に直交して延びる柱穴列が見つかり、住居跡、土坑、溝跡の他に掘立柱建物跡を確認した。磯村朝次郎氏、藤則雄氏(金沢大学)来跡。

６月23日、表土除去作業をＬＴ49、ＬＲ47、ＬＲ48、ＬＳ44、ＬＳ45区の各グリッドで行った。Ａ地区の約1/2まで到達。遺構番号は71番まで付き、平安時代ＳＩ69竪穴住居跡の精査を行った。

７月20日、表土除去を本調査区の西側2/3に当たるＬＢラインまで進めた。８月10日、調査区中央やや西側に方形の掘方があり精査中。冨樫泰時所長が来跡し、遺構の垂直写真撮影を実見。

９月１日、調査区南東部の表土除去を開始したところ、弥生時代初頭の土器埋設遺構が10基検出される。３日、本日でほぼ全域の粗掘りを終了し、弥生初頭の土器埋設遺構を新たに８基検出した。

10月７日、南東部のＳＫ285より玉と石鏃が出土。９日に開催予定の遺跡見学会の準備を開始。10日には、南東部の全景写真を撮影し、同土坑墓群の垂直写真撮影も行った。

11月10日、記録の不備を補って現場の調査を終え、同12日には片づけを済まして撤収した。

平成６年度は、５月９日からＢ地区の草刈り作業を行い、12日に表土除去を開始した。30日までに、調査区南東部に平安時代の竪穴住居跡を10数軒確認した。平面実測はトータルステーションによった。

６月13日、表土除去は北西部を行ったが、遺構、遺物は非常に少なかった。全体の3/4が終了。

７月18日、調査区全体の遺構確認を終え、南東端部のＳＤ398・399から精査を開始した。土師器、須恵器の他に、鉄滓や羽口の鍛冶関連遺物が出土。29日、竪穴住居跡の精査を集中して行った。

８月26日、ＳＩ370竪穴住居跡の覆土を掘りあげ、遺物出土状況の垂直写真撮影を行う。数日前より漸移層の除去作業を行った。八竜中学校の生徒(１年生数名)が、文化祭行事の取材のため来跡。

９月９日、住居跡群の存在する調査区南東端を除き漸移層の除去を終了、本日で殆どの遺構が出揃った。19日、ＳＩ363からは土師器、須恵器が多量に出土するが、竈がなく土坑と推定した。

10月12日、竪穴住居跡や掘立柱建物跡の完掘写真や平面図の作成を急ぐ。14日には、各種の撤収作業を済ませて調査を終了した。

平成10年度は、５月19日からＣ地区の南区北側より草刈り作業を始め、22日に表土除去を開始した。同時に、南区南側は表土が厚く重機を用いた。26日、北西端に溝を検出し精査した。

６月23日、トータルステーションによって調査区の平面実測を行った。７月22日、ＳＫ05の半截によって井戸であることが判明。すでに検出済みの溝は、平面を確認し粗掘り、写真撮影等を繰り返した。

８月７日、北区の草刈り作業を開始した。南区溝の平面実測を継続。26日、半截の結果ＳＫ11は深い陥穴状土坑と判明。31日、西側の斜面際にフラスコ状土坑を数基検出した。

９月８日、北区の調査区と遺構をトータルステーションで実測。南区は低地のため水が貯まり、排水を行った。16日には器材の搬出を済ませて、調査を終了した。

第４節　整理作業の方法と経過

館の上遺跡は、平成５(1993)年・平成６(1994)年・平成10(1998)年にわたって調査したことは先に述べてある。各々の調査年度の主担当は、平成５・６年度が小林克・磯村亨、平成10年度が利部修である。平成５年度から平成８年度までは小林・磯村が整理を行っていたが、平成９年４月から小林が文化庁記念物課に勤務することになり、以降の整理は磯村が引き継いだ。平成10年度に再開した調査は利部が担当した。同年磯村が別の遺跡を担当することになり、平成５・６年度の調査成果は平成10年度と合わせて報告することになったため、従前の整理を利部が引き継いだのである。

平成５・６年度の整理は９年度まで続き、遺物の実測・遺構の第２原図作成を継続的に行っていた。遺物は、特に弥生時代の大型製品などに重点が向けられ、粗製土器では縄文描出に、精製土器では調整手法のそれに注意が注がれた。第２原図の作成は、平成５・６年度の発掘調査における調査法の相違から、それぞれの年度で異なった作業を行っている。先に、これについて若干補足する。

平成５年度は、写真実測による平面図と手書きの断面図による。対標を含んだ垂直写真撮影したプリントをそれぞれ組み合わせて、そこから遺構の輪郭をなぞり平面図を作図する方法である。これと先の断面図を合成する。平成６年度は、遺構の輪郭に沿った主要な測点(座標値)を、パソコン上で繋ぎ合わせて作図する方法である。これも同じように断面図と合成する。因みに10年度の場合は、平面図・断面図の作成を従来の手実測で行い、直接両方の原図を修正しながら第２原図を作成した。

平成10年度調査は、遺構の数が少なくこれに関する遺物も少なかったために、整理作業は平成５・６年度を中心に行った。主要な遺物実測は２割程、第２原図は半分以上残っていたので、遅れ気味な第２原図作成を優先し、遺物のトレースや写真撮影は極力委託することにした。したがって第２原図の作成では、３通りの方法を採用したことになる。

遺構の浄書は、第２原図をパソコンにスキャナーで取り込み、間隔を整え線をなぞって、プロッタでトレースした。この方法は、パソコンへの取り込みにはやや時間を要するものの、追加や削除が容易にでき、縮尺を自由に変えられるため、レイアウトの構成が容易である。ただし、線の太さが３種類に限定されている難点もある。

報告書の作成に当たっては、掲載遺構の順番に留意した。そのために、まず時代毎の帰属を優先し、次に時代毎の種類の序列を決め、これに遺構番号の小さい順に配列することにした。平成10年度は、遺構番号を１番から付けていたが、５年度からのに続く番号に変更した。遺構の挿図は、時代の種類毎にまとめ、それには土層注記を添えることを基本にした。遺物も、遺構毎にまとまりを持たせたが、遺構外出土のものは時代毎にまとめた。

図版は、本文の最後にまとめたが、遠賀川系土器やそれと関係する遺物を巻頭図版(カラー)として掲載した。写真のレイアウト寸法は、版面を左右それぞれ縦４コマ計８コマに区分したものを基本にした。そして、上下２枚組の場合は上下４コマを組み合わせ、縦長構図が必要な場合は２コマを縦に連結して工夫した。またこれに、遺構の３段組、遺物の６コマ組10コマ組を併用した。そして、遺構の写真は下や横にキャプション分のスペースを割き、遺物の場合はコマの間隔を縦横１㎜づつ割き、写真の右下に挿図の遺物番号を付すようにした。遺物の切り抜きは避けるように心がけた。

以上の経過を経て、平成５・６・10年度の調査成果を１冊にまとめることができた。

第４章　調査の記録

第１節　縄文時代の遺構と遺物

１　陥し穴状土坑

ＳＫＴ106（第５図、図版１－１）

Ａ区西側のＭＮ・ＭＯ56区にあり、地山面で確認した。北西端を平安時代のＳＫＩ54に切られ、南西部中央は攪乱を受ける。平面形は細長く、規模は長軸2.75m×短軸0.7m、深さ1.12mである。壁は、上端から深さ約0.2mのところより下方が急激に窄まる。

ＳＫＴ166（第５図、図版１－２）

Ａ区西側のＭＭ59区にあり、地山面で確認した。北西側をＳＤ56に切られる。平面形は細長く、規模は長軸2.99m×短軸0.73m、深さ1.15mである。壁は、上端から底面まで細長い三角形を呈する。

ＳＫＴ471（第５図、図版１－３・４）

Ｃ区の北区中央のＱＥ115・116区にあり、地山面で確認した。平面形は不整楕円形で、規模は長軸2.3m×短軸1.9m、深さ1.9mである。堆積層は細かなレンズ状を呈する。壁は、上端から深さ約0.6mのところより上方が急に膨らみ、下方では上位がやや開く箱形を呈する。

２　フラスコ状土坑

ＳＫＦ66（第６図）

Ａ区西側のＭＧ55区にあり、地山面で確認した。平面形は輪郭が凸凹の不整形で、規模は長軸1.75m×短軸1.41m、深さ1.62mである。壁は、上端から深さ約0.4mのところより上方が大きく開き、下方は壁が内傾し逆台形状を呈する。底面は隅丸方形状を示す。

ＳＫＦ136（第６図）

Ａ区西側のＭＨ55区にあり、地山面で確認した。平面形は円形で、規模は直径が1.88m、深さは1.38mである。壁は、上端から深さ0.5～0.6mのところより上方が大きく開き、下方では壁が膨らむ胴張り形態を呈する。

ＳＫＦ137（第６図）

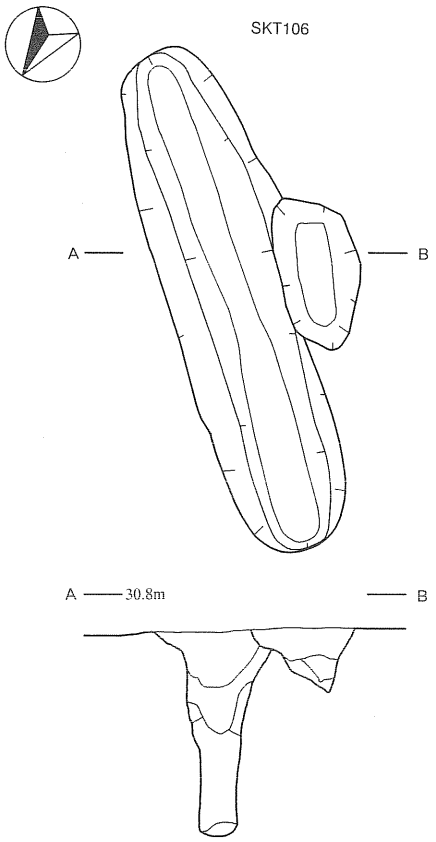
Ａ区西側のＭＨ・ＭＩ55区にあり、地山面で確認した。平面形は不整の円形で、規模は直径が1.23m、深さは1.29mである。壁は、北側上位が窄まり反対側が筒状を呈する。そのために、底面は楕円形を呈する。壁は北側で、上端から深さ約0.6mのところより上方が大きく膨らみ、下方は胴張り状を示す。南側ではやや傾斜した形状である。

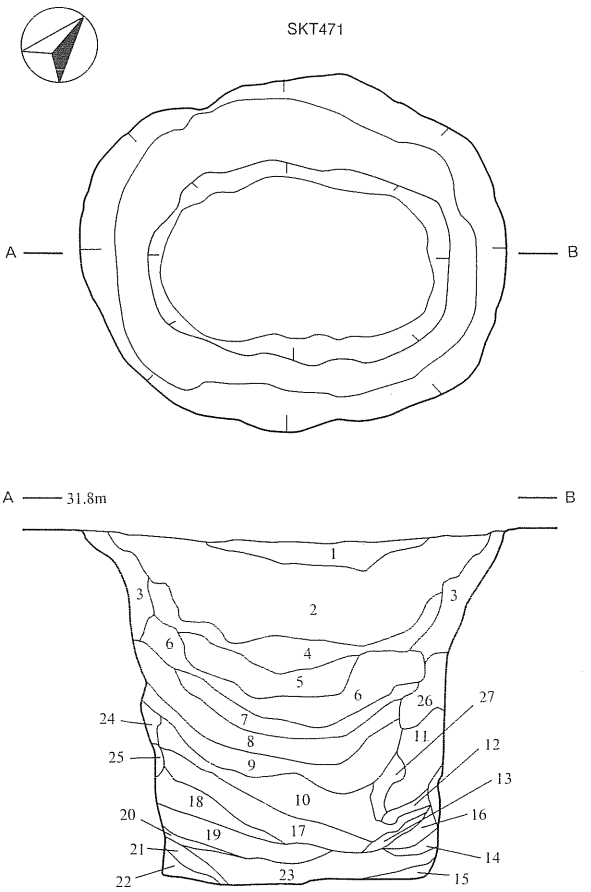
ＳＫＦ138（第７図）

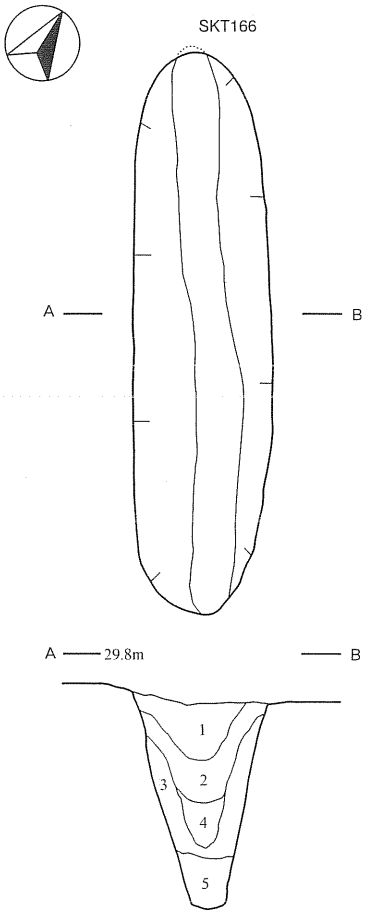
Ａ区西側のＭＩ55区にあり、地山面で確認した。平面形は不整の円形で、規模は直径が約1.7m、深さは1.7mである。壁は、上端から深さ0.3mのところより上方が大きく膨らみ、下方では胴張り状をなす。

ＳＫＦ142（第７図）

Ａ区西側のＭＦ55区にあり、地山面で確認した。平面形は不整な楕円形となり、規模は長軸1.36m×







ＳＫＴ471

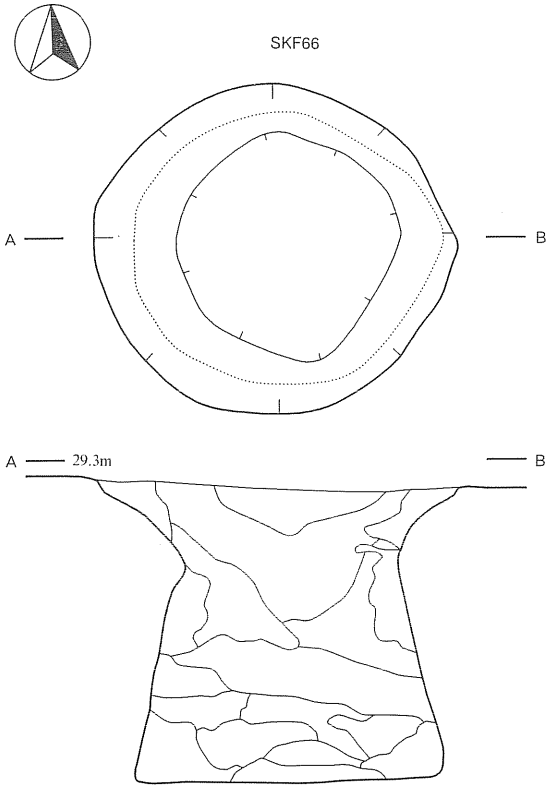
1　黒 色 土(7.5YR2/1)　炭化物(微)混入、やや軟質。
2　黒褐色土(7.5YR3/1)　地山土(微)・炭化物(微)混入、やや軟質。
3　褐 色 土(7.5YR4/4)　地山土・褐色土混入、やや軟質。
4　黒 色 土(7.5YR2/1)　地山土ブロック(少)・炭化物(微)混入、やや固質。
5　黒褐色土(7.5YR2/2)　地山土ブロック(少)混入、固質。
6　褐 色 土(7.5YR4/3)　地山土ブロック(少)混入、やや軟質。
7　暗褐色土(7.5YR3/3)　地山土(少)混入、軟質。
8　褐 色 土(7.5YR4/4)　褐色土(少)混入、軟質。
9　暗褐色土(7.5YR3/3)　黄褐色土(少)混入、軟質。
10　褐 色 土(7.5YR4/6)　褐色土(微)混入、軟質。
11　褐 色 土(7.5YR4/6)　褐色土(微)混入、やや軟質。
12～15　暗褐色土(7.5YR3/3)　褐色土(少)混入、軟質。
16　褐 色 土(7.5YR4/6)　褐色土(微)混入、軟質。
17　黒褐色土(7.5YR3/2)　黄褐色土(微)・炭化物(微)混入、軟質。
18　褐 色 土(7.5YR4/6)　褐色土(微)混入、軟質。
19　黒褐色土(7.5YR3/2)　地山土ブロック(多)混入、軟質。
20、21　褐 色 土(7.5YR4/6)　褐色土(微)混入、軟質。
22　暗褐色土(7.5YR3/3)　黄褐色土(微)混入、軟質。
23　暗褐色土(7.5YR3/3)　地山土ブロック(微)混入、軟質。
24　褐 色 土(7.5YR4/3)　固質。
25　褐 色 土(7.5YR4/3)　やや軟質。
26　褐 色 土(7.5YR4/6)　褐色土(微)混入、固質。

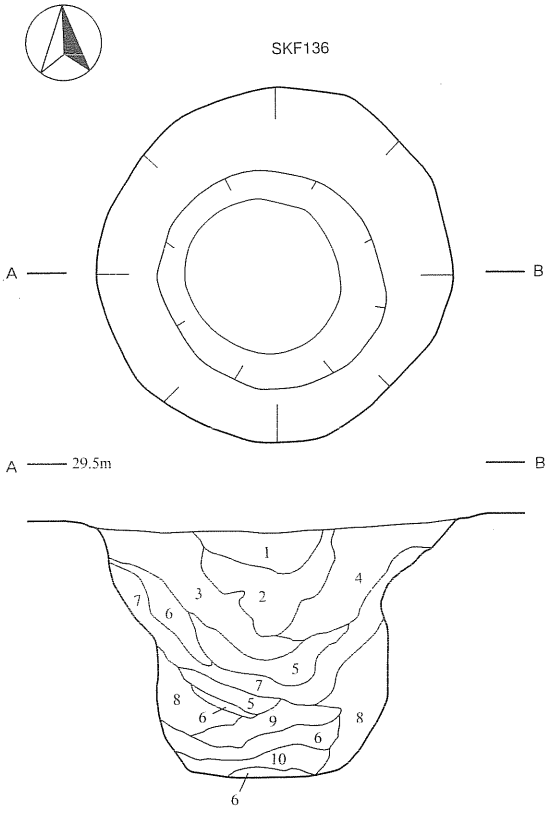
ＳＫＴ166

1　暗 褐 色 土(10YR3/3)　シルト～砂、地山土混入、やや軟質。
2　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　シルト～砂、地山土混入、やや軟質。
3　黄 褐 色 土(10YR5/8)　粘土～シルト、地山土混入、やや固質。
4　黄 褐 色 土(10YR5/8)　粘土、地山土混入、固質。
5　灰黄褐色土(10YR6/2)　粘土、地山土混入、固質。

0　1m

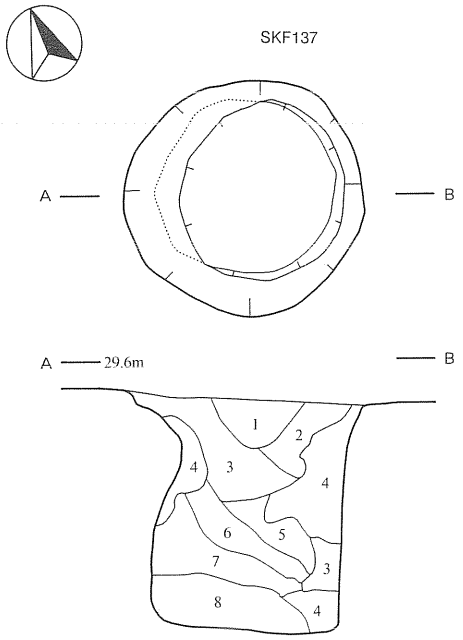
第５図　土坑（１）縄文①ＳＫＴ106・166・471





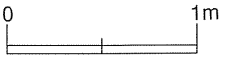
ＳＫＦ136

1　暗褐色土(10YR3/4)　シルト～砂、炭化物・地山土混入、軟質。
2　褐　色　土(10YR4/1)　シルト、炭化物・地山土混入、軟質。
3　褐　色　土(10YR4/6)　シルト～砂、炭化物・地山土混入、軟質。
4　褐灰色土(10YR5/1)　シルト、炭化物・地山土混入、やや軟質。
5　褐　色　土(10YR4/6)　シルト、炭化物・地山土混入、軟質。
6　暗褐色土(10YR3/4)　シルト～砂、炭化物・地山土混入、軟質。
7　褐灰色土(10YR5/1)　シルト、地山土混入、軟質。
8　明黄褐色土(10YR6/8)　粘土～シルト、地山土混入、やや固質。
9　褐灰色土(10YR5/1)　シルト、炭化物・地山土混入、やや軟質。
10　褐灰色土(10YR6/1)　シルト、地山土混入、やや軟質。

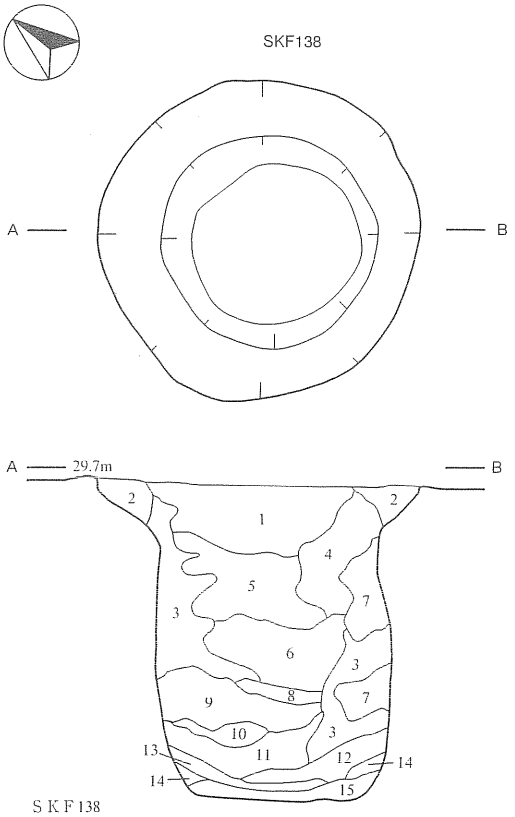


ＳＫＦ137

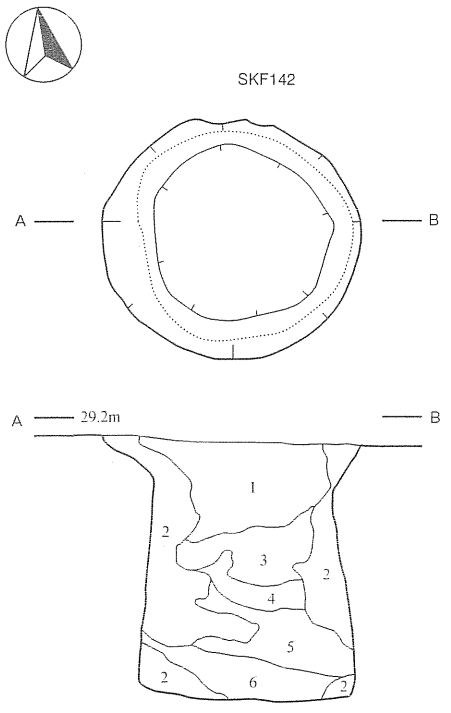
1　暗褐色土(10YR3/4)　シルト～砂、炭化物・地山土混入、やや固質。
2　褐　色　土(10YR4/6)　シルト～砂、炭化物・地山土混入、やや軟質。
3　褐　色　土(10YR4/4)　シルト、地山土混入、やや軟質。
4　黄褐色土(10YR5/8)　粘土～シルト、地山土混入、やや固質。
5　褐　色　土(10YR4/6)　シルト、地山土混入、やや軟質。
6　黄褐色土(10YR5/8)　粘土～シルト、地山土混入、やや軟質。
7　褐　色　土(10YR4/6)　シルト～砂、地山土混入、やや軟質。
8　にぶい黄褐色土(10YR5/4)　粘土～シルト、地山土混入、固質。



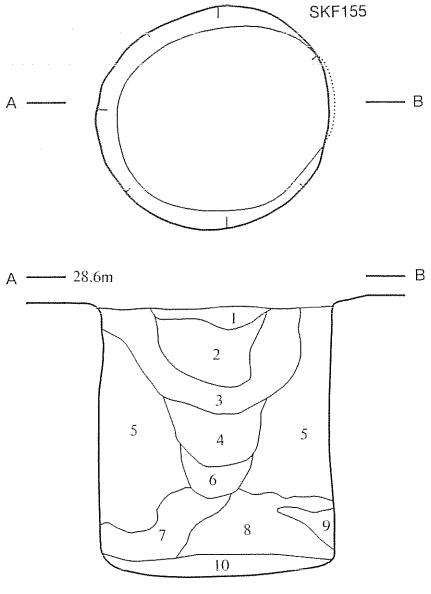
第６図　土坑（２）縄文②ＳＫＦ66・136・137



ＳＫＦ138
1　暗 褐 色 土(10YR3/4)　シルト～砂、炭化物・地山土混入、やや軟質。
2　黄 褐 色 土(10YR5/4)　粘土、地山土混入、固質。
3　褐　色　土(10YR4/6)　粘土～シルト、炭化物・地山土混入、やや軟質。
4　褐　色　土(10YR4/4)　シルト～砂、炭化物・地山土混入、やや軟質。
5　褐　色　土(10YR4/4)　シルト～砂、炭化物・地山土混入、軟質。
6　褐　色　土(10YR4/6)　シルト～砂、炭化物・地山土混入、軟質。
7　黄 褐 色 土(10YR5/8)　粘土、地山土混入、固質。
8　暗 褐 色 土(10YR3/3)　シルト～砂、炭化物・地山土混入、軟質。
9　暗 褐 色 土(10YR3/4)　シルト～砂、炭化物・地山土混入、軟質。
10　暗 褐 色 土(10YR3/3)　シルト～砂、炭化物・地山土混入、軟質。
11　褐　色　土(10YR4/4)　粘土～シルト、炭化物・地山土混入、固質。
12　黄 褐 色 土(10YR5/8)　粘土～シルト、地山土混入、軟質。
13　明黄褐色土(10YR6/8)　粘土、地山土混入、軟質。
14　褐　色　土(10YR4/4)　シルト～砂、炭化物・地山土混入、軟質。
15　明黄褐色土(10YR6/8)　粘土～シルト、炭化物・地山土混入、軟質。

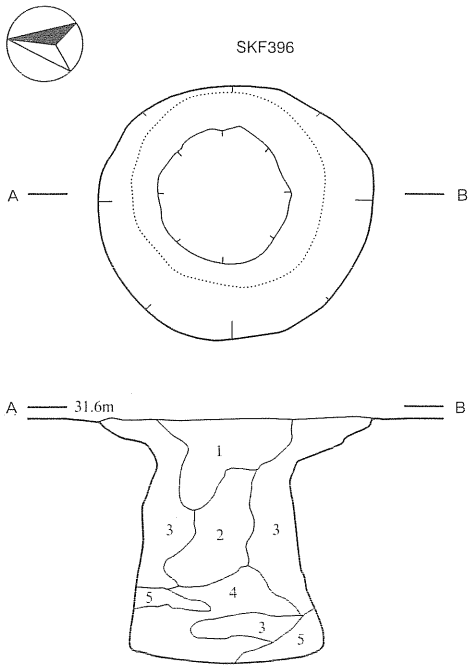


ＳＫＦ142
1　暗褐色土(10YR3/4)　シルト～砂、炭化物・地山土混入、軟質。
2　褐灰色土(10YR5/1)　シルト、炭化物・地山土混入、軟質。
3　褐　色　土(10YR4/4)　シルト～砂、炭化物・地山土混入、やや軟質。
4　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　シルト、炭化物・地山土混入、やや軟質。
5　褐　色　土(10YR4/4)　シルト、炭化物・地山土混入、やや軟質。
6　暗褐色土(10YR3/4)　シルト～砂、炭化物・地山土混入、やや軟質。

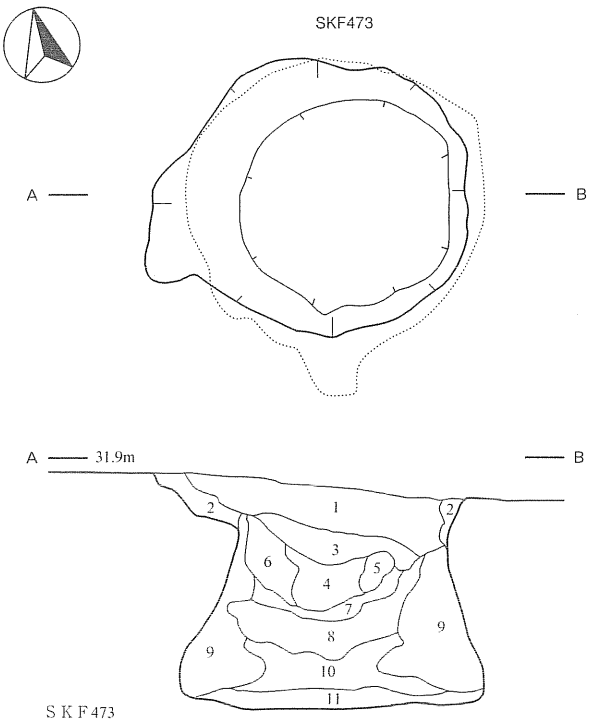


ＳＫＦ155
1　黒褐色土(10YR2/2)　シルト～砂、やや軟質。
2　暗褐色土(10YR3/4)　シルト～砂、炭化物・地山土混入、やや軟質。
3　褐　色　土(10YR4/6)　シルト～砂、炭化物・地山土混入、やや軟質。
4　黄褐色土(10YR5/6)　シルト～砂、地山土混入、軟質。
5　黄褐色土(10YR5/8)　粘土、地山土混入、やや固質。
6　褐　色　土(10YR4/6)　粘土～シルト、地山土混入、やや軟質。
7　褐　色　土(10YR4/6)　粘土～シルト、地山土混入、やや軟質。
8　褐　色　土(10YR4/4)　粘土～シルト、炭化物・地山土混入、やや軟質。
9　にぶい黄褐色土(10YR5/4)　シルト～砂、地山土混入、やや軟質。
10　褐　色　土(10YR4/4)　シルト、固質。

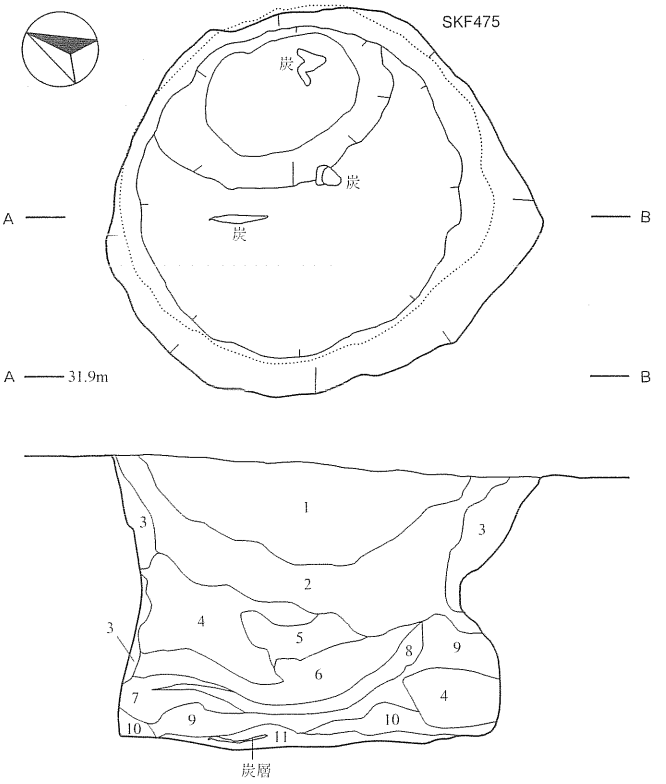
第７図　土坑（３）縄文③ＳＫＦ138・142・155



ＳＫＦ396
1　黒褐色土(10YR3/2)　シルト、やや軟質。
2　暗褐色土(10YR3/4)　粘土～シルト、地山土混入、やや軟質。
3　暗褐色土(10YR3/3)　シルト、地山土混入、軟質。
4　褐灰色土(10YR4/1)　粘土～シルト、地山土混入、軟質。
5　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　粘土～シルト、地山土混入、軟質。



ＳＫＦ473
1　黒褐色土(7.5YR2/2)　地山土(微)混入、やや固質。
2　黒褐色土(7.5YR3/2)　地山土ブロック(中)混入、やや固質。
3　褐　色　土(7.5YR2/1)　炭化物(微)・地山土(微)混入、やや軟質。
4　黒褐色土(7.5YR3/2)　やや赤色っぽい暗褐色土・地山土混入、やや軟質。
5　黒褐色土(7.5YR3/1)　地山土(微)混入、固質。
6　黒褐色土(7.5YR2/2)　炭化物(微)混入、やや軟質。
7　黒褐色土(7.5YR2/2)　炭化物(微)・地山土(少)混入、やや軟質。
8　黒褐色土(7.5YR3/2)　地山土ブロック(微)混入、やや軟質。
9　褐　色　土(7.5YR4/4)　暗褐色土(多)混入、やや軟質。
10　褐　色　土(7.5YR4/4)　暗褐色土(多)混入、軟質。
11　黒褐色土(7.5YR3/2)　地山土(少)混入、やや軟質。



ＳＫＦ475
1　黒　色　土(10YR2/1)　地山土ブロック(少)混入、やや軟質。
2　黒褐色土(10YR2/2)　地山土ブロック(少)混入、やや固質。
3　暗褐色土(10YR3/3)　地山土ブロック(微)混入、やや軟質。
4　黄褐色土(10YR5/8)　炭化物(微)混入、やや軟質。
5　黒褐色土(10YR2/2)　炭化物(微)・地山土ブロック(少)混入、軟質。
6　暗褐色土(10YR3/3)　地山土ブロック(多)混入、軟質。
7　褐　色　土(10YR4/6)　地山土混入、軟質。
8　暗褐色土(10YR2/2)　地山土(多)混入、軟質。
9　黒褐色土(10YR3/2)　地山土(少)混入、軟質。
10　黒褐色土(10YR2/2)　地山土(少)混入、軟質。
11　黒　色　土(10YR2/1)　地山粒(微)混入、やや軟質。

0　1m

第８図　土坑(４)　縄文④ＳＫＦ396・473・475

短軸1.28m、深さ1.42mである。壁は、上端から深さ0.2～0.3mのところより上方が大きく開き、下方は壁がやや内傾した台形状を呈する。下方壁の西側だけが、垂直に近い傾斜である。

ＳＫＦ155（第７図）

Ａ区中央の北西ＬＲ51区にあり、地山面で確認した。平面形は楕円形で、規模は長軸1.21m×短軸1.12m、深さ1.44mである。壁は、僅かに内傾した円筒に近い形態を呈する。

ＳＫＦ396（第８図、図版１-５）

Ｂ地区中央の北東側ＮＩ・ＮＪ75区にあり、地山面で確認した。平面形は不整楕円形で、規模は長軸1.14m×短軸1.35m、深さ1.3mである。壁は、上端から深さ0.2～0.3mのところより上方が大きく広がり、下方は内傾して台形状を呈する。

ＳＫＦ473（第８図、図版１-６・７）

Ｃ区の北区南側のＱＣ110杭にあり、地山面で確認した。平面形は不整形で、規模は長さ1.9m×幅1.5m、深さ1.25mである。壁の下方には、壁の崩落土が明瞭に残っていた。規模は、長さ1.45m×幅1.3m、深さ0.34mである。壁は、上端から深さ0.3mのところより上方が大きく開き、下方では強く内傾した台形状を呈する。底面はほぼ平坦であるが、中央部に対し周縁部が高まっている。覆土の下方には、壁の崩落土が明瞭である。

ＳＫＦ475（第８図、図版２-１～３）

Ｃ区の北区西側のＱＩ116区にあり、地山面で確認した。平面形は隅丸三角形状の不整形で、規模は長さ2.2m×幅2.1m、深さ1.55mである。壁は、南側上端から深さ0.7mのところより上方が大きく開くが、反対側はそれほどでもない。北東側の底面には、長さ1.3m×幅0.9mの小穴が付設される。ここからは炭化物が検出された。

ＳＫＦ476（第９図、図版２-５・６）

Ｃ区の北区南側のＱＤ111・112区にあり、地山面で確認した。平面形は略円形で、規模は長さ1.82m×幅1.7m、深さ1.6mである。壁は、上端から深さ0.5mのところより上方が緩く広がり、下方も緩く内傾する。南側の壁には、小さな袋状の窪みがある。

ＳＫＦ477（第９図、図版２-７・８）

Ｃ区の北区西側のＱＫ・ＱＬ118区にあり、地山面で確認した。この地区は深く削平されていた。平面形は略楕円形で、規模は長さ1.45m×幅1.3m、深さ0.34mである。壁は、北東側が袋状でその反対側は強い傾斜を示す。南東側の底面は平坦である。

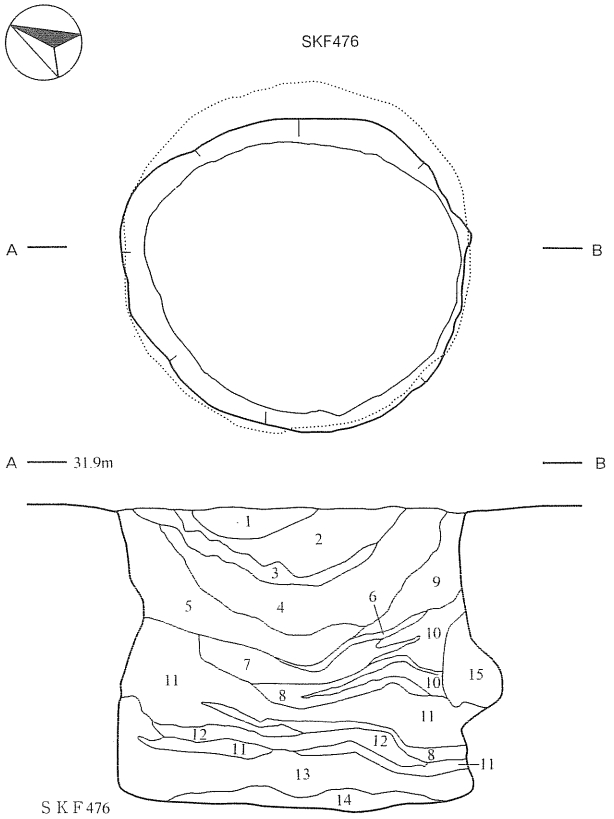
３　土坑

ＳＫ130（第９図）

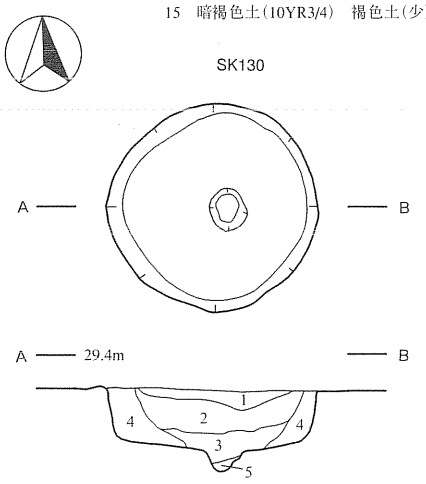
Ａ区中央やや西側のＭＤ・ＭＥ51区にあり、地山面で確認した。平面形は略円形で、規模は直径1.1m、深さ0.35mである。壁は直立気味に立ち上がり、底面の中央部がやや低い。底部中央付近には、長さ0.22m×幅0.18m、深さ0.1mの浅いピットがある。

ＳＫ131（第９図、図版２-４）

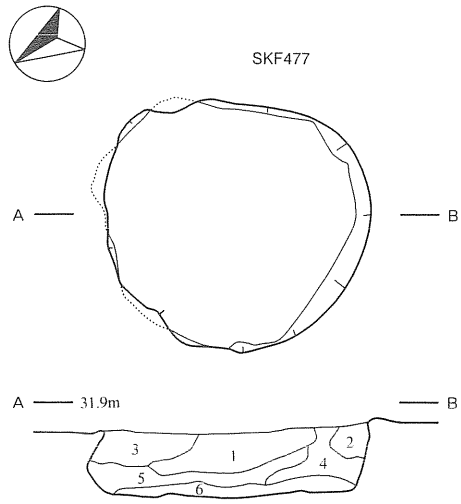
Ａ区中央やや西側のＭＦ50区にあり、地山面で確認した。平面形は不整な略円形で、規模は直径約1.4m、深さ0.51mである。壁は、やや緩い傾斜で湾曲して立ち上がり、底面は平坦である。中央に長さ0.25



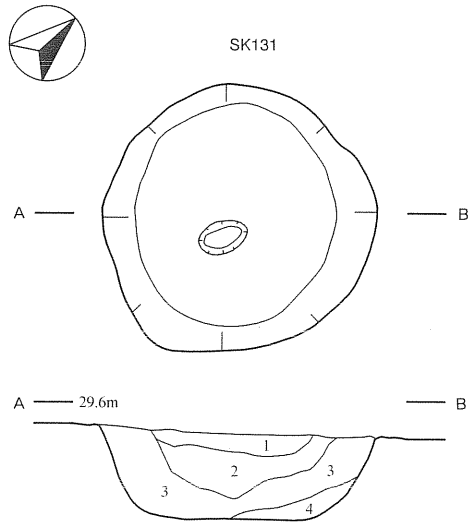
ＳＫＦ476
1　黒　色　土(10YR2/1)　地山土(微)混入、やや固質。
2　黒　色　土(10YR2/1)　地山土(少)混入、やや固質。
3　暗褐色土(7.5YR3/3)　炭化物(微)混入、固質。
4　黒褐色土(10YR2/2)　炭化物(微)・地山土(微)混入、やや固質。
5　黒褐色土(10YR2/2)　地山土ブロック(少)・地山土(少)混入、固質。
6　黒褐色土(10YR2/2)　地山土(少)・炭化物(微)混入、軟質。
7　褐　色　土(10YR2/3)　地山土(中)混入、軟質。
8　黒褐色土(10YR2/2)　地山土(少)・炭化物(微)混入、軟質。
9　暗褐色土(10YR3/3)　地山土(少)混入、固質。
10　褐　色　土(10YR4/6)　地山土混入、固質。
11　褐　色　土(10YR4/4)　褐色土(少)混入、やや軟質。
12　黒褐色土(10YR2/2)　地山土(中)混入、やや固質。
13　黒褐色土(10YR3/2)　地山土(少)混入、やや固質。
14　黒　色　土(10YR2/1)　炭化物(微)混入、固質。
15　暗褐色土(10YR3/4)　褐色土(少)混入、やや軟質。



ＳＫ130
1　黒褐色土(10YR2/3)　粘土～シルト、炭化物混入、やや軟質。
2　暗褐色土(10YR3/3)　粘土～シルト、炭化物混入、やや軟質。
3　暗褐色土(10YR3/4)　粘土、炭化物混入、固質。
4　褐　色　土(10YR4/4)　粘土～シルト、炭化物・地山土混入、やや軟質。
5　黄褐色土(10YR5/6)　粘土、地山土混入、やや固質。



ＳＫＦ477
1　暗褐色土(10YR3/3)　地山土(中)・炭化物(微)混入、やや軟質。
2　褐　色　土(10YR4/4)　褐色土(微)混入、やや軟質。
3　暗褐色土(10YR3/3)　地山土ブロック混入。
4　黒褐色土(10YR2/3)　地山土(少)混入、軟質。
5　黒褐色土(10YR2/2)　地山土(少)混入、やや軟質。
6　黒褐色土(10YR2/2)　地山土(微)混入、固質。



ＳＫ131
1　黒褐色土(10YR2/3)　粘土～シルト、炭化物混入、やや軟質。
2　黒褐色土(10YR2/2)　粘土～シルト、炭化物混入、やや軟質。
3　暗褐色土(10YR3/3)　粘土～シルト、炭化物・地山土混入、やや固質。
4　暗褐色土(10YR3/4)　粘土、地山土混入、やや固質。

0　1m

第９図　土坑（５）縄文⑤ＳＫＦ476・477、ＳＫ130・131

m×幅1.6mのピットがある。

ＳＫ135（第10図）

Ａ区中央やや西側のＭＧ・ＭＨ50区にあり、地山面で確認した。平面形は不整な楕円形で、規模は長さ1.15m×幅１m、深さ0.32mである。壁は北側が直立気味に立ち上がり、南側は緩い傾斜で湾曲している。底面は北東側が一段低い。

ＳＫ143（第10図、図版３－１）

Ａ区中央やや西側のＭＥ・ＭＦ55区にあり、地山面で確認した。平面形は略円形で、規模は長さ1.55m×幅1.5m、深さ0.92mである。壁は、全体的に湾曲して立ち上がり、その表面は凸凹している。底面には丸みがある。

ＳＫ147（第10図、図版３－２）

Ａ区中央やや西側のＭＤ48区にあり、地山面で確認した。平面形は楕円形で、規模は長さ1.04m×幅0.82m、深さ0.53mである。壁は、湾曲して直立気味に立ち上がる。底面は平坦である。

ＳＫ150（第10図）

Ａ区中央やや西側のＭＧ49区にあり、ＳＤ117の覆土を除去して確認した。ＳＤ117に切られる。平面形は楕円形で、規模は長さ0.94m×幅0.85m、深さ0.41mである。壁は湾曲して直立気味に立ち上がり、底面は平坦である。

ＳＫ151（第10図、図版３－３）

Ａ区中央やや西側のＭＥ48区にあり、地山面で確認した。平面形は楕円形で、規模は長さ1.9m×幅1.37m、深さ0.45mである。壁は、湾曲して直立気味に立ち上がり、南西側の壁では段が形成される。底面は、中央部が僅かに盛り上がる。

ＳＫ152（第11図、図版３－４）

Ａ区中央やや西側のＭＤ・ＭＥ49区にあり、地山面で確認した。平面形は不整な楕円形で、規模は長さ1.6m×幅1.47m、深さ0.52mである。壁は湾曲して立ち上がり、底面は平坦である。底面中央やや北寄りには、長さ0.24m×幅0.2mのピットが付設される。

ＳＫ153（第11図、図版３－５）

Ａ区中央やや西側のＭＦ49区にあり、地山面で確認した。ＳＤ117に切られる。平面形は不整な円形で、規模は長軸1.88m×幅1.78m、深さ0.57mである。壁は緩く立ち上がり、その中央が僅かに膨らむ。底面は平坦である。

ＳＫ154（第11図、図版３－６）

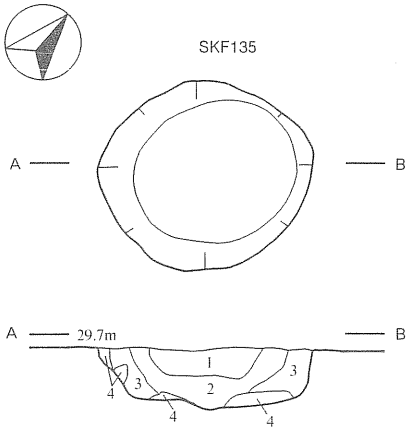
Ａ区中央やや西側のＭＦ49区にあり、地山面で確認した。北側の端がＳＤ117・118によって切られる。平面は不整の楕円形で、規模は長さ1.1m×幅0.94m、深さ0.48mである。壁は、やや湾曲して直立気味に立ち上がり、底面には僅かな凹凸がある。

ＳＫ159（第11図、図版３－７）

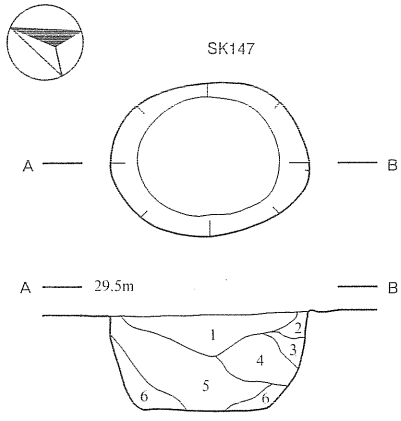
Ａ区中央やや西側のＭＧ49区にあり、地山面で確認した。平面形は円形に近い楕円形で、規模は長さ1.51m×幅1.4m、深さ0.72mである。壁は、直線的で逆台形状を呈し、底面は平坦である。

ＳＫ170（第11図、図版３－８）

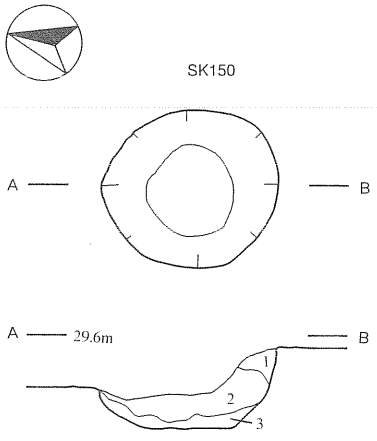
Ａ区中央やや西側のＭＤ48・49区にあり、地山面で確認した。平面形は両端が尖った楕円形で、規模は



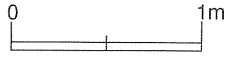
ＳＫ135
1　暗褐色土(10YR3/3)　シルト、やや固質。
2　暗褐色土(10YR3/4)　粘土～シルト、地山土混入、やや軟質。
3　暗褐色土(10YR3/3)　シルト、地山土混入、やや軟質。
4　褐　色　土(10YR4/6)　粘土～シルト、地山土混入、やや固質。

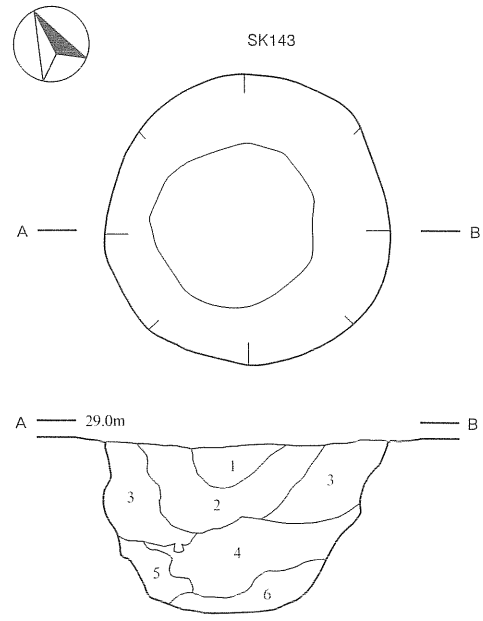


ＳＫ147
1　黒褐色土(10YR2/3)　シルト、炭化物混入、やや軟質。
2　黒褐色土(10YR2/3)　粘土～シルト、炭化物混入、やや固質。
3　暗褐色土(10YR3/4)　粘土～シルト、地山土混入、やや固質。
4　暗褐色土(10YR3/4)　粘土～シルト、地山土混入、固質。
5　暗褐色土(10YR3/4)　粘土～シルト、炭化物・地山土混入、やや固質。
6　褐　色　土(10YR4/6)　粘土、地山土混入、固質。

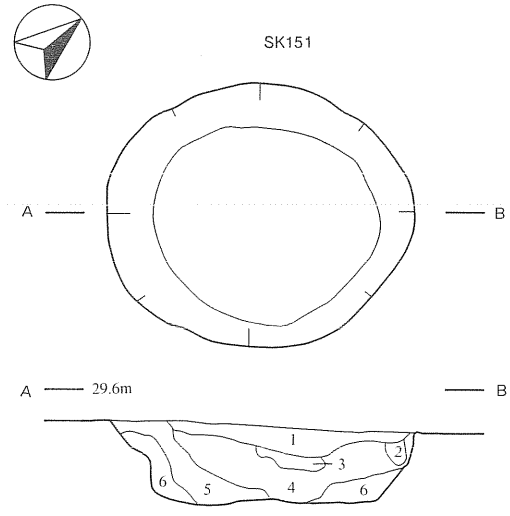


ＳＫ150
1　暗褐色土(10YR3/4)　シルト、地山土混入、やや軟質。
2　褐　色　土(10YR4/4)　シルト、炭化物混入、やや軟質。
3　褐　色　土(10YR4/6)　粘土、地山土混入、固質。



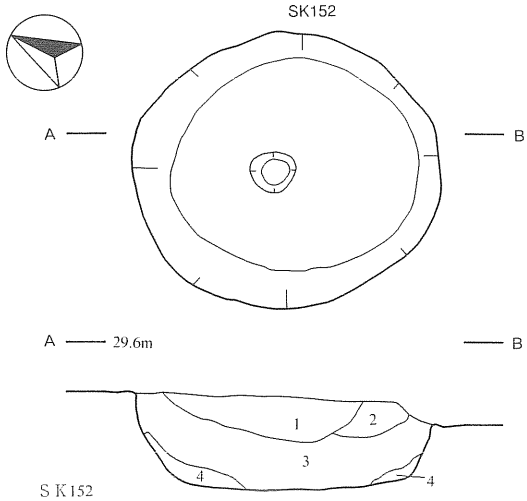


ＳＫ143
1　暗褐色土(10YR3/4)　シルト～砂、炭化物混入、やや軟質。
2　褐　色　土(10YR4/4)　シルト～砂、炭化物・地山土混入、やや軟質。
3　黄褐色土(10YR5/8)　粘土、地山土混入、固質。
4　褐　色　土(10YR4/6)　粘土～シルト、地山土混入、固質。
5　暗褐色土(10YR3/4)　シルト、炭化物・地山土混入、やや固質。
6　にぶい黄褐色土(10YR5/8)　粘土、地山土混入、固質。

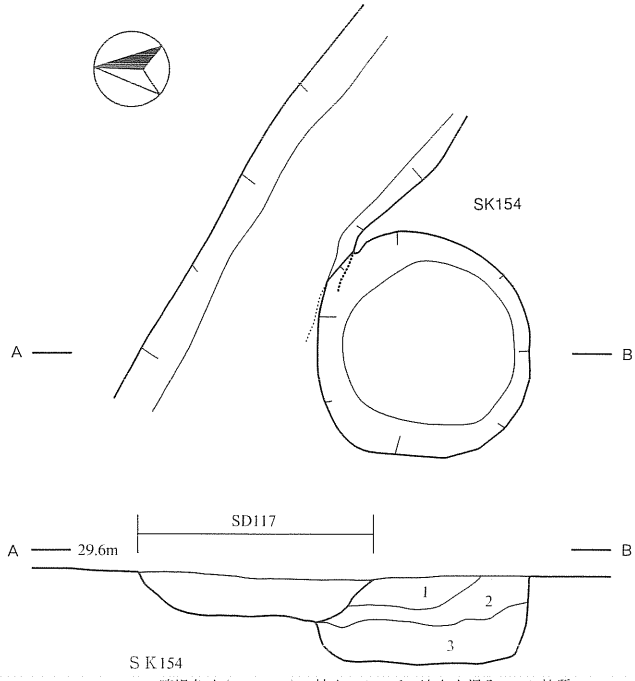


ＳＫ151
1　黒褐色土(10YR2/2)　粘土～シルト、炭化物混入、やや固質。
2　暗褐色土(10YR3/3)　シルト、軟質。
3　暗褐色土(10YR3/4)　粘土、地山土混入、固質。
4　暗褐色土(10YR3/4)　シルト、炭化物混入、軟質。
5　暗褐色土(10YR3/4)　粘土～シルト、地山土混入、やや軟質。
6　暗褐色土(10YR3/3)　粘土、地山土混入、固質。

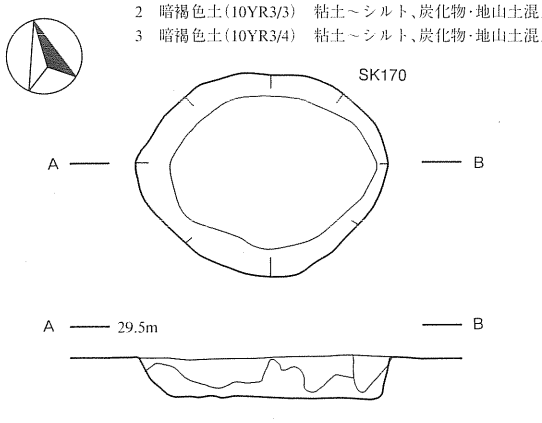
第10図　土坑（６）縄文⑥ＳＫ135・143・147・150・151

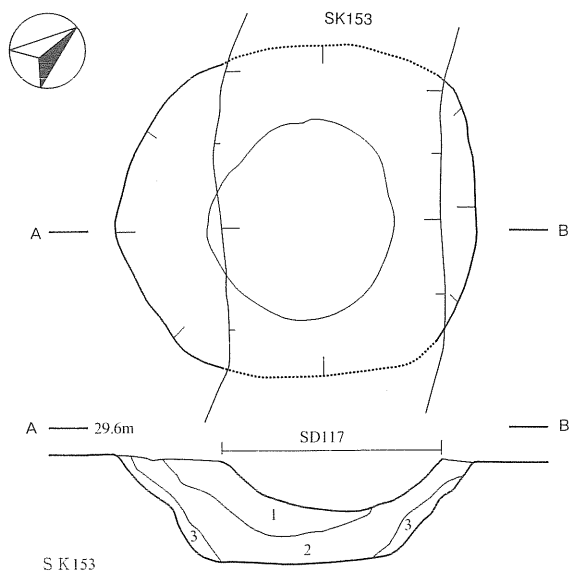


ＳＫ152
1　黒褐色土(10YR2/3)　シルト、炭化物混入、やや軟質。
2　暗褐色土(10YR3/3)　粘土～シルト、やや軟質。
3　褐　色　土(10YR4/4)　粘土～シルト、炭化物・地山土混入、やや固質。
4　黄褐色土(10YR5/6)　粘土、地山土混入、やや固質。

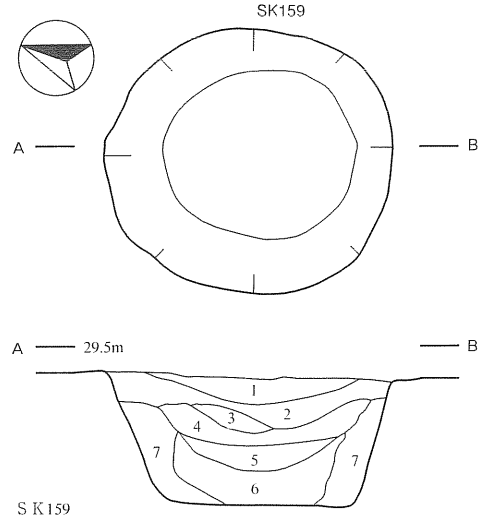


ＳＫ154
1　暗褐色土(10YR3/4)　粘土～シルト、地山土混入、やや軟質。
2　暗褐色土(10YR3/3)　粘土～シルト、炭化物・地山土混入、固質。
3　暗褐色土(10YR3/4)　粘土～シルト、炭化物・地山土混入、やや軟質。

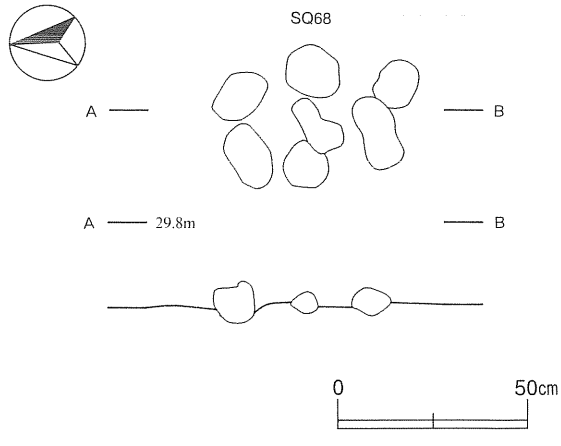




ＳＫ153
1　黒褐色土(10YR2/3)　粘土～シルト、炭化物混入、固質。
2　暗褐色土(10YR3/4)　粘土～シルト、炭化物・地山土混入、やや固質。
3　褐　色　土(10YR4/6)　粘土、炭化物・地山土混入、固質。



ＳＫ159
1　黒褐色土(10YR2/2)　粘土～シルト、炭化物混入、やや軟質。
2　暗褐色土(10YR3/3)　粘土～シルト、固質。
3　褐　色　土(10YR4/4)　粘土、炭化物・地山土混入、固質。
4　黄褐色土(10YR5/6)　粘土、炭化物・地山土混入、固質。
5　褐　色　土(10YR4/4)　粘土、炭化物・地山土混入、固質。
6　暗褐色土(10YR3/3)　粘土～シルト、地山土混入、軟質。
7　暗褐色土(10YR3/4)　粘土～シルト、地山土混入、やや固質。



第11図　土坑（７）縄文⑦ＳＫ152～154・159・170、集石遺構ＳＱ68

長さ1.33m×幅1.07m、深さ0.23mである。壁は東側が直立気味に立ち上がり、他は湾曲した緩い傾斜を示す。底面はほぼ平坦である。

４　集石遺構

ＳＱ68（第11図）

Ａ区中央やや西側のＭＧ51区にあり、地山面よりやや上位の層で確認した。径５～10cmの小さく扁平な礫が、15～20cmの範囲で集中する。

５　遺構外出土石器（第12～16図、図版４・５）

Ｓ１・Ｓ２は石鏃である。どちらも調整の丁寧な有茎鏃で、Ｓ１は基部が、Ｓ２は先端部が欠損する。Ｓ３は尖頭器とした。主要剥離面を大きく残し、僅かに先端を尖らせているが周縁の調整は粗い。

Ｓ４は石匙である。正面には全面に丁寧な調整を施し、裏面は主要剥離面を全面的に残している。幅が広く、先端は斜めだが直線的に整えている。

Ｓ５～Ｓ７は掻器である。素材はＳ５・Ｓ７が横長剥片、Ｓ６は縦長剥片を利用している。Ｓ５は剥片の先端部と右側縁下方に、正面からの丁寧な調整を施す。Ｓ７は先端と左側縁に、急角度の丁寧な調整を施す。Ｓ６は正面の両側縁に丁寧な調整を施す。

Ｓ８～Ｓ18は削器である。Ｓ８～Ｓ10は素材が縦長剥片で、正面の両側縁に丁寧な調整を施す。Ｓ11・Ｓ12の素材は横長剥片で、正面の右側縁と裏面の右側縁に調整を施す。Ｓ13・Ｓ14は縦長剥片で、正面の右側縁に丁寧な調整を施す。Ｓ14は、三日月状の窪み側を利用した定型的な石器である。Ｓ13は全体がややトロトロしている。Ｓ15～Ｓ18も一側縁に、短く細かい調整を施す。

Ｓ19～Ｓ21は石篦である。Ｓ19は横長剥片を素材にしたと考えられ、全面に調整を施す。正面の中軸線上に、縦縞状の礫皮面直下の色調が観察される。刃部が両刃状で丁寧に整えられており、石斧に分類すべきかもしれない。Ｓ24は素材が横長剥片で、主要剥離面を大きく残している。正面は両側縁と刃部に、裏面は左側縁にだけ調整を施す。Ｓ21は刃部と考えられる破片である。

Ｓ22～Ｓ24は抉入石器と考えられる。Ｓ22は正面左側縁の中央部に、Ｓ24は底辺の中央部に、Ｓ23は正面の底辺中央やや右側にそれぞれノッチをもつ。

Ｓ25～Ｓ27は使用痕のある剥片である。Ｓ25は裏面右側縁にＳ26は正面左側縁に、Ｓ27は正面左側縁にそれぞれ細かく潰れた使用痕が認められる。

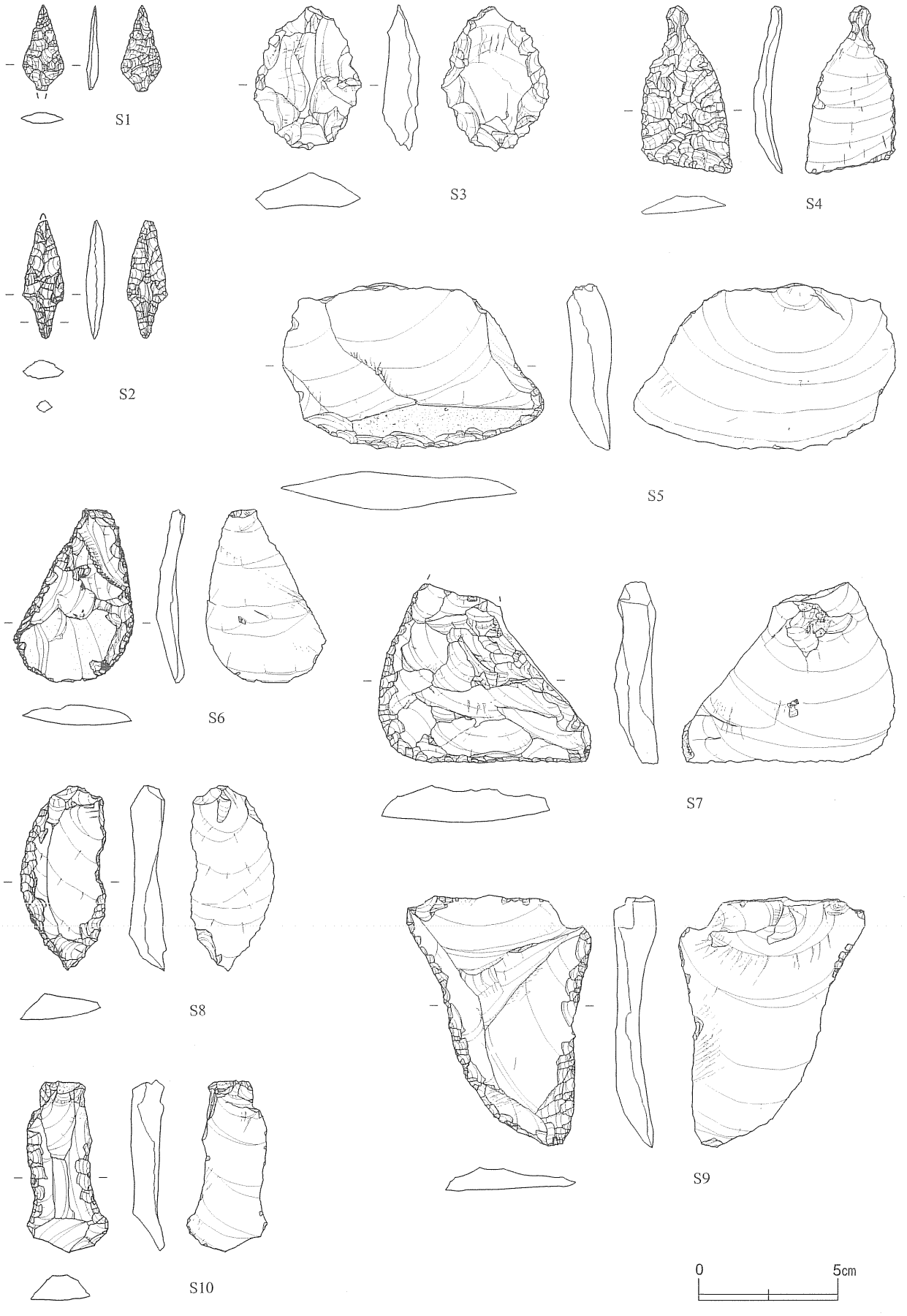
Ｓ28・Ｓ29は石核である。どちらも、小さな剥片を取り終わった残核と考えられる。Ｓ29は半分以上に礫皮面をもつ。

Ｓ30は石棒の破片である。全面が丁寧に磨かれ、断面は図の下方がやや直線的な楕円形である。

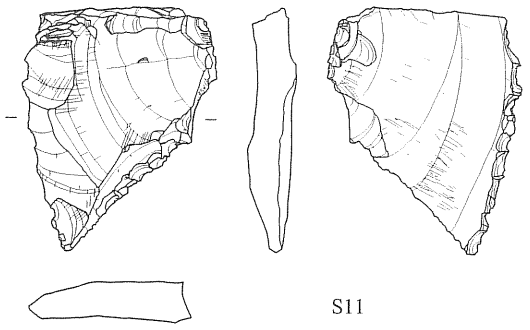
Ｓ31・Ｓ32は緩い円刃状の石斧である。Ｓ31は正面の右側縁に粗い調整を施し、形を整えている。正面の刃部と基部、裏面の刃部を磨き込んでいる。扁平な河原石を利用した片刃の石斧である。Ｓ32は全面を磨き込んだ蛤刃状の石斧で、正面・側面共に均整がとれている。

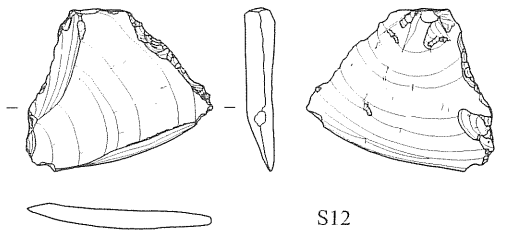
Ｓ33は凹石である。正面には１つの凹部、裏面には３つの凹部が連続した状態で付く。平行四辺形の扁平な河原石を利用している。

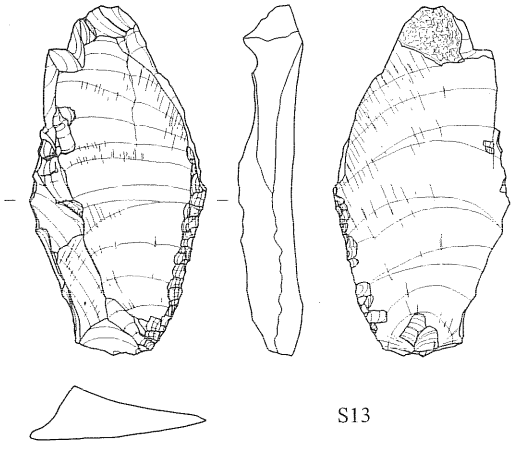
Ｓ34は石錘で一部を欠損している。半円状の扁平な河原石を利用し、端部に粗い調整を施す。表裏面

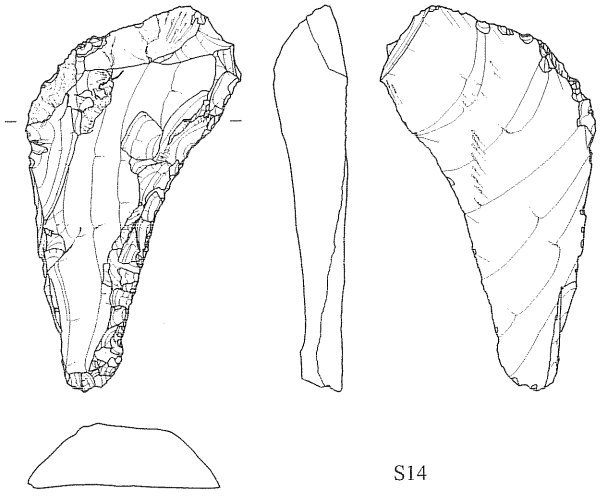


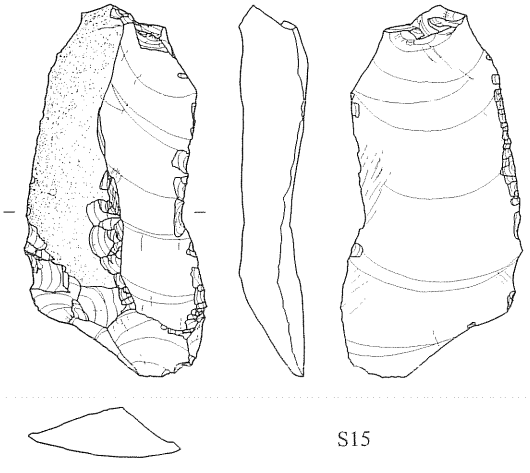
第12図　遺構外出土石器（１）縄文①Ｓ１～Ｓ10

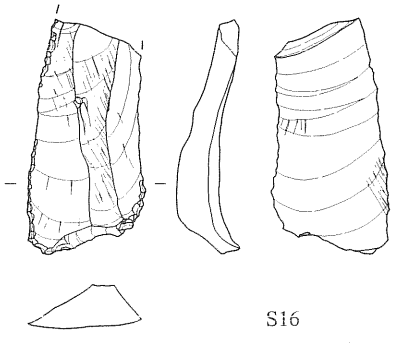


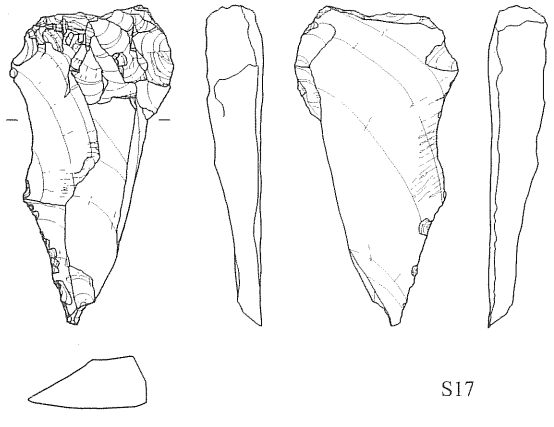


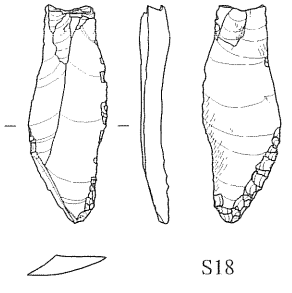


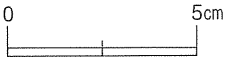




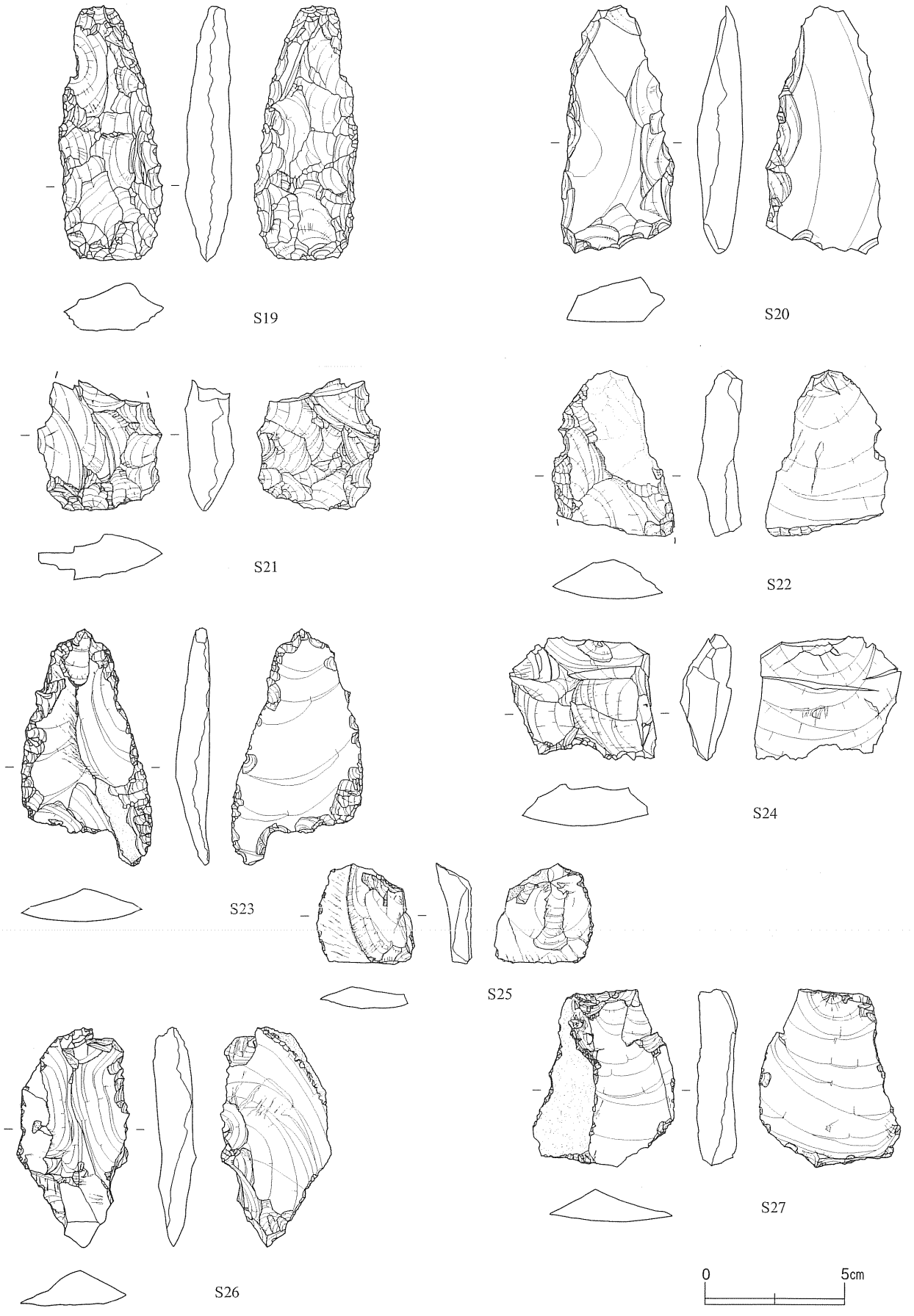




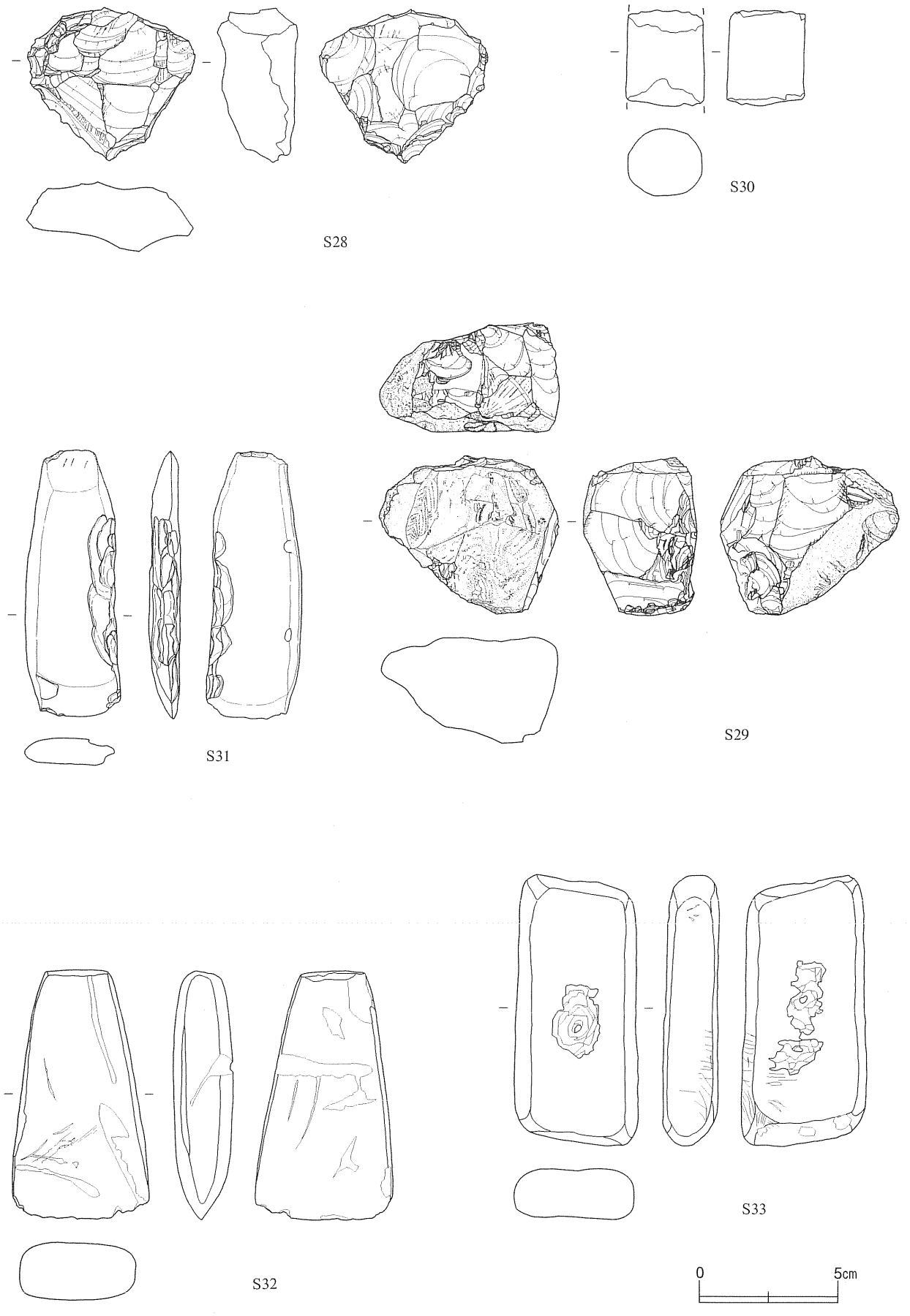




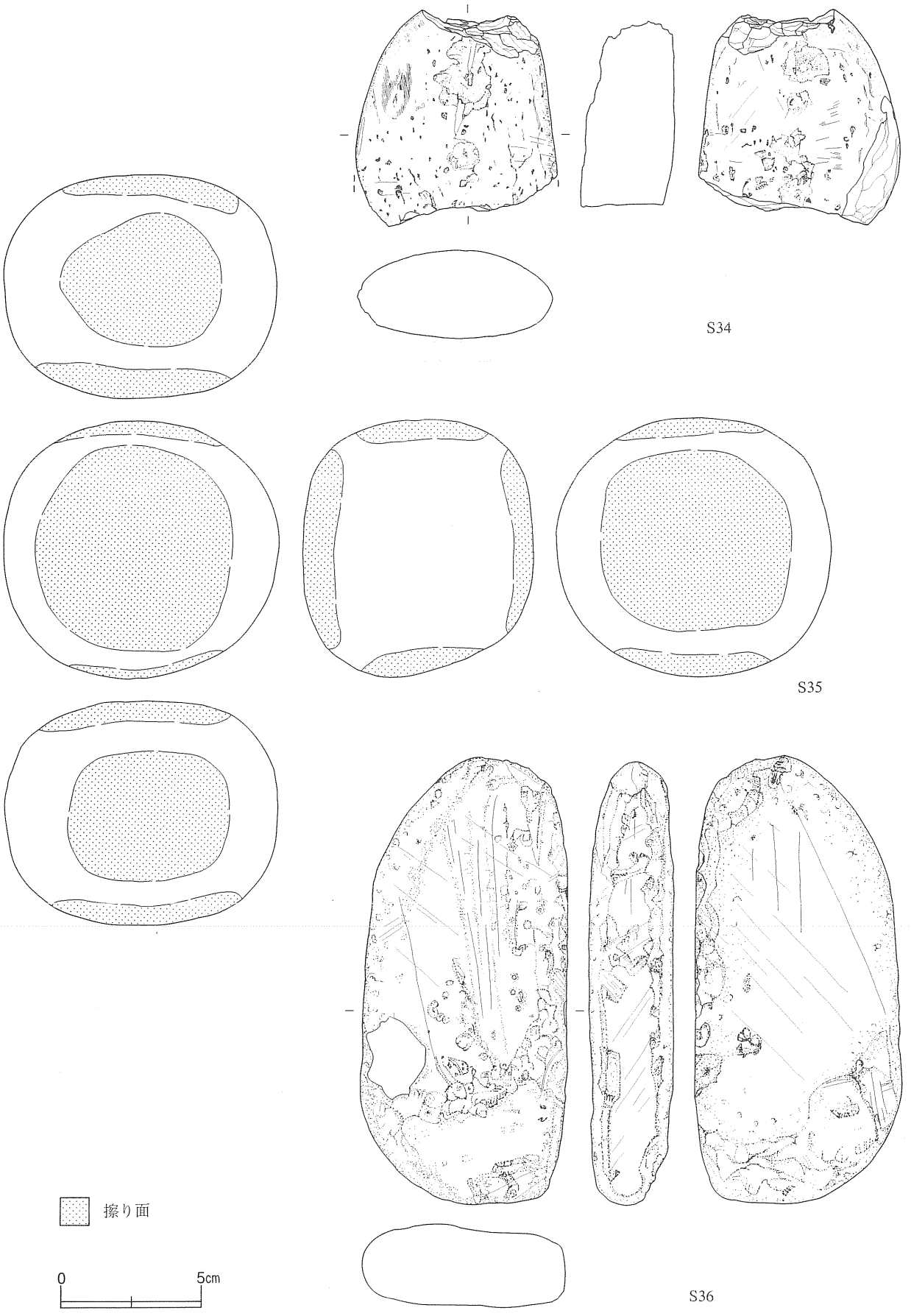
第13図　遺構外出土石器（２）縄文②Ｓ11～Ｓ18



第14図　遺構外出土石器（３）縄文③Ｓ19～Ｓ27



第15図　遺構外出土石器（４）縄文④Ｓ28～Ｓ33



第16図　遺構外出土石器（５）縄文⑤Ｓ34～Ｓ36

には、浅い凹部が観察される。

Ｓ35は擦石である。球状で重量感のある河原石である。表面がやや粗い礫で、擦り面は滑らかである。

Ｓ36は半円状扁平打製石器である。使用面の側縁は擦り潰され直線的になる。

第２表　石器の観察

（　）は推定値・現存値

番号	出土地点	器　種	石　質	色　調	長×幅×厚(mm)×重量(g)
S1	MD65区	石　鏃	硬質頁岩	10YR6/1褐灰	(31)× 15× 4× 1.2
S2	MP63区	石　鏃	硬質頁岩	5Y7/1灰白	(43)× 15× 7× 3.2
S3	MO57区	尖頭器	瑪　瑙	N7/0灰白	52× 33× 13×21.0
S4	MP64区	石　匙	硬質頁岩	10YR6/2灰黄褐	62× 25× 10×10.3
S5	MI49区	掻　器	頁　岩	2.5Y7/2灰黄	61× 85× 16×81.8
S6	MF47区	掻　器	頁　岩	5YR3/6暗赤褐	63× 41× 11×16.4
S7	KJ39区	掻　器	瑪　瑙	N7/0灰白	(65)× 61× 16×76.2
S8	KT37区	削　器	硬質頁岩	10YR5/1褐灰	67× 30× 14×20.7
S9	MP62区	削　器	頁　岩	2.5YR8/1灰白	91× 48× 15×54.5
S10	MA53区	削　器	硬質頁岩	2.5Y5/1黄灰	62× 21× 18×18.3
S11	LG39区	削　器	頁　岩	10YR6/4にぶい黄橙	65× 43× 13×33.1
S12	MA52区	削　器	頁　岩	2.5Y6/1黄灰	44× 49× 8×14.4
S13	LM41区	削　器	頁　岩	N7/0灰白	93× 47× 18×62.5
S14	MG52区	削　器	頁　岩	10YR4/2灰黄褐	102× 51× 19×79.6
S15	LP42区	削　器	頁　岩	10YR7/1灰白	100× 48× 18×61.3
S16	KR36区	削　器	頁　岩	2.5Y7/1灰白	(63)× 31× 17×21.2
S17	LG38区	削　器	頁　岩	2.5Y6/1黄灰	84× 31× 15×41.7
S18	KF37区	削　器	頁　岩	2.5Y5/1黄灰	58× 21× 8× 5.8
S19	LQ43区	石　篦	チャート	10YR4/1褐灰	91× 37× 17×57.3
S20	MI49区	石　篦	頁　岩	10YR4/6褐	90× 39× 16×55.0
S21	KA39区	石　篦	頁　岩	2.5Y5/1黄灰	(48)× 44× 18×31.1
S22	MI47区	抉入石器	頁　岩	10YR8/1灰白	60× 44× 16×32.6
S23	NA61区	抉入石器	硬質頁岩	10YR7/1灰白	86× 47× 13×35.7
S24	LE35区	抉入石器	チャート	2.5Y8/1灰白	45× 53× 19×36.9
S25	MB51区	使用痕ある剥片	頁　岩	2.5Y6/1黄灰	36× 35× 13×11.6
S26	LC35区	使用痕ある剥片	チャート	10YR5/1褐灰	79× 40× 16×35.7
S27	MS66区	使用痕ある剥片	頁　岩	10YR4/2灰黄褐	64× 51× 20×42.7
S28	MH49区	石　核	頁　岩	10YR6/1褐灰	56× 61× 29×85.6
S29	LP41区	石　核	頁　岩	5Y5/1灰	58× 63× 41×167.5
S30	MT65区	石　棒	砂　岩	N5/0灰	(35)× 27× 27×39.8
S31	MH49区	石　斧	砂　岩	10Y8/1灰白	97× 32× 11×53.5
S32	MF55区	石　斧	砂　岩	10Y6/1灰	91× 50×215×138.6
S33	MA51区	凹　石	砂質頁岩	10YR7/4にぶい黄橙	98× 45× 20×116.1
S34	ME52区	石　錘	泥　岩	5Y7/1灰白	(78)× 70× 33×227.2
S35	MD53区	擦　石	玄武岩	10YR5/3にぶい黄褐	94× 98× 82×1133.9
S36	ME52区	半円状扁平打製石器	砂　岩	2.5Y7/1灰白	162× 73× 30×554.1

第２節　弥生時代の遺構と遺物

１　土器埋設遺構（第17図）

ＳＲ188（第18・19図、図版６－２・３、18、24、29）

Ａ区中央のＬＬ・ＬＭ41区にあり、地山面で壺体部の一部を確認した。掘り込みは、断面観察で埋設土器より僅かに大きく、規模は断面で上端の推定径0.5m、深さ0.4mである。埋設土器は正立状態で、底部が食い込んでおり、やや北側に傾いている。

１は壺形土器で全体の約1/2が残存。体部上位に最大径をもち、口縁部は僅かに外反する。器高40.3cm、口径20.2cm、最大径40.6cm、底径は14.8cmである。頸部と肩部に３本一組の平行沈線文が巡る。肩部の平行沈線文の下位に、横幅５mm前後の列点文が巡る。沈線及び列点文以外は無文である。調整は、横位主体のハケメの後ミガキを施す。体部のいたる所に明瞭なハケメが観察される。沈線と列点文には、調整のハケメと異なる方向（右上-左下）に揃って、木口と思われるハケメ状の痕跡が付く。底部には約3.5cm×約３cmの穿孔がある。内面は丁寧なハケメの後、体部下端と肩部より上位には丁寧な、それ以外には粗いミガキを施す。所々に黒斑を認める。胎土には金色の雲母を顕著に含む。焼成は良好で、色調は橙色である。精製の土器である。

ＳＲ190（第18・20図、巻頭図版３－１、図版６－４、７－１、18、24、29）

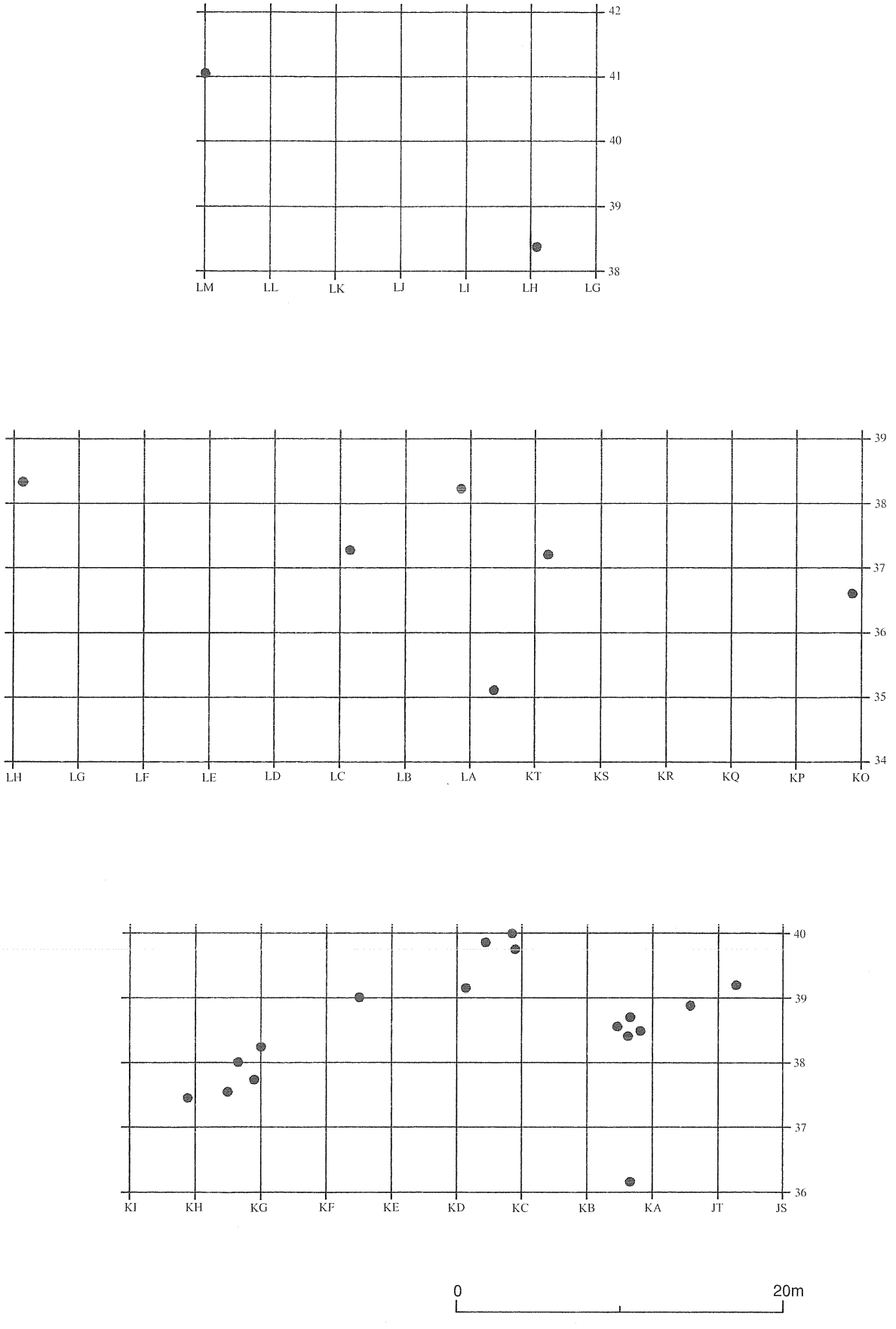
Ａ区中央やや東側のＬＧ38区にあり、地山面で壺の肩部を確認した。掘り込みは、断面観察で上部だけ埋設土器より僅かに大きく、それより下は土器と密着している。規模は、断面で上端の推定径0.5m、深さ0.4mである。埋設土器（２）は正立しており、内部から小さな壺（３）が出土した。

２は壺形土器で、口縁部と底部の一部を欠損。体部中央の僅か上位に最大径をもち、口縁部は僅かに外湾する。器高42.6cm、口径19.6cm、最大径9.4cm、底径12cmである。全体は無文であるが、口唇部直下から体部下端まで、煤や黒斑と異なる艶のある黒色の範囲が認められる。不安定ながらかなりの範囲を占めることから、黒色土器と判断される。内外面には、本来施したと思われるハケメは認め難く、丁寧なミガキを施す。底面は約1/2を欠損するが、中央側の底部内面の割れ口が斜めの状態で、外部からの穿孔が想定される。体部には、長さ10cm程の黒斑が２つ並んで確認される。胎土には海綿骨針を含む。焼成は良好で、色調はにぶい橙色である。精製の土器である。

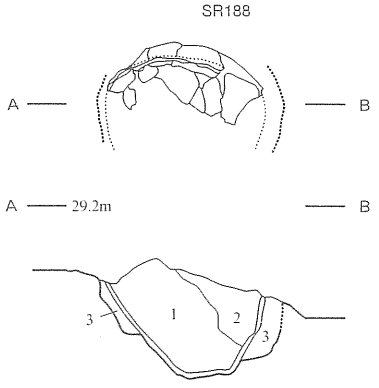
３は壺形土器で、口縁部の約1/2と体部の約1/4を欠損。体部中央やや上位に最大径をもち、口縁部は僅かに外反する。器高31cm、口径12.9cm、最大径24.2cm、底径9.3cmである。頸部に幅２～３mmの沈線文を施す以外は無文で、調整は底部を含む全面に丁寧なミガキを施す。肩部には、ほんの微かに細かなハケメ状痕跡を認める。底面には径約２cm程の穿孔があり、底部から体部下端にかけてアスファルトを認める。肩部と体部中央には黒斑がある。内面には、条の非常に細かいハケメの後に丁寧なミガキを施す。胎土には海綿骨針を含む他、１～２mmの砂粒を僅かに含む。焼成は良好で、色調はにぶい黄褐色である。精製の土器である。

ＳＲ192（第18・21図、巻頭図版６－２、図版７－２、24）

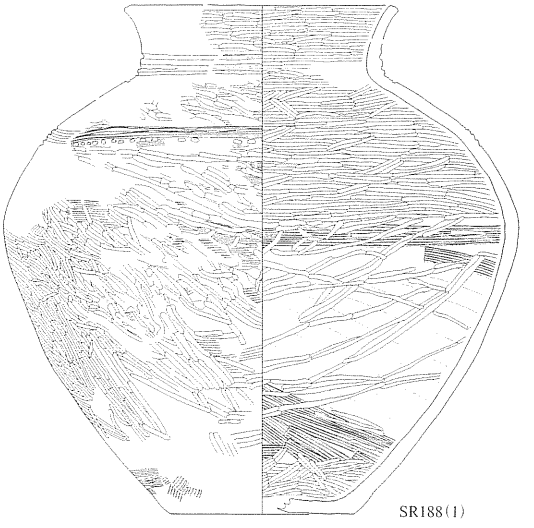
Ａ区東端のＫＧ37区にあり、地山面で甕の肩部を確認した。掘り込みは、断面観察で埋設土器より大きめの擂り鉢状を呈する。規模は、断面で上端の径0.4m、深さ0.4mである。埋設土器は正立しており、内部から口縁部の破片が出土した。



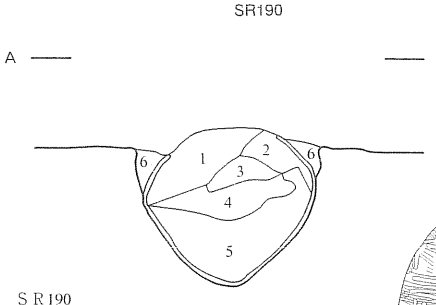
第17図　土器埋設遺構の配置



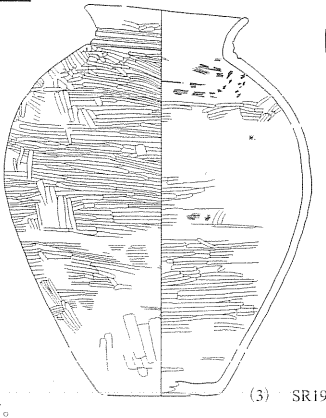
ＳＫ170
1　黒褐色土(10YR2/3)　シルト、軟質。
2　暗褐色土(10YR3/3)　粘土～シルト、炭化物混入、やや固質。
3　褐　色　土(10YR4/6)　粘土～シルト、地山土混入、固質。



SR188(1)

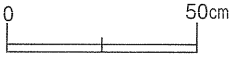


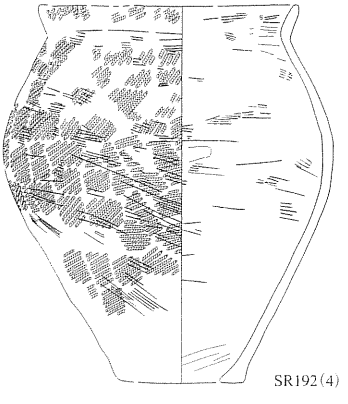
ＳＲ190
1　にぶい黄褐色土(10YR5/4)　粘土～シルト、地山土混入、やや固質。
2　にぶい黄褐色土(10YR5/4)　シルト～砂、地山土混入、やや固質。
3　褐　色　土(10YR4/6)　シルト、地山土混入、やや固質。
4　褐　色　土(10YR4/4)　シルト～砂、地山土混入、やや固質。
5　褐　色　土(10YR4/6)　シルト～粘土、地山土混入、やや固質。
6　黄褐色土(10YR5/8)　粘土、地山土混入、やや固質。



(3)　SR190

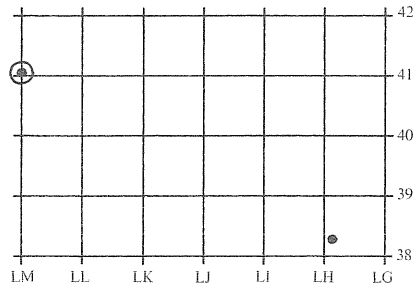
(2)

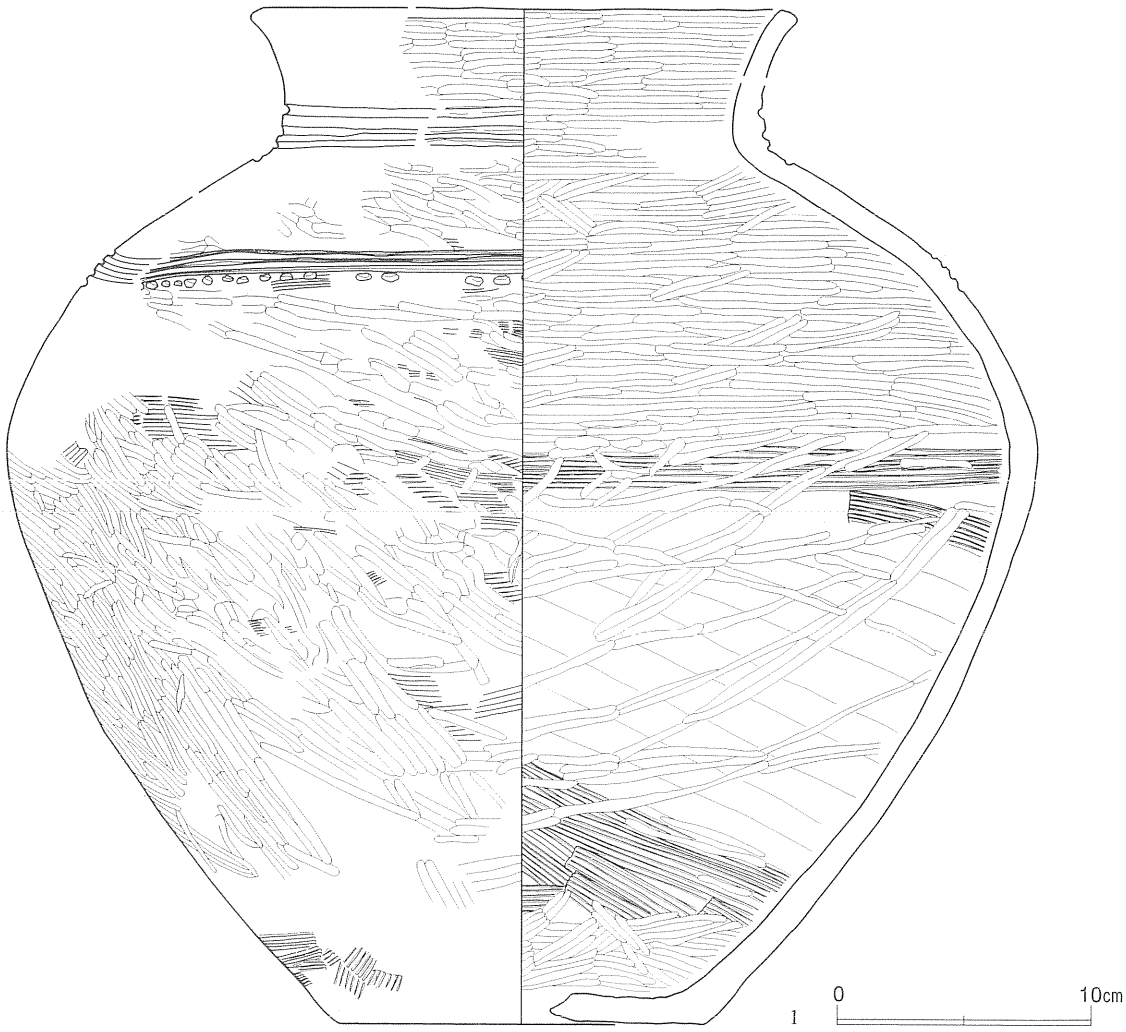




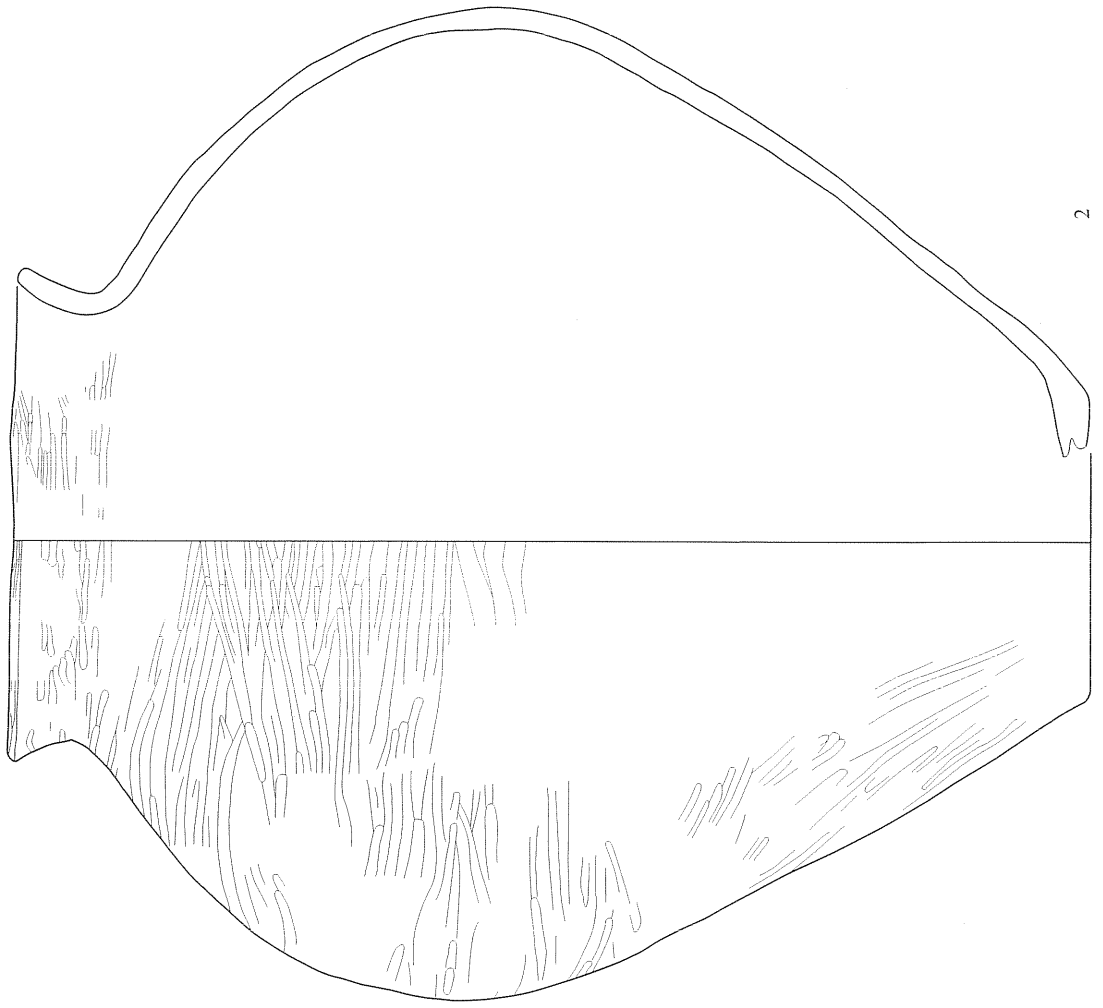
SR192(4)

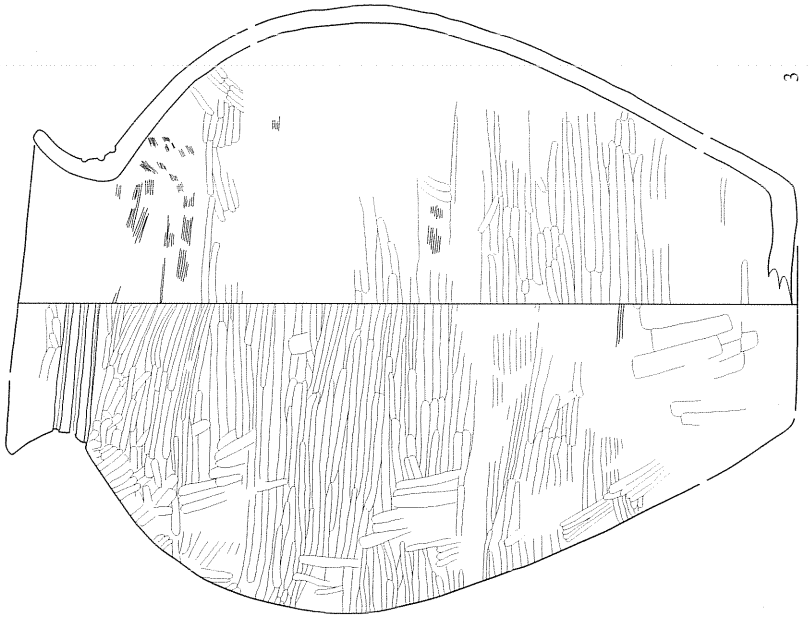
第18図　土器埋設遺構（１）弥生①ＳＲ188・190・192



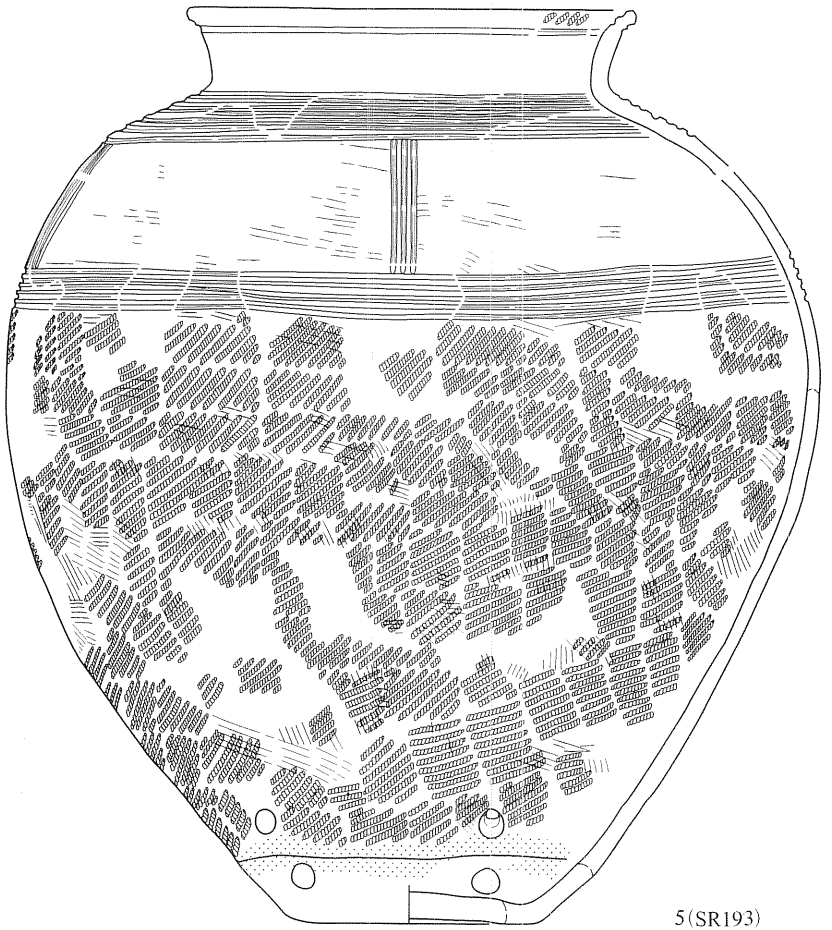


第19図　遺構内出土土器（１）弥生①ＳＲ188





第20図　遺構内出土土器（２）弥生②ＳＲ190



アスファルト

0　10cm

第21図　遺構内出土土器（３）弥生③ＳＲ192・193

４は甕形土器で、底部と口縁部などの一部を欠損。体部中央のやや上位に最大径をもち、口縁は「く」の字の頸部から短く外傾する。底部はやや外へ突出気味である。器高30cm、口径20.5cm、最大径25.9cm、底径9.8cmである。表面の約1/4が爛れている。頸部を除いた部分には、縦位回転のＬＲ縄文を施す。調整は、ハケメ→縄文の後に頸部だけに横位のナデを施す。底面には、径約６cmの正円状を呈した破損部がある。当初土器棺に関する穿孔と判断したが、内面の底部が破損部の径と一致しその周縁が非常に薄いこと、さらに破損部付近に斜めの剥落がないことから、故意に打ち欠かれていない可能性がある。また、底部より５cm上位には３～４cmの不整形の破損部がある。内面に斜めの剥落があり、土器棺使用時に穿孔されたものと判断される。内面は横位のハケメの後ミガキを施す。体部以上にはハケメが顕著である。胎土には細砂を含む。焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色である。表裏面には、大きな黒斑と思われる範囲がある。精製の土器である。

ＳＲ193（第21・22図、巻頭図版２－２、図版７－３・４、18、24、29）

Ａ区東端のＪＳ39区にあり、地山面で壺の体部を確認した。掘り込みは、断面観察で埋設土器より大きめの擂り鉢状を呈する。平面形は楕円形で、規模は長さ0.45m×幅0.39m、深さ0.2mである。

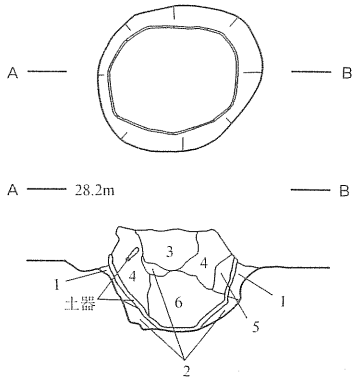
５は壺形土器で、肩部の1/2と口縁部の大半を欠損。体部上位に最大径をもち、口縁部は外反して口唇部は横位置にくる。器高36cm、推定口径17.8cm、最大径32.2cm、底径9.3cmである。体部上端部と体部最大径部付近には、それぞれ１本の幅が約2mmで７本一組と５本一組の平行沈線文がある。肩部の無文帯は、１本が幅約２mmで３本一組の口唇部に直交した平行沈線によって、区画範囲が不均衡ながら４つに区画される。縄文の施文された口唇部直下には、幅約３mmの平行沈線文を１本配置し、その下には無文帯をつくる。体部中央より下には縄文を施す。体部下端には、径約１cm（内面で約５mm）の補修孔が底部周縁に沿う割れ口に６個確認できる。このうち対になるものが一組あるものの、孔に当たる位置が破損しているのが大半で、本来５対10個の補修孔があったと考えられる。この割れ口には、アスファルトが帯状に付着する。また、体部中央にある水平な割れ口に沿った円周の約1/3にも、アスファルトが施される。現状では補修孔は確認できない。体部の相反する位置には掌大の黒斑が確認でき、その上には、他の体部同様に微かな赤色塗彩が確認できる。内面には、口縁部に約2mmの沈線文が巡り、調整はハケメの後に丁寧なミガキが施さる。胎土には海綿骨針を含む。焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色である。半精製の土器である。

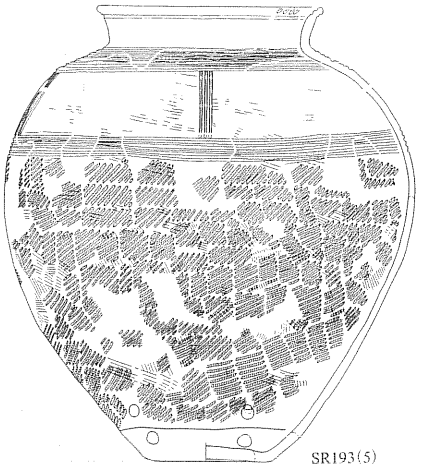
ＳＲ194（第22・23・43図、巻頭図版５－２、１－１、図版７－５・６、19、24、29、30）

Ａ区東端のＫＡ38区にあり、地山面で甕の体部を確認した。掘り込みは、断面観察で埋設土器より大きめの擂り鉢状を呈し、規模は断面で上端の径0.52m、深さ0.13mである。埋設土器は土器片が乱れた状態で出土するが、本来正立していたと推定される。内部より石鏃が１点出土した。

６は甕形土器で大部分が残存、体部上位に最大径をもち、口縁部は僅かに外傾する。体部の一部は爛れている。器高37.3cm、口径27.9cm、最大径3.3cm、底径8.3cmである。頸部に、１本の幅が約２mmで３本一組の平行沈線文が巡る。口縁部は口唇直下に縄文が、その下に縦位のハケメ文を施す。体部には全面にＬＲ縄文を施す。調整はハケメの後に縄文を施し、頸部では更に平行沈線を施す。体部には、中央部を中心にして黒色付着物が顕著である。底部には径約2.5cmの穿孔がある。内面は、ハケメの後に横位の丁寧なミガキを施す。また径15cm前後の黒斑を認める。胎土には海綿骨針を含む。焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色である。粗製の土器である。

SR193

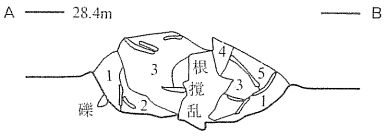


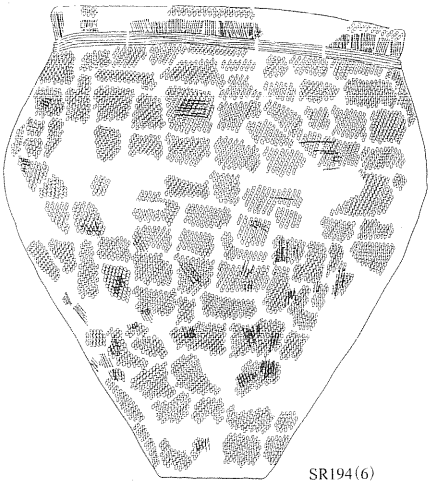


ＳＲ193

1　褐　色　土(10YR4/6)　粘土～シルト、炭化物・地山土混入、やや軟質。
2　黄褐色土(10YR5/6)　粘土、地山土混入、やや固質。
3　暗褐色土(10YR3/3)　シルト、地山土混入、軟質。
4　暗褐色土(10YR3/4)　粘土～シルト、地山土混入、やや軟質。
5　暗褐色土(10YR3/4)　シルト、やや軟質。
6　暗褐色土(10YR3/4)　シルト、炭化物・地山土混入、やや軟質。

SR194

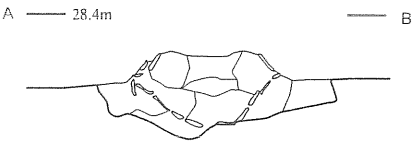


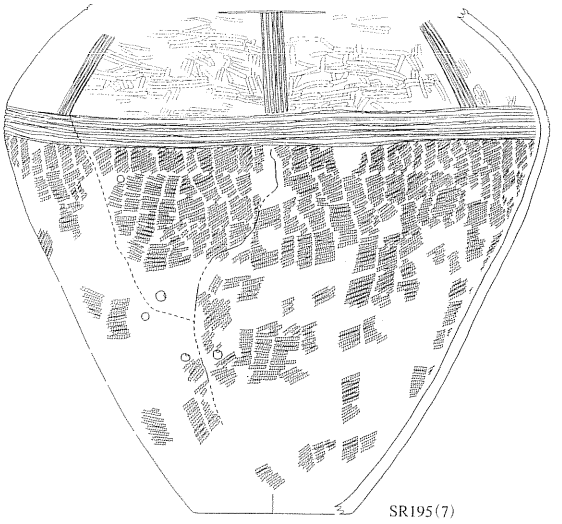


ＳＲ194

1　褐　色　土(10YR4/4)　シルト、炭化物・地山土混入、やや固質。
2　暗褐色土(10YR3/4)　シルト、地山土混入、やや固質。
3　暗褐色土(10YR3/4)　シルト、地山土混入、軟質。
4　暗褐色土(10YR3/3)　シルト、軟質。
5　黒褐色土(10YR2/3)　シルト、地山土混入、軟質。

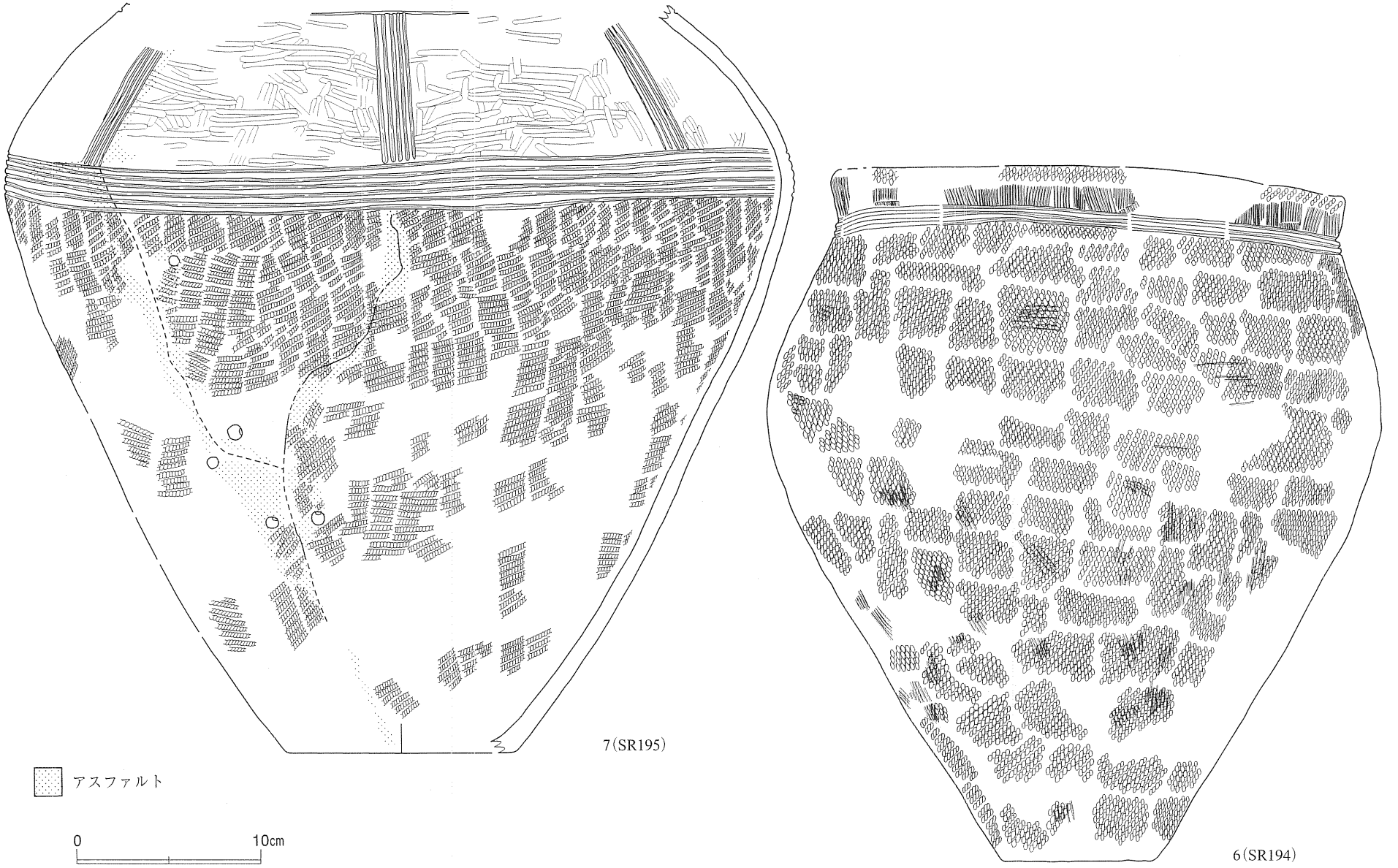
SR195





0　50cm

第22図　土器埋設遺構（２）弥生②ＳＲ193～195



第23図　遺構内出土土器（４）弥生④ＳＲ194・195

Ｓ37の石鏃は縦長剥片を利用した円基鏃である。先端が僅かに欠損している。裏面に主要剥離面を大きく残す。剥離は比較的粗い。石質は硬質頁岩で、灰色を呈している。

ＳＲ195（第22・23図、巻頭図版２－４、図版７－７、18、25）

Ａ区東端のＫＡ38区にあり、地山面で壺の体部を確認した。掘り込みは、断面観察で埋設土器より大きめの擂り鉢状を呈し、規模は断面で上端の長さ0.53m、深さ0.27mである。埋設土器はほぼ正立する。

７は壺形土器で、口縁部と底部を除く約2/3が残存。平面観察では楕円形に歪んでいたが、最大径が体部上位と想定される。現存高40.3cm、最大径42.9cm、推定底径は12.4cmである。体部最上位もしくは頸部には複数の、最大径部には６本一組の平行沈線文を施す。二組の沈線文帯は、縦位に施す５本一組の沈線文と連結しており、それによって肩部が７～８単位の無文帯に区画される。沈線は幅１～２mmの精緻な仕上がりである。最大径部より下方には、体部最下端部を除き縦位回転のＬＲ縄文を施す。調整は、ハケメの体部最大径部以上に丁寧なミガキを施す。体部には、径７～８mm（内面で３～４mm）の補修孔が斜めの割れ口に沿って５つ確認される。それらを含んで、アスファルトが「Ｙ」の字状に塗布される。また、大きな黒斑が認められる。内面は丁寧に磨いてあるが、表面には細かな剥落が全面に見られる。胎土には海綿骨針を含む。焼成は良好で、色調は浅黄橙色である。半精製の土器である。

ＳＲ196（第24・25図、巻頭図版２－１、図版７－８、19、25、26、30）

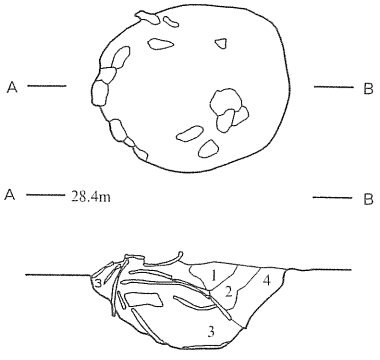
Ａ区東端のＫＡ38区にあり、地山面で壺の口縁部や体部を確認した。掘り込みは、断面観察で埋設土器より大きめの擂り鉢状を呈する。平面形は不整の楕円形で、規模は長さ0.54m×幅0.44m、深さ0.24mである。埋設土器は正立状態でやや西側に傾き、内部には土器片が折り重なって出土した。

８は壺形土器で口縁部や体部の一部を欠損。体部中央のやや上位に最大径をもち、口縁部は緩く外湾する。全体の約1/2が爛れる。器高46.9cm、口径28cm、最大径42.9cm、底径16cmである。頸部及び体部最大径部に、幅１～２mmで４本一組の平行沈線文が巡る。体部上半の無文部は、同じ様な縦位の沈線文で４つに区画される。縦位沈線文方向の口唇部には、木口によると思われる３単位の線刻文がある。上下２つの横位沈線文には、この下位に沿って1.5～2.5cmの短沈線文が巡る。短沈線の中は左が深く、垂直方向に隆起した筋のあることから、木口を右に押し引きしたと観察される。縦位沈線文の１つには、上端の左右に短い平行沈線を配置する（正面）。調整は、概ねハケメ→沈線→短沈線→縄文→ミガキである。部下端にはヘラケズリ状の痕跡が全周する。ハケメは条間の太いものと細かいものがあり、縄文は横位のＲＬ縄文と考えられる。体部の上位には、径約１cm（内面で約５mm）の補修孔が割れ目に沿って８個確認できる。このうち、２個一組のものが３対あるので、本来５対10個の補修孔があったと推定される。これら５対の補修孔を繋いで、アスファルトが確認される。アスファルトは、他に口縁部に２カ所と、底の抜けた底部割れ目に使用している。底部には穿孔は無いが、欠損部破片が大きい体部上位に想定されるかもしれない。体部下半には、幅７mm前後、長さ５～７cmの縄文を切り込む棒状の痕跡があり、大きな黒斑も認める。また口唇部の線刻文、頸部の平行沈線、短沈線、体部上位の縦位平行沈線、体部中央の平行沈線で体部下位の縄文の、それぞれに僅かな赤色塗彩の痕跡が認められる。胎土には海綿骨針を含む。焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色である。半精製の土器である。

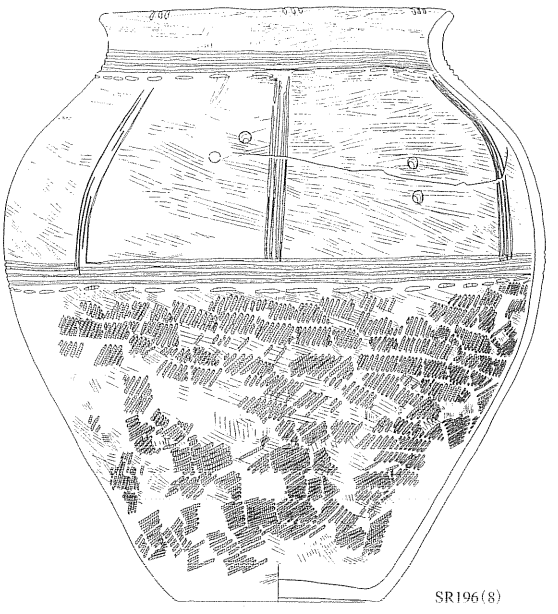
ＳＲ197（第24・26・44図、巻頭図版３－２・１－１、図版８－１、19、26、30）

Ａ区東側のＫＯ36区にあり、斜面の地山面で精製壺の口縁部や体部を確認した。掘り込みは、断面観察で北側を除き土器と密着している。平面形は略円形と見られ、規模は直径約0.46m、深さ0.26mであ

SR196

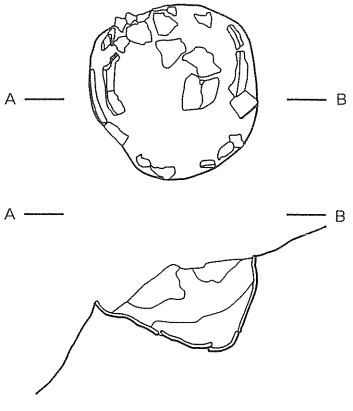


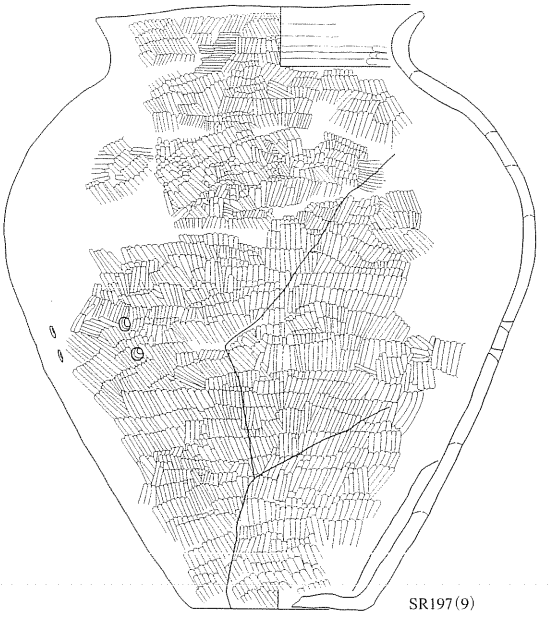
ＳＲ 196
1　黄褐色土(10YR5/6)　粘土～シルト、炭化物・地山土混入、やや軟質。
2　褐　色　土(10YR4/4)　粘土～シルト、炭化物・地山土混入、固質。
3　暗褐色土(10YR3/4)　シルト、炭化物混入、固質。
4　褐　色　土(10YR4/4)　粘土～シルト、地山土混入、やや軟質。



SR196(8)

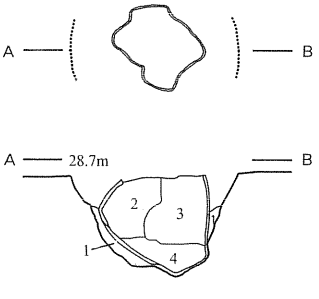
SR197



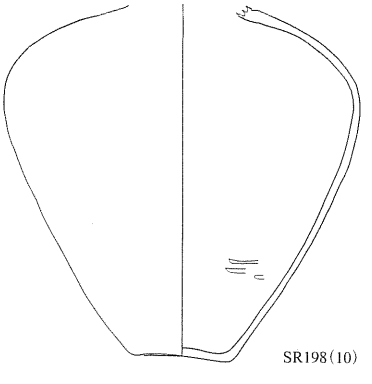


SR197(9)

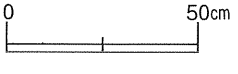
SR198



ＳＲ 198
1　黄褐色土(10YR5/6)　粘土、地山土混入、軟質。
2　褐　色　土(10YR4/6)　粘土、地山土混入、軟質。
3　褐　色　土(10YR4/6)　粘土～シルト、炭化物・地山土混入、軟質。
4　黄褐色土(10YR5/6)　粘土、炭化物・地山土混入、やや固質。

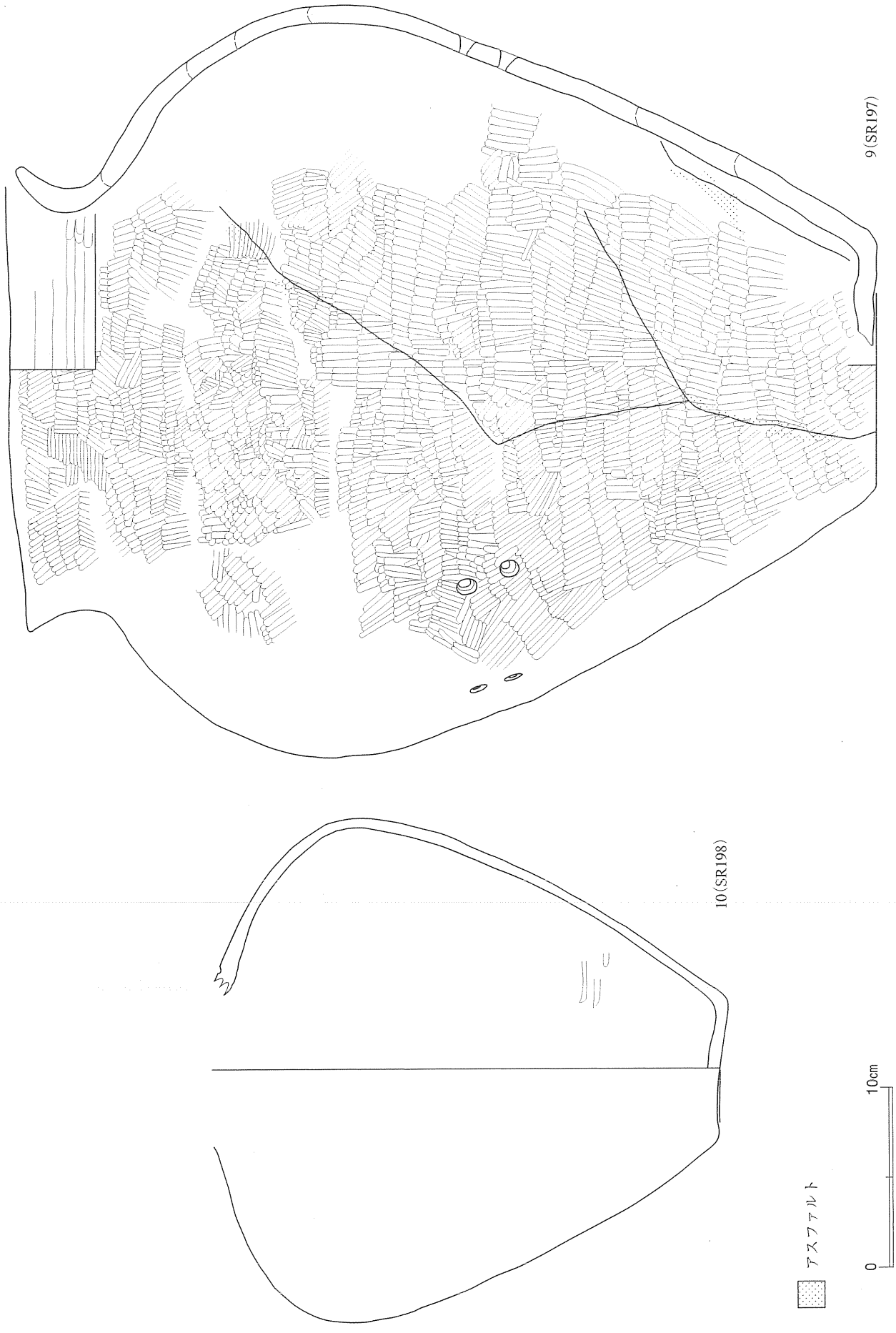


SR198(10)



第24図　土器埋設遺構（３） 弥生③ＳＲ196～198

第25図　遺構内出土土器（５）弥生⑤ＳＲ196



第26図　遺構内出土土器（６）弥生⑥ＳＲ197・198

るが、斜面に沿った楕円形の可能性がある。埋設土器は正立状態で、斜面側に大きく傾むく。内部からは玉が１点出土した。

９は壺形土器で部分的に欠損するのみ。体部上部に最大径をもち、口縁部は強く湾曲する。内外面が全体的に爛れる。器高47.8cm、口径25.9cm、最大径41.9cm、底径13.6cmである。調整は丁寧な調整を施し、条のしっかりしたハケメは認められないが、細かい擦痕は確認できる。体部中央には、２個一組で使用した外面径約１cm、内面径約５mmの補修孔６個が確認できる。３対の補修孔は、約20cmの間隔で横一列に並び、これに沿ってアスファルトが微かに認められる。アスファルトは他に、体部下位に長さ10cm程のものを含んで２カ所認める。底部には穿孔があるが、本来１～２cm程度の大きさと推定される。また、底部には、底部周縁に沿った円盤状の割れ口がある。体部から口縁部にかけて、大きく炭素の吸着した範囲がある。内面では細いハケメの後に、丁寧なミガキを施す。胎土には、海綿骨針や１～３mmの長石を含む。焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色である。精製の土器である。

Ｓ43の玉は丁寧に磨かれ光沢がある。穿孔は両側から施され貫通しているが、片側には裏面との対応がうまく行かなかった時の痕跡が残る。石質は緑色泥岩である。

ＳＲ198（第24・26図、巻頭図版３－４、図版８－２・３、19、26）

Ａ区東端のＫＨ37区にあり、地山面で壺の肩部を確認した。掘り込みは、断面観察で壁の上位に強い段が付く。規模は、断面で上端径0.48m、深さ0.27mである。埋設土器は北西側に30°程傾き、底部は掘り込みに食い込んでいる。

10は頸の長い壺形土器で、頸部と肩部の3/5を欠損。肩部が強く張り、体部上位に最大径をもつ。内外面はひどく爛れ、粘土紐接合痕に沿ったひび割れが顕著に見られる。現存高28.4cm、頸部径8.8cm、最大径28.1cm、底径7.5cmである。内外面は無文で丁寧なミガキを施すが、内面の体部上端には、頸部接合に伴う放射状の工具痕や指頭圧痕を認める。調整のハケメは確認できない。体部中央を中心にした広い範囲で、炭素の付着が認められる。その中には光沢の強い部分がある。胎土には金色の雲母を含む。焼成は本来良好だったと考えられ、色調は橙色である。精製の土器である。

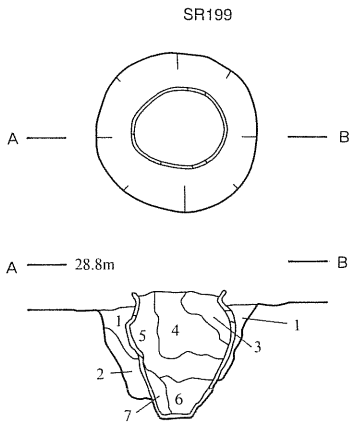
ＳＲ199（第27・28図、巻頭図版６－１、図版８－４、19、26、30）

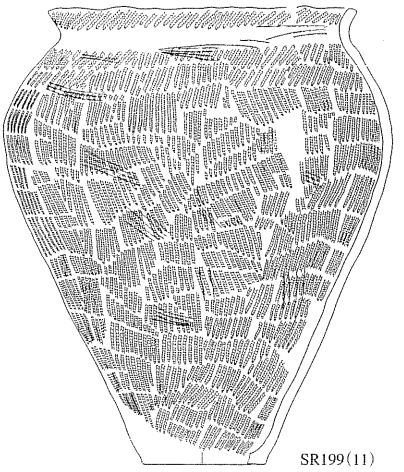
Ａ区東端のＫＧ37・38区にあり、地山面で甕の口縁部を確認した。掘り込みは、断面観察で土器埋設より大きめで壁は強く傾斜する。平面形は円形で、規模は直径0.42m、深さ0.3mである。埋設土器は正立しており、底部は掘り込みに食い込んでいる。焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色である。

11は甕形土器で、口縁部と底部付近の一部を欠損。体部上位に最大径をもち、口縁部は内湾気味で僅かに外傾する。口唇部は、指頭による細かい波状文が連続する。器高36.2cm、口径24.3cm、最大径30.6cm、底径9.7cmである。頸部を除く全面に、ＬＲと考えられる縄文を施す。調整はハケメの次に縄文を施し、その後頸部に横位のナデを施す。体部中央やや上位には、内面で割れ口が斜めの不自然な状態があり、底面も含んで穿孔の可能性がある。体部下位には、径８cm前後の黒色付着物の範囲を、内外面にはいくつかの黒斑が認められる。内面にはハケメの後丁寧なミガキを施す。胎土には細砂を顕著に含む。焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色である。粗製の土器である。

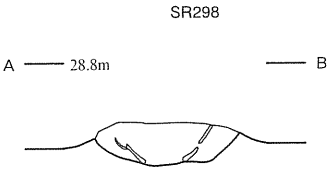
ＳＲ298（第27・28図、図版８－５・６）

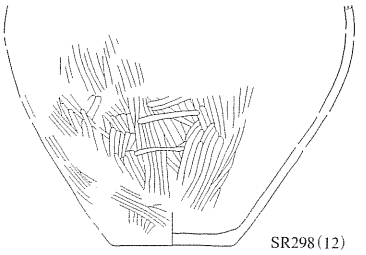
Ａ区東側のＫＴ35区にあり、地山面で壺の胴部を確認した。掘り込みは、断面観察で土器埋設より大きめの擂り鉢状を呈する。規模は、断面で上端の長さ0.38m、深さ0.1mである。埋設土器は正立してい

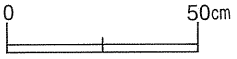


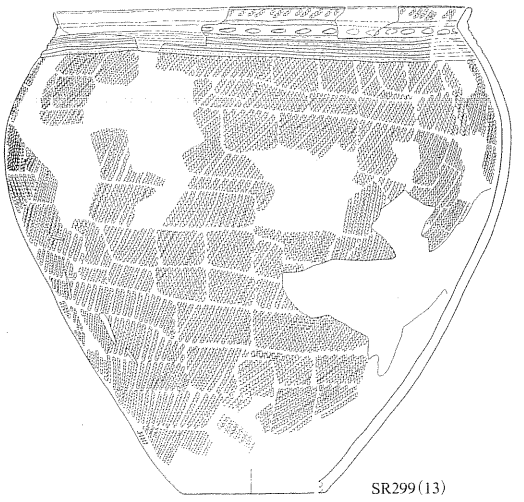


ＳＲ199
1　褐　色　土(10YR4/6)　粘土～シルト、地山土混入、やや固質。
2　褐　色　土(10YR4/4)　シルト、地山土混入、やや軟質。
3　褐　色　土(10YR4/6)　シルト、やや固質。
4　褐　色　土(10YR4/4)　粘土～シルト、炭化物・地山土混入、やや軟質。
5　黄褐色土(10YR5/6)　粘土～シルト、炭化物・地山土混入、やや固質。
6　黄褐色土(10YR5/6)　粘土、地山土混入、固質。
7　褐　色　土(10YR4/6)　シルト、軟質。

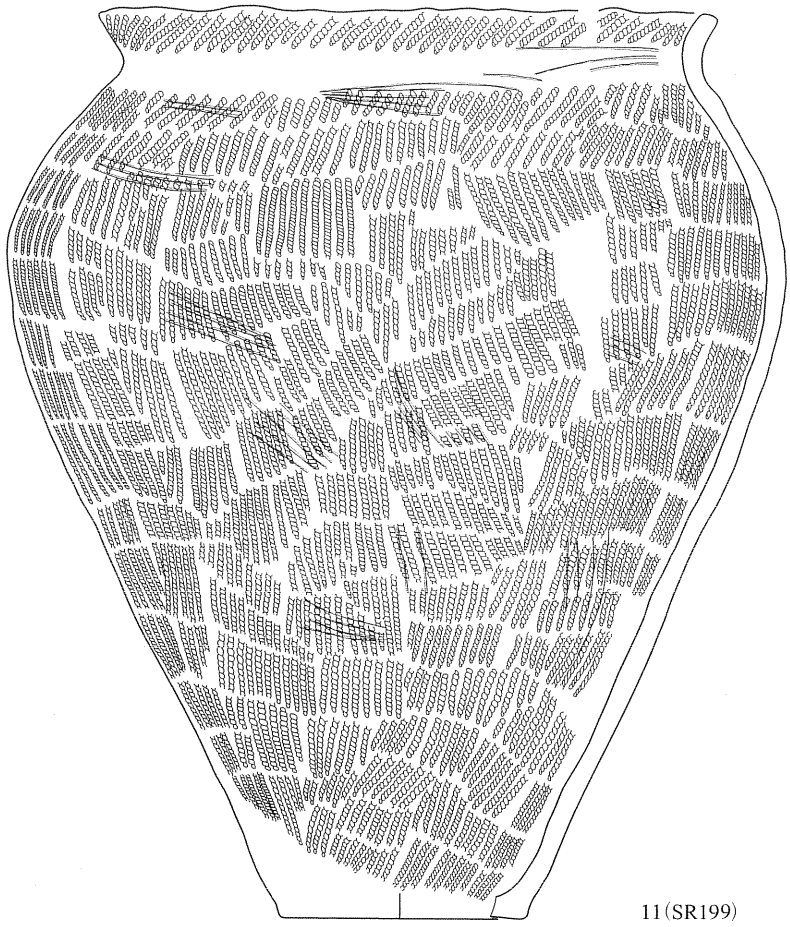


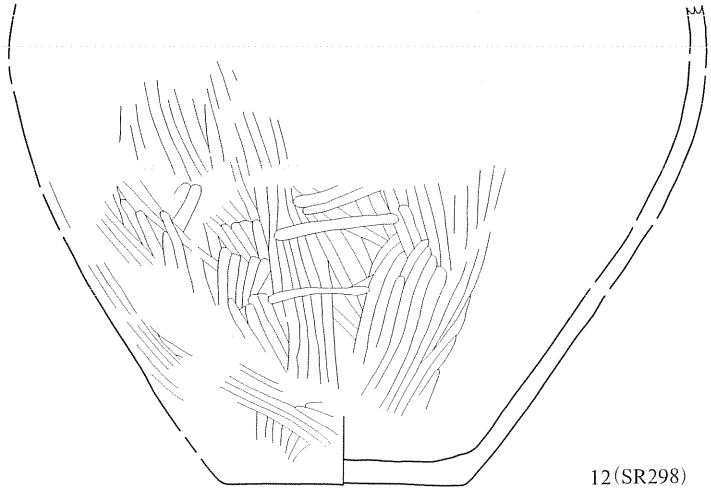






第27図　土器埋設遺構（４） 弥生④ＳＲ199・298・299





0　10cm

第28図　遺構内出土土器（７） 弥生⑦ＳＲ199・298

るが、かなり外側に開いた状態である。

12の器形は不明で、体部下半を残存。内外面の全体が爛れる。現存高19cm、底径9.4cmである。外面の調整は丁寧なミガキを施すが、内面は不明である。底部には円周に沿って割れ口が見られ、底面には「井」形状の浅い痕跡が一つ見られる。内外面は炭素の付着で全体に黒っぽいが、内面底部中央から体部高20cm位までは、洋梨状に器面の地肌が現れている。この形の輪郭を取り巻くように、幅約１cmの酸化鉄がやや厚めに付着する。この部分の外面は、やはり地肌が現れ周辺には黒色炭化物が特に目立つ。胎土には、１～２mmの砂粒を顕著に含む。焼成は本来良好と考えられ、色調は橙色である。精製の土器である。

ＳＲ299（第27・30図、巻頭図版４－１、図版19・30）

調査区東側のＫＳ37区にあり、地山面で確認した。

13は甕形土器で、口縁部と体部上位の半分、底部を欠損。体部の上位に最大径をもち、口縁は「く」の字の頸部から短く外傾する。口唇部は平坦である。体部下半は爛れている。器高38.5cm、口径32.9cm、最大径39.8cm、底径11.2cmである。頸部の屈折部には幅約４mmの平行沈線があり、上の口縁には斜縄文が、下には長さ１～1.5cmの列点文、更にこの下には頸部と同じ沈線文が巡る。体部上端を除く全面には、横位回転のＬＲ縄文を施す。調整は、縄文を施す前のハケメらしい痕跡が一部で確認できる。縄文の次に平行沈線文を施し、後に列点文を配置する。体部の上半を中心に、黒色付着物が顕著である。内面は、ハケメの後に丁寧なミガキを施す。口縁部の一部には明瞭なハケメが見られ、内面下半には、酸化鉄その他の赤色付着物を顕著に認める。胎土には海綿骨針を含む。焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色である。粗製の土器である。

ＳＲ300（第29・30図、巻頭図版５－４、図版９－１・２、20、26）

Ａ区東端のＫＦ・ＫＧ区にあり、地山面で甕の口縁部を確認した。掘り込みは、断面観察で土器埋設より大きめのもので、西側は湾曲した強い傾斜をもち反対側には中央に強い段がある。規模は、断面で上端の長さ0.35m、深さ0.3mである。埋設土器は正立状態で僅かに傾いている。

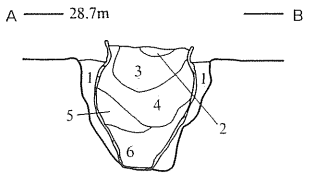
14は甕形土器で、口縁部の1/3と体部上位の一部を欠損。体部上位に最大径をもち、口縁部は直立気味に外反する。体部下半と底部が爛れる。器高32.2cm、口径22.2cm、最大径26.7cm、底径9cmである。無文の頸部直下には幅約２mmの沈線文があり、これ以外にはＬＲの縄文を施す。調整はハケメ→縄文→頸部のナデ→沈線の順である。体部上半より上に黒色付着物を認める。内面は、頸部以上でハケメの後にミガキを施すが、体部はナデだけを行っているようである。内外面には黒斑を認める。胎土には細砂を含む。焼成は良好で、色調はにぶい橙色である。粗製の土器である。

ＳＲ301（第29・31図、巻頭図版４－３、図版９－３・４、11－１、20、22、23、26、30）

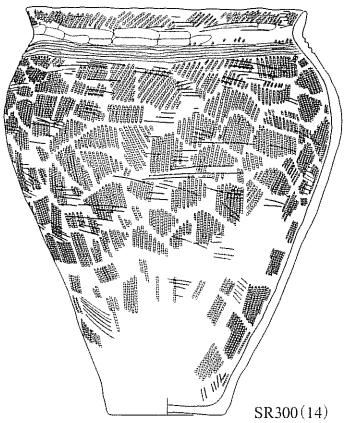
Ａ区東端のＫＧ37区にあり、地山面で粗製甕の口縁部を確認した。掘り込みは、断面観察でかなり大きく左側の壁が凸凹するが直立気味に立ち上がり、反対側は緩い擂り鉢状を呈する。規模は、断面で上端の長さ0.66m、深さ0.42mである。埋設土器は正立状態で15°程傾き、底部は掘り込みの中央に食い込んでいる。内部から小型浅鉢（16）が出土した。

15は甕形土器で口縁の2/3を欠損。体部内外面の約1/2が爛れている。器高42.7cm、推定口径29cm、最大径38.7cm、底径10.6cmである。口縁部は無文で、体部には斜位回転のＬＲ縄文が主体的である。調整は、ハケメ→縄文の後に口縁部にミガキを施す。頸部に径約４mmの補修孔（内面は約２mmだが周縁が５～10

SR300

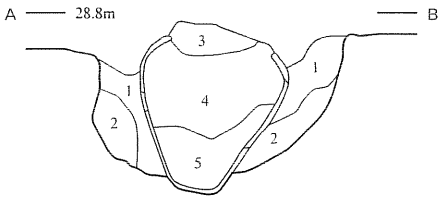


ＳＲ300
1　褐　色　土(10YR4/6)　粘土、炭化物混入、固質。
2　黄褐色土(10YR5/6)　シルト、軟質。
3　褐　色　土(10YR4/6)　シルト、炭化物・地山土混入、やや軟質。
4　褐　色　土(10YR4/6)　粘土～シルト、地山土混入、軟質。
5　褐　色　土(10YR4/6)　粘土～シルト、炭化物混入、やや個質。
6　褐　色　土(10YR4/6)　粘土～シルト、炭化物混入、やや軟質。



SR300(14)

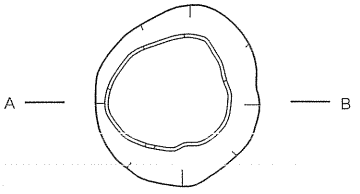
SR301

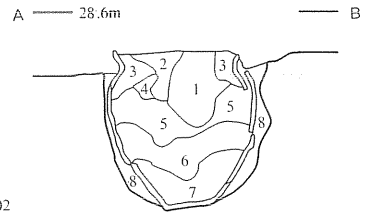


ＳＲ301
1　褐　色　土(10YR4/6)　粘土～シルト、地山土混入、軟質。
2　黄褐色土(10YR5/6)　粘土、地山土混入、軟質。
3　褐　色　土(10YR4/6)　粘土～シルト、地山土混入、やや軟質。
4　褐　色　土(10YR4/6)　シルト、炭化物・地山土混入、やや軟質。
5　褐　色　土(10YR4/6)　粘土～シルト、炭化物・地山土混入、やや固質。

(16)
SR301
(15)

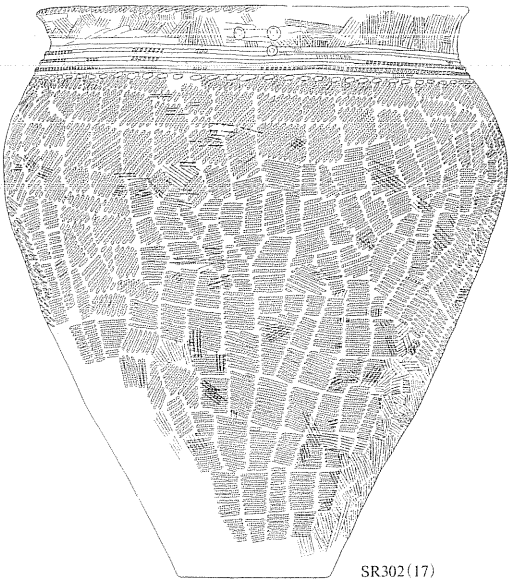
SR302





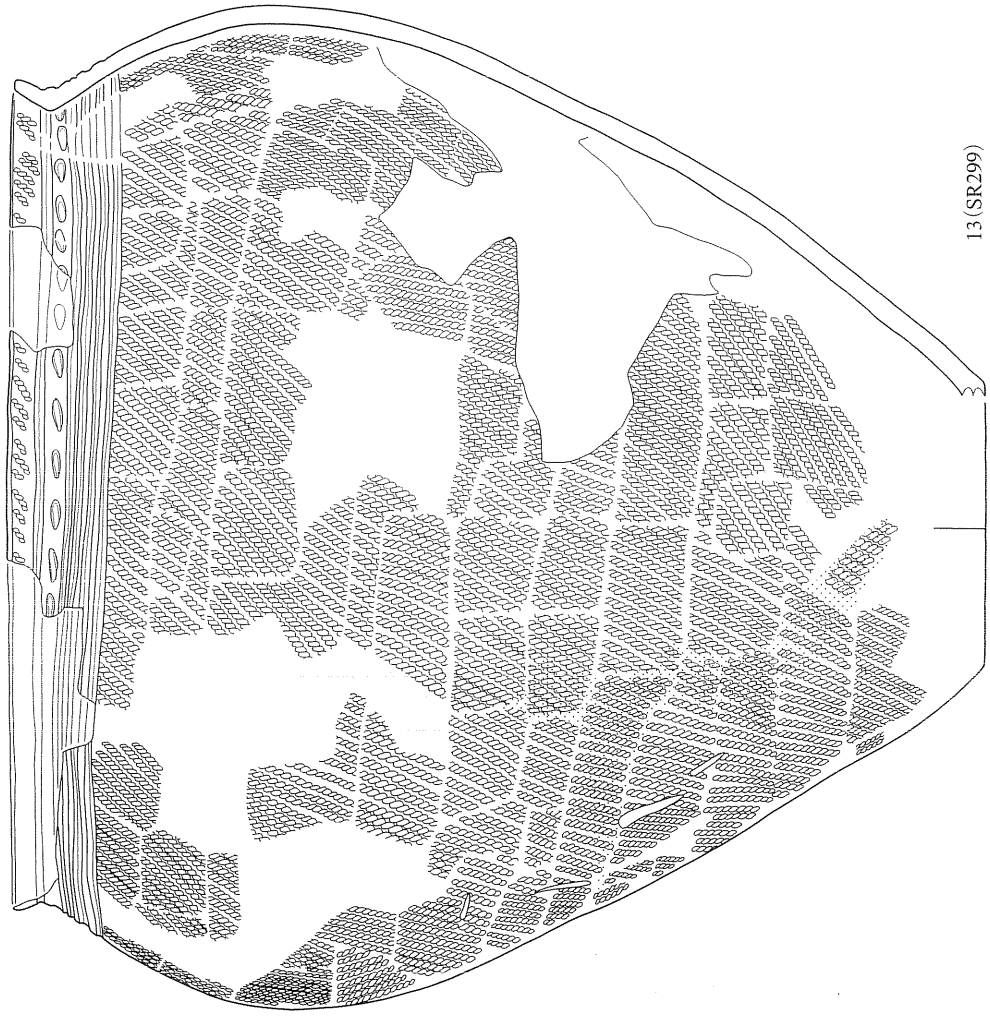
ＳＲ302
1　褐　色　土(10YR4/6)　粘土、地山土混入、やや固質。
2　暗褐色土(10YR3/4)　シルト、炭化物・地山土混入、やや固質。
3　褐　色　土(10YR4/6)　粘土～シルト、炭化物・地山土混入、固質。
4　黄褐色土(10YR5/8)　粘土～シルト、炭化物・地山土混入、固質。
5　黄褐色土(10YR5/6)　粘土～シルト、炭化物・地山土混入、やや軟質。
6　褐　色　土(10YR4/6)　粘土～シルト、炭化物・地山土混入、やや軟質。
7　褐　色　土(10YR4/6)　粘土、炭化物混入、固質。
8　褐　色　土(10YR4/4)　粘土～シルト、地山土混入、やや固質。

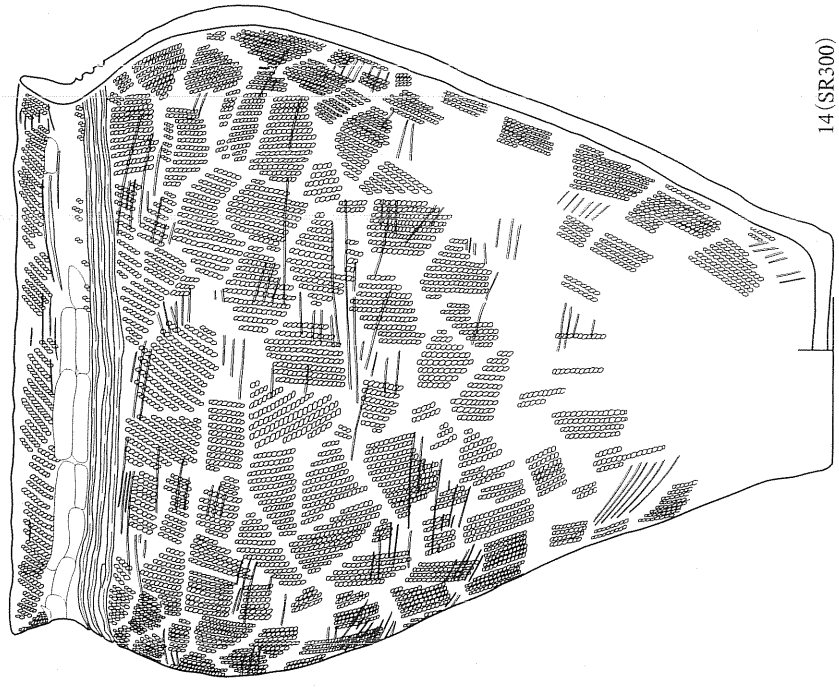
0　50cm

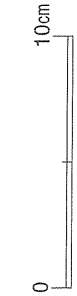


SR302(17)

第29図　土器埋設遺構(５) 弥生⑤ＳＲ300～302

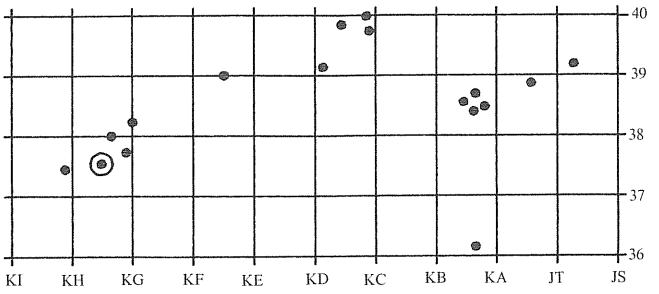




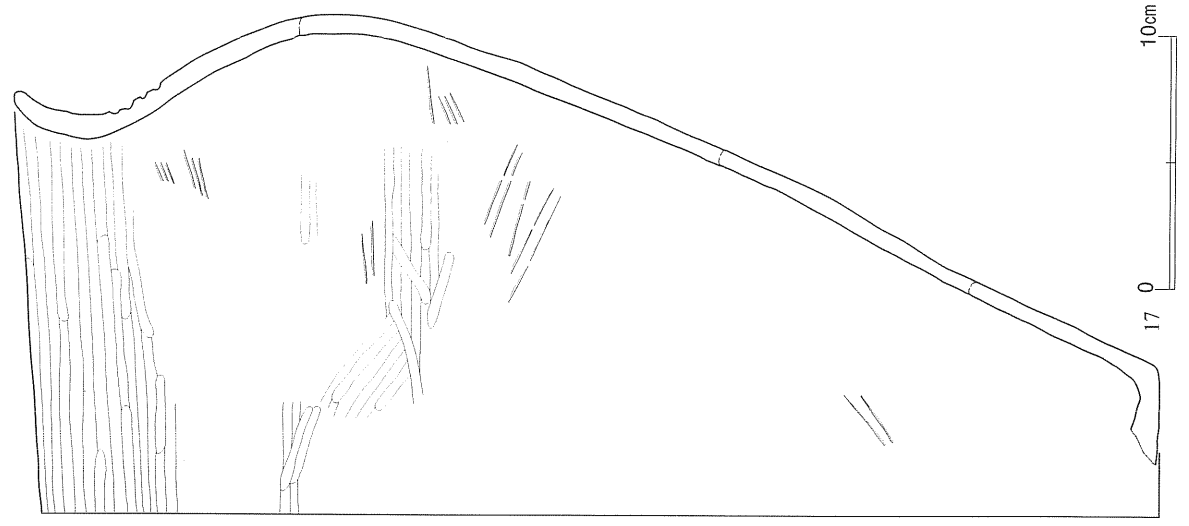


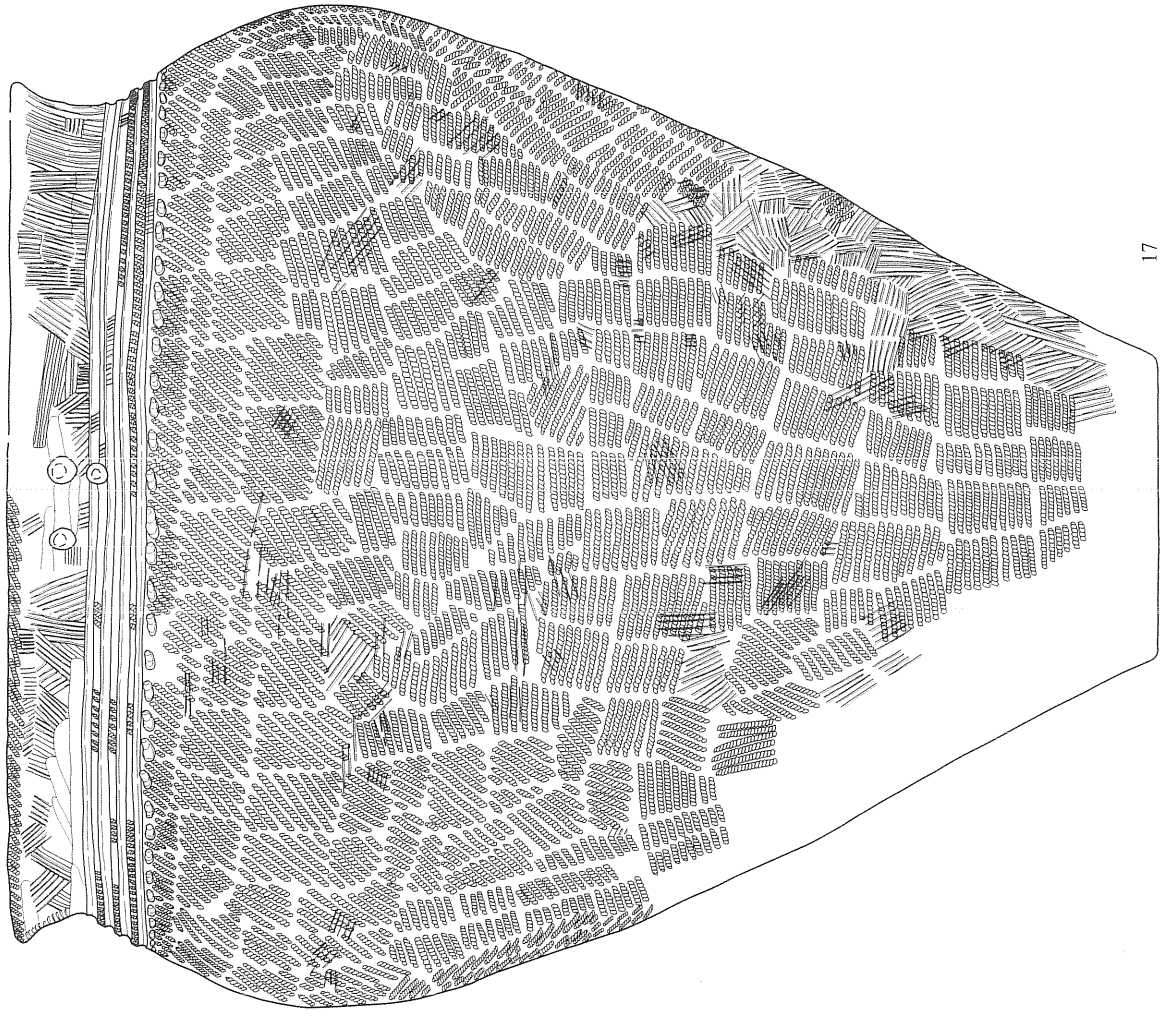
アスファルト

第30図　遺構内出土土器（８）弥生⑧ＳＲ299・300

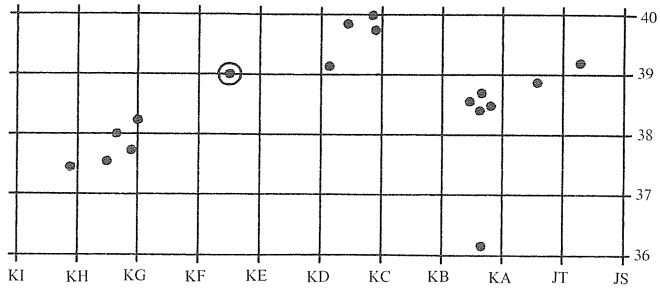


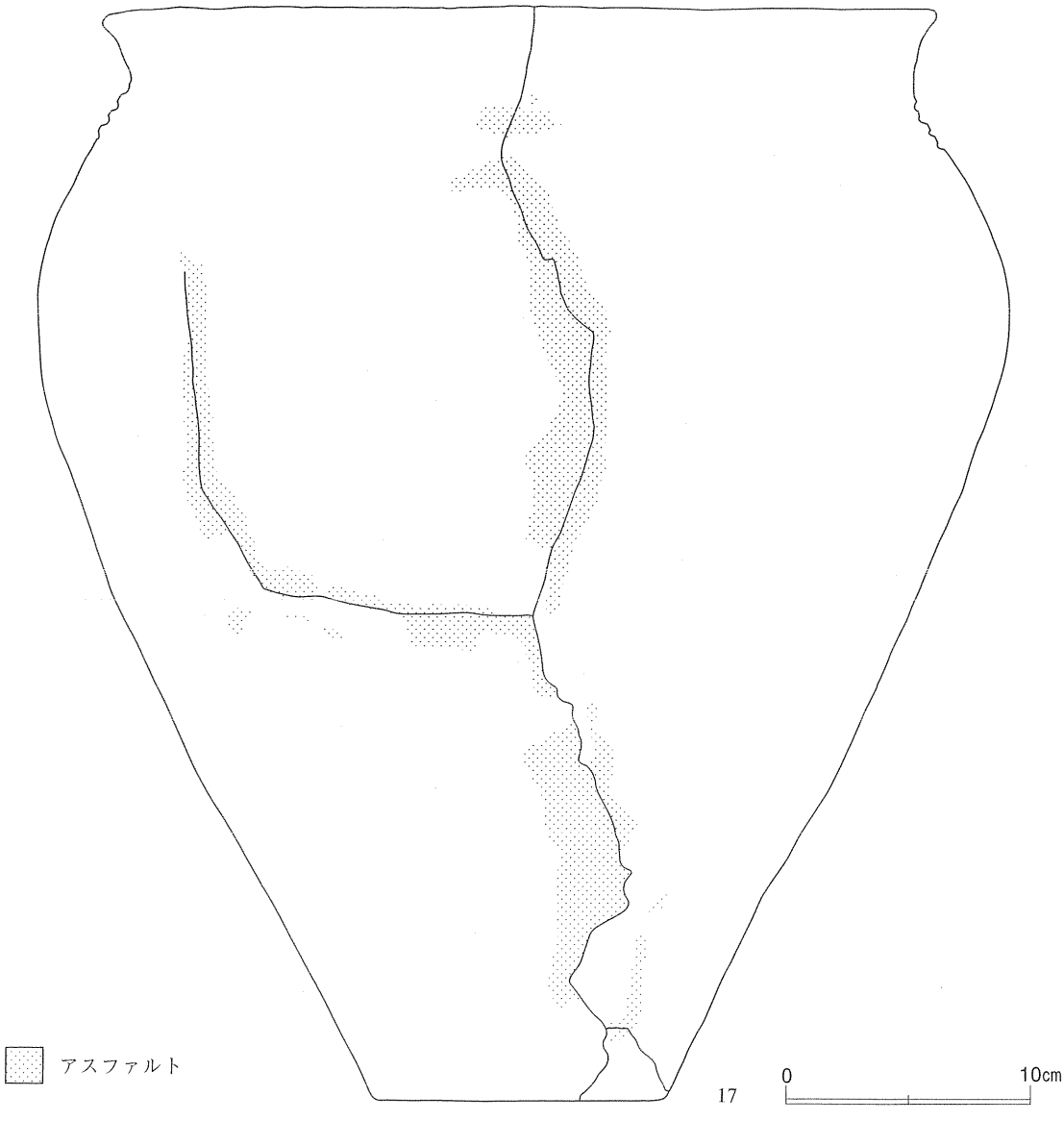
第31図　遺構内出土土器（９） 弥生⑨ＳＲ301





第32図　遺構内出土土器(10)　弥生⑩ＳＲ302





第33図　遺構内出土土器(11) 弥生⑪ＳＲ302

mmの範囲で剥落)。底面には、穿孔と判断される径４cm×４cmの不整形の孔がある。内面の調整は丁寧なミガキを施すが、それ以前のハケメは不明瞭。体部下端には、アスファルトが割れ口断面に食い込んで確認できる。また内面上位には煤状の黒色付着物を、内外面には黒斑が認められる。胎土には細砂を含む。焼成は本来良好だったと考えられる。色調はにぶい黄橙色である。

16は小型の浅鉢形土器で、口縁部と体部の一部を欠損するミニチュア品である。突出気味の底部より直線的に外傾する。器高3.2cm、口径7.9cm、底径3.5cmである。口縁部には、幅約1mmの平行沈線が約２本巡り、縦の短沈線で欠損部を除く１カ所が連結する。体部には細い撚糸文を充填する。内面の口縁部にも同じ様な沈線が１本あり、体部にはミガキを施す。内外面に黒斑がある。胎土には細砂を含む。焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色である。粗製の土器である。

ＳＲ302(第29･32･33図、巻頭図版５－１、図版９－５・６、20、27、30)

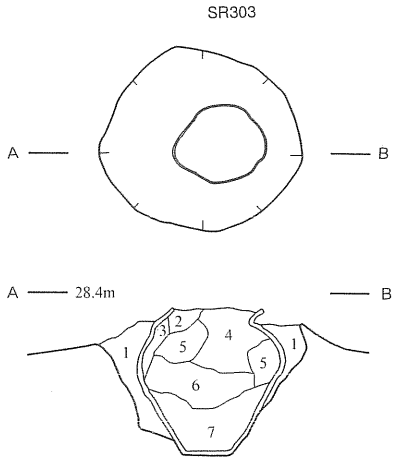
Ａ区東端のＫＥ38･39区にあり、地山面で甕の口縁部を確認した。掘り込みは、断面観察で埋設土器より僅かに大きく掘り下げる。平面形は不整の楕円形で、規模は長さ0.49m×幅0.44m、深さ0.39mである。埋設土器は正立するが、僅かに南西側へ傾く。

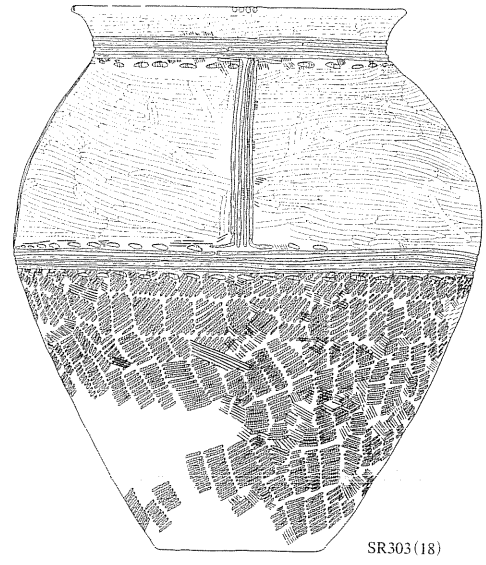
17は甕形土器で口縁部の一部を欠損し、体部下端が爛れる。体部の上位に最大径をもち、口縁部は外湾する。器高45.2cm、口径34.1cm、最大径39.7cm、底径11.6cmである。頸部屈曲部の直下に、１本が幅３～４mmの平行沈線文４本を配し、更にその直下に縄文の原体圧痕による列点文を施す。口縁部は口唇部に縄文を、それ以外にはハケメを意図的に残す。体部は下部の一部を除いて、ＬＲ縄文を不定方向に施す。調整は、ハケメ→縄文→圧痕→沈線文の順である。口縁には、２個一対で径約８mm(内面で約５mm)の補修孔があり、右下にはやりかけの痕跡がある。この補修孔に関わった下方の体部には、割れ口を繋いだアスファルトの補修が明瞭に確認できる。底部には、約3.5cm×約3cmの方形状の穿孔がある。黒斑の痕跡も明瞭である。内面は、ハケメの後に丁寧なミガキを施す。胎土には細砂を含み、焼成は良好である。色調は表面がにぶい黄橙色で、裏面が橙色である。粗製の土器である。

ＳＲ303(第34･35図、巻頭図版２－３、図版９－７・８、20、27、31)

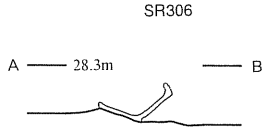
Ａ区東端のＫＣ39区にあり、地山面で壺の口縁部を確認した。掘り込みは、断面観察で埋設土器より大きめのもので、壁は西側が斜めに張り出し東側は僅かに食い込む。平面形は不整円形で、長さ0.54m×幅0.49m、深さ0.35mである。埋設土器は正立しており、底部は掘り込みに食い込んでいる。

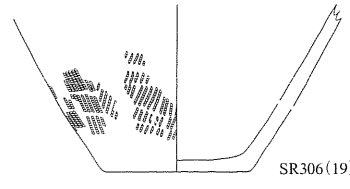
18は壺形土器で、口縁部を部分的に欠損するのみ。体部中央やや上位に最大径をもち、口縁部は緩く外反する。体部及び底面は爛れる。器高42.9cm、口径26.1cm、最大径36.9cm、底径12.5cmである。頸部及び体部の最大径部に、１本が幅約２mmで４本一組の平行沈線文が巡り、体部上半の無文部は同じような沈線文で４つに区画される。縦位沈線文の一組は、上位で５本になるが下位では４本の沈線に修正されている。縦位沈線文方向の口唇部には、欠損部を除いて４単位の線刻文がある。横位沈線文の下位に沿って長さ１cm程の列点文(工具の先端による)が巡るが、下にある沈線文の上位にも、一区画の無文帯(体部上位右)を除き同じように巡る。縦位沈線文の上下両端からは、それぞれ左右に長さ1.5～２cmの短沈線が縦の沈線に連続して平行に延びる。このうち、列点文が欠如した無文帯を区画する左右の沈線文の上位部分だけが、短沈線の下に列点文が配置されており、他では上下に重ならない。調整は、体部の平行線より上方では概ねハケメ→沈線→列点文→ミガキで、下方ではハケメ→縄文→沈線文→列点文である。縄文は、縦位回転のＬＲ縄文と考えられる。底面には約2.5cm四方の穿孔があり、周縁に沿った円盤

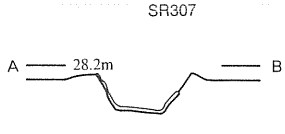


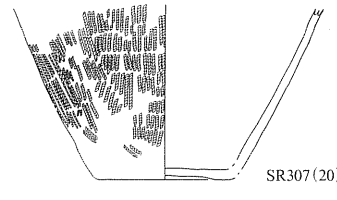


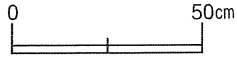
ＳＲ303
1　黄褐色土(10YR5/6)　粘土～シルト、炭化物・地山土混入、やや軟質。
2　褐　色　土(10YR4/4)　シルト、炭化物・地山土混入、やや軟質。
3　褐　色　土(10YR4/6)　シルト、炭化物・地山土混入、軟質。
4　黄褐色土(10YR5/6)　粘土～シルト、炭化物混入、やや軟質。
5　褐　色　土(10YR4/6)　粘土～シルト、炭化物・地山土混入、軟質。
6　黄褐色土(10YR5/6)　粘土～シルト、炭化物・地山土混入、軟質。
7　褐　色　土(10YR4/6)　粘土～シルト、炭化物・地山土混入、やや固質。



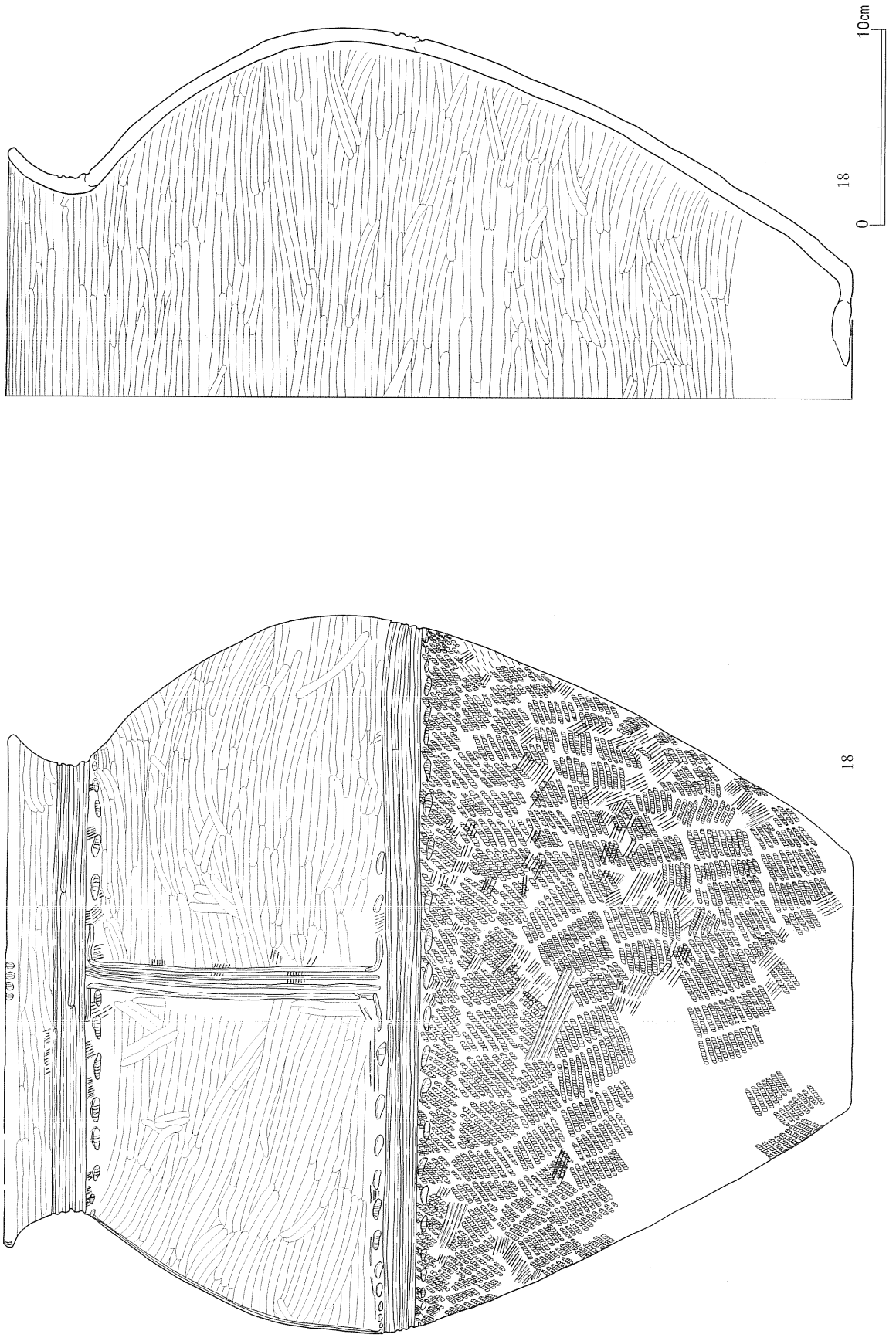








第34図　土器埋設遺構（６） 弥生⑥ＳＲ303・306・307



第35図　遺構内出土土器(12)　弥生⑫ＳＲ303

状の割れ口も認められる。体部には大きな黒斑を認めるが、部分的に黒斑と異なる黒色部分もある。内面には丁寧な横位のミガキを施す。胎土には海綿骨針を含む。焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色である。半精製の土器である。

ＳＲ306（第34・36図、図版10－３）

Ａ区東端のＫＡ36区にあり、地山面で甕と考えられる体部を確認した。掘り込みは、存在が観察できる程度である。埋設土器は45°程傾く。

19は甕形土器と考えられ、底部と体部下位を残存。内外面が爛れる。現在高13.3cm、底径11.3cmである。体部には斜位回転のＲＬ縄文を施すが、下端は無文である。内面の一部に黒色付着物を認める。胎土には１～２mmの砂粒を顕著に含む。焼成は本来良好だったと考えられる。色調はにぶい黄橙色である。粗製の土器である。

ＳＲ307（第34・36図、図版23）

Ａ区東端のＪＴ38区にあり、地山面で粗製甕と考えられる体部を確認した。掘り込みは、断面観察で土器と密着している。規模は、断面で上端の長さ0.25m、深さ0.1mである。埋設土器は正立しており、僅かに傾いている。

20は甕形土器と考えられ、底部と体部下位のみを残存。内外面が爛れる。現存高13.8cm、底径10.5cmである。体部には斜位回転のＲＬ縄文を施す。底面には円周に沿った割れ口がある。内外面には、黒色付着物が顕著である。胎土には１～２mmの砂粒を顕著に含む。焼成は本来良好だったと考えられる。色調はにぶい黄橙色である。

ＳＲ309（第36・37図、図版20・31）

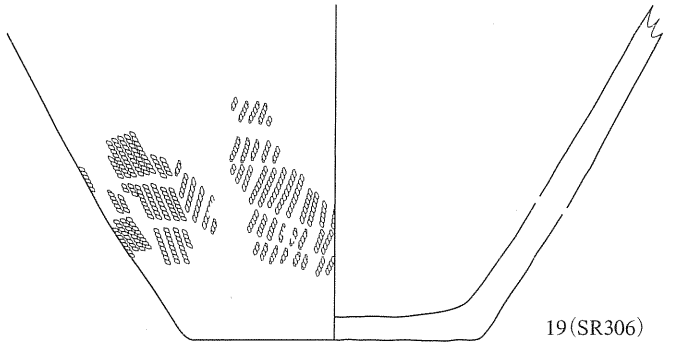
Ａ区東端のＫＡ38区にあり、地山面で甕と考えられる体部を確認した。掘り込みは、断面観察で埋設土器より大きめの擂り鉢状を呈し、東側が最も低い。平面形は略円形で、規模は直径約0.3m、深さ0.1mである。埋設土器は正立している。

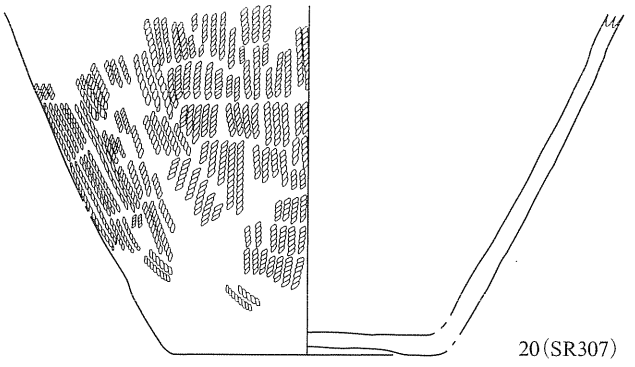
21は甕形土器と考えられ、底部と体部下半の3/4が残存。体部の器肉は３～５mmと薄く、底部はやや突出したような形態で、全体が爛れている。現存高17.5cm、底径９cmである。全面に斜位回転のＲＬ縄文を施す。上位には、横に幅７mm前後のアスファルトが割れ目に沿って見られる。そこから不規則ながら垂直方向に、やはり同じ位の幅で４本のアスファルトが認められる。これらは割れ目に沿うわけではなく、流れ落ちた状態とも思われないので、先のアスファルトを利用した文様の可能性がある。底部中央には、穿孔部らしい割れ口があるが不明瞭である。胎土には細砂を顕著に含む。焼成は不良で、色調はにぶい橙色である。粗製の土器である。

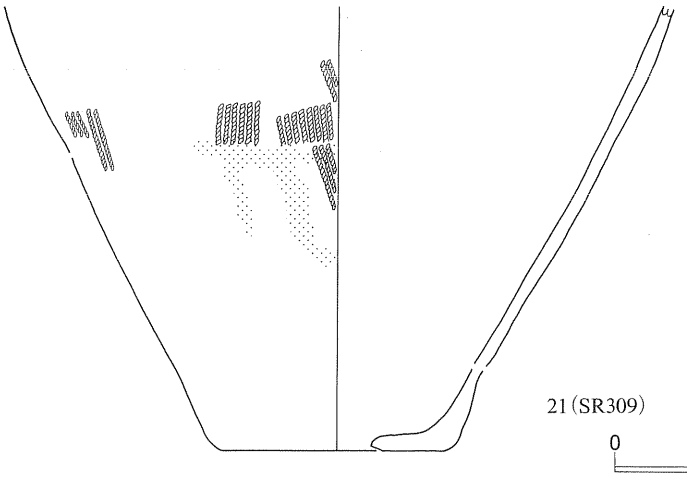
ＳＲ311（第37・38・44図、巻頭図版１－１、図版10－１・２、20、２、31）

Ａ区東端のＫＣ39区にあり、地山面で壺の肩部を確認した。掘り込みは、断面観察で埋設土器より僅かに大きいもので、壁は南東側に凹凸があり北側は土器と密着している。平面形は不整楕円形で、規模は長軸0.57m×幅0.51m、深さ0.47mである。埋設土器は正立しており、僅かに北西側へ傾く。内部からは玉が１点出土した。

22は甕形土器で体部の一部を欠損し、口縁部は一部を残存するのみ。体部上位に最大径をもち、口縁部は短く外反する。器高51.9cm、口径32.2cm、最大径44.3cm、底径16.1cmである。頸部には、幅３～４mmの平行沈線文が3本巡り、その下端にも長さ２～2.5cmの短沈線文が巡る。調整は、ハケメの後に丁寧なミ





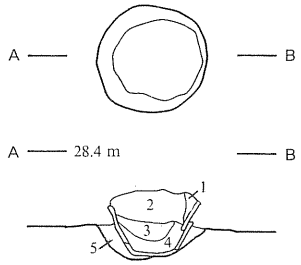


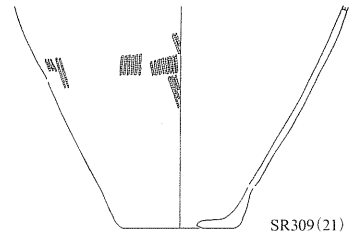
アスファルト

0　10cm

第36図　遺構内出土土器(13) 弥生⑬ＳＲ306･307･309

SR309

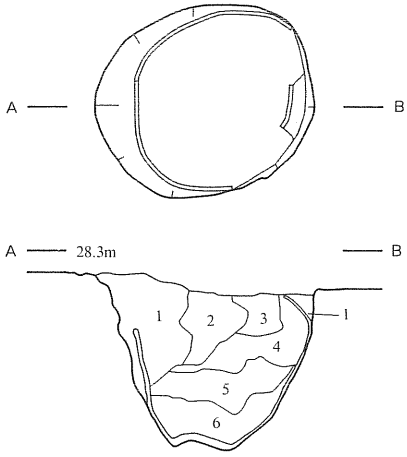


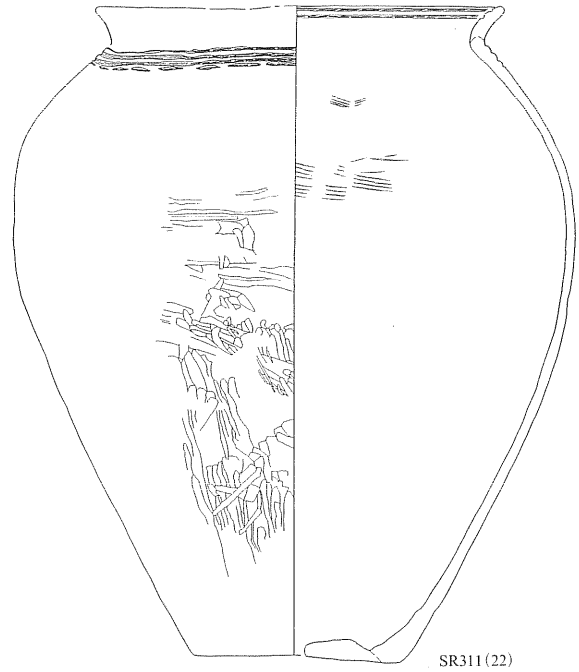


SR309(21)

ＳＲ309
1　褐　色　土(10YR4/6)　シルト、やや軟質。
2　暗褐色土(10YR3/4)　シルト、炭化物混入、やや固質。
3　暗褐色土(10YR3/4)　シルト、炭化物混入、やや軟質。
4　暗褐色土(10YR3/3)　粘土～シルト、やや固質。
5　褐　色　土(10YR4/6)　粘土～シルト、地山土混入、やや軟質。

SR311

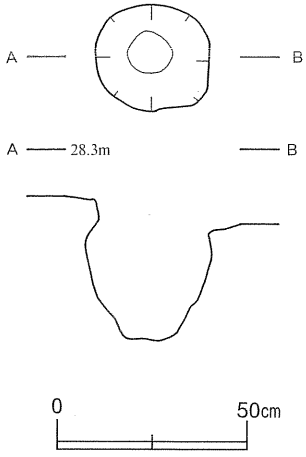


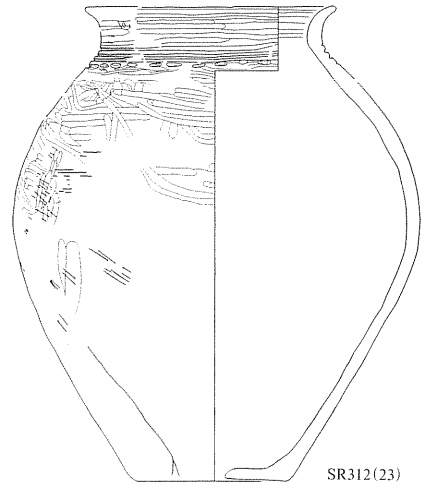


SR311(22)

ＳＲ311
1　褐　色　土(10YR4/6)　粘土～シルト、炭化物･地山土混入、固質。
2　暗 褐 色 土(10YR3/4)　シルト、炭化物混入、やや固質。
3　褐　色　土(10YR4/4)　シルト、地山土混入、やや固質。
4　暗 褐 色 土(10YR3/4)　シルト、地山土混入、やや固質。
5　明黄褐色土(10YR6/6)　粘土～シルト、地山土混入、固質。
6　明黄褐色土(10YR6/8)　粘土、地山土混入、やや固質。

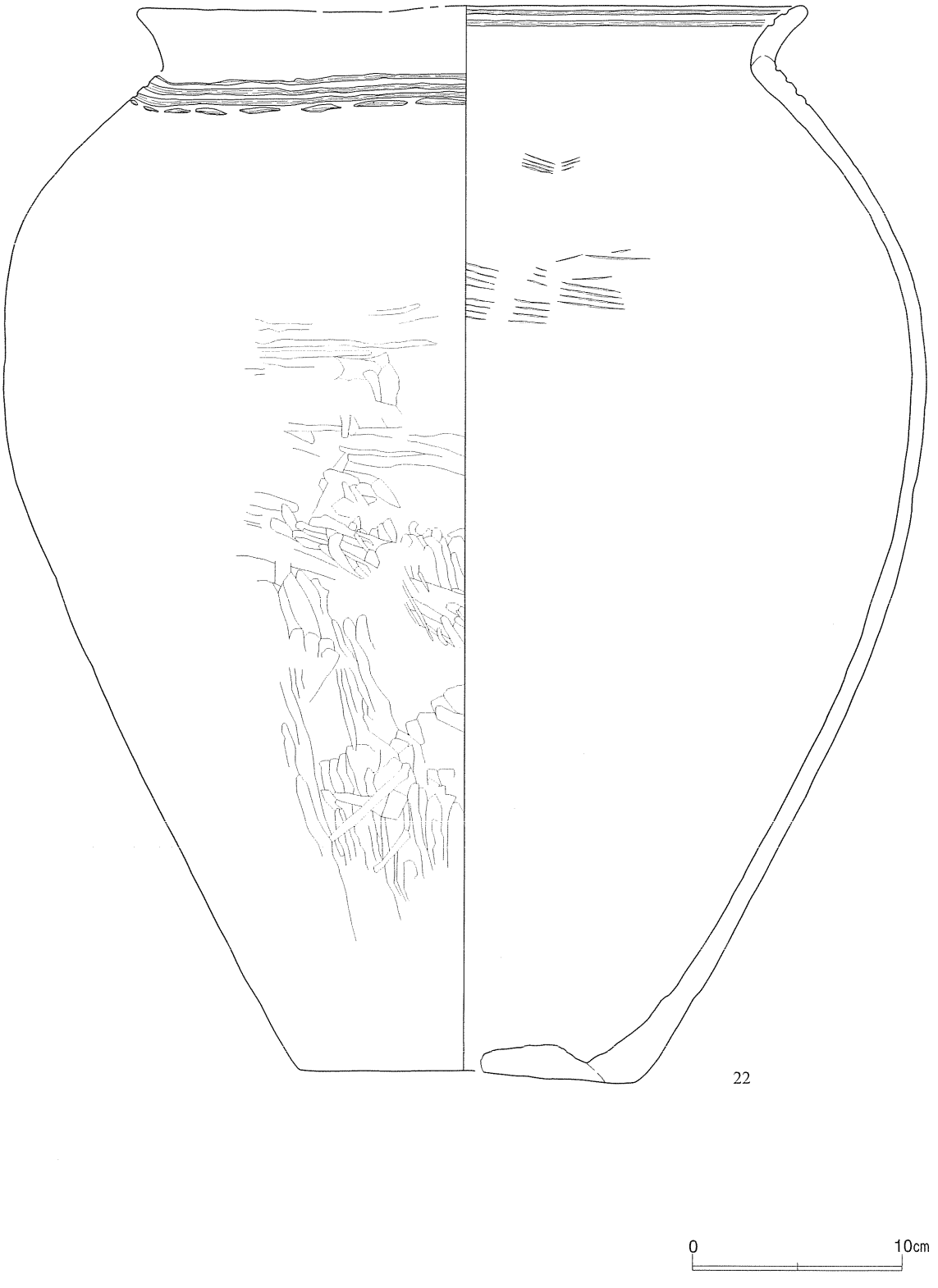
SR312





SR312(23)

第37図　土器埋設遺構(７) 弥生⑦ＳＲ309･311･312



第38図　遺構内出土土器(14)　弥生⑭ＳＲ311

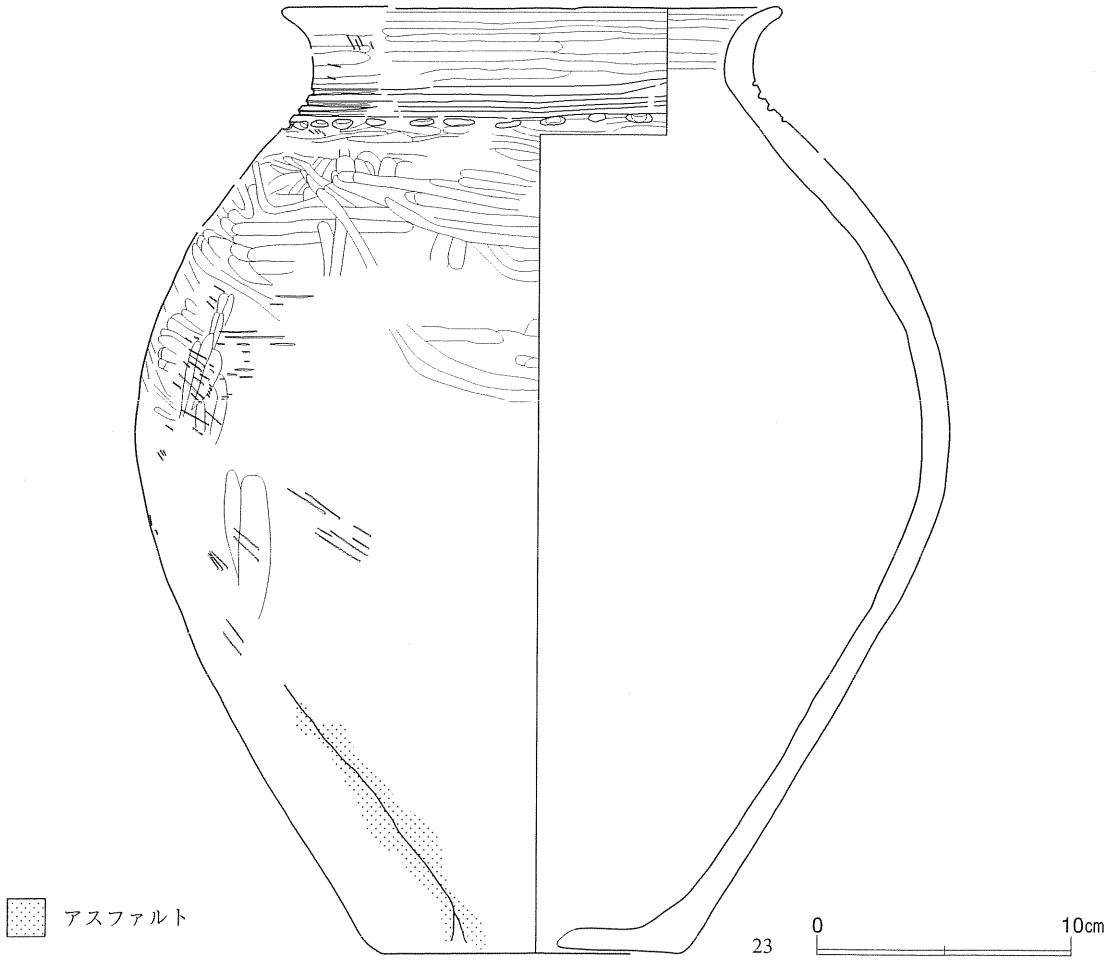
ガキを施す。底部中央は分厚く、中央に約４cm×約2.5cmの穿孔がある。底面の外周より1.5cm内側には、底が抜けたような割れ口があり、その一部にアスファルトを認める。また体部には、２カ所の大きな黒斑がある。内面には、口縁部の口唇側に幅３mm程の沈線文が２本巡る。調整はハケメの後ミガキを施す。体部上位には横位のハケメが顕著に残る。胎土には細砂を含む。焼成は概ね良好であるが、内外面には爛れた部分が顕著である。色調はにぶい橙色である。精製の土器である。内部からは玉が１点出土している。

Ｓ44の玉は全面が丁寧に磨かれ光沢がある。穿孔は両側から施され貫通しているが、穿孔部として薄い部分を選択している。石質は瑪瑙である。

ＳＲ312（第37・39図、巻頭図版３－３、図版10－４、21、27、31）

Ａ区東端のＫＣ39・40区にあり、地山面で口縁部を確認した。掘り込みは、断面観察で埋設土器より僅かに大きく、壁が湾曲して強く立ち上がる。平面形は不整形で、規模は長さ0.33m×幅0.29m、深さ0.37mである。埋設土器は正立しており、底部が掘り込みに食い込んでいる。

23は壺形土器で、口縁部から体部上位の一部を欠損。内面は体部中央を中心に爛れがある。全体的に体部やや上位に最大径をもち、口縁部は直立してから外湾する。器高37.6cm、口径19.7cm、最大径32.1cm、底径11.7cmである。頸部付近に幅２～３mmの平行沈線文を巡らし、その直下に１～1.5cmの列点文を施す。調整は、ハケメ→沈線文・列点文の後に全面的にミガキを施す。底面には直径約３cmの半月形の穿孔



第39図　遺構内出土土器（15） 弥生⑮ＳＲ312

がある。体部下部から底面穿孔部の直線に沿い、さらに反対側体部下端にかけて、一直線上にアスファルトが確認される。体部上位には黒斑がある。内面下部には、幅2cm前後の酸化鉄と思われる環状部分がある。内面の調整には丁寧なミガキを施す。胎土には海綿骨針を含む。焼成は良好で、色調はにぶい黄色橙色や明赤褐色である。精製の土器である。

ＳＲ313（第40・41図、巻頭図版４－２、図版10－５・６、21、27、31）

Ａ区東端のＫＣ39区にあり、地山面で甕の口縁部を確認した。掘り込みは、断面観察で埋設土器より大きめの擂り鉢状を呈し、北東側は緩やかである。平面形は不整楕円形で、規模は長さ0.65m×幅0.6m、深さ0.3mである。埋設土器は正立している。

24は甕形土器で底部の半分を欠損。体部上位に最大径をもち、頸部は緩く屈曲し口縁部は外傾する。現存高46.4cm、口径41.7cm、最大径51.1cm、底径13cmである。体部では粘土紐の痕跡が明瞭で、底部を除く13の粘土接合帯が確認できる。「輪積み」の可能性がある。体部と口唇部には縄文を施し、頸部と口縁部は無文である。縄文は斜位回転のＬＲ縄文で、調整は縄文の後にミガキを施す。口縁部の1/3と体部の全面には、少ないながら黒色付着物が見られる。内面には丁寧なミガキを施す。胎土には約1mmの砂粒を顕著に含む。焼成は不良で、色調は橙色である。粗製の土器である。

ＳＲ330（第40・42図、図版10－７・８、21、28、31）

Ａ区中央ＬＢ37区にあり、地山面で壺と甕を確認した。掘り込みは、断面観察で埋設土器より大きめの擂り鉢状を呈している。規模は、断面で上端の長さ0.3m以上、深さ0.3mである。埋設土器は、壺が正立し甕は北側壺中央部で横に被さる。

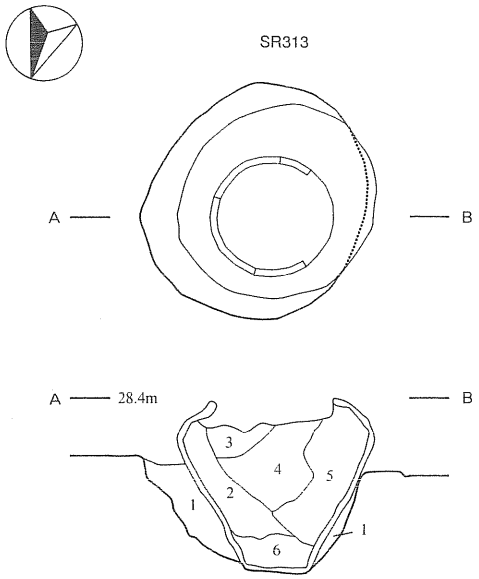
25は壺形土器で、体部上端より上部を欠損し内外面が爛れている。体部上位に最大径をもつ。現存高25.2cm、最大径25.9cm、底径8.3cmである。体部では粘土紐の痕跡が明瞭で、現存で10カ所の粘土接合帯が確認できる。水平でない接合痕が観察される所もある。内外面は無文で丁寧なミガキを施す。底部中央には1.7cm×1.2cmの、体部最大部のやや下に５mm×４mmの穿孔がある。体部に薄く光沢のある黒色付着物と、煤状の黒色付着物の２つを認める。前者はアスファルトかもしれない。胎土には細砂を含む。焼成は不良で、色調はにぶい黄橙色である。底部付近には円周に沿った割れ口がある。精製の土器である。

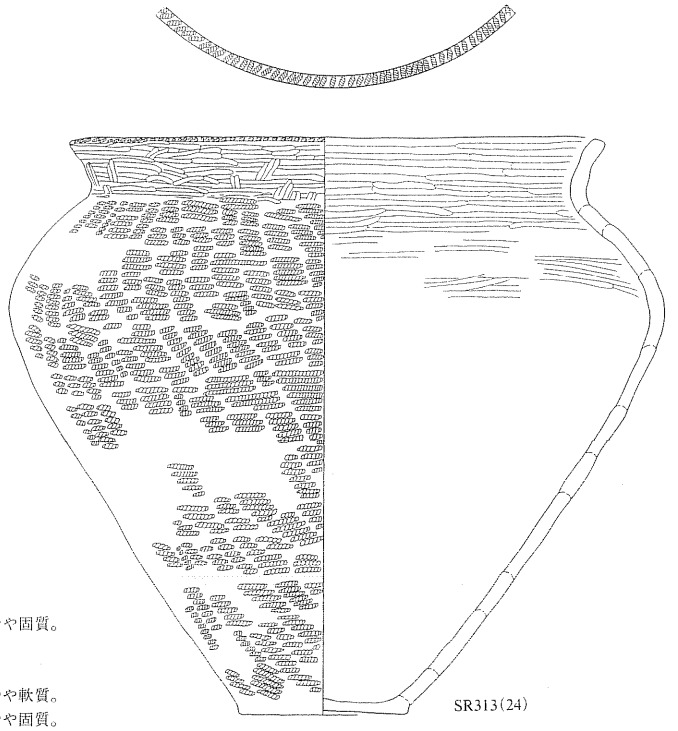
26は甕形土器と考えられ、底部と体部下位を残存。内外面が部分的に爛れる。現存高19.3cm、底径7.4cmである。文様は縦位の縄文を施し、調整はハケメの後に縄文を施す。内面の調整は、丁寧な横位のミガキを施す。内外面に黒斑と考えられる痕跡がある。胎土には細砂を含む。焼成は本来良好であったと考えられる。色調はにぶい黄橙色である。粗製の土器である。

ＳＲ342（第40・42図、巻頭図版４－４、図版21・28・31）

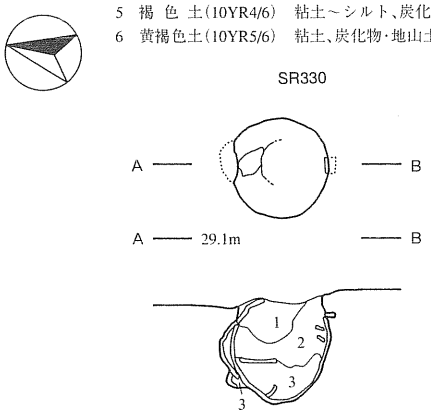
Ａ区中央部やや東側のＬＡ38区にあり、甕の体部を確認した。口縁部よりかなりの部分を削平してしまった。掘り込みは、断面観察で埋設土器より大きめの擂り鉢状を呈する。規模は、断面で上端の長さ0.4m以上、深さ0.3m程である。埋設土器は正立している。

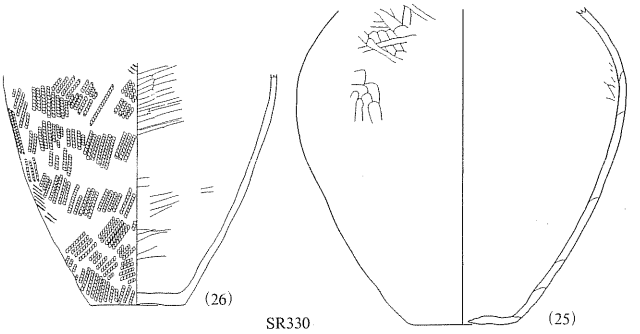
27は甕形土器で、底部と口縁・体部の一部を欠損。中央やや上位に最大径をもち、口縁部は緩く外傾する。器高44.4cm、口径22.7cm、最大径36.6cm、底径13.3cmである。頸部には、幅約３mmで３本一組の平行沈線文が巡る。体部は縄文で口縁部は無文である。縄文は縦位回転のＬＲ縄文である。調整は、ハケメ→縄文→沈線文の後にミガキを施す。体部上位には、3.5cm×３cmの内面から力が加わった穿孔がある。内外面の大半に、炭素の付着が認められる。内面はハケメの後にミガキを施す。胎土には、１～２mmの白色砂



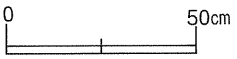


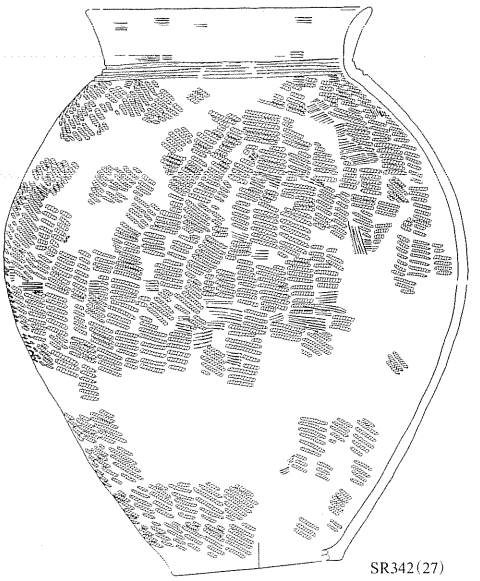
ＳＲ313
1　褐　色　土(10YR4/6)　粘土～シルト、炭化物・地山土混入、やや固質。
2　褐　色　土(10YR4/4)　粘土～シルト、地山土混入、軟質。
3　黄褐色土(10YR5/6)　粘土～シルト、地山土混入、固質。
4　黄褐色土(10YR5/6)　粘土～シルト、炭化物・地山土混入、やや軟質。
5　褐　色　土(10YR4/6)　粘土～シルト、炭化物・地山土混入、やや固質。
6　黄褐色土(10YR5/6)　粘土、炭化物・地山土混入、固質。



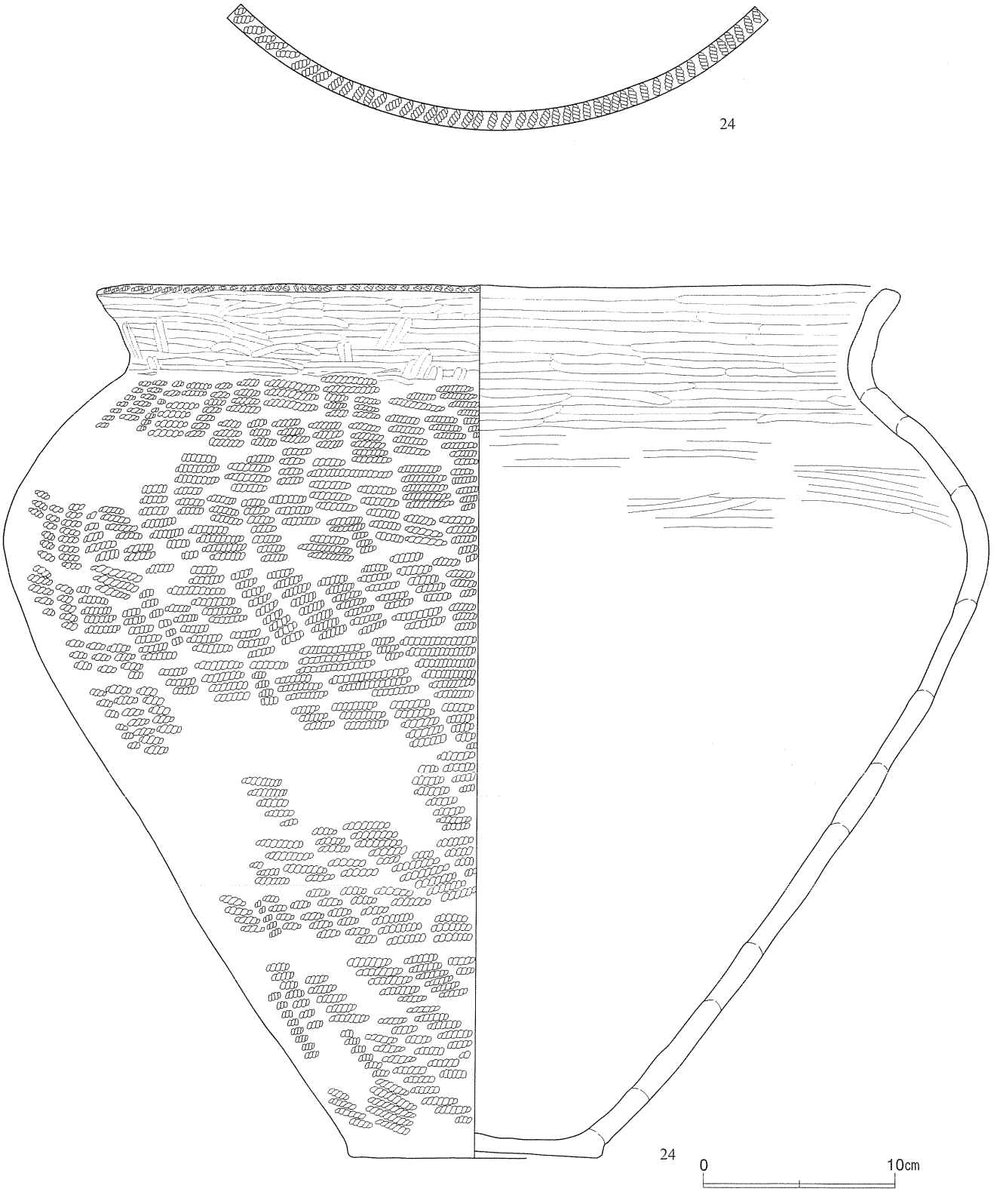


ＳＲ330
1　褐　色　土(10YR4/4)　シルト～砂、地山土混入、やや軟質。
2　褐　色　土(10YR4/6)　シルト～砂、地山土混入、やや軟質。
3　褐　色　土(10YR4/6)　粘土～シルト、地山土混入、やや軟質。





第40図　土器埋設遺構(８) 弥生⑧ＳＲ313・330・342



第41図　遺構内出土土器(16) 弥生⑯ＳＲ313

第42図　遺構内出土土器(17)　弥生⑰ＳＲ330・342

粒を顕著に含む。焼成は良好で、黒色以外の色調はにぶい黄橙色である。粗製の土器である。

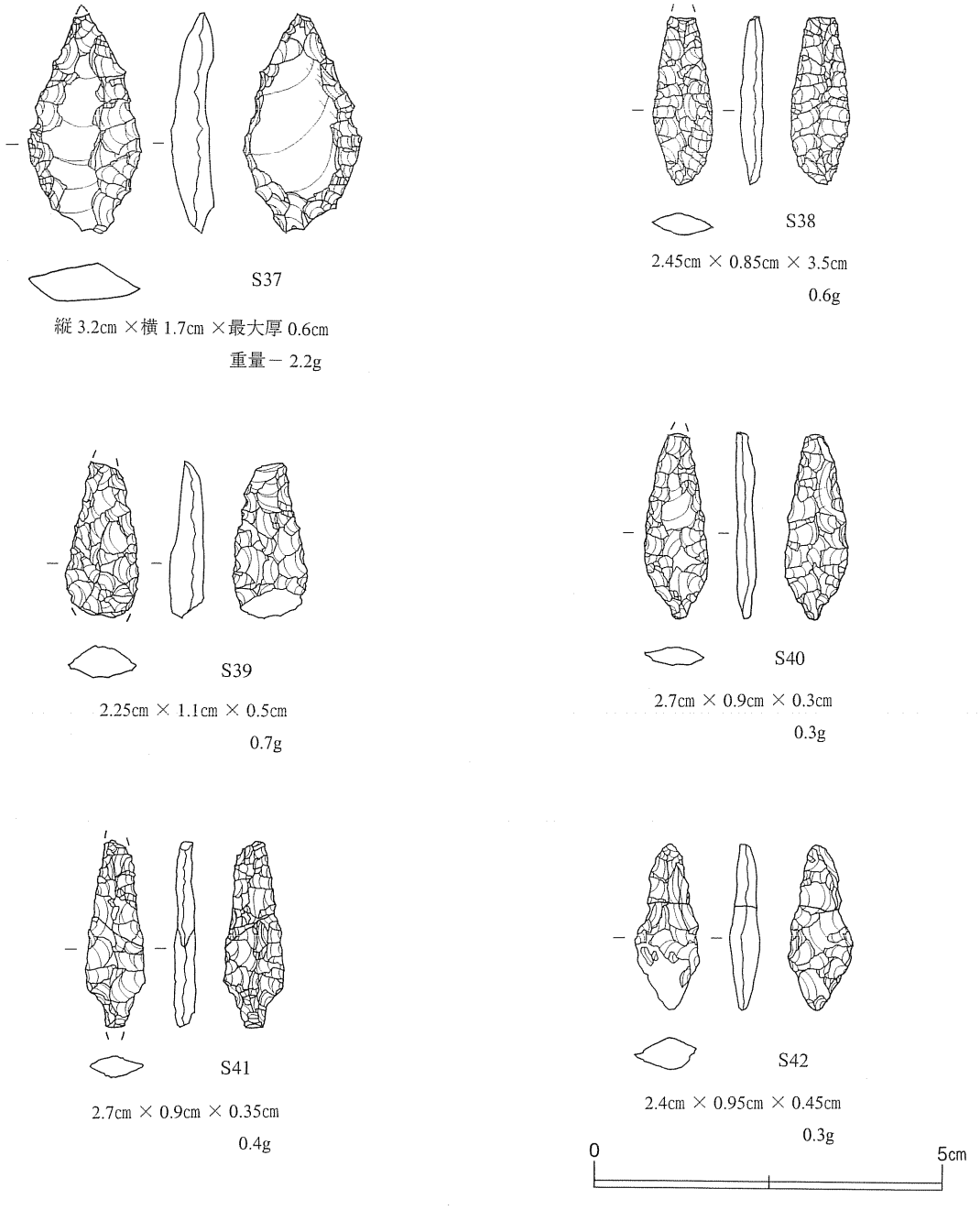
2　土坑

ＳＫ224（第45図、図版12-１）

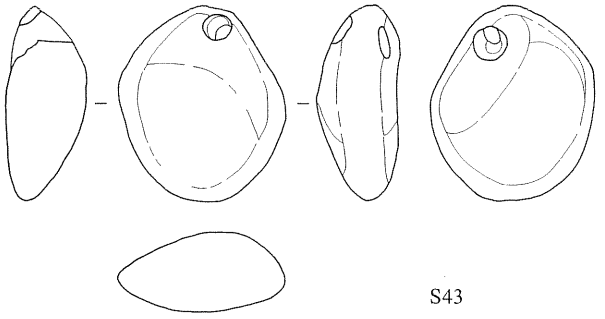
Ａ区中央やや東側のＫＲ35区にあり、地山面で確認した。ＳＤ495に切られている。平面形は楕円形で、規模は長さ2.21m×幅1.92m、深さ1.53mである。断面は、上端から深さ約0.8～0.9mのところより上方は広がり、下方では箱形を呈する。壁はかなり凹凸があり、底面中央はやや高くなる。

ＳＫ227（第45図、図版12-２）

Ａ区中央やや東側のＬＡ35・36区にあり、地山面で確認した。平面は不整の楕円形で、規模は長さ1.77

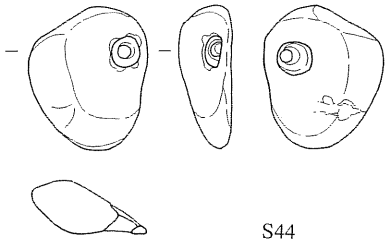


第43図　遺構内出土石器 弥生Ｓ37～Ｓ42



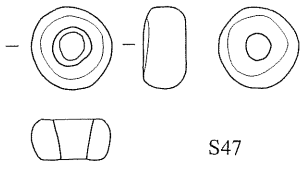
S43

大きさ－縦 2.6cm ×横 2.25cm ×最大厚 1.1cm
穿孔径－縦 4.5mm ×横 4.5mm　重量－ 7.9g



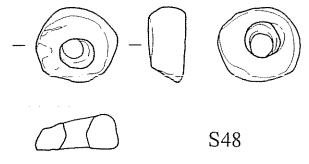
S44

1.9cm × 1.6cm × 0.7cm
4.5mm × 4.5mm　3g



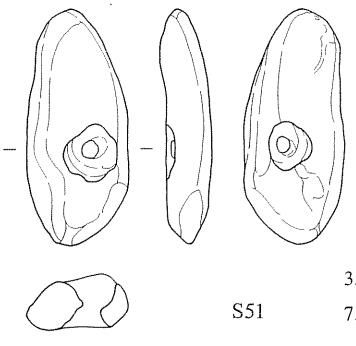
S47

1.1cm × 1.1cm × 0.6cm
5.5mm × 5mm　1.3g



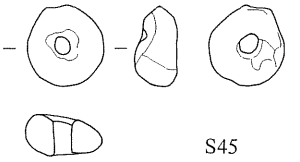
S48

1.0cm × 1.1cm × 0.5cm
5mm × 5mm　0.3g



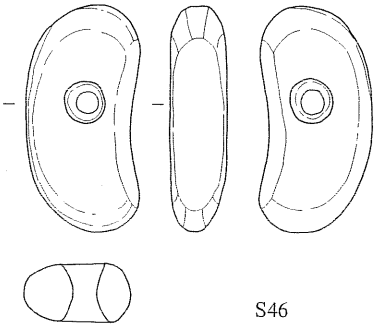
S51

3.1cm × 1.35cm × 0.7cm
7.5mm × 7mm　4.1g



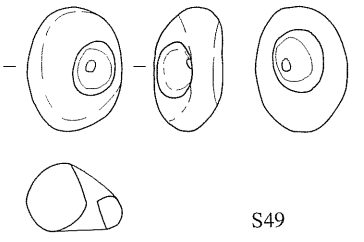
S45

1.1cm × 1.0cm × 0.55cm
3.5mm × 3.5mm　0.3g



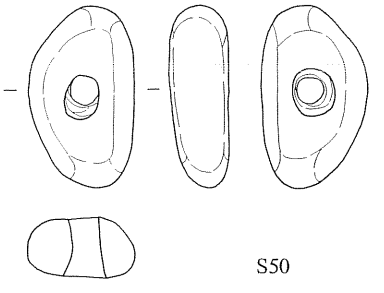
S46

3.0cm × 1.5cm × 0.8cm
6mm × 6mm　5.4g



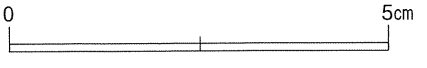
S49

1.7cm × 1.25cm × 0.9cm
8.5mm × 7mm　2g



S50

2.4cm × 1.4cm × 0.8cm
6mm × 6mm　4.1g



第44図　遺構内出土石製品 弥生Ｓ43～Ｓ51

m×幅1.3m、深さ0.43mである。断面は、長軸の両端側が直立気味に立ち上がり、短軸側ではやや緩やかな傾斜を示す。底面の南東端は、壁へ緩やかに移行する。底面は長軸の両端が僅かに低い。

ＳＫ228（第45図、図版12-３）

Ａ区中央やや東側のＫＴ35区にあり、地山面で確認したフラスコ状土坑である。平面は円形に近い楕円形で、規模は長さ1.66m×幅1.52mである。断面は、上端から深さ約0.6mのところより上方がやや開き、下方では逆台形状に大きく広がる。特に南東側で著しい。底面は南東側に緩く傾斜する。

ＳＫ229（第46図）

Ａ区中央やや東側のＫＴ35区にあり、地山面で確認した。平面は楕円形で、長さ1.37m×幅0.6m、深さ0.6mである。壁は直立気味に立ち上がり、底面は平坦で北側へ強く傾斜する。

ＳＫ235（第46図、図版12-４）

Ａ区中央やや東側のＬＣ・ＬＤ38区にあり、地山面で確認した。平面は不整の楕円形で、規模は長さ1.23m×幅0.78m、深さ0.48mである。壁は、北西側の壁が湾曲して直立気味に立ち上がり、反対側も直線的に直立気味を呈する。

ＳＫ236（第46図）

Ａ区中央やや東側のＬＤ37区にあり、地山面で確認した。平面は不整の楕円形で、規模は長さ0.74m×幅0.45m、深さ0.17mである。壁はやや緩く立ち上がり、底面もやや丸みがある。

ＳＫ237（第46図、図版12-５）

Ａ区中央やや東側のＬＤ37区にあり、地山面で確認した。平面形は不整の楕円形で、規模は長さ0.87m×幅0.47m、深さ0.28mである。壁は直立気味に立ち上がり、中央に僅かな段をもつ。底面には凹凸がある。西側短軸の上端が直線的である。

ＳＫ239（第46図、図版12-６）

Ａ区中央やや東側のＬＥ37・38区にあり、地山面で確認した。平面形は楕円形で、規模は長さ1.36m×幅0.81m、深さ0.31mである。壁は南側が湾曲して立ち上がり、北側は緩く傾斜する。底面は中央東側が僅かに高い。

ＳＫ241（第46図、図版12-７）

Ａ区中央やや東側のＬＢ35区にあり、地山面で確認した。平面形は不整の楕円形で、規模は長さ0.77m×幅0.42m、深さ0.33mである。壁は直立して立ち上がり、底面には僅かに凹凸がある。

ＳＫ242（第47図、図版）

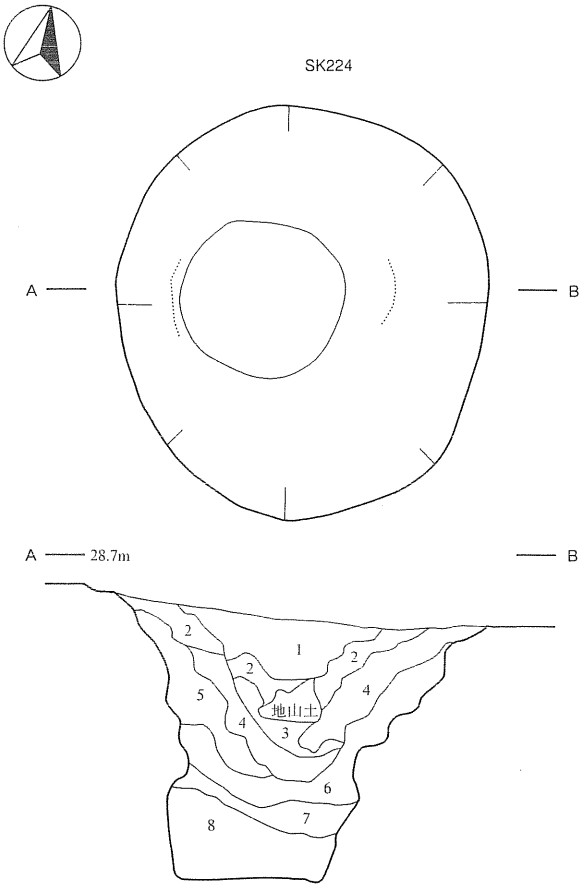
Ａ区中央やや東側のＬＢ35区にあり、地山面で確認した。平面は隅丸長方形状で、規模は長さ1.33m×幅0.6m、深さ0.32mである。壁は北西側が直立気味に立ち上がり、南東側では緩い傾斜を示す。底面は北西側で一段高くなる。北西上端と南東下端は直線的である。

ＳＫ243（第47図、図版12-８）

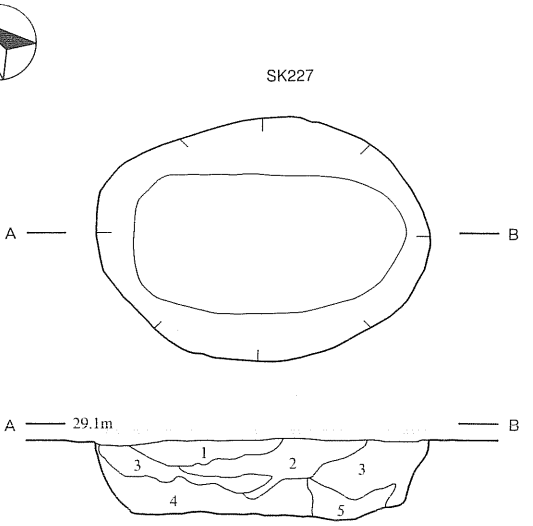
Ａ区中央やや東側のＬＡ35区にあり、地山面で確認した。平面形は不整の楕円形で、規模は長さ1.04m×幅0.53m、深さ0.2mである。壁は北西側が直立気味に立ち上がり、南東側では緩い傾斜を示す。底面には凹凸がある。

ＳＫ245（第47図、図版13-１）

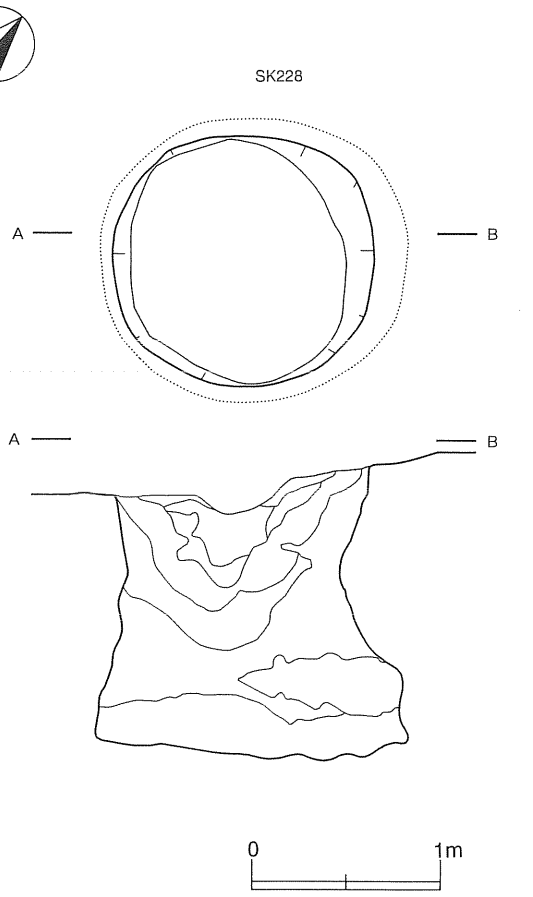
Ａ区中央やや東側のＫＴ36区にあり、地山面で確認した。平面形は隅丸の台形状で、規模は長さ1.27



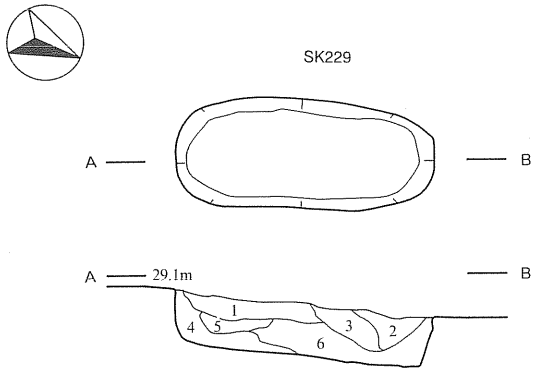
ＳＫ224
1　黒 褐 色 土(10YR2/3)　シルト～砂、炭化物・地山土混入、やや軟質。
2　暗 褐 色 土(10YR3/4)　シルト～砂、炭化物・地山土混入、やや軟質。
3　褐　色　土(10YR4/4)　粘土～シルト、炭化物・地山土混入、固質。
4　褐　色　土(10YR4/6)　粘土～シルト、炭化物・地山土混入、やや固質。
5　黄 褐 色 土(10YR5/8)　粘土～シルト、炭化物・地山土混入、固質。
6　黄 褐 色 土(10YR5/8)　粘土、炭化物・地山土混入、やや軟質。
7　明黄褐色土(10YR6/8)　粘土、炭化物・地山土混入、固質。
8　明黄褐色土(10YR6/8)　粘土、炭化物・地山土混入、やや軟質。



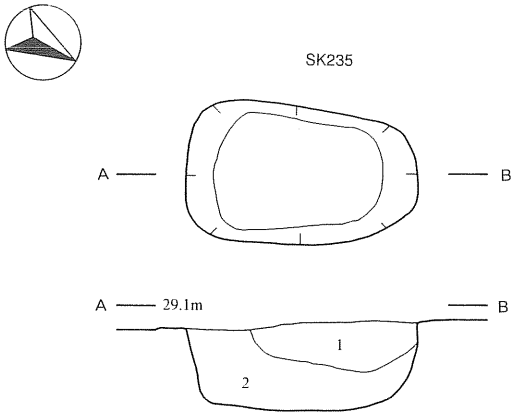
ＳＫ227
1　暗褐色土(10YR3/4)　シルト～砂、地山土混入、やや固質。
2　褐　色　土(10YR4/6)　シルト～砂、炭化物・地山土混入、やや固質。
3　暗褐色土(10YR3/3)　シルト～砂、炭化物・地山土混入、軟質。
4　褐　色　土(10YR4/4)　シルト、地山土混入、やや軟質。
5　褐　色　土(10YR4/4)　シルト、地山土混入、やや軟質。



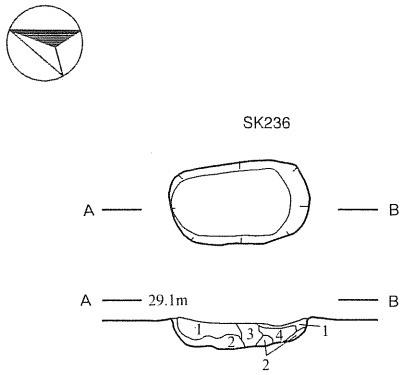
第45図　土坑（８）弥生①ＳＫ224・227・228



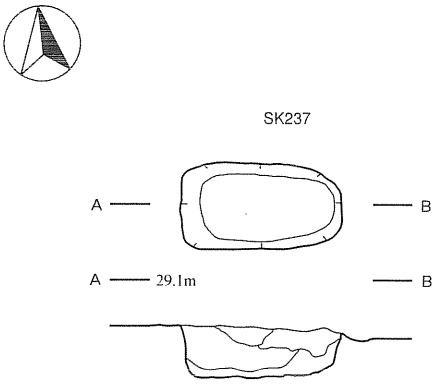
ＳＫ229
1　暗褐色土(10YR3/4)　シルト、炭化物・地山土混入、やや固質。
2　暗褐色土(10YR3/4)　シルト、炭化物・地山土混入、やや軟質。
3　黒褐色土(10YR4/3)　シルト～砂、炭化物・地山土混入、やや軟質。
4　褐　色　土(10YR4/6)　シルト、炭化物・地山土混入、やや軟質。
5　褐　色　土(10YR4/4)　シルト、炭化物・地山土混入、やや軟質。
6　黄褐色土(10YR5/6)　シルト、炭化物・地山土混入、やや軟質。

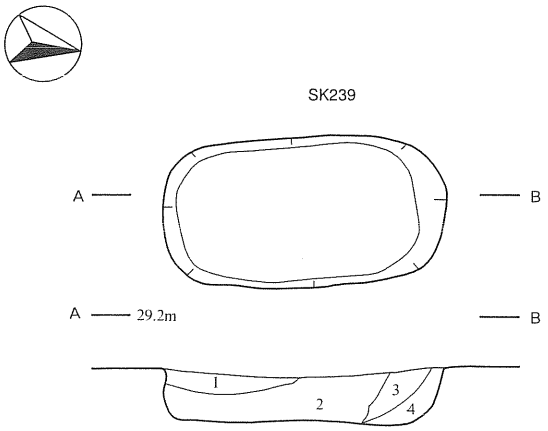


ＳＫ235
1　暗褐色土(10YR3/3)　シルト、炭化物・地山土混入、やや軟質。
2　褐　色　土(10YR4/4)　粘土～シルト、炭化物・地山土混入、やや固質。

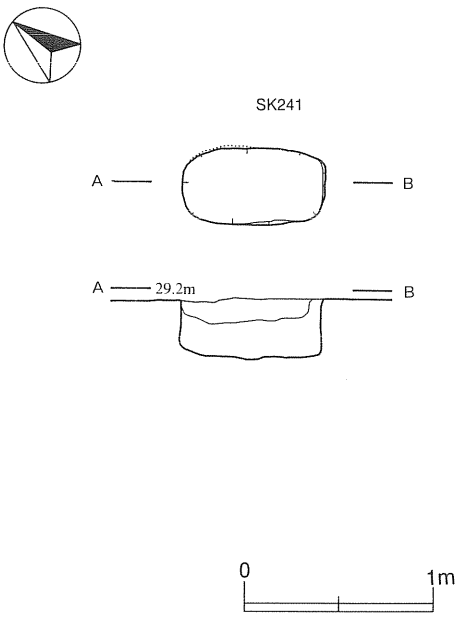


ＳＫ236
1　暗褐色土(10YR3/3)　シルト、炭化物・地山土混入、やや軟質。
2　褐　色　土(10YR4/4)　シルト、地山土混入、やや固質。
3　暗褐色土(10YR3/4)　粘土～シルト、炭化物・地山土混入、軟質。
4　暗褐色土(10YR3/4)　粘土～シルト、炭化物・地山土混入、やや軟質。





ＳＫ239
1　褐　色　土(10YR4/6)　シルト、炭化物・地山土混入、やや軟質。
2　褐　色　土(10YR4/6)　シルト、炭化物・地山土混入、軟質。
3　褐　色　土(10YR4/6)　シルト～粘土、炭化物・地山土混入、やや固質。
4　褐　色　土(10YR4/6)　シルト、地山土混入、やや軟質。



第46図　土坑（９）弥生②ＳＫ229・235～237・239・241

m×幅0.71m、深さ0.36mである。南北の上端は、南側が長く北側が短い。壁は南側が直立気味に立ち上がり、北側では湾曲する緩い傾斜を示す。南側壁の直下は浅く窪む。底面は南端を除きほぼ平坦である。

ＳＫ246（第47図、図版13－２）

Ａ区中央やや東側のＬＦ38区にあり、地山面で確認した。平面形は楕円形で、規模は長さ1.63m×幅1.01m、深さ0.47mである。壁は南側が直立して立ち上がり、北側では直立気味に立ち上がる。底面には僅かな凹凸がある。

ＳＫ247（第47・44図、巻頭図版１－１、図版13－３）

Ａ区中央やや東側のＬＦ39区にあり、地山面で確認した。平面形は不整の楕円形で、規模は長さ1.11m×幅0.86m、深さ0.42mである。壁は北東側が直立気味に立ち上がり、南東側では湾曲して緩い傾斜を示す。壁面には凹凸がある。底面はほぼ平坦である。内部からは玉が１点出土した。

Ｓ45の玉は臼玉である。ザラザラした粗い作りであるが、穿孔部の穿孔痕は鮮やかである。石質は緑色泥岩である。

ＳＫ248（第48・43図、巻頭図版１－１、図版13－３）

Ａ区中央やや東側のＬＦ40区にあり、地山面で確認した。平面形はやや不整な隅丸長方形で、規模は長さ0.84m×幅0.67m、深さ0.38mである。壁は北西側がやや緩く立ち上がり、中央部に出っ張りがある。南東側は湾曲して直立気味に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。内部より石鏃が１点出土した。

Ｓ38の石鏃は円基鏃である。先端と基部の一部が欠損している。全面に細かく丁寧な調整を施す。石質は硬質頁岩で、白色を呈している。

ＳＫ251（第48図、図版13－４）

Ａ区中央やや東側のＬＡ34・35区にあり、地山面で確認した。平面形は不整の楕円形で、規模は長さ1.6m×幅0.77m、深さ0.43mである。壁は北西側が直立して立ち上がり、南東側でも直立気味の傾斜を示す。底面は南東側から北西側へ緩く傾斜し、僅かに凹凸がある。

ＳＫ252（第48・44図、巻頭図版１－１、図版13－５）

Ａ区中央やや東側のＬＡ・ＬＢ34区にあり、地山面で確認した。平面形は整った楕円形で、規模は長さ1.57m×幅0.81m、深さ0.33mである。壁は南東側がやや緩く立ち上がり、北西側ではやや強い傾斜を示す。底面はやや凸凹している。内部より玉が１点出土した。

Ｓ46の玉は勾玉状の形態で、全面が丁寧に磨かれ光沢がある。穿孔は両側から施され貫通している。石質は緑色泥岩である。

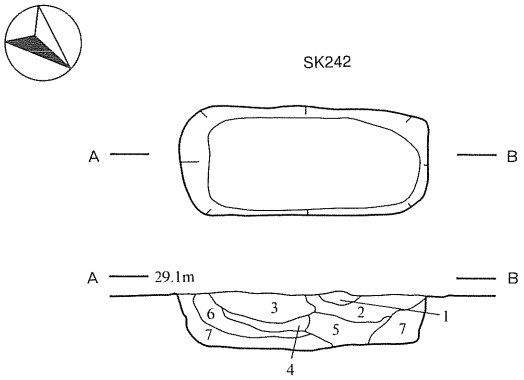
ＳＫ253（第48図、図版13－６）

Ａ区中央やや東側のＫＴ・ＬＡ35区にあり、地山面で確認した。平面形は不整の楕円形で、規模は長さ1.03m×幅0.75m、深さ0.37mである。壁は西側が直立気味に立ち上がり、東側ではそれよりやや緩い傾斜を示す。底面は東側が次第に高くなっている。

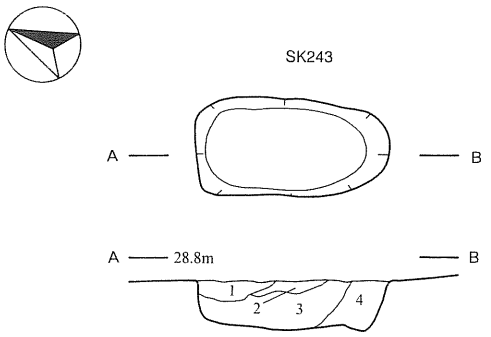
ＳＫ255（第48・44図、巻頭図版１－１、図版13－７）

Ａ区中央やや東側のＫＴ・ＬＡ35区にあり、地山面で確認した。平面形は不整の楕円形で、規模は長さ1.25m×幅0.82m、深さ0.4mである。壁は西側が緩く立ち上がり、東側は直立気味に強い傾斜を示す。底面は西側で幅0.25mの短い平坦部を造り、そこから東側に徐々に高まる。内部より玉が１点出土した。

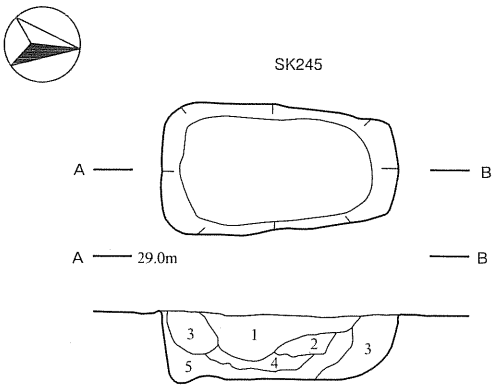
Ｓ47の玉は元来全面が丁寧に磨かれ、光沢のあったものと推定される。石質は緑色泥岩である。



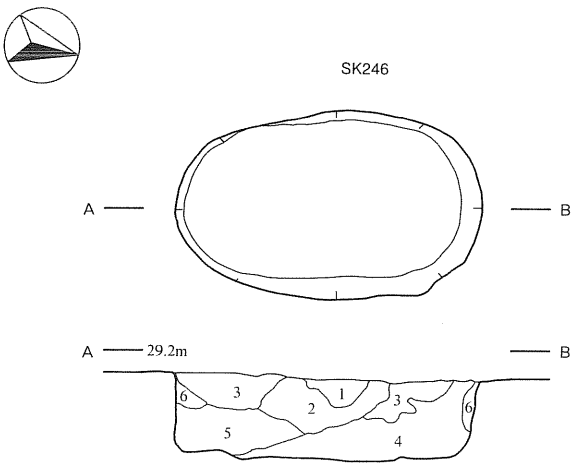
ＳＫ242
1　褐　色　土(10YR4/6)　粘土～シルト、地山土混入、やや固質。
2　褐　色　土(10YR4/4)　シルト～砂、焼土・炭化物・地山土混入、やや軟質。
3　暗褐色土(10YR3/4)　粘土～シルト、炭化物・地山土混入、やや固質。
4　褐　色　土(10YR4/6)　粘土～シルト、焼土・炭化物・地山土混入、やや固質。
5　暗褐色土(10YR3/4)　シルト、炭化物・地山土混入、やや軟質。
6　褐　色　土(10YR3/3)　シルト、地山土混入、やや固質。
7　褐　色　土(10YR4/6)　粘土、炭化物・地山土混入、固質。



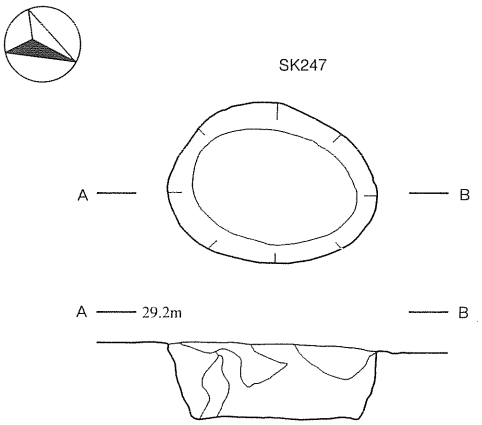
ＳＫ243
1　褐　色　土(10YR4/6)　シルト、炭化物・地山土混入、やや軟質。
2　褐　色　土(10YR4/6)　シルト、炭化物・地山土混入、軟質。
3　黄褐色土(10YR5/4)　粘土～シルト、炭化物・地山土混入、やや軟質。
4　黄褐色土(10YR5/6)　粘土～シルト、炭化物・地山土混入、やや固質。

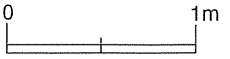


ＳＫ245
1　褐　色　土(10YR4/6)　粘土、地山土混入、固質。
2　灰黄褐色土(10YR5/2)　シルト、炭化物・地山土混入、やや固質。
3　褐　色　土(10YR4/6)　シルト、炭化物・地山土混入、やや軟質。
4　黄 褐 色 土(10YR5/6)　粘土～シルト、炭化物・地山土混入、固質。
5　褐　色　土(10YR4/6)　シルト、炭化物・地山土混入、やや固質。

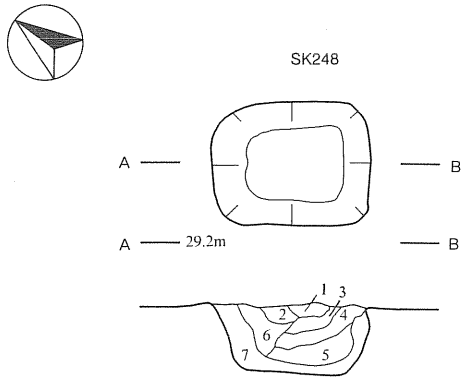


ＳＫ246
1　褐　色　土(10YR4/4)　シルト、炭化物・地山土混入、やや固質。
2　褐　色　土(10YR4/6)　シルト、炭化物・地山土混入、やや固質。
3　黄褐色土(10YR5/8)　粘土、炭化物・地山土混入、固質。
4　黄褐色土(10YR5/6)　粘土～シルト、炭化物・地山土混入、やや固質。
5　暗褐色土(10YR3/4)　シルト、炭化物・地山土混入、やや軟質。
6　黄褐色土(10YR5/8)　粘土～シルト、炭化物・地山土混入、やや固質。

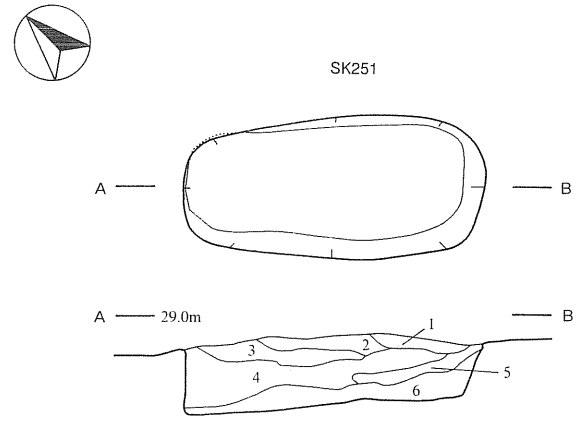




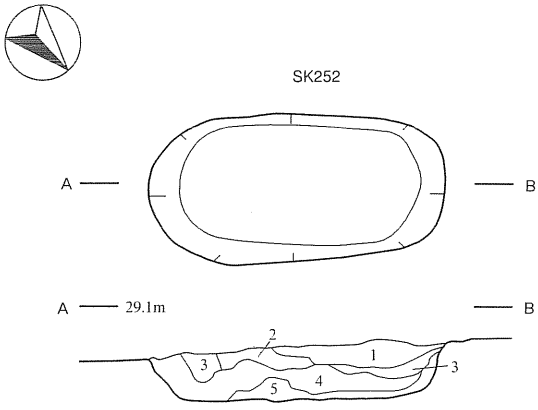
第47図　土坑(10) 弥生③ＳＫ242～247



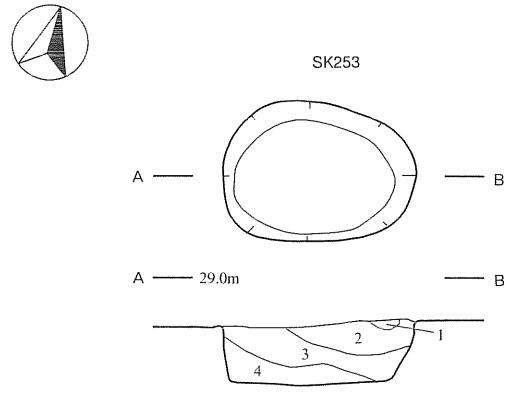
ＳＫ248
1　暗褐色土(10YR3/3)　シルト、炭化物・地山土混入、やや軟質。
2　暗褐色土(10YR3/4)　シルト、炭化物・地山土混入、やや軟質。
3　褐　色　土(10YR4/4)　粘土～シルト、炭化物・地山土混入、やや固質。
4　褐　色　土(10YR4/6)　粘土～シルト、炭化物・地山土混入、やや軟質。
5　暗褐色土(10YR3/4)　粘土、炭化物・地山土混入、やや固質。
6　褐　色　土(10YR4/4)　粘土～シルト、地山土混入、やや固質。
7　褐　色　土(10YR4/4)　粘土、地山土混入、やや固質。



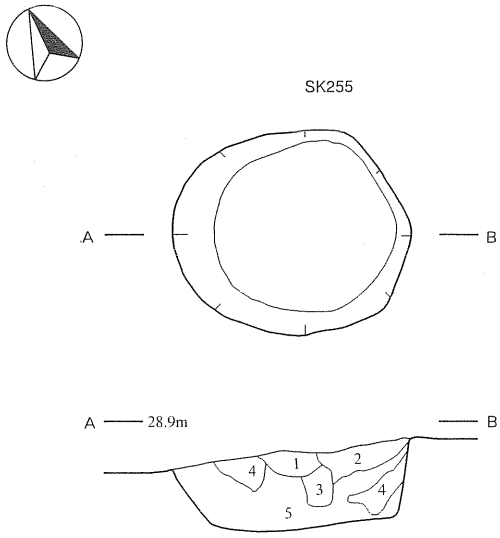
ＳＫ251
1　にぶい黄褐色土(10YR5/3)　粘土～シルト、やや固質。
2　にぶい黄褐色土(10YR5/4)　粘土、炭化物・地山土混入、固質。
3　灰黄褐色土(10YR6/2)　シルト、炭化物・地山土混入、やや固質。
4　褐　色　土(10YR4/4)　シルト、炭化物・地山土混入、やや固質。
5　暗褐色土(10YR3/4)　シルト～砂、炭化物・地山土混入、やや軟質。
6　黄褐色土(10YR5/8)　粘土、炭化物・地山土混入、固質。



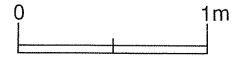
ＳＫ252
1　褐　色　土(10YR4/6)　シルト、炭化物混入、やや軟質。
2　褐　色　土(10YR4/4)　粘土～シルト、炭化物混入、固質(暗褐色土(10YR3/4))。
3　暗褐色土(10YR3/3)　シルト～砂、炭化物混入、やや軟質。
4　褐　色　土(10YR4/4)　シルト、炭化物混入、やや軟質。
5　褐　色　土(10YR4/6)　粘土～シルト、炭化物・地山土混入、やや固質。



ＳＫ253
1　灰黄褐色土(10YR4/2)　シルト～砂、地山土混入、やや軟質。
2　黄褐色土(10YR5/8)　粘土、地山土混入、固質。
3　褐　色　土(10YR4/4)　シルト～砂、炭化物・地山土混入、軟質。
4　褐　色　土(10YR4/6)　シルト、炭化物・地山土混入、やや軟質。



ＳＫ255
1　暗褐色土(10YR3/4)　シルト、炭化物・地山土混入、やや軟質。
2　暗褐色土(10YR3/3)　シルト、炭化物・地山土混入、やや軟質。
3　褐　色　土(10YR4/6)　粘土、地山土混入、やや固質。
4　暗褐色土(10YR3/4)　シルト、やや軟質。
5　褐　色　土(10YR4/4)　粘土～シルト、地山土混入、軟質。



第48図　土坑(11)　弥生④ＳＫ248・251～253・255

ＳＫ256（第49図）

Ａ区中央やや東側のＫＴ35区にあり、地山面で確認した。平面形は不整な楕円形で、規模は長さ0.78m×幅0.67m、深さ0.38mである。壁は直立気味に立ち上がり、底面は北西から南東に傾斜する。

ＳＫ261（第49・44図、巻頭図版１－１、図版13－８）

Ａ区中央やや東側のＫＳ35区にあり、地山面で確認した。平面形は不整な楕円形で、規模は長さ0.73m×幅0.5m、深さ0.29mである。壁は湾曲して直立気味に立ち上がり、底面は丸みがある。内部より玉が１点出土した。

Ｓ48の玉は臼玉である。ザラザラした粗い作りで、穿孔は両側から施され貫通している。石質は緑色泥岩である。

ＳＫ262（第49図、図版14－１）

Ａ区中央やや東側のＬＤ37区にあり、地山面で確認した。平面形は略楕円形で、規模は長さ1.03m×幅0.63m、深さ0.3mである。壁は、北西側が湾曲して直立気味に立ち上がり、南東側は中央が強くせり出し垂直的に立ち上がる。

ＳＫ263（第49図、図版14－２）

Ａ区中央やや東側のＬＤ34区にあり、地山面で確認した。平面形は隅丸長方形状で、規模は長さ1.44m×幅0.71m、深さ0.4mである。壁は、湾曲して直立気味に立ち上がり、底面は南東側から北西側に傾斜する。また底面には少し凹凸がある。

ＳＫ266（第49図、図版14－３）

Ａ区中央やや東側のＬＣ34区にあり、地山面で確認した。平面形は不整の楕円形で、規模は長さ1.22m×幅0.61m、深さ0.46m（下面）である。壁は東側が直立して立ち上がり、西側は湾曲して直立する。底面は東端が最も低く、底の平らな西側上位面と東側下位面に二分される。

ＳＫ268（第50図、図版14－５・６）

Ａ区東端のＪＴ37区にあり、地山面で確認した。平面形は不整な楕円形で、規模は長さ1.1m×幅0.69m、深さ0.27mである。壁は東側が直立気味に立ち上がり、西側はやや緩い傾斜を示す。底面はほぼ平坦で、東から西へ緩く傾斜する。

ＳＫ269（第50図、図版14－４）

Ａ区東端のＪＴ37区にあり、地山面で確認した。平面形は不整な楕円形で、規模は長さ0.83m×幅0.57m、深さ0.21mである。壁は直立気味に立ち上がり、底面は東から西へ徐々に高くなる。

ＳＫ270（第50図、図版14－７）

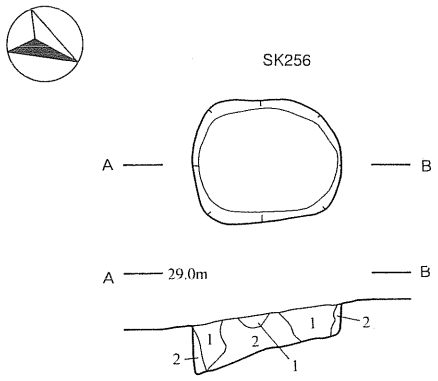
Ａ区東端のＪＴ36・37区にあり、地山面で確認した。平面形は不整な楕円形で、規模は長さ1.18m×幅0.74m、深さ0.19mである。壁は湾曲して立ち上がり、底面は中央やや北側が最も低い。

ＳＫ272（第50図、図版14－８）

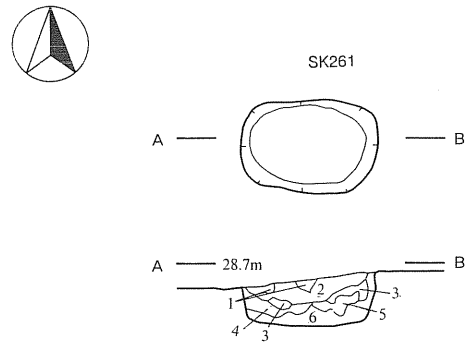
Ａ区東端のＪＴ・ＫＡ38区にあり、地山面で確認した。平面形は不整な楕円形で、規模は長さ1.41m×幅0.7m、深さ0.2mである。壁は直立気味に立ち上がり、底面は平坦で東から西へ僅かに傾く。

ＳＫ274（第50図、図版15－１）

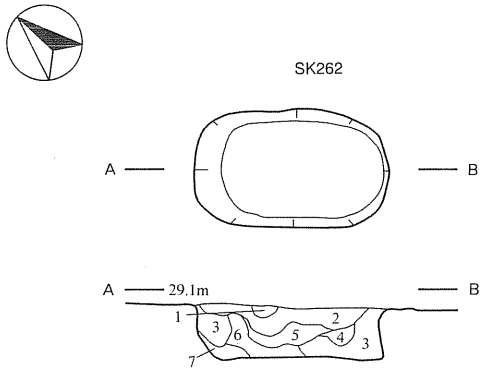
Ａ区東端のＫＡ38区にあり、地山面で確認した。平面形は略円形で、規模は直径約0.57m、深さ0.3mである。壁はやや緩く立ち上がり、底面は丸みをもつ。



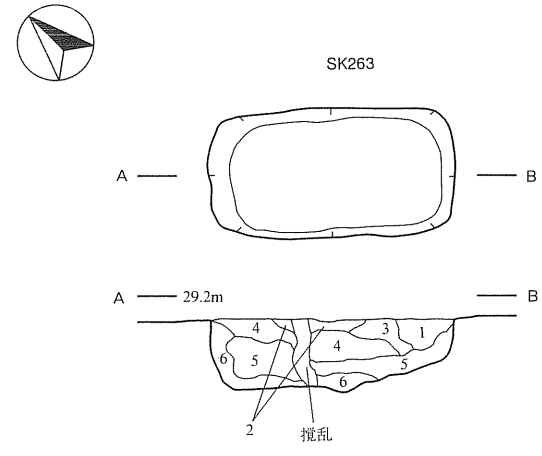
ＳＫ256
1　褐　色　土(10YR4/4)　シルト～砂、地山土混入、やや固質。
2　黄褐色土(10YR5/8)　粘土、地山土混入、固質。



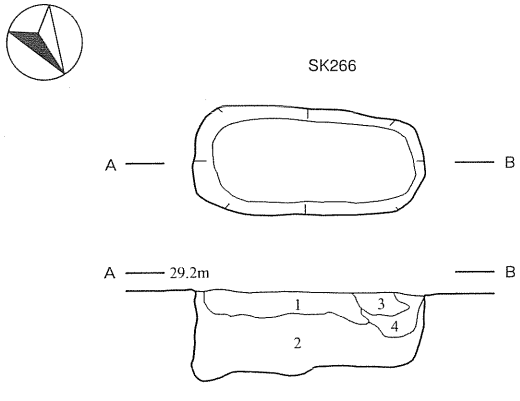
ＳＫ261
1　暗褐色土(10YR3/4)　シルト～砂、炭化物混入、やや軟質。
2　褐　色　土(10YR4/4)　シルト～砂、炭化物・地山土混入、やや軟質。
3　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　シルト～砂、炭化物・地山土混入、やや軟質。
4　黄褐色土(10YR5/6)　シルト～砂、炭化物・地山土混入、やや軟質。
5　褐　色　土(10YR4/4)　シルト～砂、炭化物・地山土混入、やや軟質。
6　黄褐色土(10YR5/8)　シルト～砂、地山土混入、やや軟質。



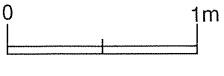
ＳＫ262
1　褐　色　土(10YR4/6)　シルト、炭化物・地山土混入、固質。
2　にぶい黄褐色土(10YR5/4)　粘土～シルト、炭化物・地山土混入、固質。
3　褐　色　土(10YR4/6)　粘土～シルト、炭化物・地山土混入、やや固質。
4　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　シルト、地山土混入、やや軟質。
5　褐　色　土(10YR4/6)　粘土～シルト、炭化物・地山土混入、やや固質。
6　黄褐色土(10YR5/6)　粘土～シルト、炭化物・地山土混入、固質。
7　黄褐色土(10YR5/8)　粘土～シルト、炭化物・地山土混入、固質。



ＳＫ263
1　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　シルト～砂、炭化物・地山土混入、やや軟質。
2　にぶい黄褐色土(10YR5/4)　シルト、炭化物・地山土混入、やや固質。
3　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　シルト、炭化物・地山土混入、やや固質。
4　黄褐色土(10YR5/8)　粘土、炭化物・地山土混入、固質。
5　暗褐色土(10YR3/4)　シルト～砂、炭化物・地山土混入、やや軟質。
6　褐　色　土(10YR4/6)　シルト、炭化物・地山土混入、やや軟質。



ＳＫ266
1　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　シルト、炭化物・地山土混入、やや軟質。
2　灰　黄　褐　色　土(10YR4/2)　粘土～シルト、炭化物・地山土混入、やや固質。
3　明　黄　褐　色　土(10YR6/8)　粘土、地山土混入、固質。
4　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　シルト、炭化物・地山土混入、やや固質。



第49図　土坑(12) 弥生⑤ＳＫ256・261～263・266

ＳＫ275（第50図、図版15-２）

Ａ区東端のＫＡ39区にあり、地山面で確認した。平面形は不整の楕円形で、規模は長さ1.17m×幅0.75m、深さ0.24mである。壁は東側が緩く立ち上がり、西側は強い傾斜を示す。底面はほぼ平坦で、西側がやや高い。

ＳＫ276（第51図、図版15-３）

Ａ区東端のＪＫ38区にあり、地山面で確認した。平面形は不整の楕円形で、規模は長さ0.88m×幅0.58m、深さ0.15mである。壁は湾曲して立ち上がり、底面はほぼ平坦で、北西から南東側に傾斜する。

ＳＫ278（第51・52図、巻頭図版６、図版15-４、23、28）

Ａ区東端のＪＫ35・36区にあり、地山面で確認した。平面形は略楕円形で、規模は直径約1.26m、深さ1.26mである。壁は、北側上端から深さ約0.4mのところより下方が大きく開き、他の三方は直立する。底面は南側がやや低い。内部からは、壺・浅鉢・深鉢が出土している。

28は壺形土器で、口縁部の1/2を残存。器高9.8cm、口径6.3cm、最大径10.4cm、底径6.1cmである。外面は無文で、調整は丁寧なミガキを施す。黒斑が体部の1/3を占める。内面には粗いナデが明瞭である。胎土には海綿骨針を含む。焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色である。精製の土器である。

29は浅鉢で、口縁部の一部を欠損。器高8cm、口径17.6cm、底径9.1cmである。外面は、体部にＬＲ縄文を施した後に口縁部の幅１～1.5cmにミガキを施す。内面は全面にミガキを施す。底部から体部の一部と、内面体部の一部に黒斑を認める。胎土には、１～２㎜の砂粒をやや顕著に含む。焼成はやや不良で、色調は黄褐色である。粗製の土器である。

30は深鉢形土器で、口縁部の1/3を欠損。内傾する口縁部直下に最大径をもつ。外面の1/2が爛れている。器高20cm、口径16.1cm、最大径18.3cm、底径8.7cmである。口唇直下は縄文で、その下に無文帯を挟んで幅３～４㎜の平行沈線文がある。体部は下端を除いて縦位の縄文を施すが、一部ハケメのような痕跡を認める。体部の爛れている所以外は、黒色炭化物が付着する。内面の調整にはミガキを施し、部分的にアスファルトらしい付着物が確認れる。胎土には１～２㎜の砂粒が顕著である。焼成は良好で、色調は橙色である。粗製の土器である。

ＳＫ279（第51図、図版15-５）

Ａ区東端のＫＤ36・37区にあり、地山面で確認した。平面形は不整の楕円形で、規模は長さ0.96m×幅0.67m、深さ0.17mである。壁は北側が緩く立ち上がり、南側は強い傾斜を示す。底面はほぼ平坦であるが、北側にやや傾く。

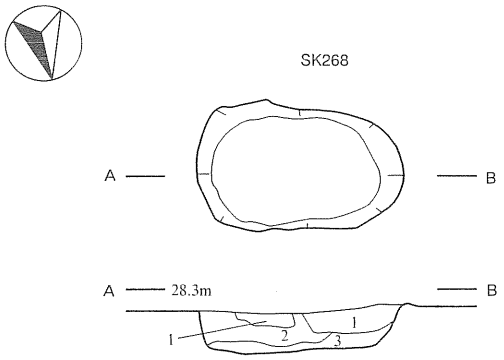
ＳＫ280（第51図、図版15-６）

Ａ区東端のＫＦ37区にあり、地山面で確認した。中央付近には根による攪乱がある。平面形は楕円形で、規模は長さ1.02m×幅0.68m、深さ0.24mである。壁は直立気味に立ち上がり、底面は北側がやや高い。底面にはやや凹凸があり、中央やや南側には径0.3m前後のピットがある。

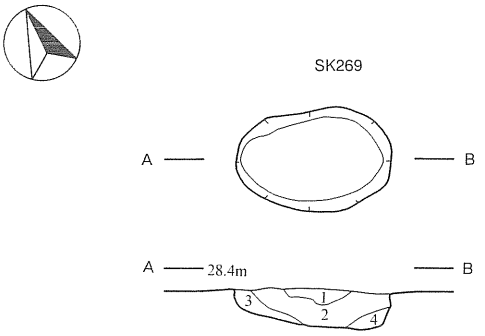
ＳＫ282（第51・44図、巻頭図版１-１、図版15-７）

Ａ区東端のＫＥ36区にあり、地山面で確認した。平面形は不整の楕円形で、規模は長さ1.42m×幅0.77m、深さ0.23mである。壁は直立気味に立ち上がり、底面はほぼ平坦で東側がやや高い。内部より玉が１点出土した。

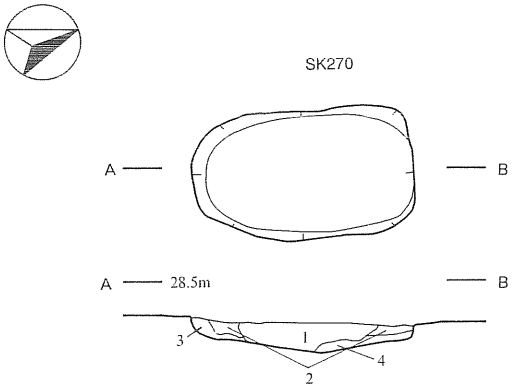
Ｓ49の玉は全面が丁寧に磨かれ光沢がある。穿孔は両側から施され貫通しているが、貫通部は非常に



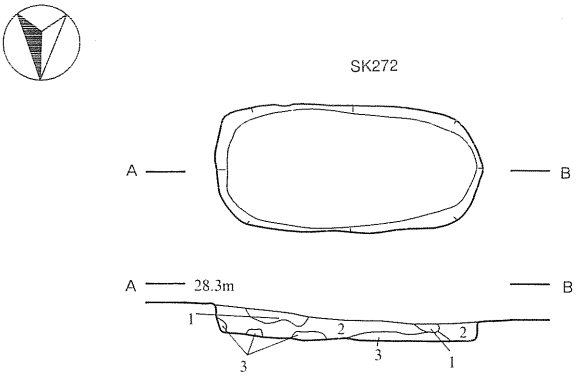
ＳＫ268
1　黄褐色土(10YR5/8)　粘土、炭化物・地山土混入、やや固質。
2　暗褐色土(10YR3/4)　粘土～シルト、炭化物混入、やや軟質。
3　黄褐色土(10YR5/8)　シルト、地山土混入、固質。



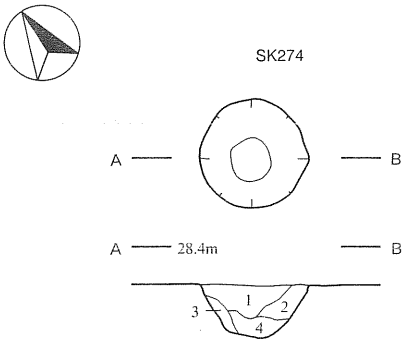
ＳＫ269
1　褐　色　土(10YR4/4)　粘土～シルト、地山土混入、やや固質。
2　暗褐色土(10YR3/4)　粘土～シルト、地山土混入、やや軟質。
3　暗褐色土(10YR3/4)　粘土～シルト、固質。
4　暗褐色土(10YR3/4)　シルト、炭化物混入、軟質。



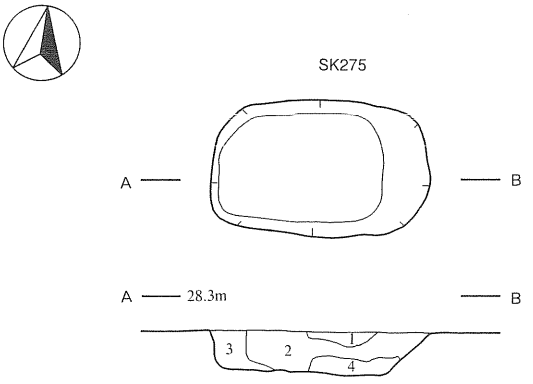
ＳＫ270
1　暗褐色土(10YR3/4)　粘土～シルト、炭化物・地山土混入、やや固質。
2　褐　色　土(10YR4/4)　粘土～シルト、地山土混入、固質。
3　褐　色　土(10YR4/6)　粘土、地山土混入、固質。
4　黄褐色土(10YR5/6)　粘土、地山土混入、やや固質。



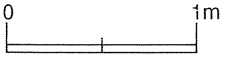
ＳＫ272
1　褐　色　土(10YR4/6)　粘土～シルト、地山土混入、やや軟質。
2　暗褐色土(10YR3/4)　粘土～シルト、炭化物混入、やや軟質。
3　黄褐色土(10YR5/6)　粘土、地山土混入、やや固質。



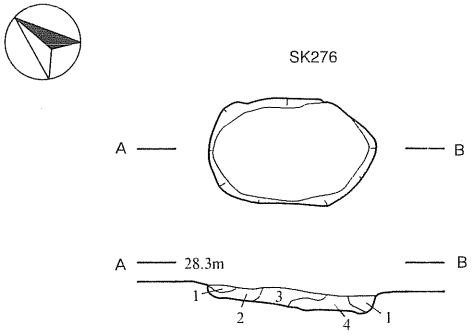
ＳＫ274
1　暗褐色土(10YR3/4)　粘土～シルト、炭化物・地山土混入、やや固質。
2　暗褐色土(10YR3/4)　粘土～シルト、炭化物・地山土混入、固質。
3　黄褐色土(10YR5/6)　粘土、地山土混入、固質。
4　褐　色　土(10YR4/4)　粘土～シルト、地山土混入、やや軟質。



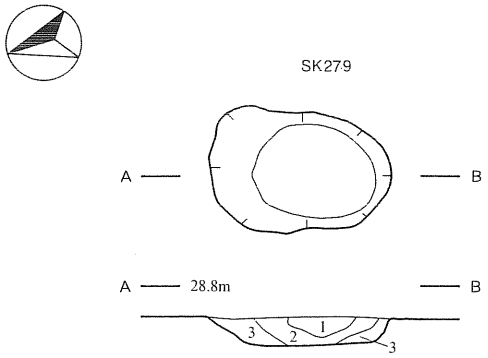
ＳＫ275
1　黒褐色土(10YR2/2)　シルト、軟質。
2　暗褐色土(10YR3/4)　粘土～シルト、炭化物・地山土混入、やや軟質。
3　褐　色　土(10YR4/6)　粘土、地山土混入、やや固質。
4　褐　色　土(10YR4/6)　粘土、地山土混入、固質。



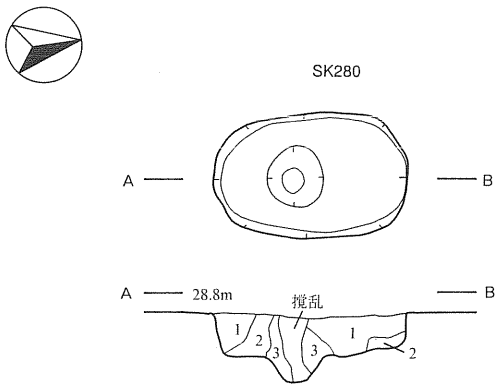
第50図　土坑(13) 弥生⑥ＳＫ268～270・272・274・275



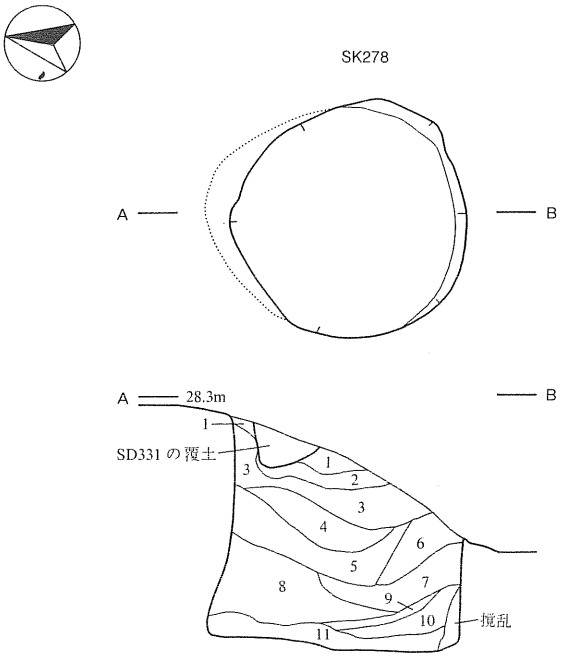
ＳＫ276
1　暗褐色土(10YR3/4)　シルト、地山土混入、やや軟質。
2　褐　色　土(10YR4/6)　粘土、地山土混入、固質。
3　褐　色　土(10YR4/6)　粘土～シルト、地山土混入、やや固質。
4　褐　色　土(10YR4/6)　粘土、地山土混入、やや軟質。



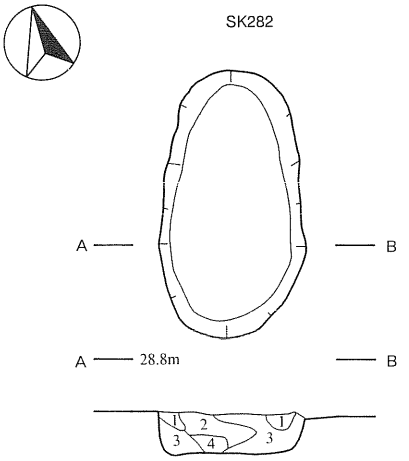
ＳＫ279
1　黒褐色土(10YR2/3)　シルト、炭化物混入、軟質。
2　暗褐色土(10YR3/4)　粘土～シルト、地山土混入、軟質。
3　黄褐色土(10YR5/6)　粘土、地山土混入、固質。



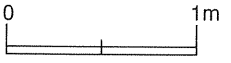
ＳＫ280
1　褐　色　土(10YR4/6)　シルト、炭化物・地山土混入、やや軟質。
2　黄褐色土(10YR5/6)　粘土～シルト、地山土混入、やや固質。
3　黄褐色土(10YR5/8)　粘土、地山土混入、固質。



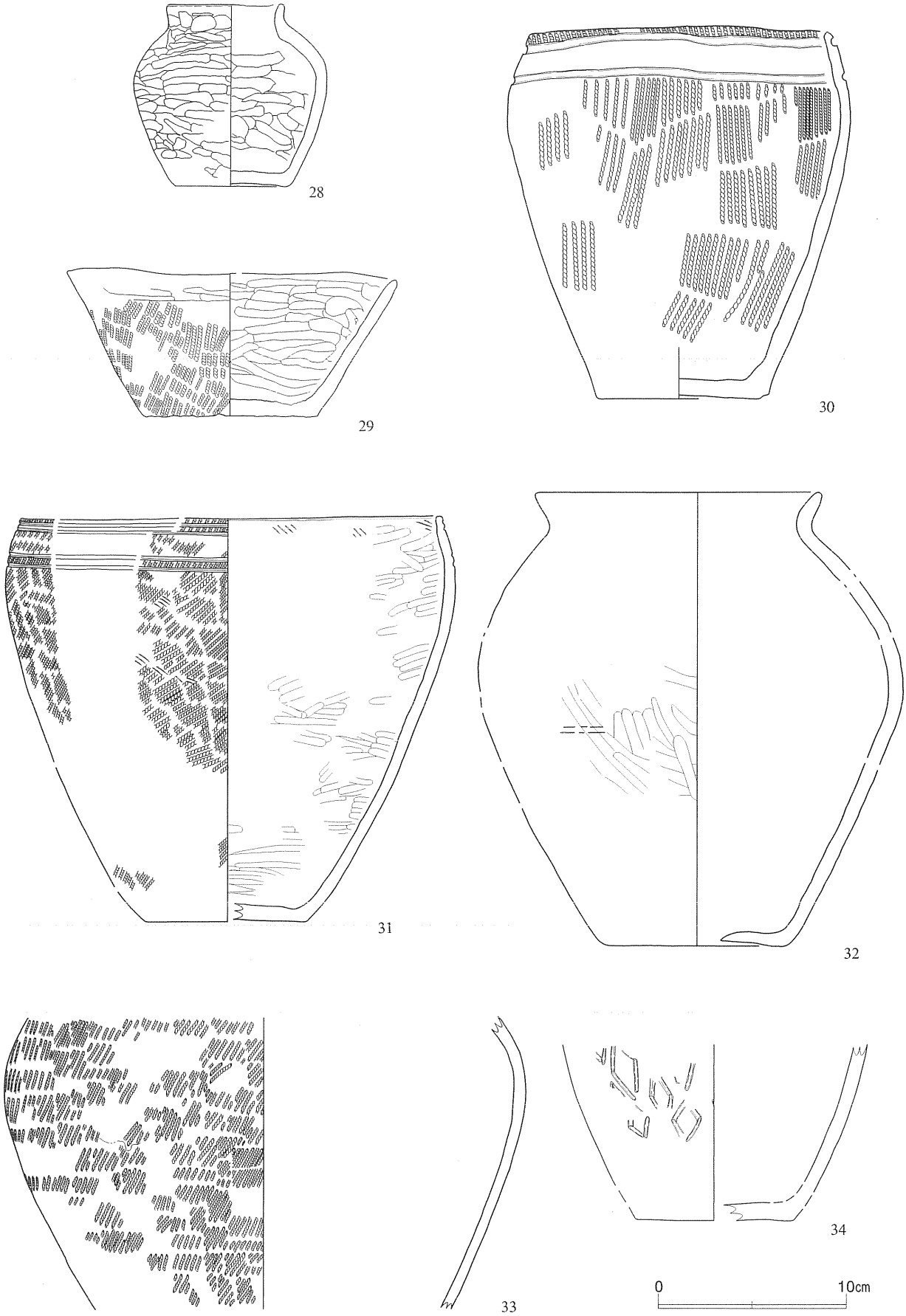
ＳＫ278
1　黒褐色土(10YR2/3)　シルト、地山土混入、軟質。
2　暗褐色土(10YR3/4)　シルト、地山土混入、軟質。
3　褐　色　土(10YR4/6)　粘土～シルト、地山土混入、やや軟質。
4　褐　色　土(10YR4/6)　粘土、炭化物・地山土混入、やや軟質。
5　黄褐色土(10YR5/6)　粘土、地山土混入、やや固質。
6　暗褐色土(10YR3/4)　粘土～シルト、地山土混入、やや固質。
7　褐　色　土(10YR4/6)　粘土、地山土混入、やや固質。
8　黄褐色土(10YR5/8)　粘土、地山土混入、固質。
9　褐　色　土(10YR4/6)　粘土～シルト、炭化物・地山土混入、やや固質。
10　褐　色　土(10YR4/6)　粘土、地山土混入、やや固質。
11　褐　色　土(10YR4/4)　粘土、炭化物・地山土混入、軟質。



ＳＫ282
1　黄褐色土(10YR5/6)　粘土～シルト、地山土混入、固質。
2　褐　色　土(10YR4/6)　粘土、地山土混入、やや固質。
3　褐　色　土(10YR4/4)　粘土～シルト、炭化物・地山土混入、軟質。
4　褐　色　土(10YR4/6)　粘土、地山土混入、やや軟質。



第51図　土坑(14)　弥生⑦ＳＫ276・278～280・282



第52図　遺構内出土土器(18) 弥生⑱28～31、**遺構外出土土器** 弥生32～34

小さい。石質は緑色泥岩である。

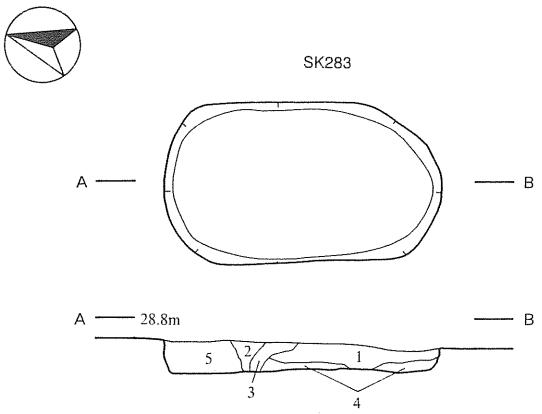
ＳＫ283（第43・53図、巻頭図版１－１、図版15－８）

Ａ区東端のＫＦ37区にあり、地山面で確認した。平面形は不整の楕円形で、規模は長さ1.47m×幅0.88m、深さ0.19mである。壁は垂直に立ち上がり、底面は中央やや南東側で高まる。内部より石鏃が１点出土した。

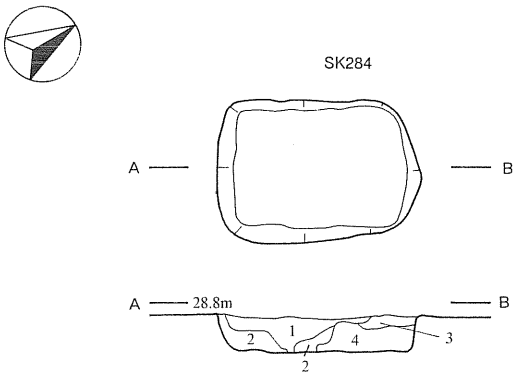
第３表　弥生土器の観察

（　）は推定値・現存値

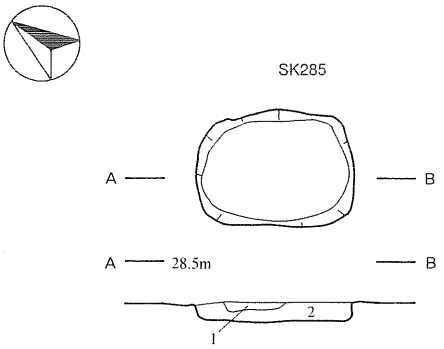
番号	出土地点	種類	器種	胎土（砂粒）	色調（外・内）		口径×底径×高さ（㎜）
1	ＳＲ188	弥生	壺	１㎜微量	7.5ＹＲ7/6橙	7.5ＹＲ6/6橙	202×148×403
2	ＳＲ190	弥生	壺	１㎜少量	7.5ＹＲ7/4にぶい橙	7.5ＹＲ7/4にぶい橙	196×120×426
3	ＳＲ190	弥生	壺	１㎜微量	7.5ＹＲ8/4浅黄橙	7.5ＹＲ8/4浅黄橙	129× 93×310
4	ＳＲ192	弥生	甕	１㎜多量	7.5ＹＲ8/4浅黄橙	7.5ＹＲ7/4にぶい橙	205× 98×300
5	ＳＲ193	弥生	壺	１㎜多量	7.5ＹＲ7/6橙	7.5ＹＲ7/4にぶい橙	178× 93×360
6	ＳＲ194	弥生	甕	１㎜多量	7.5ＹＲ8/6浅黄橙	7.5ＹＲ7/3にぶい橙	279× 83×373
7	ＳＲ195	弥生	壺	１㎜少量	10ＹＲ8/3浅黄橙	7.5ＹＲ7/6橙	－×(124)×(403)
8	ＳＲ196	弥生	壺	１㎜少量	7.5ＹＲ7/6橙	7.5ＹＲ7/2明褐灰	280×160×469
9	ＳＲ197	弥生	壺	１㎜微量	7.5ＹＲ7/3にぶい橙	10ＹＲ7/2にぶい黄橙	259×136×478
10	ＳＲ198	弥生	壺	１㎜多量	10Ｒ5/8赤	10Ｒ5/8赤	－× 75×(284)
11	ＳＲ199	弥生	甕	１㎜多量	7.5ＹＲ7/6橙	7.5ＹＲ7/4にぶい橙	243× 97×362
12	ＳＲ298	弥生	壺	１～２㎜多量	7.5ＹＲ6/3にぶい褐	7.5ＹＲ3/1黒褐	－× 94×(190)
13	ＳＲ299	弥生	甕	１㎜多量	7.5ＹＲ7/6橙	10ＹＲ6/1褐灰	329×112×385
14	ＳＲ300	弥生	甕	１㎜少量	5ＹＲ7/4にぶい橙	5ＹＲ7/4にぶい橙	222× 90×322
15	ＳＲ301	弥生	甕	１㎜多量	7.5ＹＲ8/8黄橙	7.5ＹＲ6/4にぶい橙	(290)×106×427
16	ＳＲ301	弥生	浅鉢	１㎜多量	2.5ＹＲ7/1灰白	2.5ＹＲ7/2灰黄	79× 35× 32
17	ＳＲ302	弥生	甕	１㎜多量	7.5ＹＲ6/6橙	5ＹＲ7/8橙	341×116×452
18	ＳＲ303	弥生	壺	１㎜多量	7.5ＹＲ7/4にぶい橙	7.5ＹＲ6/3にぶい褐	261×125×429
19	ＳＲ306	弥生	甕	１㎜多量	7.5ＹＲ7/6橙	10ＹＲ7/3にぶい黄橙	－×113×(133)
20	ＳＲ307	弥生	甕	１㎜多量	10ＹＲ7/3にぶい黄橙	7.5ＹＲ8/3浅黄橙	－×105×(138)
21	ＳＲ309	弥生	甕	１～２㎜多量	7.5ＹＲ7/6橙	7.5ＹＲ8/4浅黄橙	－× 90×(175)
22	ＳＲ311	弥生	甕	１㎜多量	7.5ＹＲ8/4浅黄橙	7.5ＹＲ8/4浅黄橙	322×161×519
23	ＳＲ312	弥生	壺	１㎜少量	7.5ＹＲ7/6橙	7.5ＹＲ7/3にぶい橙	197×117×376
24	ＳＲ313	弥生	甕	１㎜多量	5ＹＲ7/8橙	5ＹＲ6/8橙	417×130×(464)
25	ＳＲ330	弥生	壺	１㎜多量	7.5ＹＲ8/4浅黄橙	7.5ＹＲ8/4浅黄橙	－× 83×(252)
26	ＳＲ330	弥生	甕	１㎜多量	7.5ＹＲ8/6浅黄橙	5Ｙ6/1灰	－× 74×(193)
27	ＳＲ342	弥生	壺	１㎜多量	Ｎ1.5/0黒	5Ｙ3/2オリーブ黒	227×133×444
28	ＳＫ278	弥生	壺	１～２㎜多量	10ＹＲ7/1灰白	2.5Ｙ5/1黄灰	63× 61× 98
29	ＳＫ278	弥生	浅鉢	１～２㎜多量	7.5ＹＲ8/4浅黄橙	7.5ＹＲ8/3浅黄橙	176× 91× 80
30	ＳＫ278	弥生	深鉢	１～２㎜多量	2.5ＹＲ6/6橙	5ＹＲ7/6橙	161× 87×200
31	ＳＫ294	弥生	深鉢	１～２㎜多量	5ＹＲ7/6橙	5ＹＲ7/6橙	(225)× 86×216
32	ＫＯ34	弥生	壺	１㎜多量	7.5ＹＲ7/2明褐灰	7.5ＹＲ7/2明褐灰	(153)× 94×244
33	ＭＦ53	弥生	壺	１～２㎜多量	7.5ＹＲ7/2明褐灰	7.5ＹＲ5/1褐灰	－× －×157
34	ＬＣ35	弥生	壺	１㎜多量	7.5ＹＲ6/3にぶい褐	7.5ＹＲ7/2明褐灰	－× 84×(95)



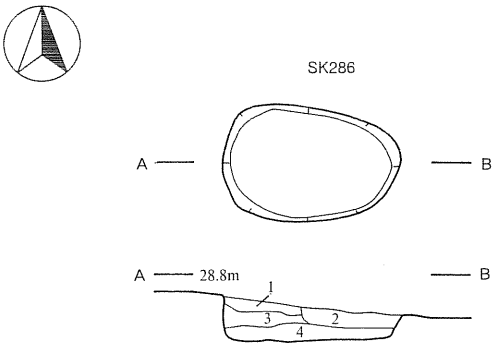
ＳＫ283
1　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　シルト、炭化物・地山土混入、やや固質。
2　褐　色　土(10YR4/4)　粘土～シルト、地山土混入、やや固質。
3　黄褐色土(10YR5/8)　粘土～シルト、地山土混入、やや固質。
4　にぶい黄褐色土(10YR5/4)　粘土～シルト、地山土混入、固質。
5　黄褐色土(10YR5/8)　粘土、地山土混入、軟質。



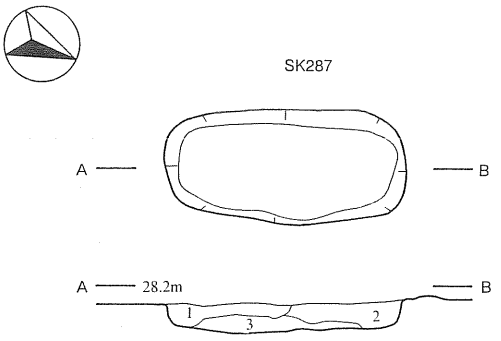
ＳＫ284
1　褐　色　土(10YR4/6)　粘土、地山土混入、固質。
2　黄褐色土(10YR5/6)　粘土、地山土混入、固質。
3　褐　色　土(10YR4/6)　粘土～シルト、地山土混入、固質。
4　黄褐色土(10YR5/8)　粘土、地山土混入、固質。



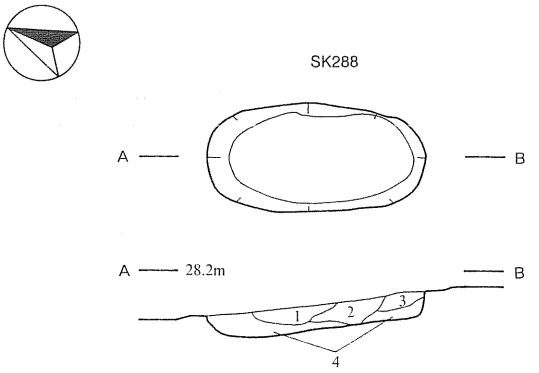
ＳＫ285
1　褐　色　土(10YR4/6)　粘土～シルト、炭化物混入、やや固質。
2　暗褐色土(10YR3/4)　粘土～シルト、炭化物・地山土混入、やや軟質。



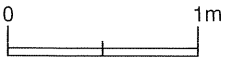
ＳＫ286
1　褐　色　土(10YR4/6)　シルト～砂、地山土混入、やや軟質。
2　黄褐色土(10YR5/8)　粘土、地山土混入、やや固質。
3　黄褐色土(10YR5/8)　粘土、地山土混入、固質。
4　黄褐色土(10YR5/6)　粘土、炭化物・地山土混入、固質。



ＳＫ287
1　黄褐色土(10YR5/6)　粘土、炭化物・地山土混入、固質。
2　褐　色　土(10YR4/6)　粘土、地山土混入、固質。
3　褐　色　土(10YR4/6)　粘土、地山土混入、やや固質。



ＳＫ288
1　褐　色　土(10YR4/6)　粘土～シルト、炭化物・地山土混入、やや軟質。
2　褐　色　土(10YR4/4)　粘土～シルト、地山土混入、軟質。
3　褐　色　土(10YR4/6)　粘土、地山土混入、固質。
4　黄褐色土(10YR5/6)　粘土、炭化物・地山土混入、固質。



第53図　土坑(15) 弥生⑧ＳＫ283～288

Ｓ39の石鏃は先端と基部を欠損している。全面を調整しているが、やや粗い作りである。石質は硬質頁岩で、灰白色を呈している。

ＳＫ284（第53図、図版16－１）

Ａ区東端のＫＥ36区にあり、地山面で確認した。平面形は不整の隅丸長方形状で、規模は長さ1.08m×幅0.77m、深さ0.2mである。壁は直立気味に立ち上がり、底面には僅かな凹凸がある。

ＳＫ285（第53図、図版16－２）

Ａ区東端のＫＥ38区にあり、地山面で確認した。平面形は不整の隅丸長方形状で、規模は長さ0.84m×幅0.62m、深さ0.12mである。壁は直立気味に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

ＳＫ286（第53図、図版16－３）

Ａ区東端のＫＤ・ＫＥ39区にあり、地山面で確認した。平面形は不整な楕円形で、規模は長さ0.94m×幅0.64m、深さ0.25mである。壁は直立気味に立ち上がり、底面は中央部が最も低い。

ＳＫ287（第53図、図版16－４）

Ａ区東端のＫＤ40区にあり、地山面で確認した。平面形は楕円形で、規模は長さ1.28m×幅0.62m、深さ0.19mである。壁は直立気味に立ち上がり、底面は南東側が最も低い。

ＳＫ288（第53図、図版16－５）

Ａ区東端のＫＤ41区にあり、地山面で確認した。ＳＤ331に切られている。平面形は楕円形で、規模は長さ1.17m×幅0.59m、深さ0.26mである。壁は、北西側が湾曲して緩く立ち上がり、南東側は強い傾斜を示す。底面は北西側に強く傾斜する。

ＳＫ289（第54図、図版16－６）

Ａ区東端のＫＢ・ＫＣ40区にあり、地山面で確認した。平面形は不整の楕円形で、規模は長さ1.11m×幅0.68m、深さ0.25mである。壁は緩く立ち上がり、底面の南側が一段窪んでいる。

ＳＫ290（第54図、図版16－６）

Ａ区東端のＫＣ40区にあり、地山面で確認した。平面形は隅丸長方形状で、規模は長さ0.65m×幅0.47m、深さはピット底面までが0.48m、床までが0.2mである。壁は垂直して立ち上がり、床面は北側に緩い傾斜を示す。北側はピット状の深い落ち込みになる。

ＳＫ291（第54図、図版16－７）

Ａ区東端のＫＥ37区にあり、地山面で確認した。平面形は不整な楕円形で、規模は長さ0.98m×幅0.55m、深さ0.12mである。壁は直立して立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

ＳＫ292（第54図、図版16－８）

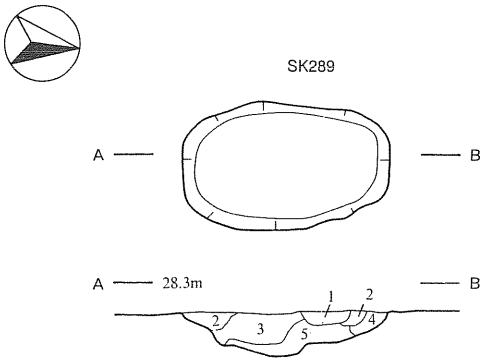
Ａ区東端のＫＤ36区にあり、地山面で確認した。平面形は隅丸方形状で、規模は長さ0.77m×幅0.72m、深さ0.15mである。壁はやや湾曲して立ち上がり、底面は中央付近がやや高まる。

ＳＫ293（第54図、図版17－１）

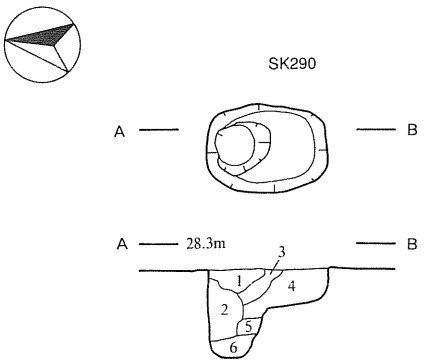
Ａ区東端のＫＣ36区にあり、地山面で確認した。平面形は不整な楕円形で規模は長さ1.4m×幅1.25m、深さ0.76mである。壁は南北側が直立気味に立ち上がり、東西側がそれよりやや緩い傾斜を示す。底面には凹凸がある。

ＳＫ294（第55図、図版17－２、22、28）

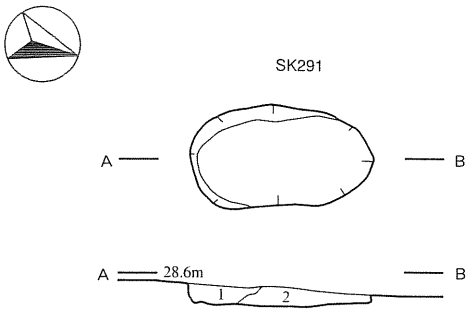
Ａ区東端のＫＡ35・36区にあり、地山面で確認した。ＳＤ493に切られている。平面形は不整楕円形で、



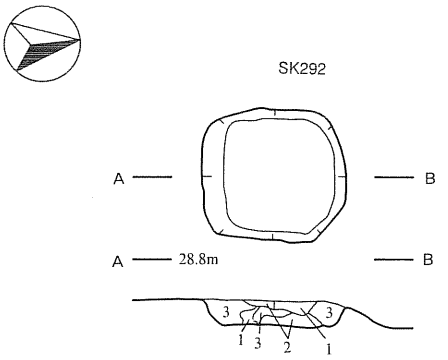
ＳＫ289
1　褐　色　土(10YR4/6)　粘土～シルト、山土混入、やや固質。
2　暗褐色土(10YR3/4)　シルト、軟質。
3　褐　色　土(10YR4/6)　粘土～シルト、地山土混入、やや固質。
4　褐　色　土(10YR4/6)　粘土～シルト、地山土混入、やや軟質。
5　褐　色　土(10YR4/6)　シルト、炭化物・地山土混入、やや固質。



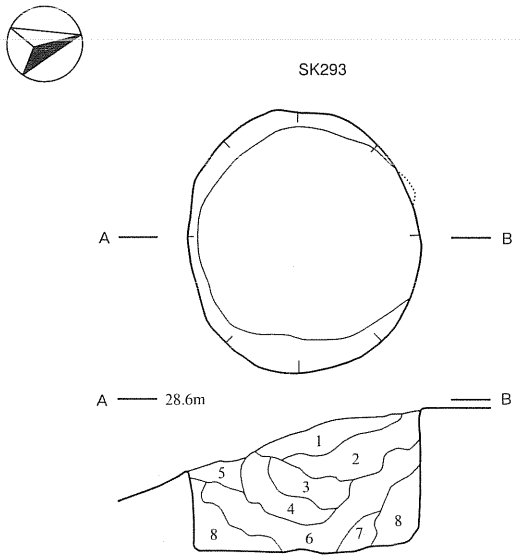
ＳＫ290
1　褐　色　土(10YR4/4)　シルト、炭化物・地山土混入、やや固質。
2　褐　色　土(10YR4/4)　粘土～シルト、地山土混入、軟質。
3　褐　色　土(10YR4/6)　粘土～シルト、地山土混入、やや固質。
4　褐　色　土(10YR4/6)　粘土～シルト、炭化物・地山土混入、やや固質。
5　黄褐色土(10YR5/6)　粘土、地山土混入、軟質。
6　黒褐色土(10YR3/2)　シルト、地山土混入、軟質。



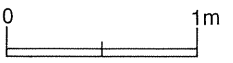
ＳＫ291
1　褐　色　土(10YR4/6)　シルト、地山土混入、軟質。
2　黄褐色土(10YR5/6)　粘土、地山土混入、固質。



ＳＫ292
1　明黄褐色土(10YR6/8)　粘土、地山土混入、固質。
2　褐　色　土(10YR4/4)　粘土～シルト、地山土混入、やや固質。
3　褐　色　土(10YR4/6)　粘土～シルト、地山土混入、やや軟質。



ＳＫ293
1　黒褐色土(10YR2/3)　シルト、地山土混入、やや軟質。
2　暗褐色土(10YR3/4)　シルト、焼土・地山土混入、軟質。
3　暗褐色土(10YR3/4)　粘土～シルト、焼土・地山土混入、やや固質。
4　褐　色　土(10YR4/4)　粘土～シルト、地山土混入、軟質。
5　褐　色　土(10YR4/6)　粘土～シルト、地山土混入、やや軟質。
6　褐　色　土(10YR4/6)　粘土～シルト、炭化物・地山土混入、軟質。
7　黄褐色土(10YR5/8)　粘土～シルト、炭化物・地山土混入、軟質。
8　褐　色　土(10YR4/6)　粘土、炭化物・地山土混入、やや軟質。



第54図　土坑(16) 弥生⑨ＳＫ289～293

規模は長さ1.3m×幅1.2m、深さ1.25mである。断面は、壁が上端から深さ0.5～0.7mのところより上方が緩く開き、下方は内傾し逆台形状を呈す。底面は南側がやや高まる。内部からは深鉢が出土した。

31は深鉢形土器で、全体の約1/2を欠損。内傾する口縁部直下に最大径をもつ。器高21.6cm、推定口径22.5cm、最大径24.1cm、底径8.6cmである。口唇直下は縄文で、その下に無文帯（磨消縄文）を挟んで幅１～２㎜の２本一組の平行沈線文が２つある。沈線文には磨消による不明瞭な部分がある。体部には下端を除いて斜縄文を施し、一部にハケメの痕跡を認める。体部の約半分に黒色付着物がある。内面には、ハケメの後に丁寧なミガキを施す。胎土には径１～３㎜の砂粒を顕著に含む。焼成は良好で、色調は橙色である。粗製の土器である。

ＳＫ295（第55図、図版17-３）

Ａ区東端のＫＡ36区にあり、地山面で確認した。平面形は略円形で、規模は長さ0.79m×幅0.7m、深さ0.56mである。壁は直立気味に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

ＳＫ296（第55図）

Ａ区東端のＪＴ35･36区にあり、地山面で確認した。平面形は略円形で、規模は長さ1.19m×幅1.13m、深さ1.02mである。壁は、上端から深さ0.15mのところより上方が開き、下方は直立もしくは直立気味に立ち上がる。底面は中央部が最も低く丸みがある。

ＳＫ325（第44･55図、巻頭図版１-１、図版17-４）

Ａ区東端のＬＤ38区にあり、地山面で確認した。平面形は不整な楕円形で、規模は長軸0.68m×幅0.4m、深さ0.2mである。壁は北西側が湾曲して直立し、南東側は緩く立ち上がる。底面にはやや凹凸があり、底面の中央部が最も低い。内部より玉が１点出土した。

Ｓ50の玉は勾玉状を呈する。全面が丁寧に磨かれ光沢がある。穿孔は両側から施され貫通しているが、正面穿孔部下位に欠損した痕跡がある。石質は瑪瑙である。

ＳＫ327（第56･44図、巻頭図版１-１、図版17-５）

Ａ区中央やや東側のＬＡ38区にあり、地山面で確認した。平面形は楕円形で、規模は長さ1.04m×幅0.62m、深さ0.28mである。壁は南側が直立気味に立ち上がり、北側は直立する。内部より玉が１点出土した。

Ｓ51玉は勾玉状を呈し、全面が丁寧に磨かれ光沢がある。穿孔は両側から施され貫通しているが、正面穿孔部右側が偏って深く彫り込まれている。石質は瑪瑙である。

ＳＫ329（第56図、図版17-６）

Ａ区東端のＬＤ38区にあり、地山面で確認した。平面形は不整楕円形で、規模は長さ1.98m×幅1.08m、深さ0.41mである。壁は北側が直立気味に立ち上がり、南側は湾曲して直立する。

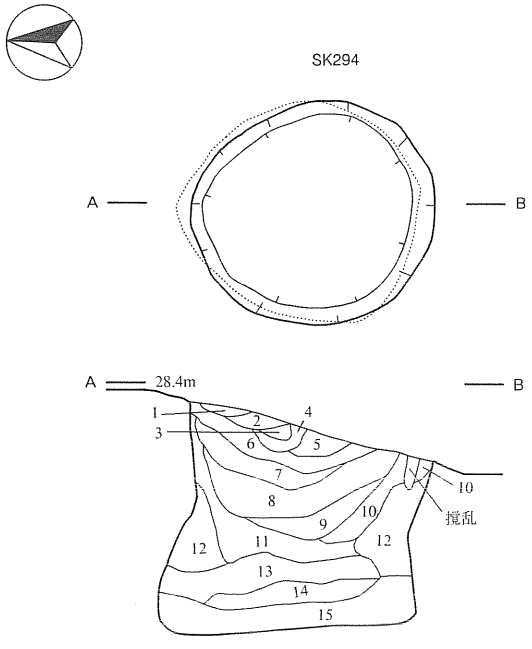
ＳＫ333（第56図）

Ａ区東端のＫＧ37区にあり、地山面で確認した。平面形は不整楕円形で、規模は長さ1.44m×幅0.83m、深さ0.35mである。壁は湾曲して立ち上がり、底部の中央部が大きく落ち込む。

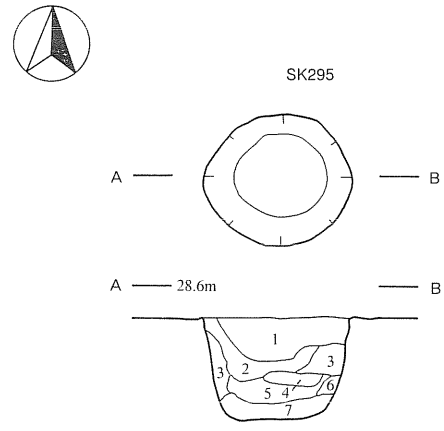
ＳＫ334（第56図、図版17-７）

Ａ区東端のＫＥ・ＫＦ38区にあり、地山面で確認した。平面形は楕円形で、規模は長さ1.19m×幅0.68m、深さ0.2mである。壁は、湾曲して直立気味に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

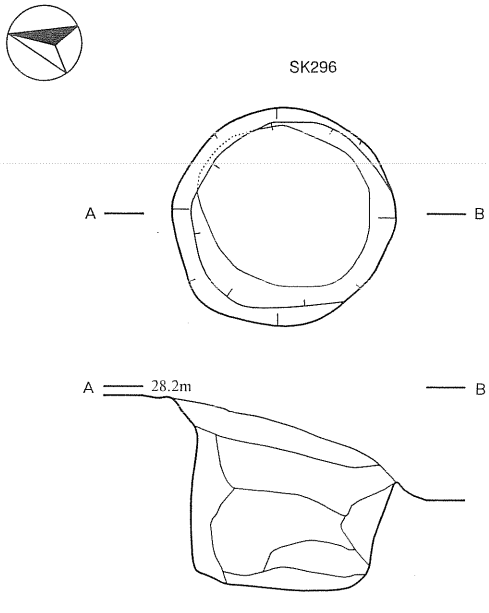
ＳＫ346（第43図、巻頭図版１-１）

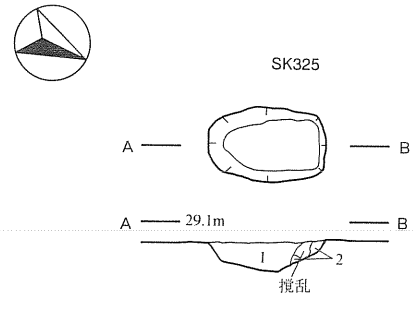


ＳＫ294
1　暗褐色土(10YR3/3)　粘土～シルト、やや軟質。
2　褐　色　土(10YR4/4)　粘土～シルト、炭化物･地山土混入、軟質。
3　暗褐色土(10YR3/4)　シルト、地山土混入、軟質。
4　褐　色　土(10YR4/4)　粘土、地山土混入、軟質。
5　黒褐色土(10YR2/3)　シルト、やや軟質。
6　暗褐色土(10YR3/4)　粘土～シルト、炭化物混入、やや軟質。
7　暗褐色土(10YR3/4)　粘土～シルト、炭化物･地山土混入、やや軟質。
8　暗褐色土(10YR3/4)　粘土～シルト、炭化物･地山土混入、軟質。
9　褐　色　土(10YR4/6)　粘土～シルト、炭化物･地山土混入、固質。
10　褐　色　土(10YR4/6)　粘土、炭化物･地山土混入、固質。
11　褐　色　土(10YR4/6)　粘土、炭化物･地山土混入、やや固質。
12　黄褐色土(10YR5/6)　粘土、地山土混入、やや軟質。
13　暗褐色土(10YR3/4)　粘土～シルト、地山土混入、やや軟質。
14　褐　色　土(10YR4/6)　粘土～シルト、炭化物混入、軟質。
15　褐　色　土(10YR4/6)　粘土、地山土混入、軟質。

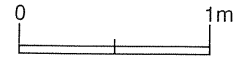


ＳＫ295
1　褐　色　土(10YR4/4)　粘土～シルト、炭化物･地山土混入、やや固質。
2　褐　色　土(10YR4/6)　粘土～シルト、地山土混入、やや固質。
3　黄褐色土(10YR5/6)　粘土、地山土混入、やや固質。
4　黄褐色土(10YR5/6)　粘土、地山土混入、やや軟質。
5　暗褐色土(10YR3/4)　粘土～シルト、炭化物･地山土混入、軟質。
6　褐　色　土(10YR4/6)　粘土～シルト、地山土混入、やや軟質。
7　褐　色　土(10YR4/6)　粘土～シルト、地山土混入、やや軟質。

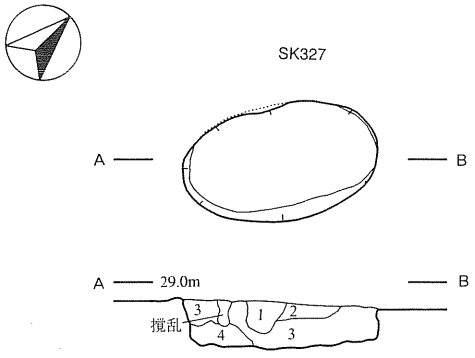


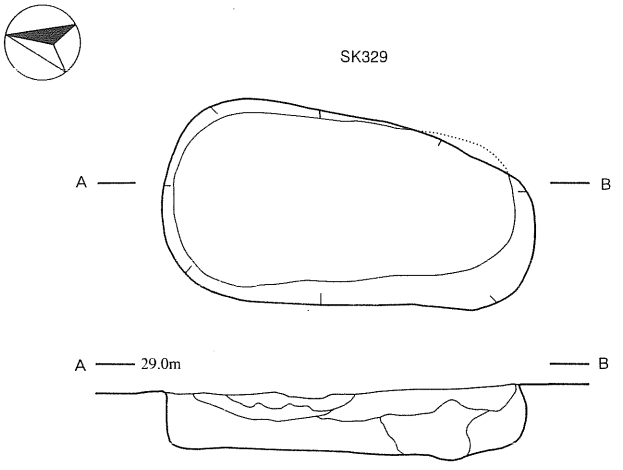


ＳＫ325
1　褐　色　土(10YR4/6)　シルト、地山土混入、やや軟質。
2　褐　色　土(10YR4/4)　シルト、地山土混入、やや軟質。

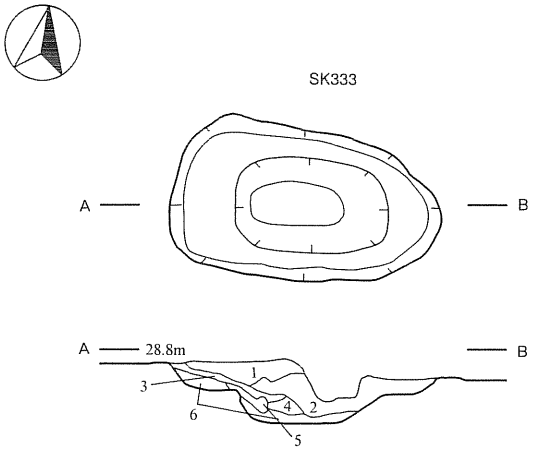


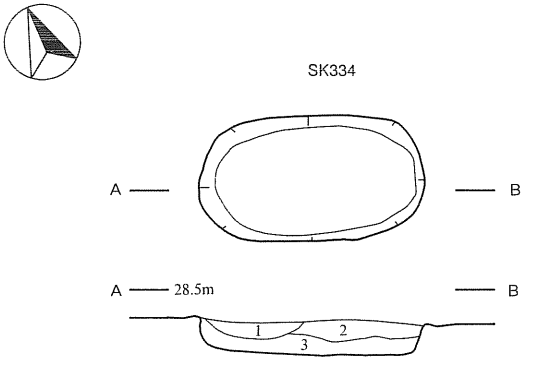
第55図　土坑(17)　弥生⑩ＳＫ294～296･325





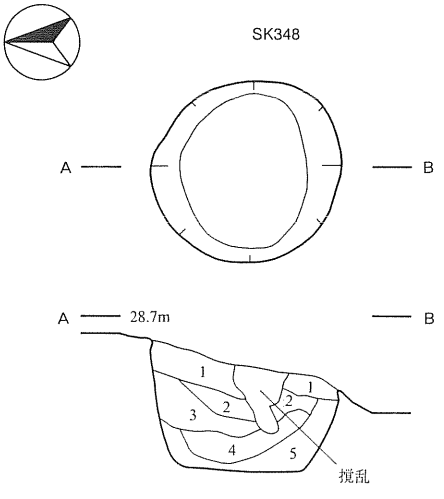
ＳＫ327
1　褐　色　土(10YR4/6)　シルト～砂、炭化物･地山土混入、やや軟質。
2　褐　色　土(10YR4/4)　粘土～シルト、炭化物･地山土混入、やや軟質。
3　褐　色　土(10YR4/6)　粘土～シルト、焼土･炭化物･地山土混入、やや固質。
4　黄褐色土(10YR5/8)　粘土、地山土混入、固質。
5　黄褐色土(10YR5/8)　粘土、焼土･地山土混入、固質。



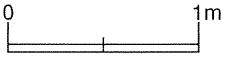


ＳＫ333
1　黄褐色土(10YR5/6)　粘土、地山土混入、固質。
2　暗褐色土(10YR3/4)　シルト、地山土混入、やや軟質。
3　暗褐色土(10YR3/4)　シルト、やや軟質。
4　黒褐色土(10YR2/3)　シルト、軟質。
5　黒褐色土(10YR2/3)　シルト、やや軟質。
6　褐　色　土(10YR4/6)　粘土～シルト、地山土混入、やや軟質。

ＳＫ334
1　褐　色　土(10YR4/4)　シルト、炭化物･地山土混入、やや固質。
2　黄褐色土(10YR5/6)　粘土～シルト、地山土混入、固質。
3　褐　色　土(10YR4/6)　粘土～シルト、炭化物混入、やや固質。



ＳＫ348
1　暗褐色土(10YR3/4)　粘土～シルト、地山土混入、軟質。
2　褐　色　土(10YR4/6)　粘土～シルト、炭化物･地山土混入、やや固質。
3　褐　色　土(10YR4/6)　粘土、地山土混入、固質。
4　褐　色　土(10YR4/6)　粘土～シルト、地山土混入、やや軟質。
5　黄褐色土(10YR5/8)　粘土、地山土混入、やや固質。



第56図　土坑(18) 弥生⑪ＳＫ327･329･333･334･348

Ａ区中央東側のＫＪ39区にあり、地山面で確認した。内部より石鏃３点が出土した。

石鏃はすべて凸基有茎鏃である。Ｓ40は先端が僅かに欠損している。調整は本来丁寧に施されたようであるが、摩滅が著しい。Ｓ41は先端と茎の一部が欠損している。全体に細かく丁寧な調整を施す。Ｓ42は摩滅が著しく、調整は殆ど確認できない。これらの石質は硬質頁岩で、すべて白色を呈する。

ＳＫ348（第56図、図版17-８）

Ａ区東端のＫＢ35・36区にあり、地山面で確認した。平面形は略円形で、規模は長さ1.02m×幅0.96m、深さ0.72mである。壁は、湾曲して直立気味に立ち上がり、底面は北側がやや高い。

３　遺構外出土土器（第52図、巻頭図版５、図版22）

32は、Ａ区中央東側のＫＯ35区から出土した壺形土器である。口縁部の殆どが欠損。体部上位に最大径をもち、口縁部は短く外傾する。部分的に爛れている。器高24.4cm、推定口径15.3cm、最大径22.7cm、底径9.4cmである。全体が無文で、内外面に丁寧なミガキを施す。体部に10cm前後の黒斑が３カ所認められる。底部中央には、穿孔の痕跡が一部残っている。胎土には細砂を含む。焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色である。精製の土器である。

33はＡ区中央西側のＭＥ53区から出土した。深鉢もしくは甕形土器と考えられる。体部上位の1/3を残存し、体部上位に最大径をもつ。推定最大径27.9cm、現存高15.7cmである。全面に、横位回転のＬＲ縄文を施す。調整は、縄文を施す前にハケメを施したらしい痕跡が一部確認される。上位には煤状の炭化物が認められる。内面は粗いナデの後木口によるナデを施す。胎土には細砂を含む。焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色である。粗製の土器である。

34はＡ区中央やや東のＬＣ35区から出土した。深鉢もしくは甕形土器と考えられる。底部と体部下位を残存。底径8.4cm、現存高9.5cmである。内面底部を除き平滑なナデを施す。外面には幅約２mmの沈線によって、縦に長い菱形文様を施す。体部下端の一部に黒斑を認める。胎土には細砂を含む。焼成は良好で、色調は褐色である。精製の土器である。

巻頭図版５の左下の遺物は、Ａ区東端のＫＡ38区から出土した甕形土器である。同区のＳＲ190の付近から出土した。口縁部の一部と、底部を含む体部の約2/3が残存する。器高34.5cm、推定最大径30.8cm、底径10cmである。頸部には幅３mmの平行沈線文を施し、口縁部と体部を区画している。口縁部は口唇部直下に縄文が、その下には無文部を挟んで、縦位のハケメが施される。体部にはハケメの後に、ＬＲの縄文を施す。体部の上半には、煤状炭化物が広範に認められる。内面には、全面的に丁寧なナデを施す。また、底部付近を除く体部下半には、煤状炭化物が厚くこびり付いている。底面には、径1cm程の穿孔部と判断される割れ口がある。胎土には砂粒が認められ、海綿骨針を含む。焼成は良好で、色調は淡い褐色である。粗製の土器である。

図版22の右側中央の遺物は、Ａ区東端のＫＬ39区から出土した壺形土器である。体部上位に最大径をもち、頸がやや長い形態である。底部から頸部付け根まであり、一部を欠損する。現存高23.2cm、最大径22cm、底径７cmである。体部全面に大きめな節のＬＲ縄文を施す。内面の下半には木口によるナデを施し、全体を薄く仕上げている。体部の中央に、対になるような形で５～10cmの黒斑がある。胎土には金色の雲母を顕著に含む。焼成は良好で、淡い色調は茶褐色である。粗製の土器である。

第３節　平安時代の遺構と遺物

１　竪穴住居跡

ＳＩ07（第58図、図版44・49・51）

Ｂ区南東端のＮＦ59・60区にあり、地山面で確認した。遺構に関する正確な内容が不明であるが、幾つかの土坑も存在したとされ、これらが北西側でＳＩ371と切り合っている。新旧関係は不明。また南西側をＳＤ398が切り込んでいる。平面形は正方形で、地山面で確認した。規模は一辺４～５ｍである。

遺物は、須恵器の有台坏（35）、土師器の有台坏（36）・丸底長胴甕（37）・小甕（38・39）などが出土した。35は高台が短くシャープな作りで、底面端部も鋭い角度を成す。底面はヘラ切りで、渦痕が明瞭。36は僅かに開く足高高台で、口縁が外湾する。内黒で、外面底部と高台内側にも炭素の吸着がある。外面底部には、紐状に隆起した渦痕が認められる。37は口縁部が「く」の字状の長胴甕で、ロクロで調整している。38は非ロクロ調整で、底部はやや突出し口縁は摘み出している。外面に粗いケズリ、内面に木口のナデを施す。39は口縁部が「く」の字状を呈し、ロクロで調整している。底面は回転糸切り底のようである。

ＳＩ69（第58・59図、図版32－１、44）

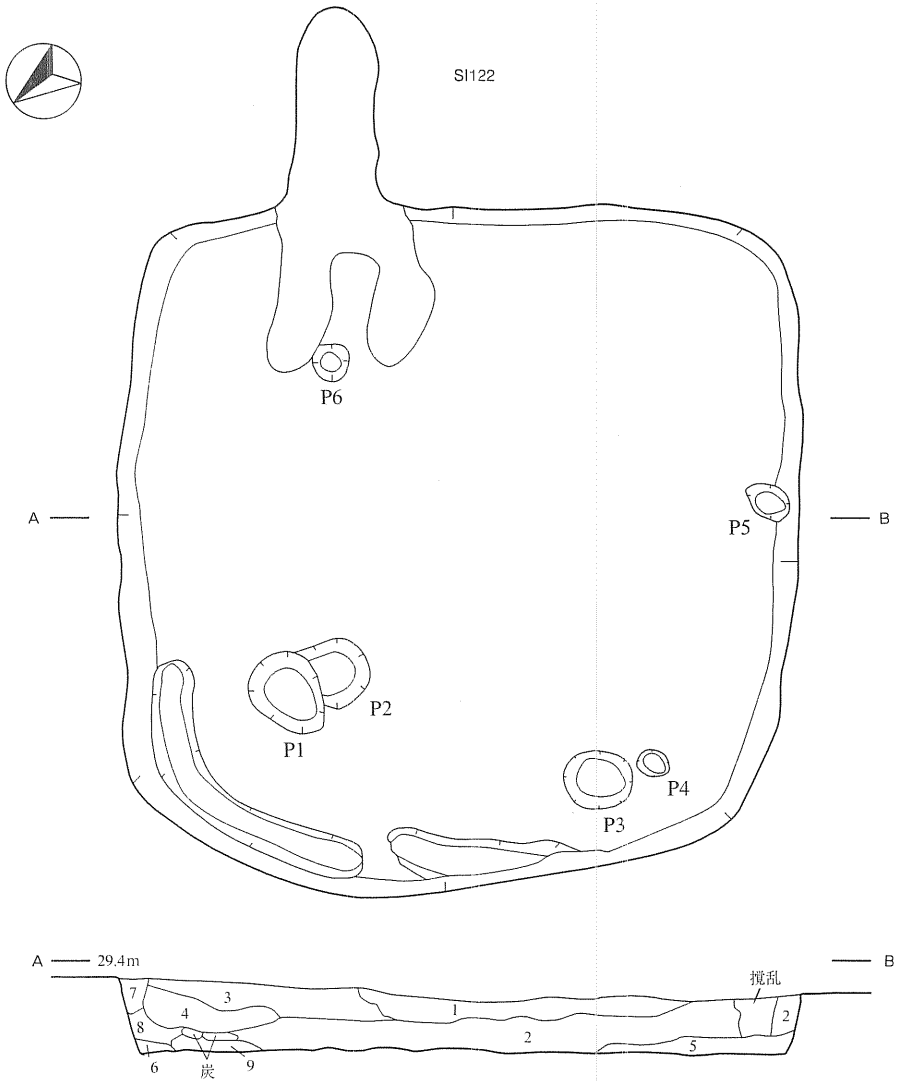
Ａ区中央やや西側のＭＥ52区にあり、地山面で確認した。遺構に関する正確な内容が不明であるが、一辺４ｍ前後の方形を呈し南東辺に竈をもつ。床面には数個のピットが存在する。

遺物は、土師器の坏（40～49）・有台坏（50）・小甕（51～53）・長胴甕（54～56）が出土した。40～47は、底径が比較的小さくやや深身の形態で、口縁部は直線的か僅かに外湾する。底面は43を除いて回転糸切りである。48は他に較べると浅めで、口縁部は強く外湾する。底面は回転糸切り底のようである。49は穿孔部をもつ底部破片で、穿孔部は13㎜×10㎜である。回転糸切りのある底面に、墨書の痕跡を認める。50は深身の形態で、口縁部は直線的である。内黒で底面には回転糸切りの痕跡がある。51～53は口縁部が「く」の字状を呈し、ロクロで調整している。51の底面は、回転糸切りである。54は頸部が「く」の字状を呈し、口縁部は外湾する。胴部は、外面が粗いケズリ内面には木口のナデを施す。口縁部はロクロ調整のようである。胴部成形の粘土紐が明瞭。55は口縁部が「く」の字状で、平底である。外面は、体部上位より口縁部までロクロ調整で、他は主に縦位のヘラケズリを施す。内面も体部上位以上はロクロ調整で、下方ではナデを施す。56は、「く」の字状の頸部から口縁部が垂直に立ち上がる。外面は、体部上位より口縁部までロクロ調整で、他は主にヘラケズリを施す。内面は、体部上位の半分以上がロクロ調整で、下半はナデ底部付近にはハケメが認められる。

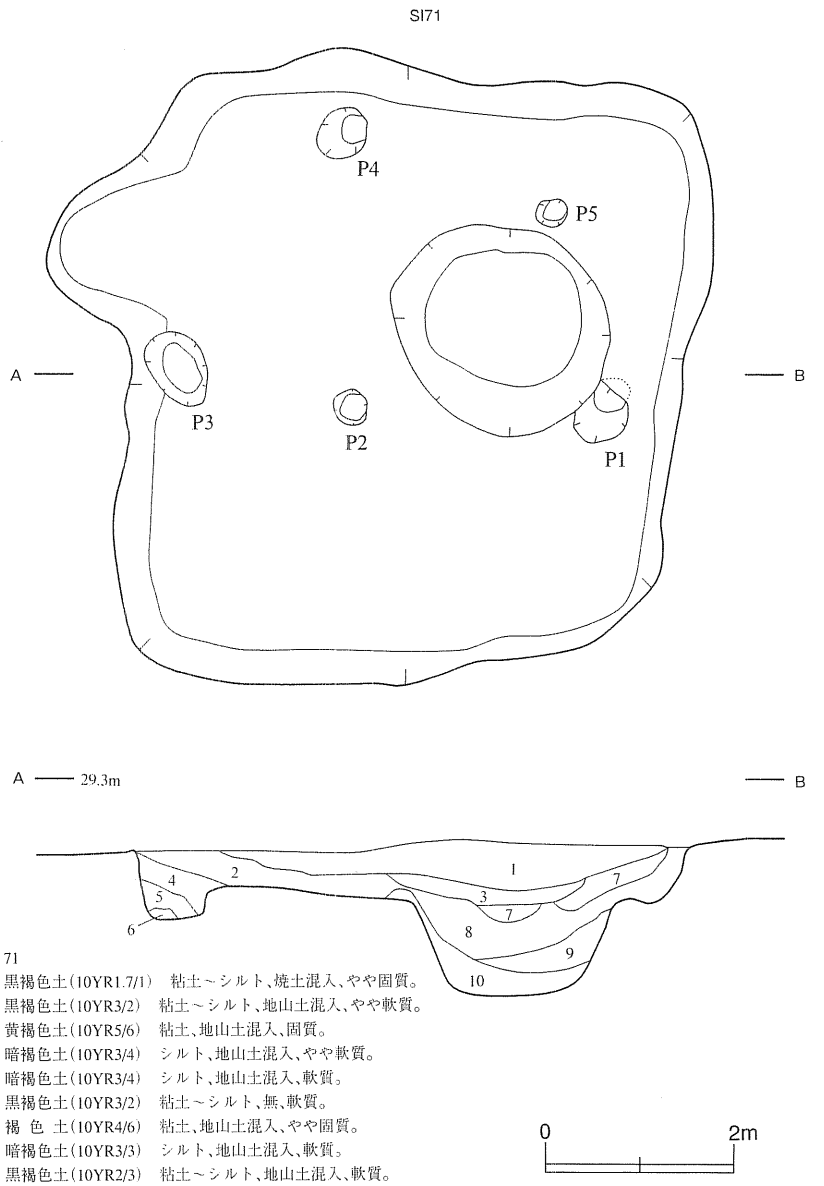
ＳＩ71（第57・60図、図版32－２、49）

Ａ区中央やや西側のＬＴ・ＭＡ50区にあり、地山面で確認した。平面形は隅丸の菱形状を呈し、中央やや東寄りに大きな土坑を伴う。規模は長軸約3.3ｍ×短軸3.1ｍ、床までの深さは0.3ｍである。壁は比較的緩く傾斜し、床面は端から中央へ向かって徐々に低くなる。土坑の規模は、長さ1.2ｍ×幅1.05ｍ、深さ0.5ｍである。竈は北西辺の中央やや北側にあり、壁沿いの幅は1.1ｍと広い。柱穴はＰ1～Ｐ5まで確認され、径0.3～0.4ｍと径0.15～0.2ｍに分けられる。柱穴は南から東側に傾斜している。

遺物は土師器の甕（57）が出土した。57は、口縁部が直線的に緩く外反する。底部は分厚く、全体に粗悪な作りである。調整は不明瞭であるが、外面に雑なヘラケズリを施す。

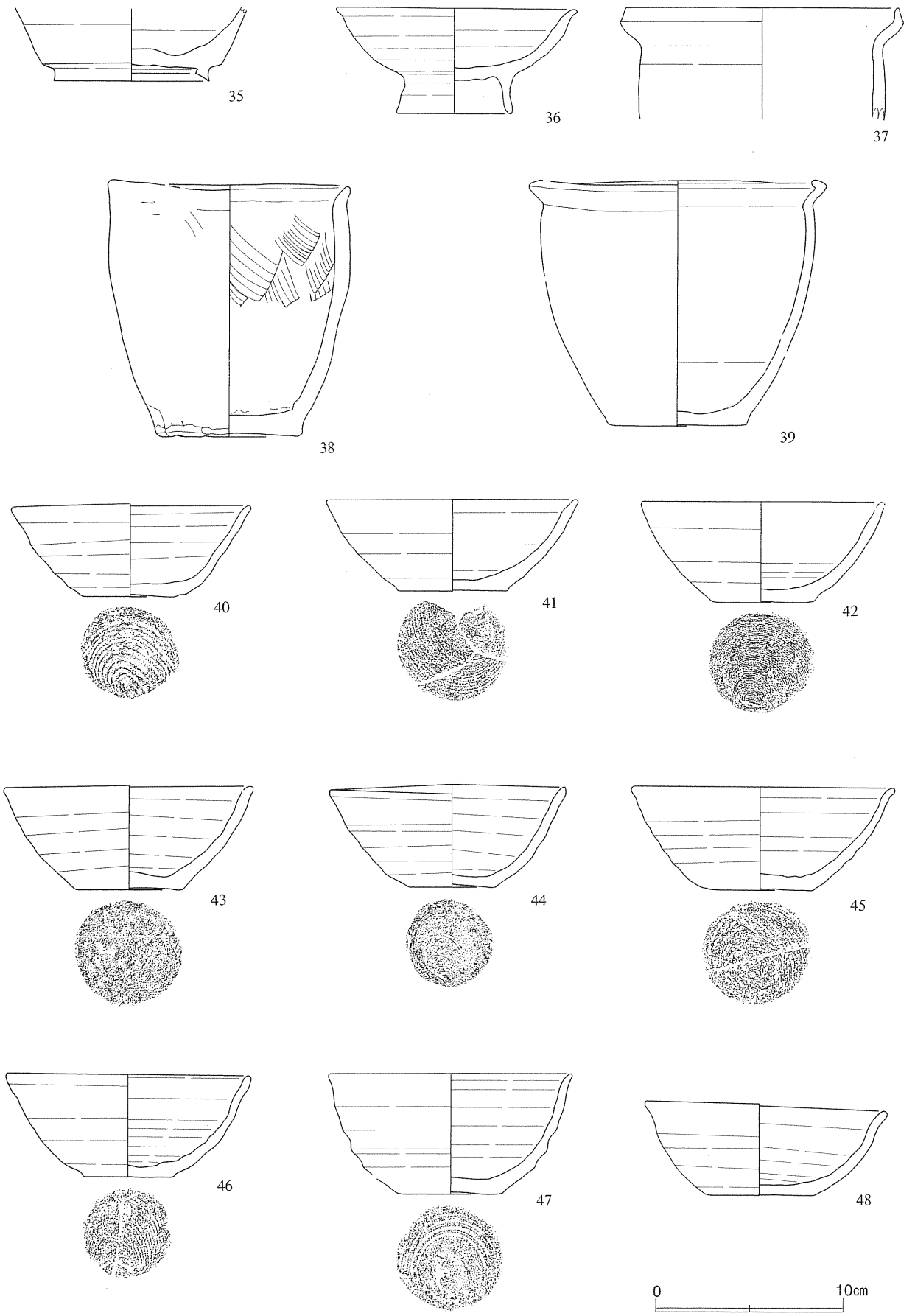


ＳＩ107
1　暗褐色土(10YR3/4)　シルト、炭化物･焼土混入、やや軟質。
2　暗褐色土(10YR3/4)　シルト、炭化物･焼土混入、軟質。
3　褐　色　土(10YR4/4)　シルト、炭化物混入、やや軟質。
4　褐　色　土(10YR4/4)　シルト、炭化物･地山土混入、やや固質。
5　黒褐色土(10YR2/3)　粘土～シルト、焼土･地山土混入、やや固質。
6　褐　色　土(10YR4/4)　粘土～シルト、地山土混入、やや固質。
7　褐　色　土(10YR4/6)　粘土、地山土混入、固質。
8　暗褐色土(10YR3/4)　シルト、軟質。
9　赤褐色土(10YR4/8)　粘土～シルト、焼土混入、固質。

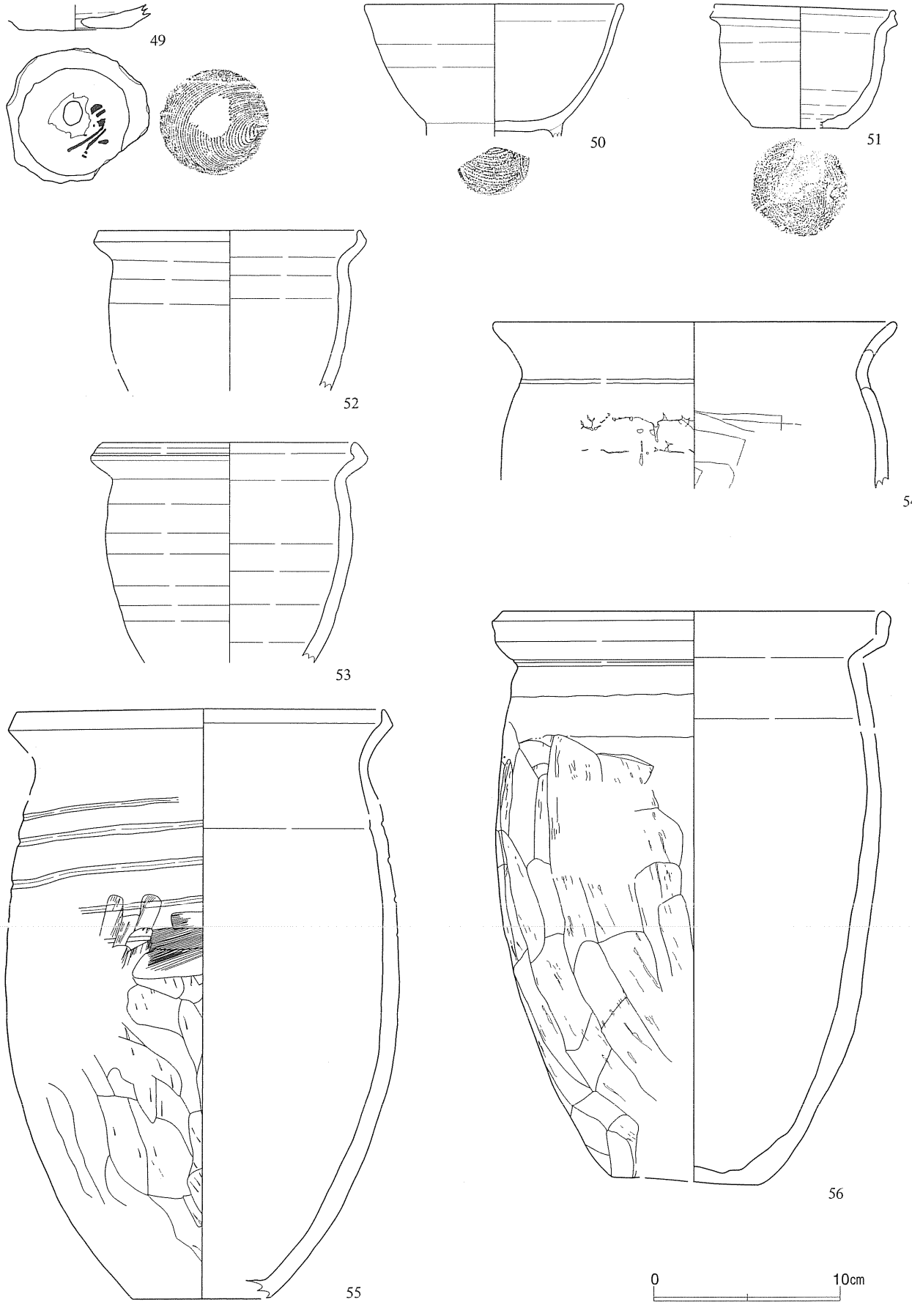


ＳＩ71
1　黒褐色土(10YR1.7/1)　粘土～シルト、焼土混入、やや固質。
2　黒褐色土(10YR3/2)　粘土～シルト、地山土混入、やや軟質。
3　黄褐色土(10YR5/6)　粘土、地山土混入、固質。
4　暗褐色土(10YR3/4)　シルト、地山土混入、やや軟質。
5　暗褐色土(10YR3/4)　シルト、地山土混入、軟質。
6　黒褐色土(10YR3/2)　粘土～シルト、無、軟質。
7　褐　色　土(10YR4/6)　粘土、地山土混入、やや固質。
8　暗褐色土(10YR3/3)　シルト、地山土混入、軟質。
9　黒褐色土(10YR2/3)　粘土～シルト、地山土混入、軟質。
10　褐　色　土(10YR4/6)　粘土、地山土混入、やや軟質。

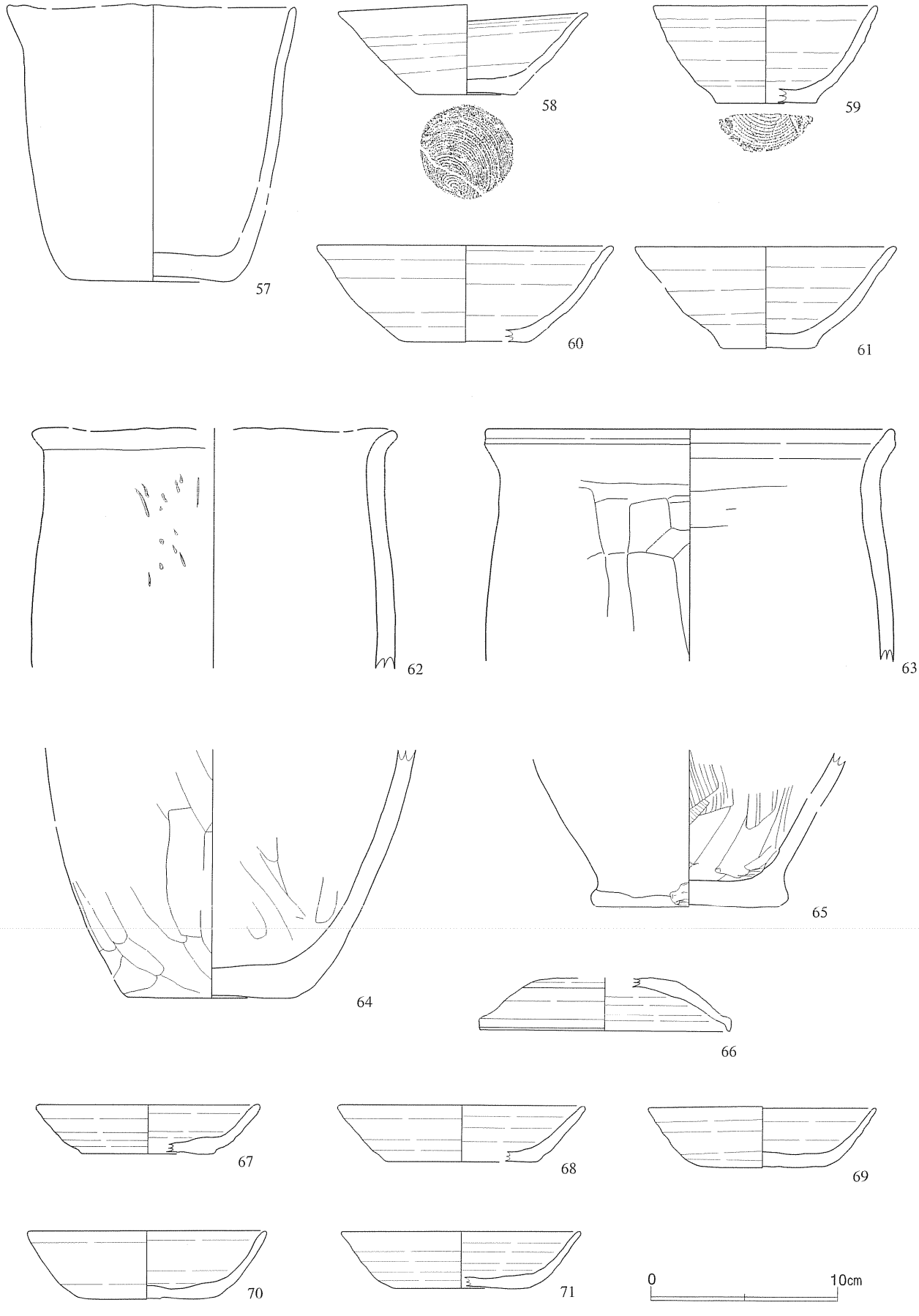
第57図　竪穴住居跡（１）古代①ＳＩ71･122



第58図　遺構内出土土器(19)　古代①35～48



第59図　遺構内出土土器(20)　古代②49～56



第60図　遺構内出土土器(21) 古代③ＳＩ57～71

ＳＩ107（第60・61図、図版32－３）

Ａ区中央やや西側のＬＴ44・45区にあり、地山面で確認した。西側隅がＳＤ115に切られる。平面形は不整な長方形で、規模は長さ4.3m×幅3.6m、深さ0.3mである。壁は、北西側を除きやや緩い傾斜で立ち上がる。床面には凹凸がある。南東壁には２つの竈が付くが、遺存状況は悪い。北側の竈西側はその前庭部であるが、他の落ち込みが本住居跡に伴うかは不明である。北西壁際には、いくつかの土坑が重複するが、これらも本住居跡に伴うかは不明。

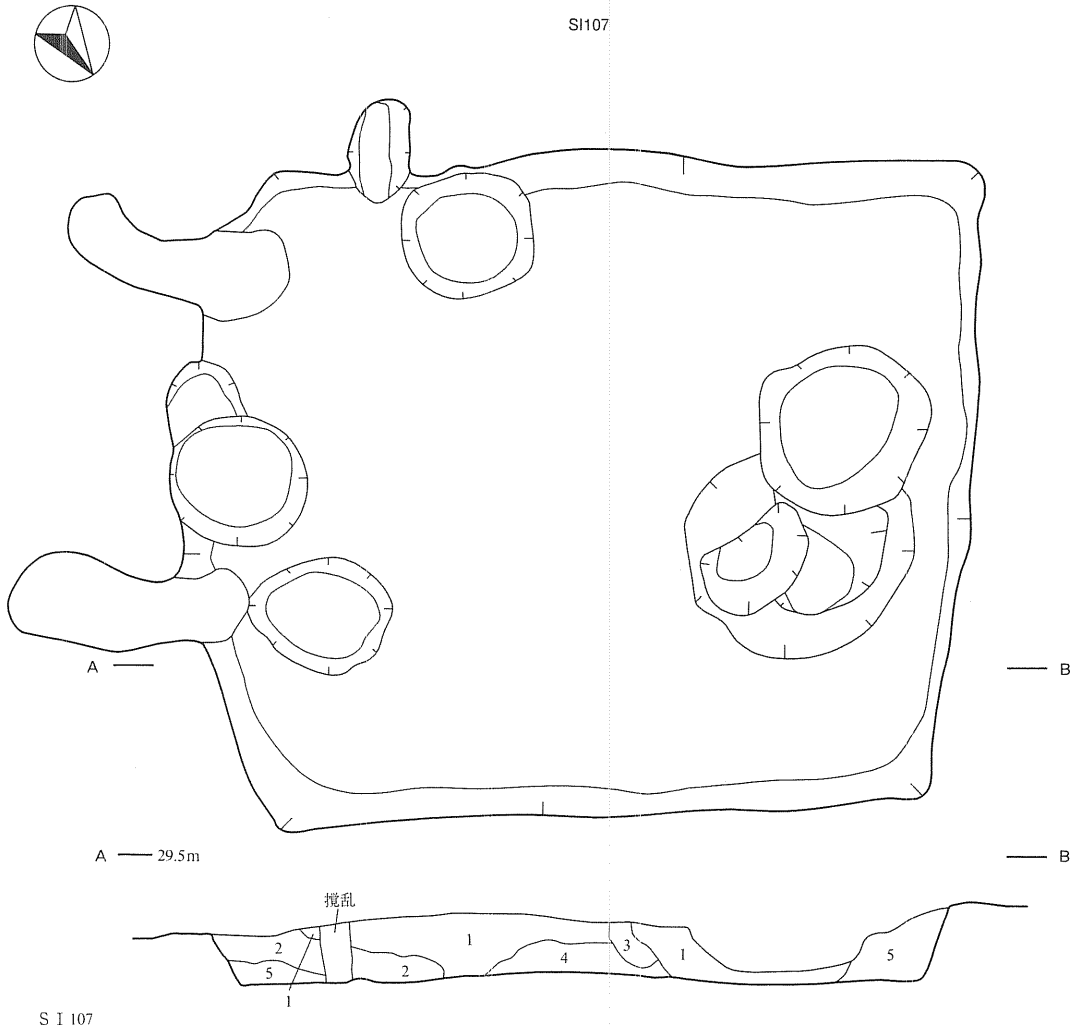
遺物は須恵器の壺・甕、土師器の坏（58～61）・長胴甕（62～65）・小甕などが出土した。58は、底部より口縁部まで直線的に外傾する９個の破片が接合しているが、うち２点だけが褐色で他は灰白色である。二次的な火熱によって、還元状態に変質したものである。59～60は、体部でやや膨らんで口縁部に至る。60の体部内面には、粘土紐の接合痕が認められる。底部は、静止糸切りの61を除いた他は回転糸切りである。62・63は、口縁から胴部上位の破片である。62は口縁部が短く外湾し、体部外面に粗いヘラケズリを施す。非ロクロのようである。63は口縁部が短く直立し、体部外面にヘラケズリを施す。口縁部はロクロ調整である。64・65は、底部から体部下位の破片である。外面はヘラケズリ内面はナデを施す。62と同一個体のようである。底面は細かな砂を敷いた砂底と考えられる。65は底部が突出している。外面は縦位のヘラケズリで、内面には木口によるハケメが明瞭である。

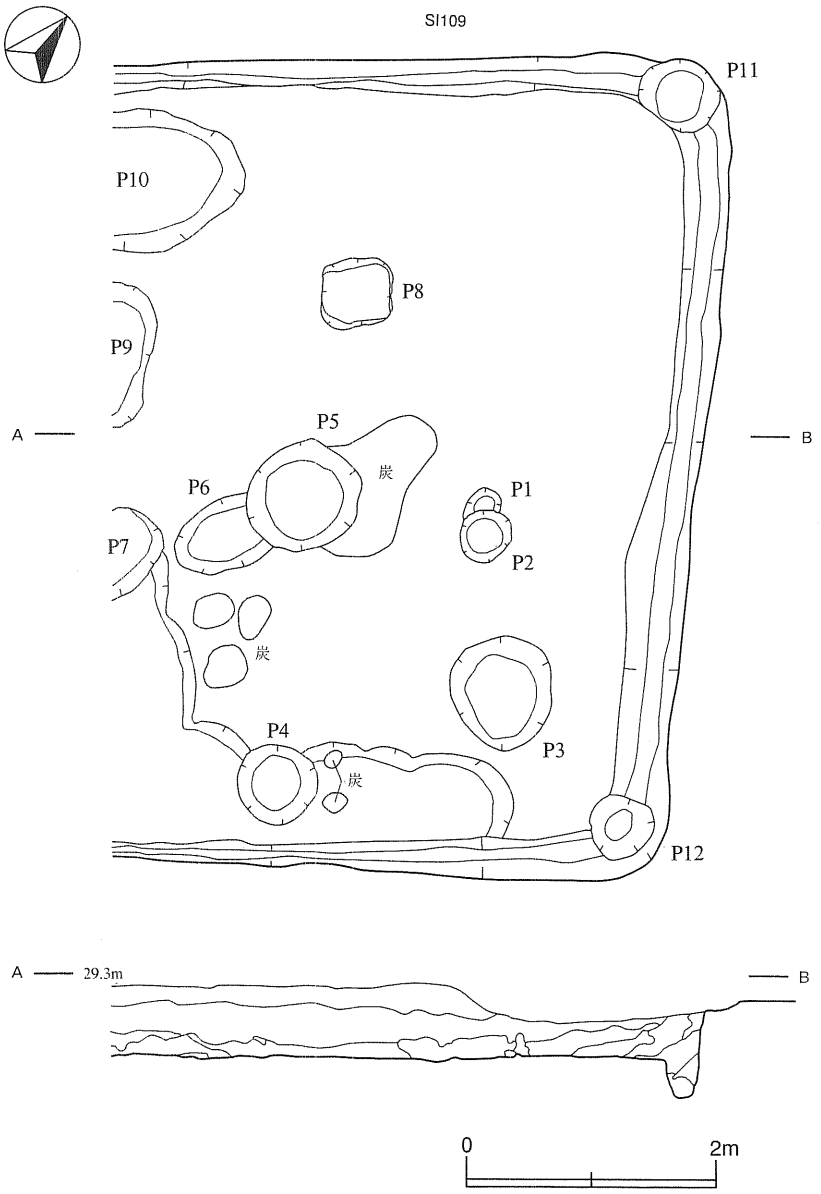
ＳＩ109（第60～62図、図版33－１、44）

Ａ区中央のＬＮ38・39区にあり、地山面で確認した。南西側は調査区外で、平面形は方形状を呈する。規模は、長軸約6.5m×現存長5m、深さ0.6mである。南東壁際から南側にかけての床面は、約0.1mの段があり低くなっている。各々の床面は僅かに凹凸がある。壁は強い傾斜を示し、これに沿って周溝がある。周溝は最大幅0.4m～最小幅0.1mで、深さは0.3mである。中央には長軸約1.3m×短軸1mの焼けた面があり、この南側にも近接して３カ所の焼けた面が確認された。ピットはＰ1～Ｐ12まで見つかったが、主な柱穴はＰ３・Ｐ８・Ｐ11・Ｐ12と考えられる。このうち、Ｐ８は径0.55m、深さ0.5mの方形で、Ｐ３は長さ0.65m×幅0.55m、深さ0.4mである。Ｐ１・Ｐ２・Ｐ４は本遺構に伴うと判断しているが、深さは0.1～0.2mと浅い。

遺物は、須恵器の坏蓋（66）・坏（67～73）・有台坏（75～81）・甕（87）、土師器の坏（74）・小甕（82・83）・甕（84～86）が出土した。66は天井部が平坦で、端部は短く直立する。67～71は身が浅く、比較的大きな底径から口縁部まで直線的に外傾する。71は殆どが褐色を呈しているが、生焼けと考えられる。底面はすべてヘラ切りである。72は底径が小さく、口縁部はやや外湾する。底面は回転糸切り。73は箱形を呈した底部破片で、内外面に大きく墨と思われる痕跡がある。底面はヘラ切り。75～77は小振りで、高台は短くやや外傾する。76・77の底部はヘラ切り。78は大振りで79は細身で深い形態である。80は腰が強く張る稜椀の形態で、底部外面には墨書が認められる。81は底部外面を上にした転用硯で、そこには墨が全体に付着している。墨が割れ口にも認められるので、底部を円形に整えてから使用したと解釈される。87は、内外面に平行沈線を基調にしたタタキを施す。

74は底径が小さく、口縁部は外湾する。体部外面に墨書がある。82は内外がロクロ調整で、外面の体部下端にヘラケズリを施す。底面は回転糸切りで83～85は底部が突出し、外面には粗いケズリを施す。83・84の内面には、木口のハケメが明瞭。底面は83が砂底で、84・85には簾状の痕跡が認められる。



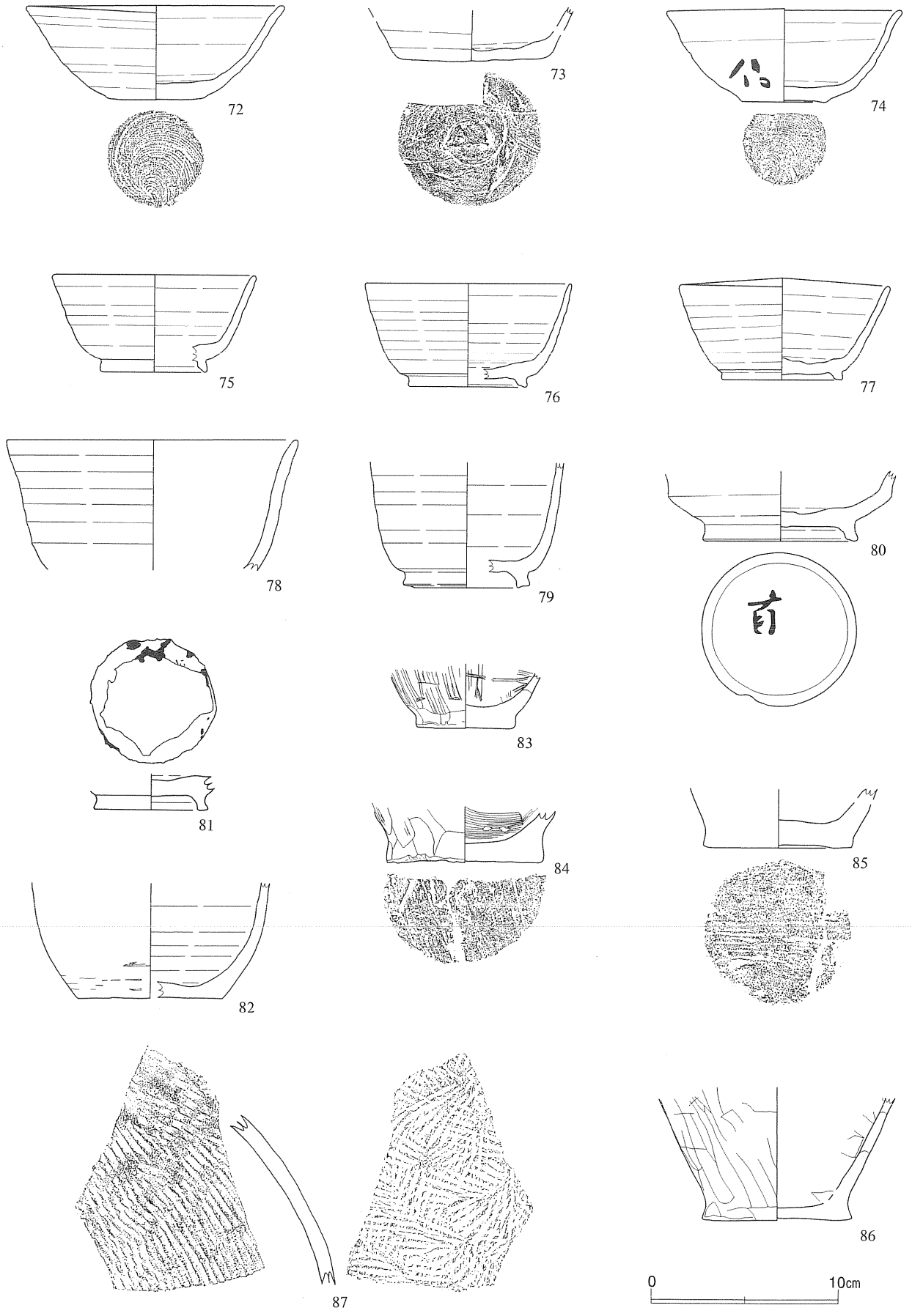


SＩ107

1　暗褐色土(10YR3/3)　シルト、炭化物・地山土混入、軟質。
2　赤褐色土(10YR4/6)　粘土～シルト、炭化物・焼土混入、軟質。
3　暗褐色土(10YR3/4)　シルト、炭化物・焼土混入、やや軟質。
4　黒褐色土(10YR2/3)　シルト、地山土混入、やや軟質。
5　褐　色　土(10YR4/6)　粘土、地山土混入、やや固質。
6　暗褐色土(10YR3/3)　粘土～シルト、地山土混入、やや固質。
7　褐　色　土(10YR4/6)　粘土～シルト、地山土混入、やや固質。
8　黄褐色土(10YR5/6)　粘土、地山土混入、軟質。
9　黒褐色土(10YR2/3)　粘土～シルト、やや固質。

0　1m　　0　2m

第61図　竪穴住居跡（２）古代②ＳＩ107・109



第62図　遺構内出土土器(22)　古代④72～87

ＳＩ122（第57・63・64図、図版33－２、49、50）

Ａ区中央やや西側のＭＢ48・49区にあり、地山面で確認した。平面形は不整の隅丸正方形で、北西側の壁は大きく張り出している。規模は約3.5m×約3.5m、床面までの深さは0.4mである。床面はほぼ平坦で、壁は垂直に立ち上がる。南東側の壁には中央北側よりに竈があり、北西側壁沿いには幅約0.2mの周溝が途切れながら取り付く。竈は長さ約1.9m×幅約0.9mである。主なピットは３つある（Ｐ1～Ｐ3）。

遺物は、土師器の皿（88）・坏（89・90）・小甕（91・92）・長胴甕（93～99）が出土した。88は、突出した底部より口縁部まで連続して外反する。89・90は、体部が膨らみ口縁部が僅かに外反する。底面は回転糸切りである。91・92は底面が僅かに突出しており、底面は回転糸切りである。胴部は共に粗く爛れるが、ロクロ調整のようである。91の内面には煤の付着が見られる。93・94は口縁部が「く」の字状を呈し、ロクロで調整している。96は頸部が緩く外反し、口縁部は直線的に外傾する。外面胴部の上半以上はロクロ調整で、下半には縦位のヘラケズリを施す。97・98は頸部が緩い「く」の字状を呈し、口唇直下で短く直立する。外面胴部の上半以上はロクロ調整で、下半は縦位のヘラケズリである。内面には木口のナデを施す。99は胴部下半に縦位のヘラケズリを、その下端には横位のヘラケズリを施す。底面はやや上げ底気味で、周縁を削除した可能性がある。端には、直線的で途切れた縄目の痕跡が１条認められる。

ＳＩ125（第64・65図、図版33－３）

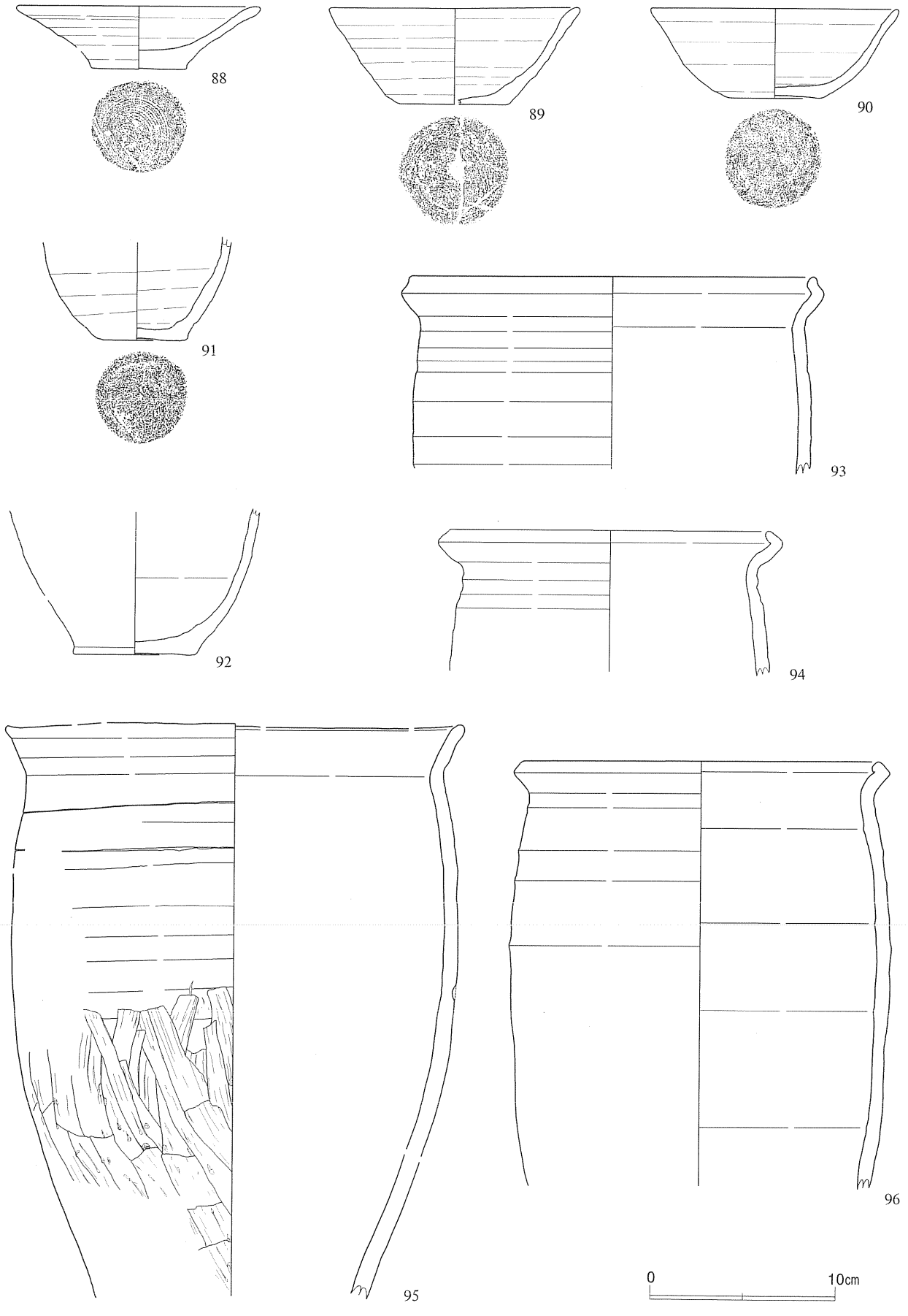
Ａ区中央やや西側のＭＢ45・46区にあり、地山面で確認した。データ不足のため、図はあまり正確でない。平面形は隅丸方形状を呈し、西側は新しい遺構に切られ立ち上がりは不明である。規模は、一辺が約2.9m、深さは0.2mである。南側壁はやや強い傾斜を示し、床面は北側が緩く立ち上がる。東壁の中央やや南寄りに竈が取り付く。

遺物は土師器の小甕（100）が出土した。胴部はやや膨らみ、底部周縁の端は鋭く突出する。胴部の外面は縦位のヘラケズリで、内面はナデを施す。特に底部内面には、指頭によるナデが明瞭である。

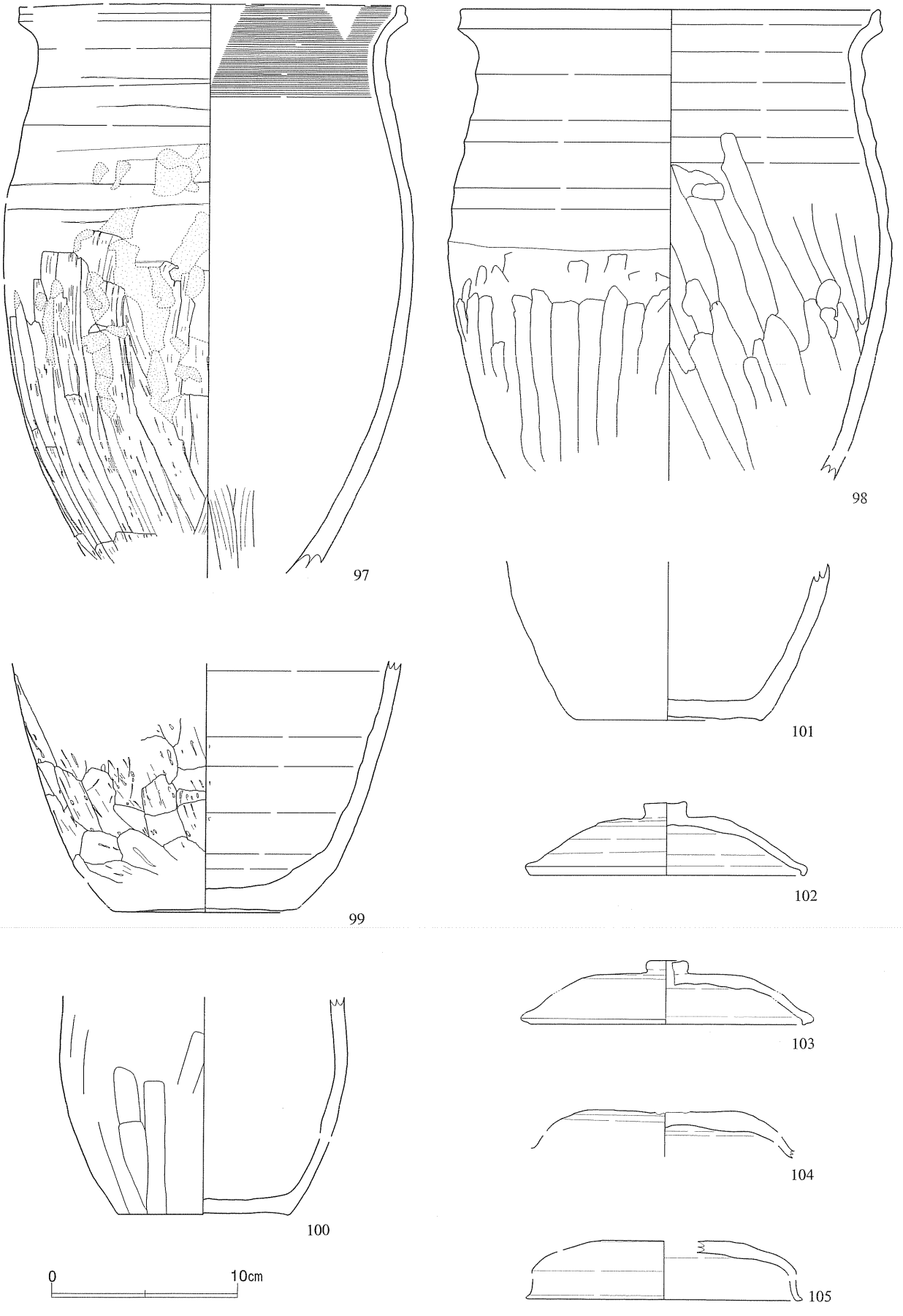
ＳＩ363（第64・66～70図、図版44～47・51）

Ｂ区南東のＮＪ59・60区にあり、地山面で確認した。調査時点で竪穴住居跡と認識されたため、本項に含めたが、種類の帰属は不明瞭である。平面では、いくつかの土坑状の掘り込みが集中しているように観察され、結果として不整の形状を呈している。東壁断面では、大きめの土坑が南側から少なくとも３回、北側へ掘り進めていることが分かるが、別にこの直下に安定した広い床面がある。大きなまとまり部分の規模は、長さ約6.3m×幅約4.2m、深さ0.7mである。

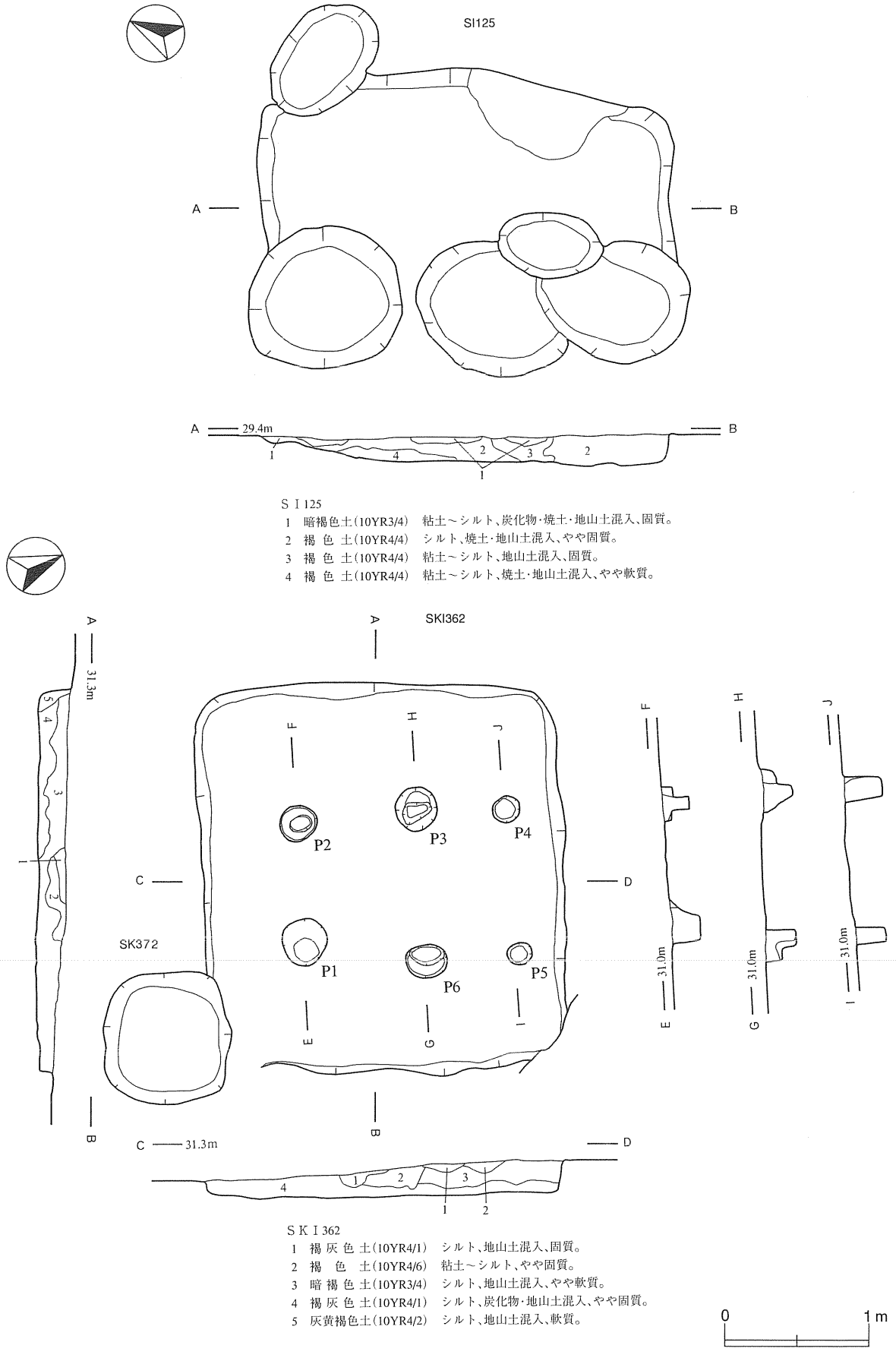
遺物は、須恵器の坏蓋（102～104）・壺蓋（105）・有台皿（106～108）・坏（109・110・112～123・127）・有台坏（128～138）・長頸瓶（139・141・142）・甕（143・144）・大甕（140・145・146）、土師器の坏（111）・椀（124～126）などが出土した。102～104は天井が比較的高く平坦で、102・103の端部は短く内傾する。104の摘み部には、螺旋状の沈線が認められる。105の天井平坦部は狭く、口縁部は垂直的に降りて外湾する。107は高台が外傾し、口縁部は外湾するが、106も同一形態であろう。108は高台が直立し底部が厚い。107・108は静止糸切りかもしれない。109・110・112～116・118は、底部から口縁部まで内湾もしくは直線的に立ち上がる。そのうち、113と118はやや深い形態である。109・110・112・113の底部は回転ヘラ切りで、他は回転糸切りである。113・116・118は墨書土器である。117・119～123・127は、底部から体部にかけて湾曲もしくは直線的に立ち上がり、口縁部は僅かに外湾する。128・129は高台が高く腰部が張り高台は直立もしくはやや外傾する。共に回転糸切りである。130～138は、短い高台部からすぐに立ち上がり、口縁部が直線的



第63図　遺構内出土土器(23)　古代⑤88～96



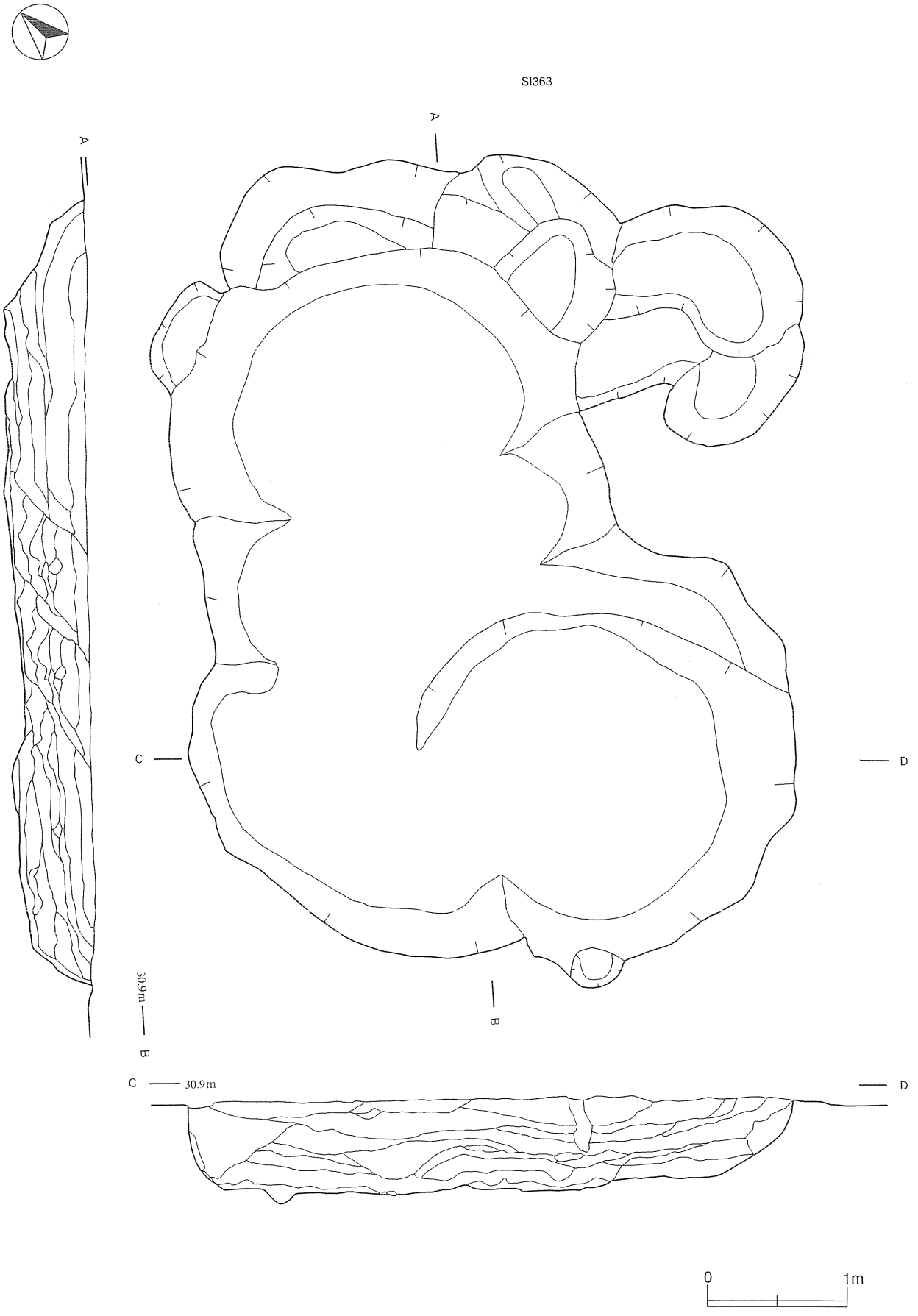
第64図　遺構内出土土器(24)　古代⑥97～105



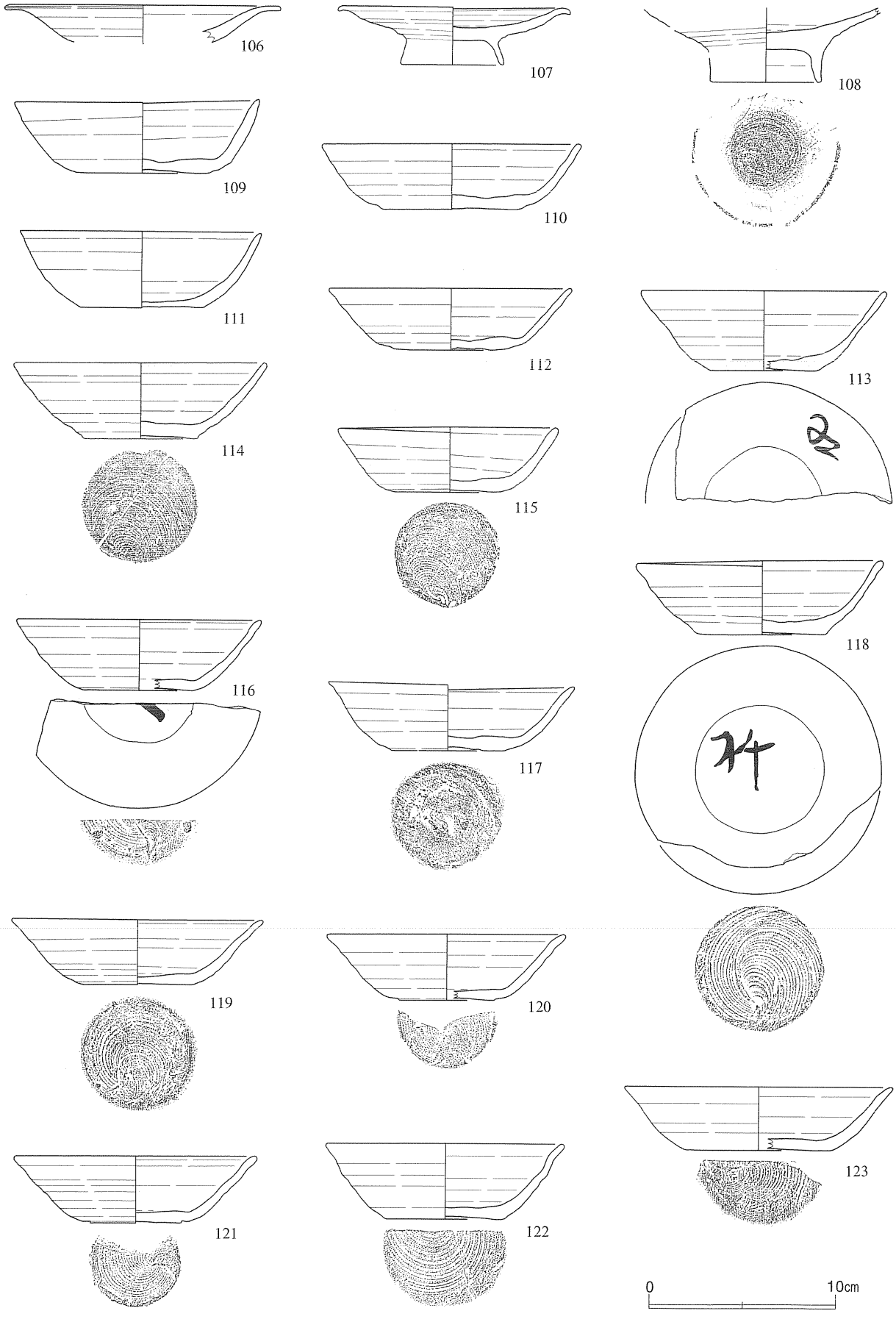
ＳＩ125
1　暗褐色土(10YR3/4)　粘土～シルト、炭化物・焼土・地山土混入、固質。
2　褐　色　土(10YR4/4)　シルト、焼土・地山土混入、やや固質。
3　褐　色　土(10YR4/4)　粘土～シルト、地山土混入、固質。
4　褐　色　土(10YR4/4)　粘土～シルト、焼土・地山土混入、やや軟質。

ＳＫＩ362
1　褐灰色土(10YR4/1)　シルト、地山土混入、固質。
2　褐　色　土(10YR4/6)　粘土～シルト、やや固質。
3　暗褐色土(10YR3/4)　シルト、地山土混入、やや軟質。
4　褐灰色土(10YR4/1)　シルト、炭化物・地山土混入、やや固質。
5　灰黄褐色土(10YR4/2)　シルト、地山土混入、軟質。

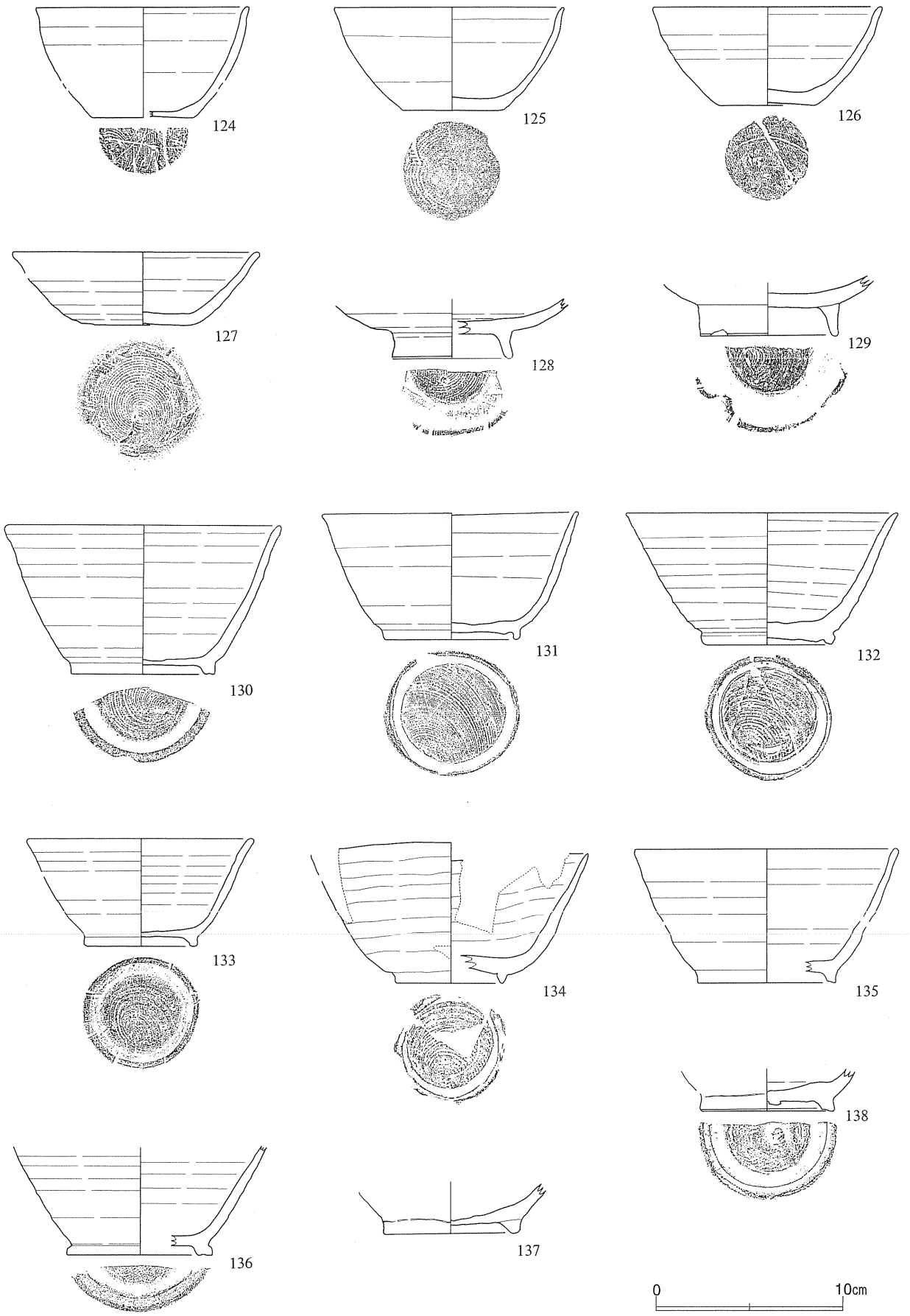
第65図　竪穴住居跡（３）古代③ＳＩ125、竪穴状遺構（１）古代①ＳＫＩ362



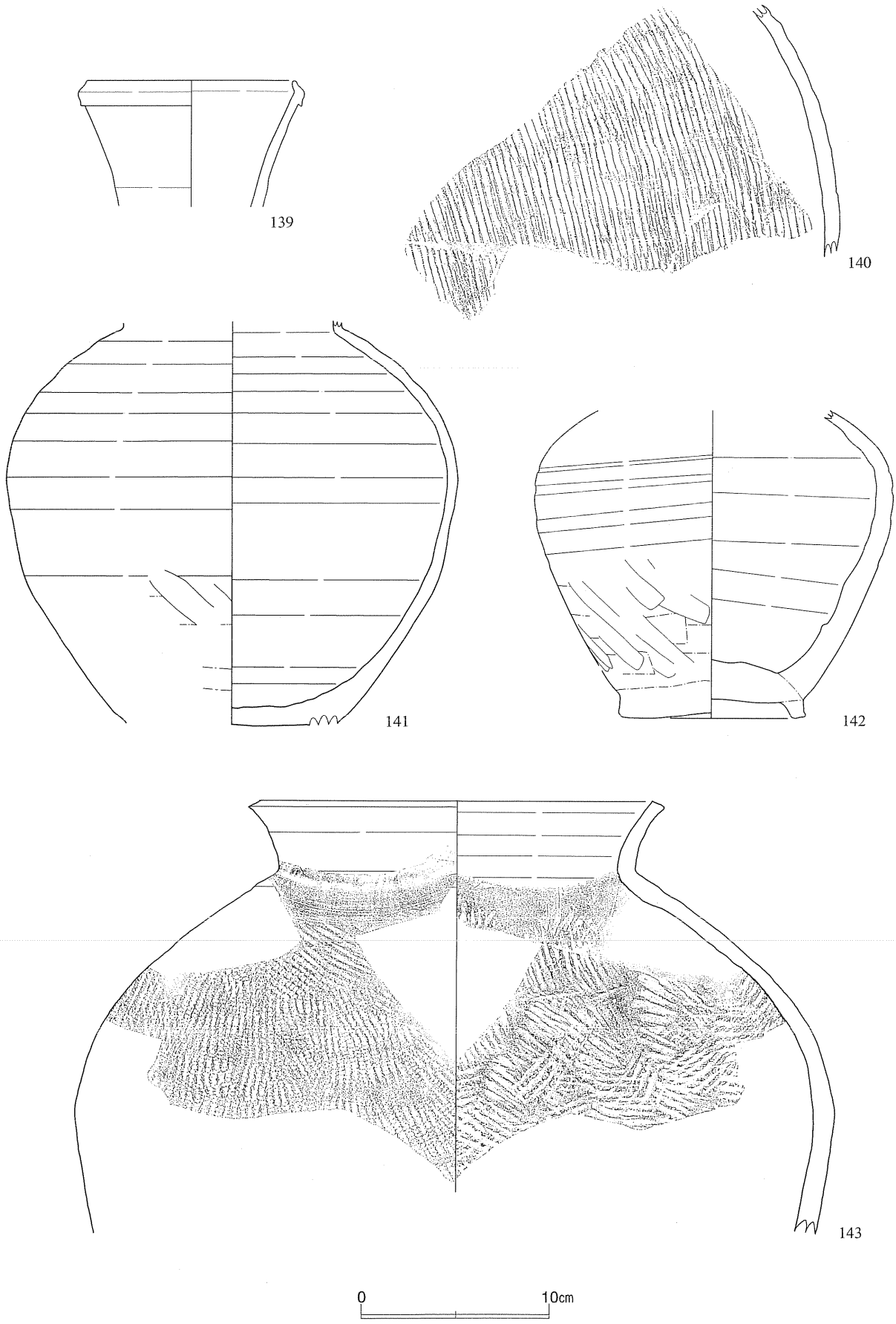
第66図　竪穴住居跡（４）古代④ＳＩ363



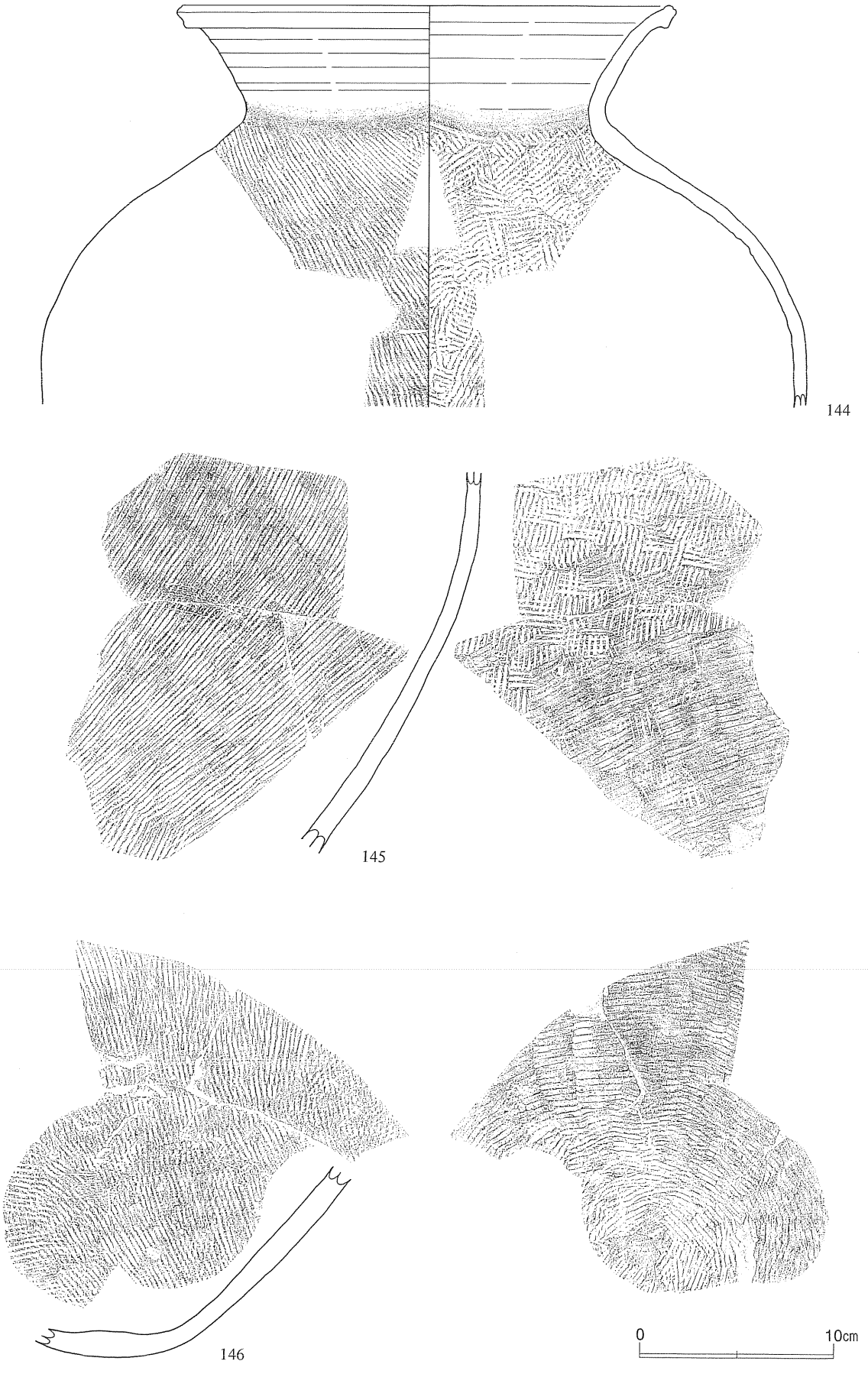
第67図　遺構内出土土器(25)　古代⑦106～123



第68図　遺構内出土土器(26)　古代⑧124～138



第69図　遺構内出土土器(27)　古代⑨139～143



第70図　遺構内出土土器(28)　古代⑩144～146

で僅かに外反する深身の形態である。底部は135が不明で、137・138が回転ヘラ切りの他は回転糸切りである。139は口唇直下の外面に稜があり、口唇部は短く内傾する。141・142は共に、体部下半にヘラケズリを施す。142の内面には焼き膨れが見られる。143の口縁部は外傾し、口唇部は平坦でやや外傾する。144・146の内外面には平行タタキを施す。145・146は同一個体である。口縁部は大きく外反し口唇部直下に強い稜をもつ。底部は丸く、体部は球形を成す。口縁部以外の内外面に、平行なタタキを施す。

ＳＩ364（第71・72図、図版34－１）

Ｂ区南東のＮＧ57・58区にあり、地山面で確認した。調査時点で竪穴住居跡と認識したが、種類の帰属は不明瞭である。ＳＤ399に切られ、平面では２つの落ち込みが重複するように観察でき、結果として不整の形状を呈している。南側にピットが集中している。東側の落ち込みと見られる部分は、長さ4.2m×幅2.9m、深さ0.6mである。

遺物は、須恵器の有台皿（147～149）・坏（150～153）・有台坏（154・155）、土師器の坏（156・157）などがある。有台皿は底部が厚く、高台は三角形を呈し短く直立する。147は底部から短く外湾する。147～149はすべて回転糸切りで、渦の痕跡は細い。151には墨書が見られ、151～153は回転糸切りである。154・155の高台は短い。155は回転糸切りで、この後篦で小さな丸を描く。156・157は、底部より内湾もしくは内湾気味に立ち上がる。底部は回転糸切りである。

ＳＩ365（第64・72・73図、図版34－２、46、50、51）

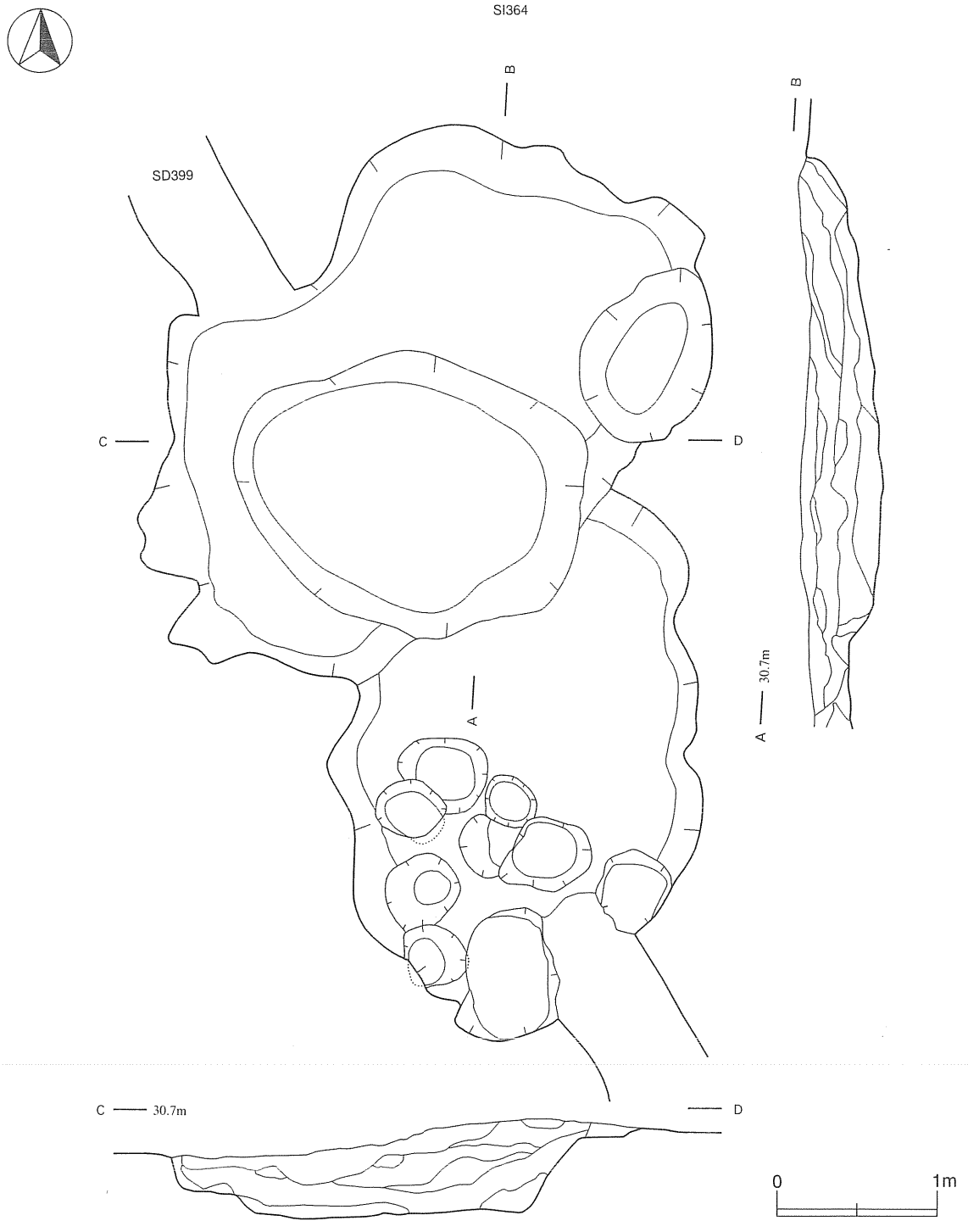
Ａ区東端のＮＢ68区にあり、地山面で確認した。平面形は隅のやや丸い正方形状で、竈のある南側が大きく歪んでいる。北西隅には大きな土坑を伴う。規模は長さ約2.35m×幅2.2m、床面までの深さは0.25mである。壁は比較的緩く立ち上がり、床面は端から中央部へ向かって徐々に低くなる。土坑は二段掘りで、その規模は長軸1.5m×幅1.3mである。竈は南辺の中央やや西寄りにあり、前庭部から煙出までの規模は、長さ1.85m×幅0.55mである。Ｐ１～Ｐ２の柱穴は、径0.2m内外の大きさである。

遺物は、須恵器の坏（158）・甕（160）・長頸瓶（161）、土師器の坏（159）・甕（101）がある。158は底部より内湾して立ち上がる。底部には回転糸切りを施す。159は深身の形態で、やはり内湾して立ち上がる。底部は回転糸切り。160は体部の内外面に、平行なタタキを施す。161は肩が丸く張り口唇部は短く直立する。頸部の成形は三段構成で、体部下半には横位のヘラケズリを施す。

ＳＩ369（第73・74図、図版34－３、46）

Ａ区南東端のＮＨ59区にあり、地山面で確認した。平面形は隅のやや丸い不整の長方形で、西側をＳＤ399に切られる。床面の中央に段があり、東側の低い面と西側の高い面に分かれる。規模は、長さ3.4m×幅3.25m、深さは低い面で0.35mである。壁は比較的緩い傾斜で立ち上がる。床面の段差は0.1mで、全体に僅かな凹凸がある。南東側壁の中央南側には、長さ1.4m×幅0.5mの竈がある。柱穴はＰ１だけが確認できた。３つの落ち込みは、本遺構には伴わない。

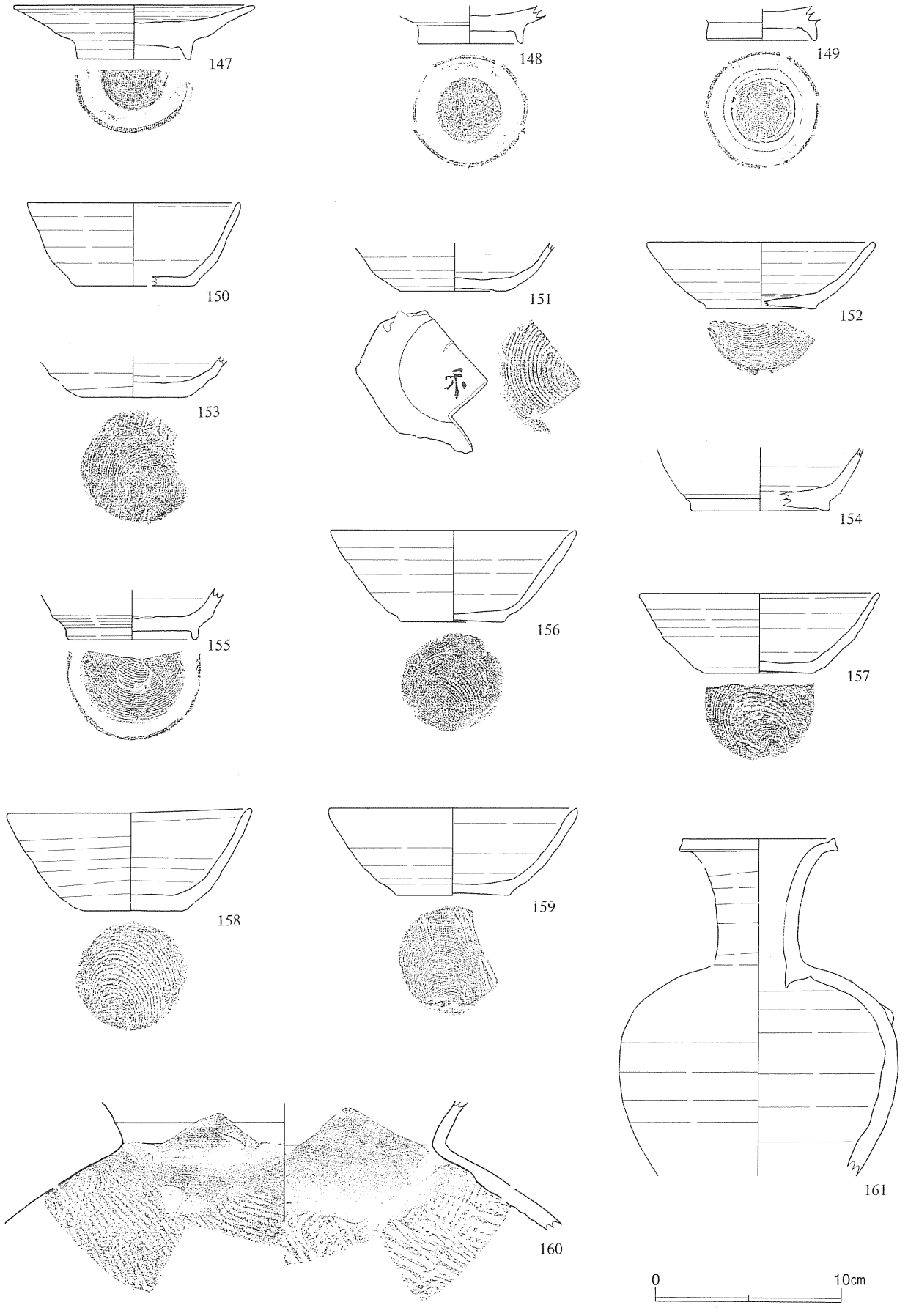
遺物は、土師器の坏（162・163）・小甕（164～168）・甕（169・170）がある。162・163は深身の形態で、底部は回転糸切りである。165は口縁部が緩く外湾し、166は外傾する。どちらも、成形時の粘土紐が明瞭であるが調整は不明瞭。164・168は回転糸切りで、前者は胴部に縦位のヘラケズリを、後者はロクロ調整を施す。167は胴部下端に横位のヘラケズリがあり、底部は篦起こしの後ナデを施したと考えられる。169は口縁部が緩く外湾する。成形時の粘土紐が明瞭で、胴部はヘラケズリを施す。内面には横位のナデを施す。170は頸部が「く」の字状を呈し、ロクロ調整である。



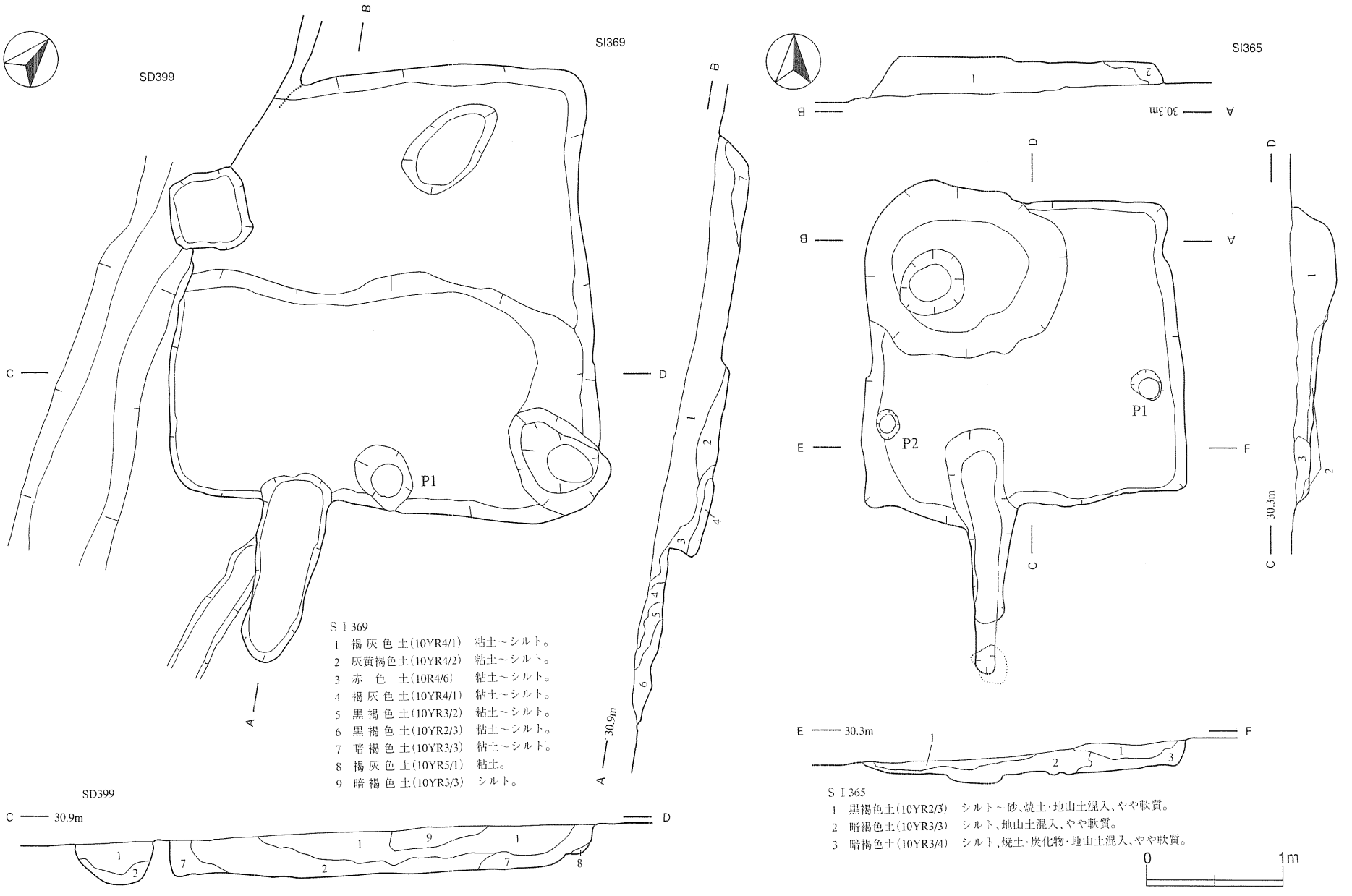
第71図　竪穴住居跡（５） 古代⑤ＳＩ364

ＳＩ370（第74～77図、図版35-１・２、46、47）

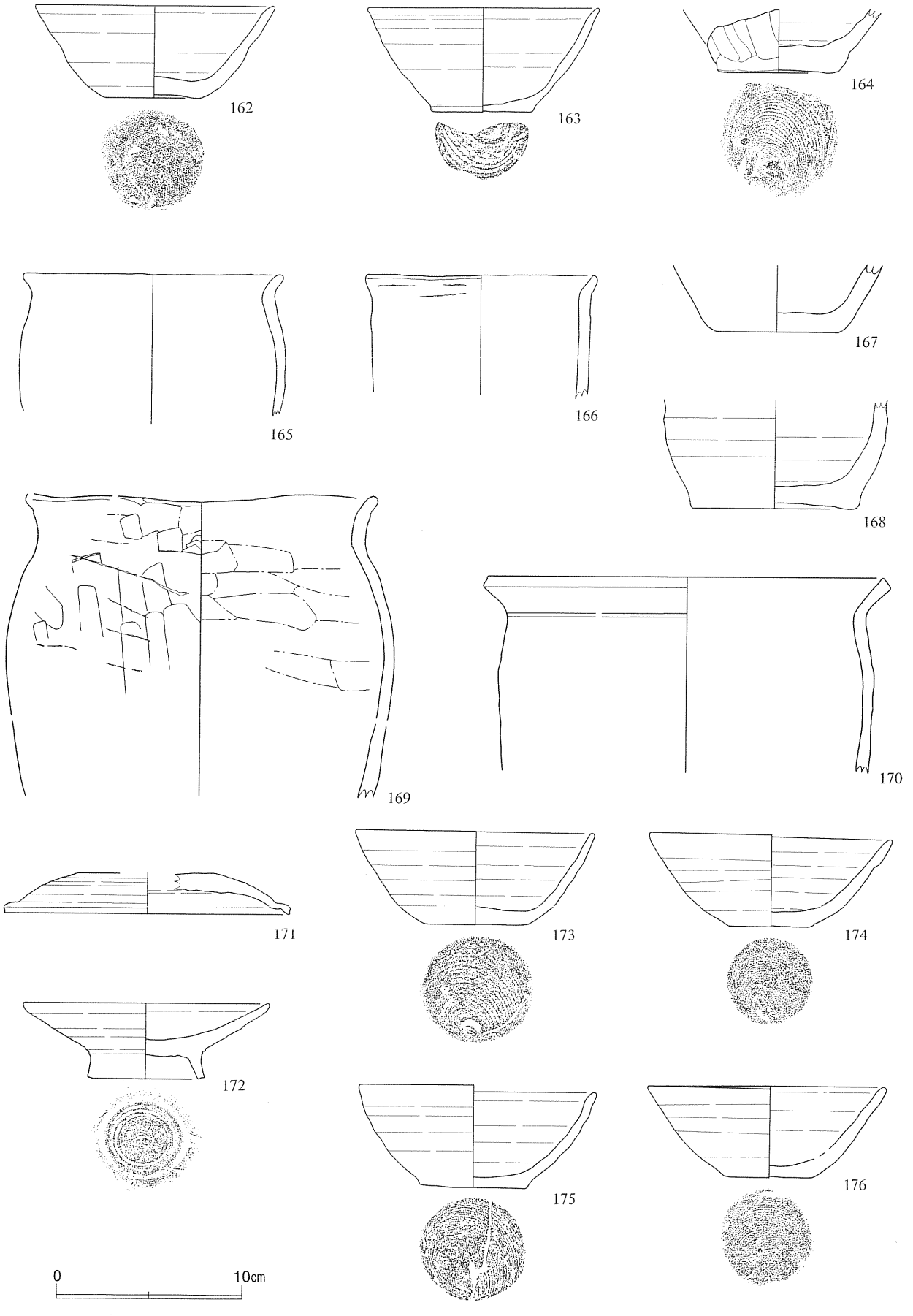
Ａ区南東端のＮＩ58･59区にあり、地山面で確認した。本遺構には竈がないものの中央部やや東側に床面の焼けた部分があることから、竪穴住居跡にした。平面形は隅丸の正方形状で、規模は長さ3.2m×幅3.1m、深さ0.4mである。壁は強い傾斜を示す南辺を除けば、やや緩い傾斜の立ち上がりである。床面には弱い凹凸があり、北側に向かって徐々に低くなる。焼け面は、径0.2mの広がりで３カ所集中して確認された。柱穴は、中央部付近にＰ１～Ｐ４が確認された他に、北側隅には径0.4mのＰ５が見つかった。



第72図　遺構内出土土器(29)　古代⑪147～161



第73図　竪穴住居跡（６）古代⑥ＳＩ365・369



第74図　遺構内出土土器(30)　古代⑫162～176

前者には方形と円形があり、径0.2～0.3mの大きさがある。

遺物は、須恵器の坏蓋(171)・有台皿(172)・瓶(202)、土師器の坏(173～187)・有台椀(191・192)・小甕(188～190・193・194)・甕(195～199)・手捏ね土器(200)・支脚(201)などが出土した。171は低い天井で、端部は短く屈折する。172は高台部が高く、僅かに外側に踏んばる。接地面は平坦で、「コ」字形のしっかりした形態。体部は底部から内湾して立ち上がる。173～181は、底部から口縁部まで内湾して立ち上がる。183は体部は直線的で、口縁部は外湾する。183・184・187を除いた坏は、すべて回転糸切り底である。189・190は、頸部が「く」の字状を呈し口縁部は内屈する。どちらもロクロ調整を施し、190の底部は回転糸切りである。191は高台部がやや長く、「ハ」の字形に外湾する。坏部は中央が丸く窪んで最も低く、体部は内湾、口縁部は外湾する。内面は黒色処理を施し、その調整は下半は放射状の上半は平行なミガキを施す。底面外側は、不整な放射状の痕跡を有し192も同様である。195の底面には葉脈状の沈線があり、所々に丸い小さな窪みを有する。200の口縁部は波打ち、体部には指頭による圧痕が顕著である。201は天井部に細かな砂粒が顕著で、体部には粘土紐の痕跡が認められる。製作時に、天井を下にして成形したものであろう。197は口縁部が外湾する。胴部は外面が縦位のヘラケズリ、内面は横位の木口によるナデを施す。198は頸部が緩い「く」の字状を呈し、口唇部が短く直立する。外面の口縁部と胴部上位はロクロ調整で、他は縦位のヘラケズリを施す。内面はロクロ調整である。199は外面が縦位のヘラケズリ、内面は底部がナデの他はロクロ調整である。

ＳＩ371(第75・78図、図版35－３、47、48)

Ａ区南東端のＮＧ60区にあり、地山面で確認した。北西辺から南東辺にかけてＳＤ398に切られる。また南東側は、ＳＩ07と重複するものの新旧関係は不明である。竈は攪乱で消失したと判断した。平面形は南側で、半分が東側へ鍵状に張り出すものの、全体では不整の長方形を呈する。規模は、長さ4.6m×幅4.2m、深さ0.2mである。壁は緩く立ち上がり、底面は凹凸が著しい。柱穴はＰ１～Ｐ５までと考えられるが、径は0.3～0.5mの大きさがある。他の落ち込みは時期が不明である。

遺物は須恵器の瓶類(217)、土師器の坏(203～214)・小甕(215・216)などが出土した。217は、体部外面と底面にヘラケズリを施す。底面には浅い沈線状の痕跡がある。210・212は、底面より内湾して立ち上がる深身の形態である。205～209は、底部より内湾し口縁部は直線もしくは外反する。210・212はやや浅い形態で、口縁部は内湾もしくは直線的である。212の内面全面には、墨の痕跡が認められる。210・212・214を除く底面は、回転糸切りである。215は内外面がロクロ調整で、口縁部は屈折して口唇部が短く直立するものであろう。216も内外面ロクロ調整で、底面は回転糸切りである。

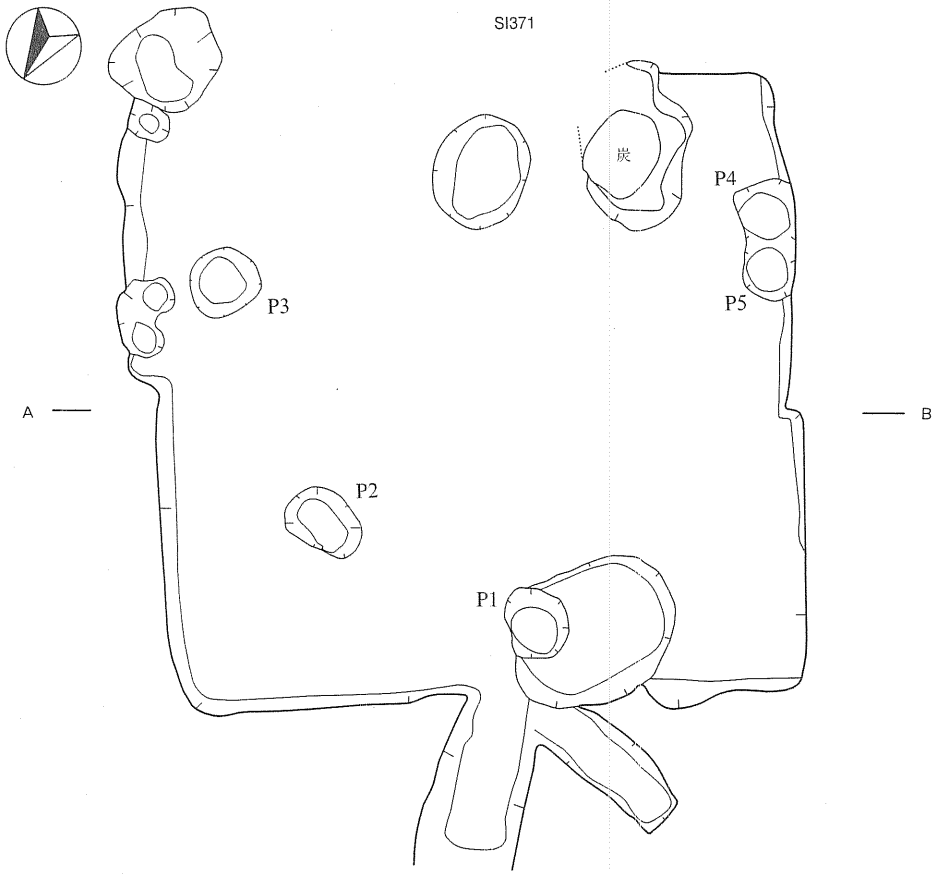
２　竪穴状遺構

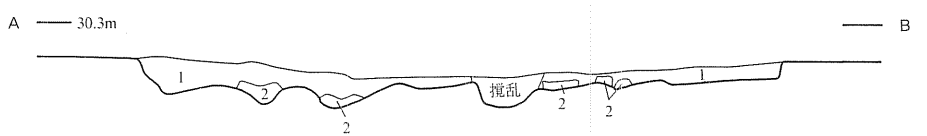
ＳＫＩ54(第79図、図版36－１、48)

Ｂ区西側のＭＯ56区にあり、地山面で確認した。平面形は隅丸の不整長方形で、北西側が楕円状を呈する。規模は長さ約3m×幅2.4m、床面までの深さは0.3m最も深い北西側が0.4mである。壁は北西と南西側がやや緩く、他は直立気味に立ち上がる。底面はほぼ平坦であるが、北西の壁際で緩く窪む。西辺の中央部に径2.3mの柱穴があり、床より0.2mの深さである。

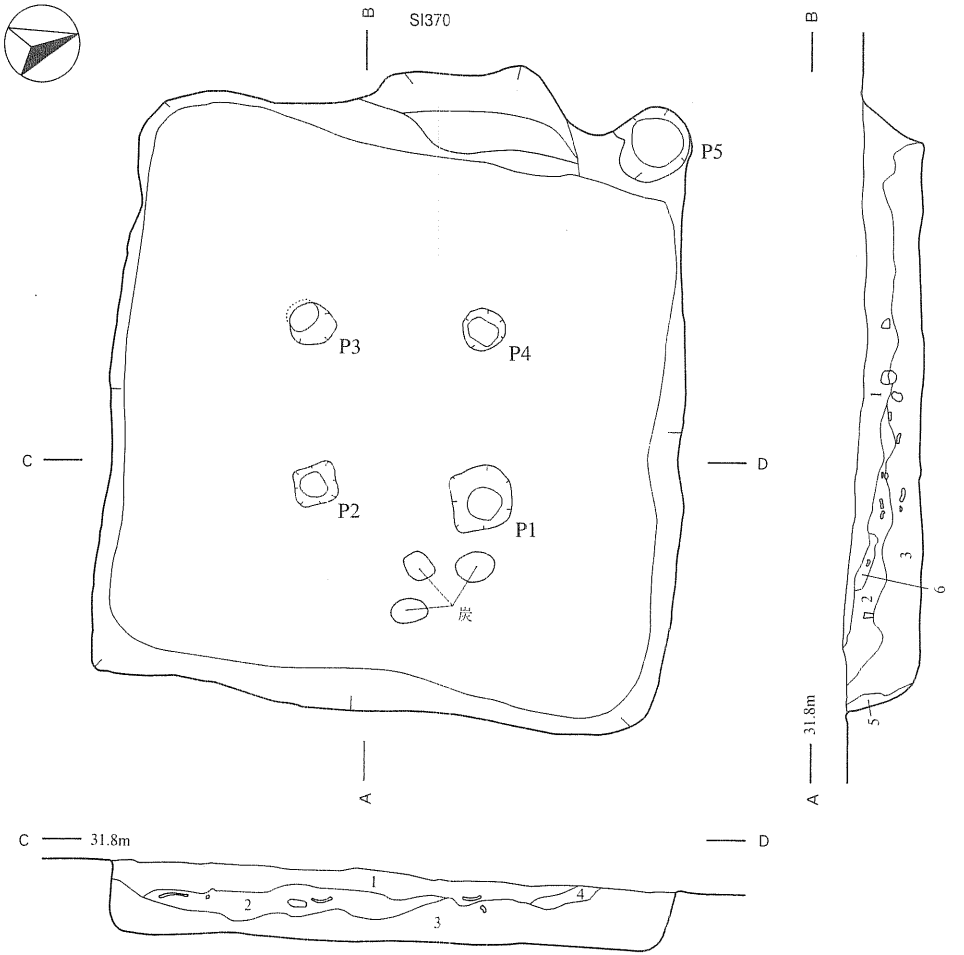
ＳＫＩ362(第65図、図版36－２)

Ａ区南東端のＮＨ61区にあり、地山面で確認した。東側隅はＳＤ398に切られ、南側隅はＳＫ372に切





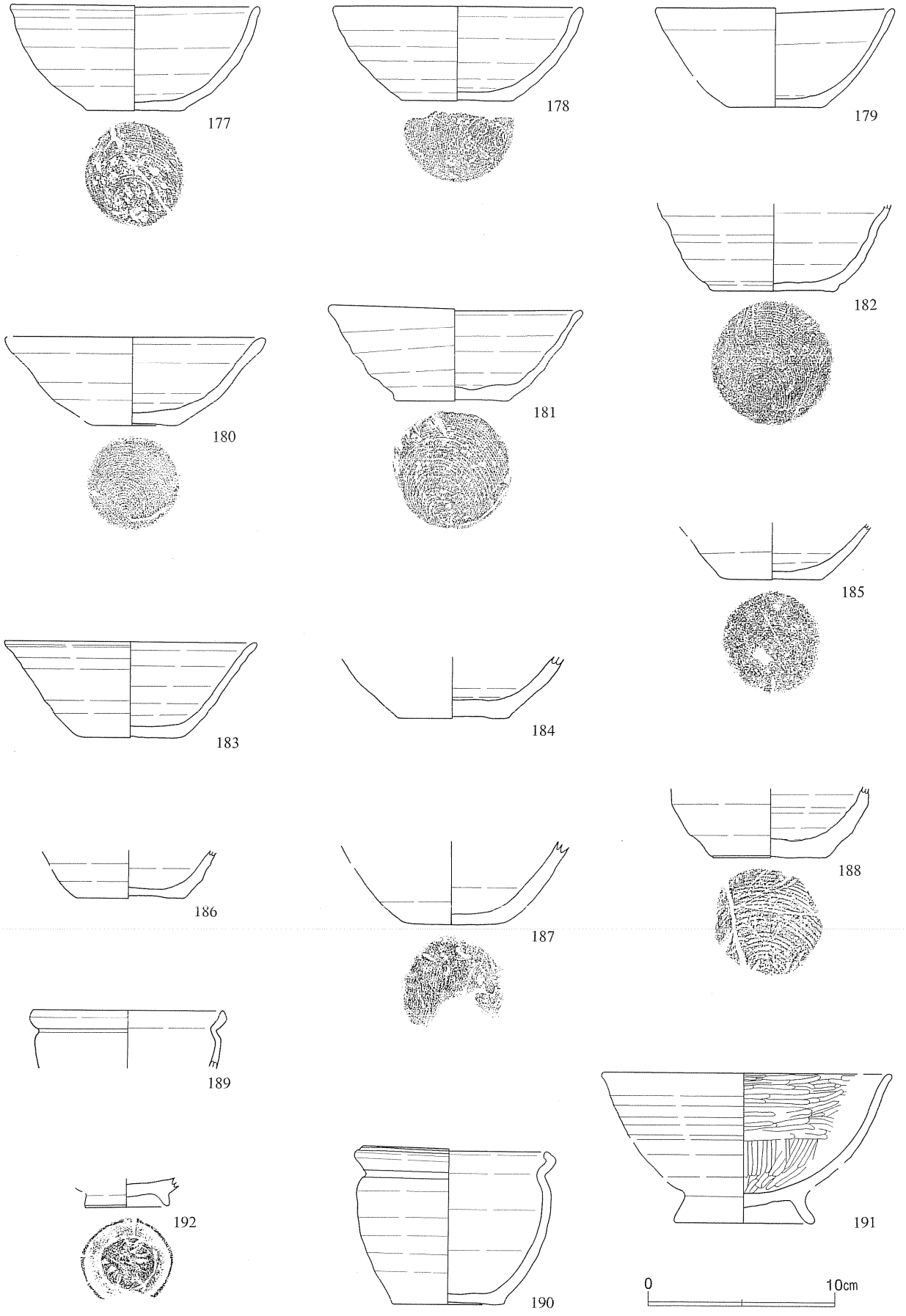
ＳＩ371
1　黒 褐 色 土(10YR2/3)　粘土～シルト、地山土(少)混入、固質。
2　灰黄褐色土(10YR4/2)　シルト、地山土(多)混入、固質。



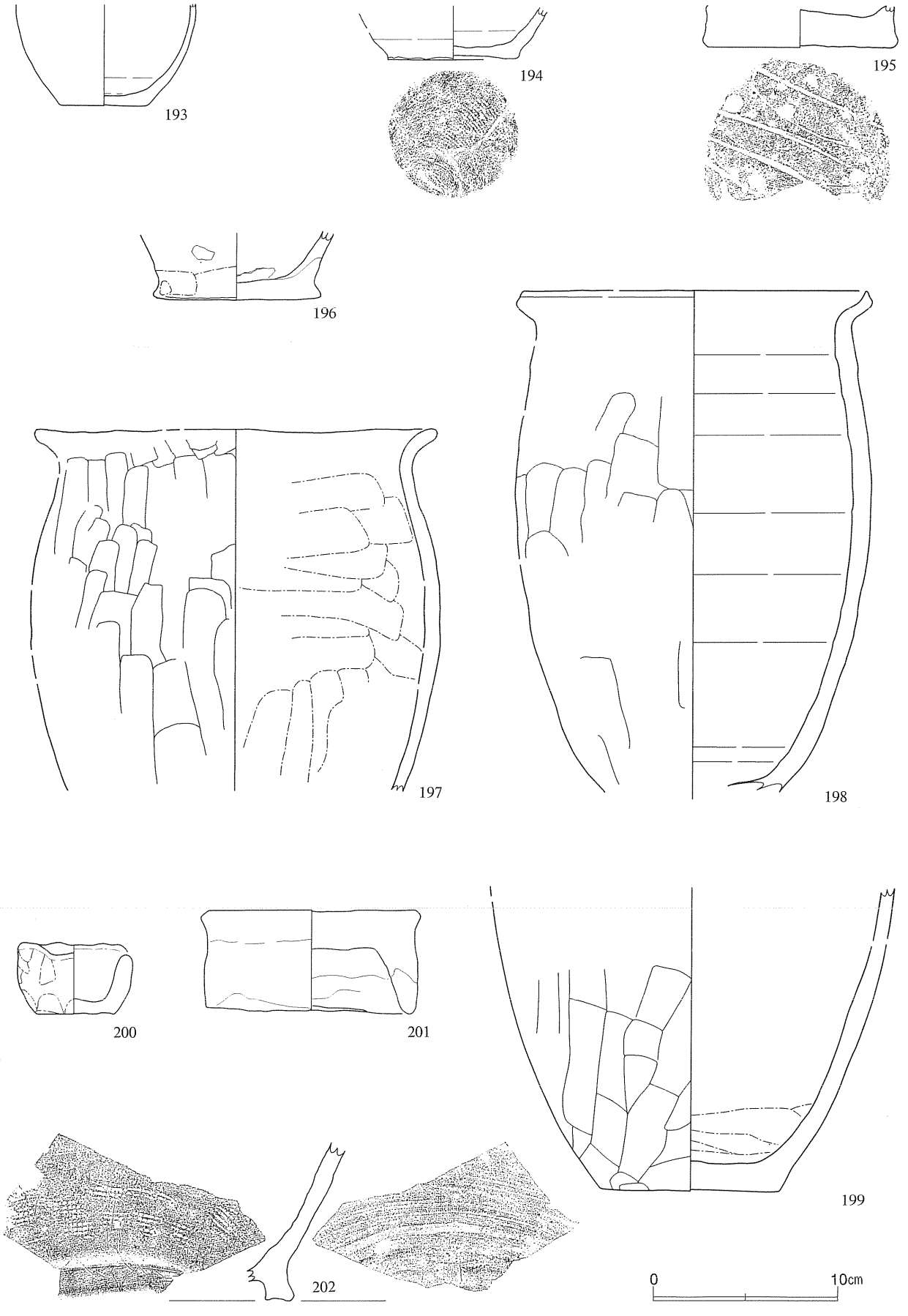
ＳＩ370
1　黒 褐 色 土(10YR3/2)　シルト、焼土混入、やや軟質。
2　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　シルト～砂、焼土混入、やや固質。
3　暗 褐 色 土(10YR3/3)　粘土～シルト、焼土・炭化物混入、軟質。
4　暗 褐 色 土(10YR3/3)　粘土～シルト、焼土・炭化物混入、やや軟質。
5　黒 褐 色 土(10YR3/2)　粘土～シルト、炭化物混入、軟質。
6　灰黄褐色土(10YR4/2)　シルト、やや固質。

0　2m　　0　1m

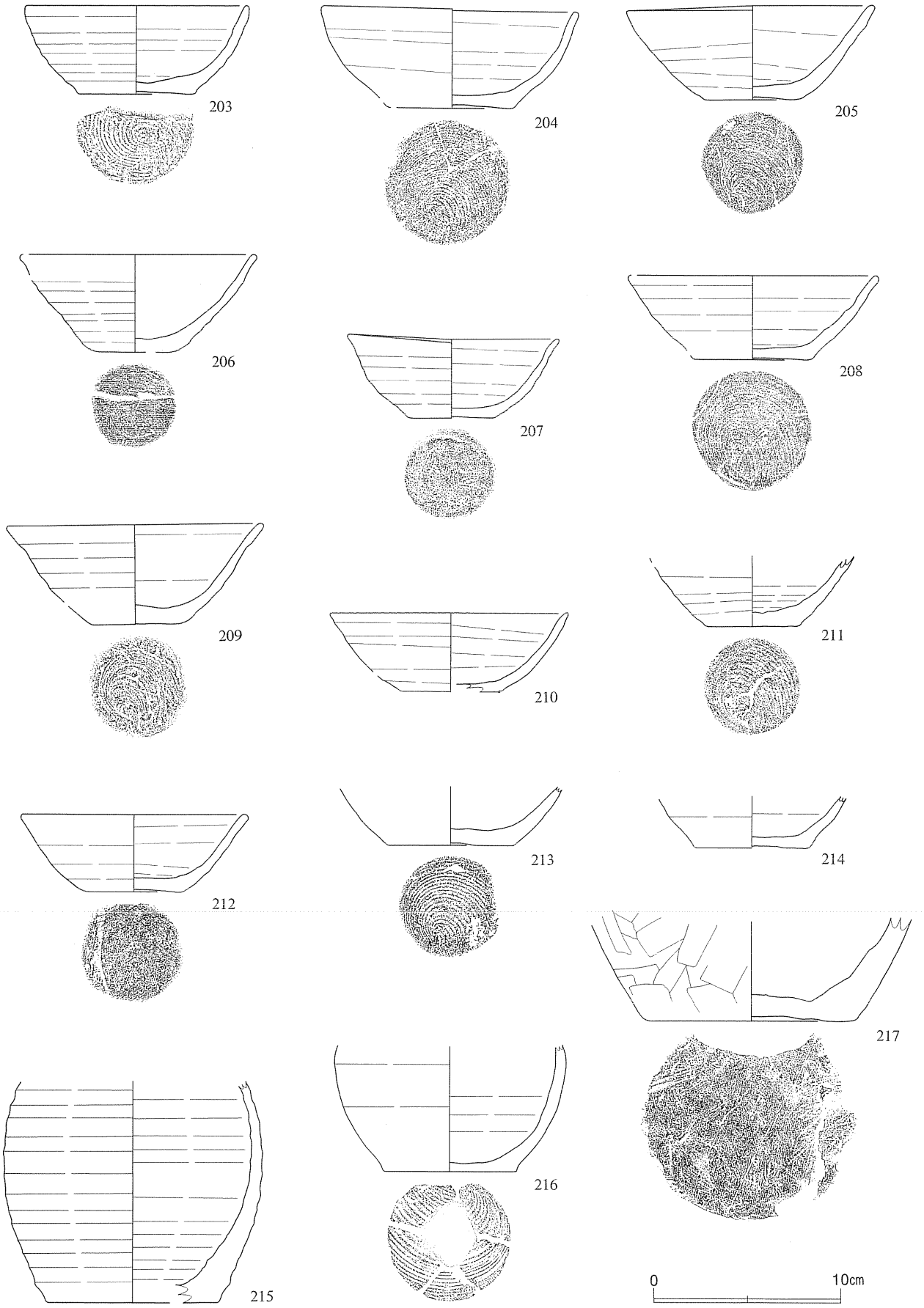
第75図　竪穴住居跡（７）古代⑦ＳＩ370･371



第76図　遺構内出土土器(31)　古代⑬177～192



第77図　遺構内出土土器(32) 古代⑭193～202



第78図　遺構内出土土器(33)　古代⑮203～217

第４表　古代の土器の観察（１）

（　）は推定値・現存値

番号	出土地点	種類	器　種	胎土（砂粒）	色　調（外・内）		口径×底径×高さ（mm）
35	ＳＩ07	須恵	有台坏	1～2mm多量	5B4/1暗青灰	2.5Y5/2暗灰黄	125× 82×(39)
36	ＳＩ07	土師	有台坏	1mm多量	7.5YR8/4浅黄橙	N1.5/0黒	129× 60× 57
37	ＳＩ07	土師	甕	1～2mm多量	7.5YR8/4浅黄橙	7.5YR8/3浅黄橙	146× －×(62)
38	ＳＩ07	土師	小　甕	1～2mm多量	5YR7/4にぶい橙	7.5YR8/3浅黄橙	130× 73 ×148
39	ＳＩ07	土師	小　甕	1～3mm多量	5YR8/4淡橙	5YR8/3淡橙	146× 67×132
40	ＳＩ69	土師	坏	1mm多量	7.5YR8/3浅黄橙	7.5YR8/3浅黄橙	129× 49× 50
41	ＳＩ69	土師	坏	1～2mm多量	5YR7/8橙	5YR8/3淡橙	135× 58× 49
42	ＳＩ69	土師	坏	1mm多量	10YR8/2灰白	10YR8/2灰白	130× 50× 54
43	ＳＩ69	土師	坏	1～2mm多量	5YR7/8橙	5YR7/8橙	134× 56× 56
44	ＳＩ69	土師	坏	1mm多量	7.5YR8/4浅黄橙	5YR7/6橙	126× 46× 55
45	ＳＩ69	土師	坏	1mm多量	5YR7/4にぶい橙	5YR7/6橙	141× 56× 56
46	ＳＩ69	土師	坏	1mm多量	7.5YR8/3浅黄橙	7.5YR8/3浅黄橙	131× 47× 55
47	ＳＩ69	土師	坏	1～2mm多量	5YR8/4淡橙	7.5YR8/6黄橙	130× 54× 65
48	ＳＩ69	土師	坏	1mm多量	7.5YR6/6橙	7.5YR7/4にぶい橙	130× 57× 51
49	ＳＩ69	土師	坏	1mm多量	5YR8/4淡橙	7.5YR8/2灰白	－× 59×(14)
50	ＳＩ69	土師	有台坏	1mm多量	7.5YR8/6浅黄橙	N1.5/0黒	140× 73× 71
51	ＳＩ69	土師	小　甕	1～2mm多量	7.5YR8/4浅黄橙	7.5YR8/6黄橙	98× 52× 67
52	ＳＩ69	土師	小　甕	1～3mm多量	5YR7/6橙	5YR7/8橙	141× －×(86)
53	ＳＩ69	土師	小　甕	1～3mm多量	7.5YR7/8黄橙	5YR6/8橙	137× －×(120)
54	ＳＩ69	土師	甕	1～2mm多量	5YR8/4淡橙	5YR8/4淡橙	219× －×90
55	ＳＩ69	土師	甕	1～2mm多量	5YR7/6橙	7.5YR7/3橙	199× 74×320
56	ＳＩ69	土師	甕	1～2mm多量	7.5YR8/6浅黄橙	7.5YR8/3浅黄橙	206× 80×311
57	ＳＩ71	土師	甕	1～3mm多量	5YR5/6明赤褐	5YR6/8橙	157× 80×149
58	ＳＩ107	土師	坏	1～2mm多量	7.5YR8/1灰白	7.5YR8/1灰白	134× 52× 49
59	ＳＩ107	土師	坏	1mm多量	7.5YR7/1明褐灰	7.5YR6/1褐灰	121× 54× 53
60	ＳＩ107	土師	坏	1mm多量	7.5YR7/6橙	7.5YR7/6橙	160× 62× 53
61	ＳＩ107	土師	坏	1～2mm多量	7.5YR7/3にぶい橙	7.5YR7/3にぶい橙	145× 48× 55
62	ＳＩ107	土師	甕	1～3mm多量	7.5YR8/4浅黄橙	7.5YR8/3浅黄橙	197× －×(130)
63	ＳＩ107	土師	甕	1～3mm多量	5YR7/6橙	5YR7/6橙	225× －×(126)
64	ＳＩ107	土師	甕	1～3mm多量	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR7/4にぶい橙	－× 88×(135)
65	ＳＩ107	土師	甕	1mm多量	5YR7/6橙	5YR7/6橙	－× 97×(90)
66	ＳＩ109	須恵	蓋	1～2mm多量	5B5/1青灰	5B4/1暗青灰	134× －×(29)
67	ＳＩ109	須恵	坏	1～2mm多量	5B5/1青灰	5B5/1青灰	120× 70× 27
68	ＳＩ109	須恵	坏	1～2mm多量	5G7/1明緑灰	5G7/1明緑灰	133× 80×307
69	ＳＩ109	須恵	坏	1mm多量	10YR8/1灰白	10YR8/1灰白	122× 60× 33
70	ＳＩ109	須恵	坏	1～3mm多量	10YR8/1灰白	10YR8/1灰白	129× 64× 37
71	ＳＩ109	須恵	坏	1mm多量	10YR8/4浅黄橙	10YR8/4浅黄橙	129× 70× 31
72	ＳＩ109	須恵	坏	1mm多量	10YR7/1灰白	10YR7/1灰白	139× 48× 51
73	ＳＩ109	須恵	坏	1mm多量	10YR8/1灰白	10YR8/1灰白	－× 74×(26)
74	ＳＩ109	土師	坏	1mm多量	7.5YR8/3浅黄橙	7.5YR8/3浅黄橙	127× 45× 55
75	ＳＩ109	須恵	有台坏	1～2mm多量	5Y8/1灰白	5Y8/1灰白	110× 56× 52
76	ＳＩ109	須恵	有台坏	1mm多量	5Y7/1灰白	5Y7/1灰白	111× 62× 56
77	ＳＩ109	須恵	有台坏	1mm多量	5Y7/1灰白	5Y7/1灰白	114× 64× 55
78	ＳＩ109	須恵	有台坏	1～3mm多量	7.5Y7/1灰白	7.5Y7/1灰白	157× －×(71)
79	ＳＩ109	須恵	有台坏	1mm多量	7.5Y6/1灰	7.5Y6/1灰	－× 56×(68)
80	ＳＩ109	須恵	有台坏	1mm多量	5Y5/1灰	5Y7/2灰白	－× 85×(38)
81	ＳＩ109	須恵	有台坏	1mm多量	N6/0灰	N6/0灰	－× 57×(19)
82	ＳＩ109	土師	小　甕	1～2mm多量	7.5YR5/2灰褐	7.5YR7/2明褐灰	－× 78× 62
83	ＳＩ109	土師	小　甕	1～2mm多量	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR7/3にぶい橙	－× 50×(30)
84	ＳＩ109	土師	甕	1～2mm多量	2.5YR6/6橙	2.5YR7/4淡赤橙	－× 78×(27)
85	ＳＩ109	土師	甕	1～3mm多量	7.5YR7/3にぶい橙	7.5YR8/2灰白	－× 77×(32)
86	ＳＩ109	土師	甕	1～2mm多量	5YR7/6橙	7.5YR8/3浅黄橙	－× 76× 66
87	ＳＩ109	須恵	甕	1mm多量	10YR4/1灰	10YR6/1灰	－× －× －
88	ＳＩ122	土師	皿	1～2mm多量	7.5YR8/4浅黄橙	7.5YR8/4浅黄橙	131× 50× 34
89	ＳＩ122	土師	坏	1～3mm多量	2.5YR7/4淡赤橙	2.5YR7/4淡赤橙	135× 58× 52
90	ＳＩ122	土師	坏	1～2mm多量	7.5YR8/4浅黄橙	7.5YR8/4浅黄橙	134× 52× 49
91	ＳＩ122	土師	小　甕	1mm多量	5YR7/6橙	5YR7/4にぶい橙	－× 52×(53)
92	ＳＩ122	土師	小　甕	1～3mm多量	7.5YR7/2明褐灰	5YR8/4淡橙	－× 66×(77)
93	ＳＩ122	土師	甕	1～3mm多量	10YR8/2灰白	10YR8/3浅黄橙	213× －×(104)
94	ＳＩ122	土師	甕	1～3mm多量	7.5YR8/4浅黄橙	7.5YR8/4浅黄橙	185× －×(77)
95	ＳＩ122	土師	甕	1～3mm多量	10YR8/2灰白	10YR8/2灰白	248× －×(312)

第５表　古代の土器の観察（２）

（　）は推定値・現存値

番号	出土地点	種類	器　種	胎土(砂粒)	色　調(外・内)		口径×底径×高さ(mm)
96	ＳＩ122	土師	甕	1～3mm多量	7.5ＹＲ8/3浅黄橙	7.5ＹＲ8/3浅黄橙	204×　－×(231)
97	ＳＩ122	土師	甕	1～2mm多量	10ＹＲ8/2灰白	10ＹＲ8/2灰白	209×　－×(304)
98	ＳＩ122	土師	甕	1mm多量	2.5ＹＲ7/6橙	2.5ＹＲ7/6橙	227×　－×(255)
99	ＳＩ122	土師	甕	1～3mm多量	2.5ＹＲ7/4淡赤橙	5ＹＲ6/3にぶい橙	－×100×(134)
100	ＳＩ125	土師	小　甕	1～3mm多量	2.5ＹＲ6/4にぶい橙	7.5ＹＲ7/2明褐灰	－×　92×(118)
101	ＳＩ365	土師	甕	1～3mm多量	7.5ＹＲ5/1褐灰	7.5ＹＲ8/3浅黄橙	－×100×(85)
102	ＳＩ363	須恵	蓋	1～3mm多量	2.5Y7/1灰白	2.5Y6/1黄灰	152×　72×　40
103	ＳＩ363	須恵	蓋	1mm多量	2.5ＹＲ8/1灰白	2.5ＹＲ8/1灰白	158×　79×　34
104	ＳＩ363	須恵	蓋	1～3mm多量	5Y6/1灰	5Y5/1灰	－×　82×(23)
105	ＳＩ363	須恵	蓋	1～2mm多量	N7/0灰白	5Y6/1灰	149×　69×(32)
106	ＳＩ363	須恵	有台皿	1mm多量	N5/0オリーブ灰	N6/0灰	148×　－×　20
107	ＳＩ363	須恵	有台皿	1～3mm多量	2.5Y6/1黄灰	2.5Y7/1灰白	124×　55×　31
108	ＳＩ363	須恵	有台皿	1～2mm多量	10ＹＲ7/1灰白	10ＹＲ8/1灰白	－×　70×(38)
109	ＳＩ363	須恵	坏	1mm多量	2.5Y7/1灰白	5Y8/1灰白	132×　73×　40
110	ＳＩ363	須恵	坏	1～2mm多量	2.5Y8/1灰白	2.5Y8/1灰白	139×　75×　35
111	ＳＩ363	土師	坏	1～2mm多量	7.5ＹＲ7/8黄橙	7.5ＹＲ8/2灰白	129×　66×　41
112	ＳＩ363	須恵	坏	1mm多量	2.5Y7/1灰白	2.5Y7/1灰白	130×　60×330
113	ＳＩ363	須恵	坏	1～3mm多量	10Y6/1灰	10Y6/1灰	132×　59×　43
114	ＳＩ363	須恵	坏	1～2mm多量	10ＹＲ8/1灰白	10ＹＲ8/2灰白	136×　62×　41
115	ＳＩ363	須恵	坏	1～3mm多量	5B6/1青灰	5B5/1青灰	118×　56×　35
116	ＳＩ363	須恵	坏	1～2mm多量	5Y7/1灰白	5Y7/1灰白	131×　59×　38
117	ＳＩ363	須恵	坏	1～3mm多量	5B6/1青灰	5B5/1青灰	132×　62×　36
118	ＳＩ363	須恵	坏	1～2mm多量	2.5Y8/1灰白	2.5Y7/1灰白	133×　69×　40
119	ＳＩ363	須恵	坏	1～3mm多量	2.5Y7/1灰白	2.5Y8/1灰白	135×　58×　35
120	ＳＩ363	須恵	坏	1～2mm多量	10Y6/1灰	10Y6/1灰	128×　51×　35
121	ＳＩ363	須恵	坏	1～2mm多量	7.5Y7/1灰白	7.5Y7/1灰白	130×　52×　35
122	ＳＩ363	須恵	坏	1～2mm多量	5Y7/1灰白	5Y7/1灰白	123×　63×　40
123	ＳＩ363	須恵	坏	1～2mm多量	5Y8/2灰白	5Y8/2灰白	144×　80×　34
124	ＳＩ363	土師	椀	1～2mm多量	7.5ＹＲ7/6橙	N1.5/0黒	119×　55×　59
125	ＳＩ363	土師	椀	1mm多量	10ＹＲ8/2灰白	N1.5/0黒	123×　54×　55
126	ＳＩ363	土師	椀	1～2mm多量	5ＹＲ7/6橙	5ＹＲ7/6橙	123×　51×　53
127	ＳＩ363	須恵	坏	1～2mm多量	5GＹ7/1明緑灰	5Y7/1灰白	132×　52×　39
128	ＳＩ363	須恵	有台坏	1mm多量	N4/0灰	N5/0灰	－×　61×(32)
129	ＳＩ363	須恵	有台坏	1～2mm多量	5Y7/1灰白	5Y7/1灰白	－×　73×(29)
130	ＳＩ363	須恵	有台坏	1mm多量	N5/0灰	N7/0灰白	143×　76×　80
131	ＳＩ363	須恵	有台坏	1mm多量	N5/0灰	7.5ＹＲ6/1灰	137×　71×　68
132	ＳＩ363	須恵	有台坏	1～3mm多量	N5/0灰	7.5ＹＲ6/1灰	146×　67×　72
133	ＳＩ363	須恵	有台坏	1～2mm多量	N5/0灰	N5/0灰	122×　59×　58
134	ＳＩ363	須恵	有台坏	1～2mm多量	N4/0灰	N5/0灰	148×　57×　76
135	ＳＩ363	須恵	有台坏	1～2mm多量	7.5Y6/1灰	7.5Y6/1灰	141×　74×　72
136	ＳＩ363	須恵	有台坏	1～2mm多量	7.5Y5/1灰	7.5Y7/1灰白	－×　78×(58)
137	ＳＩ363	須恵	有台坏	1～2mm多量	5Y8/1灰白	5Y8/1灰白	－×　71×(28)
138	ＳＩ363	須恵	有台坏	1～2mm多量	N4/0灰	N5/0灰	－×　70×(23)
139	ＳＩ363	須恵	長頸瓶	1～2mm多量	5BG6/1緑灰	7.5Y7/1灰白	120×　－×(67)
140	ＳＩ363	須恵	大甕	1mm多量	7.5Y6/1灰	5Y6/2オリーブ灰	－×　－×　－
141	ＳＩ363	須恵	長頸瓶	1mm多量	5B6/1青灰	N5/0灰	(117)×(113)×(215)
142	ＳＩ363	須恵	長頸瓶	1～3mm多量	N1.5/0黒	7.5Y4/1灰	(123)×　97×(164)
143	ＳＩ363	須恵	甕	1mm多量	7.5Y5/1灰	7.5Y5/1灰	220×　－×(230)
144	ＳＩ363	須恵	甕	1～2mm多量	N4/1灰	7.5Y5/1灰	409×　－×(230)
145	ＳＩ363	須恵	大　甕	1mm多量	5Y6/1灰	5Y6/1灰	－×　－×　－
146	ＳＩ363	須恵	大　甕	1～2mm多量	7.5Y7/1灰白	7.5Y7/1灰白	－×　－×(128)
147	ＳＩ364	須恵	有台皿	1～2mm多量	5B4/1暗青灰	5B4/1暗青灰	130×　61×　29
148	ＳＩ364	須恵	有台皿	1～2mm多量	5B4/1暗青灰	5B4/1暗青灰	－×　57×(21)
149	ＳＩ364	須恵	有台皿	1～2mm多量	5Y6/1灰	5Y7/1灰白	－×　58×(19)
150	ＳＩ364	須恵	坏	1～3mm多量	5Y6/1灰	5Y6/1灰	115×　65×　45
151	ＳＩ364	須恵	坏	1～2mm多量	5Y8/1灰白	5Y8/1灰白	－×　60×　26
152	ＳＩ364	須恵	坏	1～2mm多量	N5/0灰	N5/0灰	123×　60×　36
153	ＳＩ364	須恵	坏	1mm多量	10ＹＲ7/3にぶい黄橙	10ＹＲ7/3にぶい黄橙	－×　61×　22
154	ＳＩ364	須恵	有台坏	1～3mm多量	5Y8/1灰白	7.5Y8/1灰白	－×　75×(34)
155	ＳＩ364	須恵	有台坏	1～2mm多量	10Y7/1灰白	7.5Y7/1灰白	－×　72×(27)
156	ＳＩ364	土師	坏	1～3mm多量	7.5ＹＲ8/8黄橙	7.5ＹＲ8/8黄橙	133×　60×　47

第６表　古代の土器の観察（３）

（　）は推定値・現存値

番号	出土地点	種類	器　種	胎土(砂粒)	色　調(外・内)		口径×底径×高さ(mm)
157	ＳＩ364	土師	坏	1～2mm多量	7.5ＹＲ7/8黄橙	7.5ＹＲ6/8橙	130× 60× 43
158	ＳＩ365	須恵	坏	1～2mm多量	5Ｂ5/1青灰	5Ｂ5/1青灰	131× 55× 53
159	ＳＩ365	土師	坏	1～3mm多量	7.5Ｙ7/1灰白	7.5Ｙ7/1灰白	133× 60× 47
160	ＳＩ365	須恵	甕	1～2mm多量	10Ｙ6/1灰	10Ｙ6/1灰	－× －×(66)
161	ＳＩ365	須恵	長頸瓶	1mm多量	10Ｙ6/1灰	5Ｙ6/1灰	82× －×(183)
162	ＳＩ369	土師	坏	1～2mm多量	7.5ＹＲ8/8黄橙	7.5ＹＲ8/6浅黄橙	128× 52× 50
163	ＳＩ369	土師	坏	1～2mm多量	5ＹＲ7/6橙	7.5ＹＲ7/3にぶい橙	125× 54× 56
164	ＳＩ369	土師	小　甕	1～2mm多量	7.5ＹＲ6/6橙	7.5ＹＲ7/8黄橙	－× 66×(35)
165	ＳＩ369	土師	小　甕	1～3mm多量	7.5ＹＲ4/2灰褐	2.5ＹＲ7/8橙	140× －×(75)
166	ＳＩ369	土師	小　甕	1～3mm多量	5ＹＲ6/3にぶい橙	5ＹＲ8/4淡橙	120× －×(64)
167	ＳＩ369	土師	小　甕	1～3mm多量	2.5ＹＲ7/6橙	5ＹＲ7/4にぶい橙	－× 66×(36)
168	ＳＩ369	土師	小　甕	1～2mm多量	2.5ＹＲ7/6橙	5ＹＲ8/4淡橙	－× 86×(59)
169	ＳＩ369	土師	甕	1～3mm多量	2.5ＹＲ7/8橙	5ＹＲ7/6橙	189× －×(164)
170	ＳＩ369	土師	甕	1～3mm多量	2.5ＹＲ6/8橙	5ＹＲ7/8橙	229× －×(106)
171	ＳＩ370	須恵	蓋	1～2mm多量	10Ｙ7/1灰白	5Ｙ7/1灰白	154× 74×(22)
172	ＳＩ370	須恵	有台皿	1～3mm多量	5Ｂ3/1暗青灰	5Ｂ3/1暗青灰	133× 58× 41
173	ＳＩ370	土師	坏	1mm多量	7.5ＹＲ8/6橙	7.5ＹＲ8/6浅黄橙	130× 55× 51
174	ＳＩ370	土師	坏	1～3mm多量	7.5ＹＲ8/2灰白	7.5ＹＲ8/2灰白	132× 44× 50
175	ＳＩ370	土師	坏	1～2mm多量	7.5ＹＲ7/4にぶい橙	7.5ＹＲ7/3にぶい橙	129× 58× 56
176	ＳＩ370	土師	坏	1～3mm多量	7.5ＹＲ8/4浅黄橙	7.5ＹＲ8/1灰白	130× 47× 50
177	ＳＩ370	土師	坏	1mm多量	10ＹＲ7/1灰白	10ＹＲ8/2灰白	135× 53× 57
178	ＳＩ370	土師	坏	1～3mm多量	10ＹＲ7/2にぶい黄橙	10ＹＲ8/2灰白	135× 60× 51
179	ＳＩ370	土師	坏	1mm多量	7.5ＹＲ8/4浅黄橙	7.5ＹＲ8/4浅黄橙	130× 52× 54
180	ＳＩ370	土師	坏	1～2mm多量	5ＹＲ7/4にぶい橙	5ＹＲ7/4にぶい橙	141× 46× 48
181	ＳＩ370	土師	坏	1～3mm多量	2.5Ｙ8/1灰白	2.5Ｙ8/1灰白	137× 60× 50
182	ＳＩ370	土師	坏	1～3mm多量	2.5ＹＲ6/8橙	2.5ＹＲ6/8橙	－× 67×(47)
183	ＳＩ370	土師	坏	1～3mm多量	5ＹＲ7/3にぶい橙	5ＹＲ7/3にぶい橙	136× 55× 52
184	ＳＩ370	土師	坏	1mm多量	5ＹＲ7/6橙	5ＹＲ7/6橙	－× 60×(38)
185	ＳＩ370	土師	坏	1mm多量	7.5ＹＲ8/4浅黄橙	7.5ＹＲ8/4浅黄橙	－× 57×(31)
186	ＳＩ370	土師	坏	1～2mm多量	7.5ＹＲ8/3浅黄橙	5ＹＲ6/6橙	－× 59×(26)
187	ＳＩ370	土師	坏	1～2mm多量	10ＹＲ8/2灰白	10ＹＲ8/2灰白	－× 45×(45)
188	ＳＩ370	土師	小　甕	1～2mm多量	7.5ＹＲ8/3浅黄橙	7.5ＹＲ8/3浅黄橙	－× 57×(37)
189	ＳＩ370	土師	小　甕	1～2mm多量	2.5Ｙ7/1灰白	10ＹＲ8/2灰白	103× －×(31)
190	ＳＩ370	土師	小　甕	1～2mm多量	7.5ＹＲ8/3浅黄橙	5Ｙ4/1灰	100× 59× 84
191	ＳＩ370	土師	有台椀	1mm多量	5ＹＲ8/4淡橙	Ｎ1.5/0灰	156× 74× 81
192	ＳＩ370	土師	有台椀	1mm多量	5ＹＲ7/6橙	5ＹＲ7/6橙	－× 44×(15)
193	ＳＩ370	土師	小　甕	1～2mm多量	10ＹＲ7/2にぶい黄	7.5ＹＲ8/3浅黄橙	－× 48×(55)
194	ＳＩ370	土師	小　甕	1～2mm多量	10ＹＲ8/3浅黄橙	10ＹＲ8/3浅黄橙	－× 70×(29)
195	ＳＩ370	土師	甕	1～3mm多量	7.5ＹＲ5/6明褐	7.5ＹＲ5/6明褐	－×100×(20)
196	ＳＩ370	土師	甕	1～2mm多量	2.5ＹＲ6/8橙	2.5ＹＲ6/8橙	－× 80×(36)
197	ＳＩ370	土師	甕	1～2mm多量	7.5ＹＲ6/4にぶい橙	7.5ＹＲ7/3にぶい橙	217× －×(196)
198	ＳＩ370	土師	甕	1～3mm多量	7.5ＹＲ7/4にぶい橙	7.5ＹＲ8/4浅黄橙	188× 74×275
199	ＳＩ370	土師	甕	1～3mm多量	7.5ＹＲ7/6橙	7.5ＹＲ8/4浅黄橙	－× 96×(165)
200	ＳＩ370	土師	手捏	1mm多量	10ＹＲ8/3浅黄橙	10ＹＲ8/3浅黄橙	62× 42× 39
201	ＳＩ370	土師	支脚	1mm多量	2.5ＹＲ6/8橙	2.5ＹＲ6/8橙	112×112× 56
202	ＳＩ370	須恵	瓶	1mm多量	5Ｂ4/1暗青灰	5Ｂ4/1暗青灰	－× －×(77)
203	ＳＩ371	土師	坏	1～2mm多量	2.5ＹＲ6/8橙	2.5ＹＲ6/8橙	111× 63× 48
204	ＳＩ371	土師	坏	1～2mm多量	5ＹＲ7/6橙	5ＹＲ7/6橙	138× 69× 53
205	ＳＩ371	土師	坏	1～2mm多量	7.5ＹＲ7/2明褐灰	7.5ＹＲ7/6橙	134× 54× 51
206	ＳＩ371	土師	坏	1mm多量	7.5ＹＲ8/6橙	7.5ＹＲ8/6浅黄橙	127× 43× 52
207	ＳＩ371	土師	坏	1mm多量	7.5ＹＲ8/3浅黄橙	7.5ＹＲ8/4浅黄橙	113× 42× 43
208	ＳＩ371	土師	坏	1mm多量	7.5ＹＲ5/3にぶい褐	7.5ＹＲ6/3にぶい褐	135× 63× 45
209	ＳＩ371	土師	坏	1～3mm多量	5ＹＲ7/8橙	5ＹＲ7/6橙	138× 48× 54
210	ＳＩ371	土師	坏	1～2mm多量	2.5ＹＲ7/6橙	2.5ＹＲ7/6橙	128×(54)× 42
211	ＳＩ371	土師	坏	1～2mm多量	2.5Ｙ7/1灰白	7.5ＹＲ7/3にぶい橙	－× 51×(37)
212	ＳＩ371	土師	坏	1mm多量	7.5ＹＲ8/2灰白	7.5ＹＲ7/4にぶい橙	122× 54× 42
213	ＳＩ371	土師	坏	1mm多量	7.5ＹＲ5/3にぶい褐	7.5ＹＲ7/4にぶい橙	－× 67×(32)
214	ＳＩ371	土師	坏	1～2mm多量	7.5ＹＲ7/6橙	7.5ＹＲ7/6橙	－× 60×(28)
215	ＳＩ371	土師	小　甕	1mm多量	7.5ＹＲ5/3にぶい褐	7.5ＹＲ6/3にぶい褐	－× 91×(119)
216	ＳＩ371	土師	小　甕	1～2mm多量	7.5ＹＲ6/1褐灰	7.5ＹＲ8/3浅黄橙	－× 71×(68)
217	ＳＩ371	須恵	瓶	1～3mm多量	5Ｂ7/1明青灰	5Ｂ5/1青灰	－×112×(53)

られる。平面形は隅のやや丸い長方形で、東側はやや歪んでいる。規模は、長さ2.75m×幅2.55m、深さは0.25mである。壁はやや強く立ち上がり、床面はやや凹凸があるものの全体には平坦である。柱穴はＰ１～Ｐ６まで確認され、Ｐ３は長径0.3m×短径2.8m、深さ0.2m、Ｐ５は長径0.17m×短径0.15mである。

ＳＫＩ377（第79図、図版36-３）

Ａ区東端のＮＢ71区にあり、地山面で確認した。平面形はやや隅の丸い正方形で、西側はやや歪んでいる。西側壁際に大きな土坑を伴う。規模は一辺が約2.2mで、床面までの深さは約0.3mである。壁は強い傾斜で立ち上がり、床面は端から中央部へ向かって徐々に高くなる。第79図中の一点鎖線は、固く締まった貼床の範囲である。土坑の規模は、長さ0.96m×幅0.82m、深さ0.25mである。柱穴はＰ１～Ｐ５まで確認され、径0.2m内外の大きさである。屋外で竪穴隅の近くには、北側を除いて径25cm内外のピットが検出された。上屋の構築に関わるものであろう。覆土上位には、多量の礫がレンズ状に堆積していた。

ＳＫＩ413（第79図）

Ａ区東端のＮＫ63区にあり、地山面で確認した。南側から西側にかけて、広範囲に攪乱を受ける。平面形は方形状を呈すると考えられる。規模は残存する北東側の一辺で約5.5mで、床まで深さは約0.1mである。床面には比較的凹凸があり、北東から南西にかけて緩く傾斜する。壁は緩く立ち上がる部分が多く、平面観察では蛇行が著しい。北側隅付近のピットが伴うかは不明。

３　掘立柱建物跡

ＳＢ70（第80図）

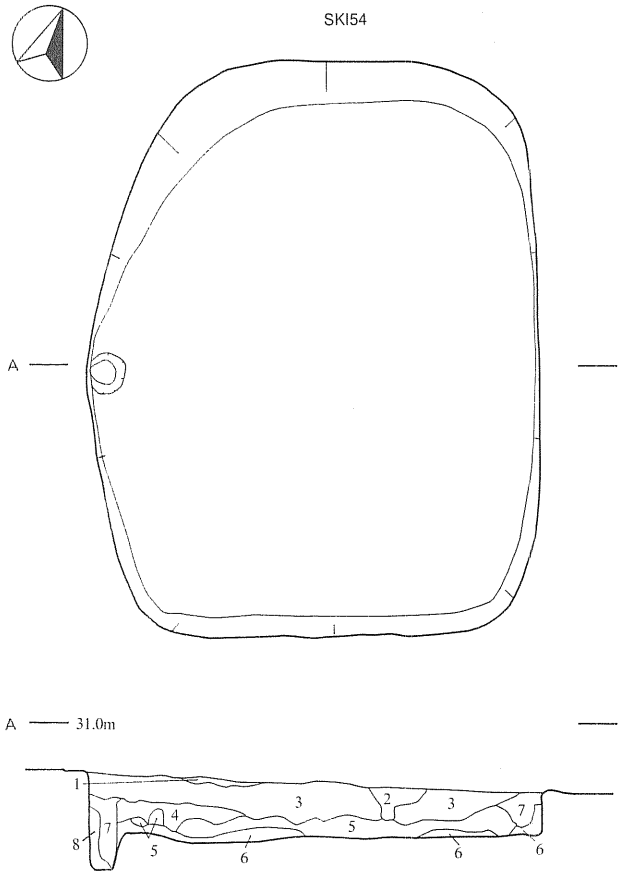
Ａ区西端のＮＢ58・ＮＣ59・ＮＤ60区に中心があり、地山面でＰ１～Ｐ24まで確認しピットの配列から掘立柱建物跡とした。柱間は桁行６間×梁行２間で、それぞれ約15.6mと約6.2mである。主軸方向はＮ-43°-Ｗである。Ｐ22～Ｐ24より、庇が取り付いていたと考えられる。Ｐ７・Ｐ８、Ｐ９・10、Ｐ14・15の重複関係より一部立て替えも想定される。Ｐ21より、桁行４間×梁行２間に梁行２間×桁行２間を付け足した可能性がある。ピットは、大きいＰ５が長さ0.9m×幅0.7m、小さいＰ20が長さ0.4m×0.4mである。

ＳＢ200（第81図、図版37-１～３）

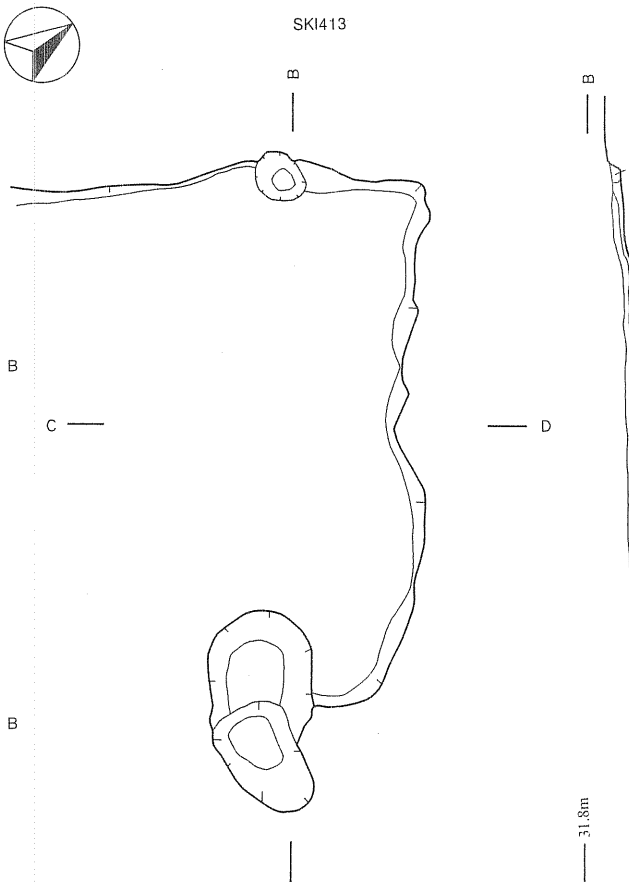
Ａ区中央東側のＬＥ36・ＬＦ36・ＬＧ37・ＬＨ38区に中心があり、地山面でＰ１～Ｐ24まで確認しピットの配列から掘立柱建物跡とした。本遺構は、柱間が桁行５間×梁行２間と桁行２間×梁行２間の建物が連結した形態で、それぞれ約13.3mと約7.7m、約5.3m×約5.2mである。大きい方の主軸方向はＮ-39°-Ｗで、その桁行にはＰ14・Ｐ６の柱穴が認められる。この南端と小さい方の南西には、ピットが検出されなかった。ピットは、大きいＰ５が長さ1.6m×幅1.1m、小さいＰ20が長さ0.8×幅0.7mである。

ＳＢ440（第82図）

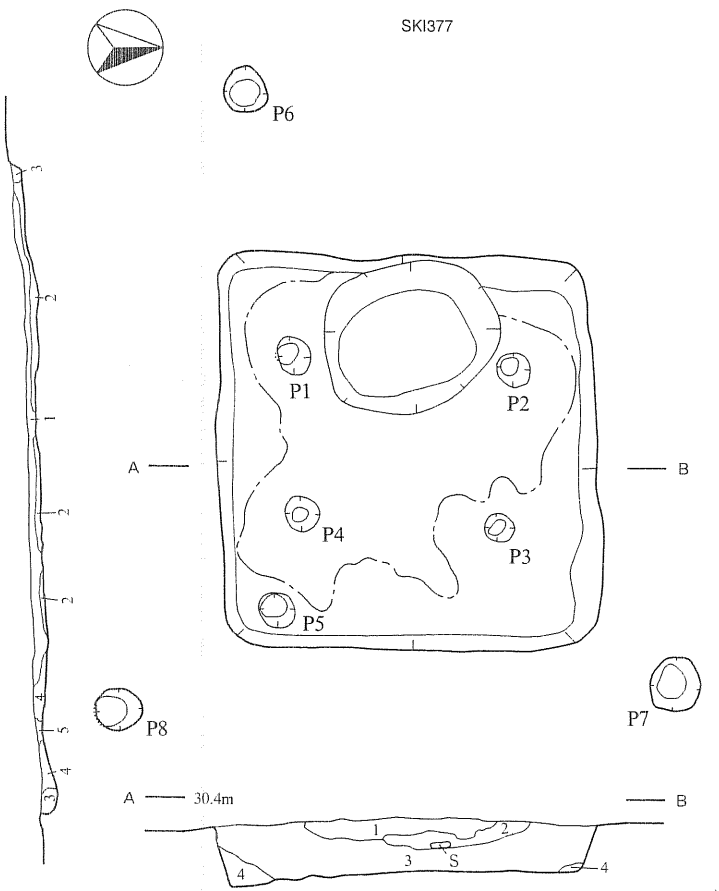
Ａ区とＢ区の境ＮＤ～ＮＦ62区に中心があり、地山面でＰ１～Ｐ９まで確認しピットの配列から掘立柱建物跡とした。Ｐ４でＳＢ450と切り合い、本遺構が新しい。梁行の西側が張り出し、対辺が斜めになる形態であるが、南西隅の柱痕跡が確認できなかった可能性がある。梁行の東側中央にはピットがなく、Ｐ７・Ｐ８間はＳＫ366に切られていると判断された。柱間は桁行４間×梁行２間で、それぞれ約9.2



ＳＫＩ54
1　褐　色　土(10YR4/6)　粘土～シルト、地山土混入、やや固質。
2　暗褐色土(10YR3/4)　シルト、地山土混入、軟質。
3　暗褐色土(10YR3/3)　シルト、炭化物・焼土・地山土混入、やや固質。
4　黒褐色土(10YR3/2)　シルト、地山土混入、やや軟質。
5　黄褐色土(10YR5/6)　粘土～シルト、地山土混入、やや固質。
6　暗褐色土(10YR3/4)　粘土～シルト、地山土混入、やや軟質。
7　暗褐色土(10YR3/3)　シルト、地山土混入、やや軟質。
8　黄褐色土(10YR5/8)　粘土～シルト、地山土混入、固質。



ＳＫＩ413
1　黒褐色土(10YR3/2)　粘土～地山土、炭化物(少)混入、固質。
2　褐　色　土(10YR4/6)　粘土、地山土(多)混入、固質。
3　黒褐色土(10YR2/3)　粘土～シルト、やや固質。
4　暗赤色土(10YR3/4)　粘土～シルト、焼土(中)・地山土(中)混入、やや固質。
5　赤　色　土(10YR4/6)　粘土～シルト、焼土(多)混入、固質。



ＳＫＩ377
1　明黄褐色土(10YR6/8)　シルト～砂、地山土混入、やや軟質。
2　にぶい黄橙色土(10YR6/3)　シルト～砂、地山土混入、軟質。
3　褐 灰 色 土(10YR4/1)　砂、地山土混入、軟質。
4　にぶい黄橙色土(10YR6/3)　砂、地山土混入、やや軟質。

第79図　竪穴状遺構(２) 古代⑧ＳＫＩ54・413・377

m×9.2mである。主軸方向はN-74°-Wである。ピットは、大きいＰ８が長さ1.35m×幅0.95m、小さいＰ２が長さ0.7m×幅0.65mである。

ＳＢ450（第82図）

Ａ区南東端のＮＦ62・ＮＧ62区、ＮＧ63区に中心があり、地山面でＰ１～Ｐ９まで確認しピットの配列から掘立柱建物跡とした。Ｐ１でＳＢ440と切り合い、本遺構が旧い。梁行の東側が張り出し、対辺中央にはＳＫ408が存在するもののピットが存在しない可能性が高い。とすればＳＢ440と類似する。柱間は桁行３間×梁行２間で、それぞれ約8.3m×約５mである。主軸方向はN-74°-Wである。ピットは、大きいＰ５が長さ0.8m×幅0.7m、小さいＰ４が長さ0.65m×幅0.6mである。

ＳＢ453（第84図、図版38-１）

Ｂ区中央南東側のＮＪ62・63区に中心があり、地山面でＰ１～Ｐ10まで確認しピットの配列から掘立柱建物跡とした。Ｐ１はＳＤ399と切り合い、本遺構の方が旧い。柱間は桁行３間×梁行２間で、それぞれ8.7mと5.4mである。主軸方向はN-13°-Wである。梁行は南側が狭く、全体に台形状を呈するピットは、大きいＰ６が長さ0.96m×幅0.9m、小さいＰ２が長さ0.5m×幅0.43mである。

ＳＢ454（第84図、図版38-２）

Ｂ区中央南側のＮＪ62・63区に中心があり、地山面でＰ１～Ｐ10まで確認しピットの配列から掘立柱建物跡とした。桁行の南西側は、ＳＤ399やＳＫ425に切られ消失したピットもある。柱間は桁行４間×梁行２間で、それぞれ約9.2m×約５mである。主軸方向はN-50°-Wである。ピットは、大きいＰ６が長さ0.8m×幅0.5m、小さいＰ９が径0.5mである。

ＳＢ459（第83図）

Ｂ区中央北東側のＮＩ74区、ＮＪ75・76区に中心があり、地山面でＰ１～Ｐ14まで確認しピットの配列から掘立柱建物跡とした。桁行３間×梁行２間の建物の、桁行側にそれぞれ１間四方の建物が1つずつ取り付いた形態である。３間×２間の建物は南西側に迫り出した不整の長方形で、取り付いた建物も矩形を成す。前者の大きさは9.4m×6.6mである。主軸方向はN-38°-Wである。ピットは、大きいＰ１が長さ0.65m×幅0.57m、小さいＰ10が長さ0.5m×幅0.4mである。

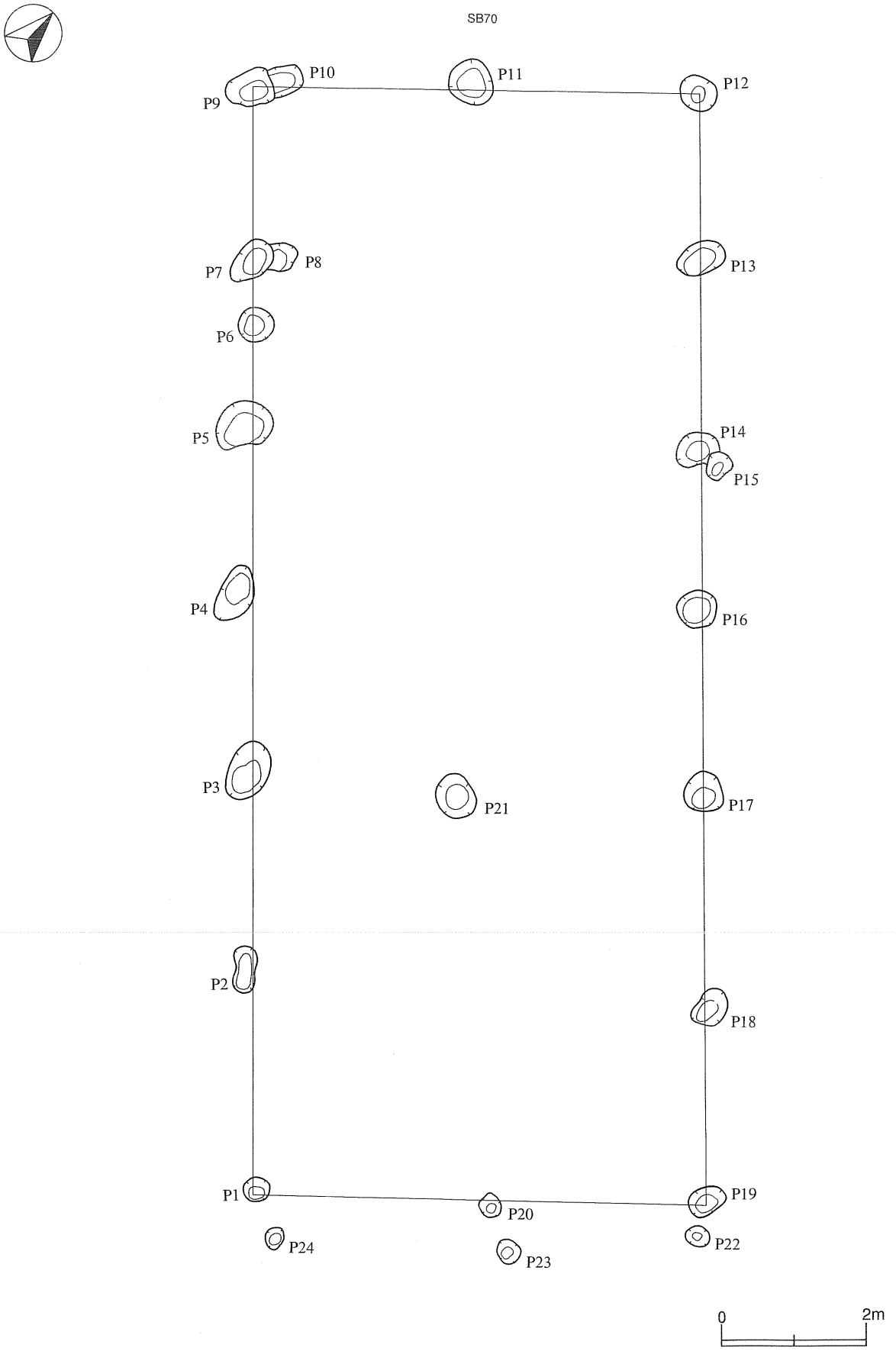
４　井戸

ＳＥ465（第85図、図版43-１・２）

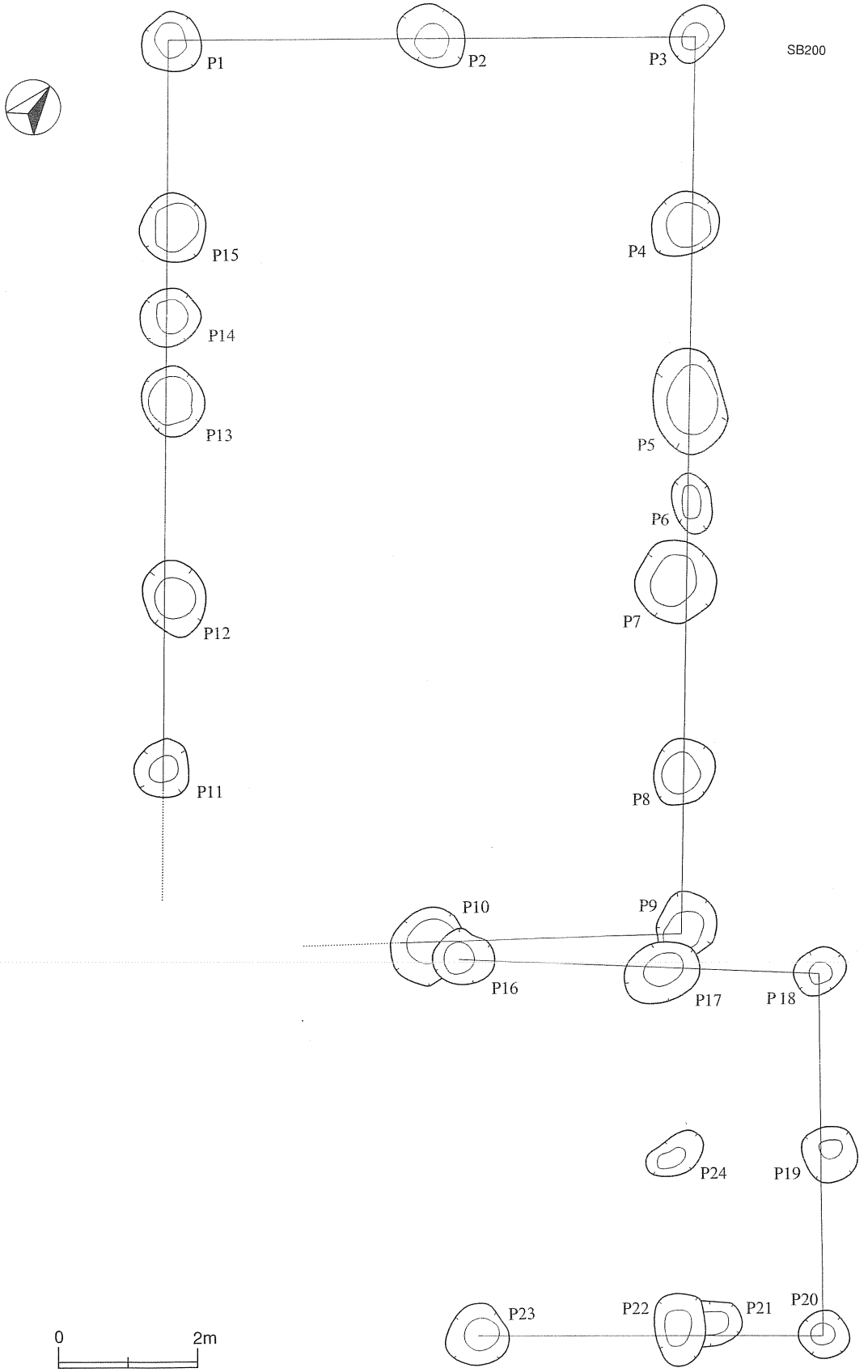
Ｃ区南東地区のＯＫ83区にあり、地山面で確認した。大きな楕円形の黒褐色土の広がりに、小規模な黒色土の楕円形プランが重複するように検出された。平面形は上端が不整の楕円形で、底面及び底から0.4～0.45m上位の段では隅丸長方形状を呈する。規模は、長さ3.35m×幅2.45m、深さ1.7mである。底面は長さ1.3m×幅1.1m、その上では長さ1.35m×幅1.6mである。壁は底部から段までが垂直で、段は0.25～0.3mのテラス状部分となっており、そこから上端まで緩やかに立ち上がる。底面の四隅には、厚さ5㎜前後の杉と思われる尖った材を差し込んでいる。西側隅には、幅15㎜内外、厚さが1.5㎜前後の板端が出土した。湧水が激しいため常に水かきが必要であったが、そのために下部の断面が崩壊した。

５　土坑

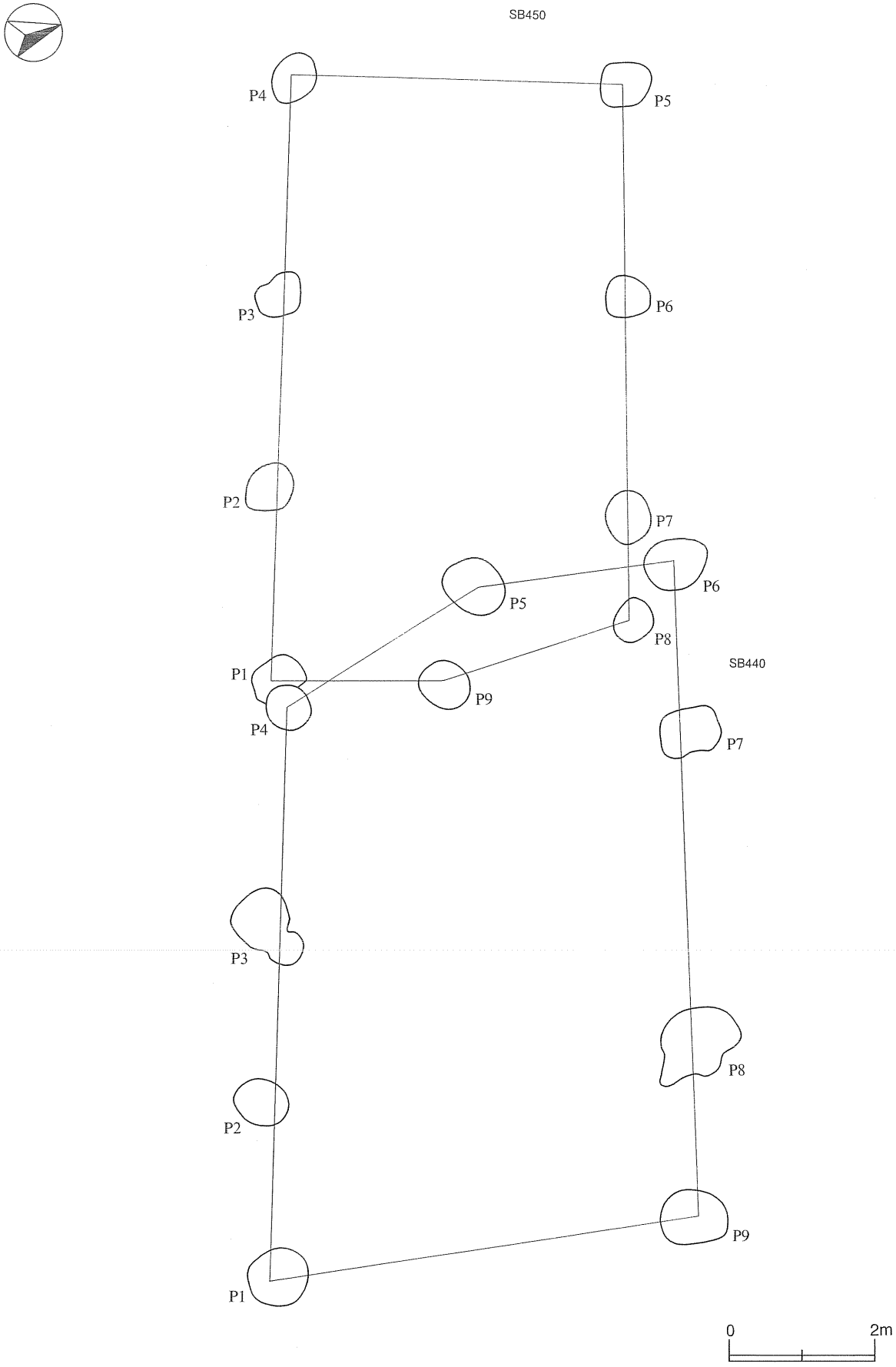
ＳＫ04（第86図、図版39-1・2）



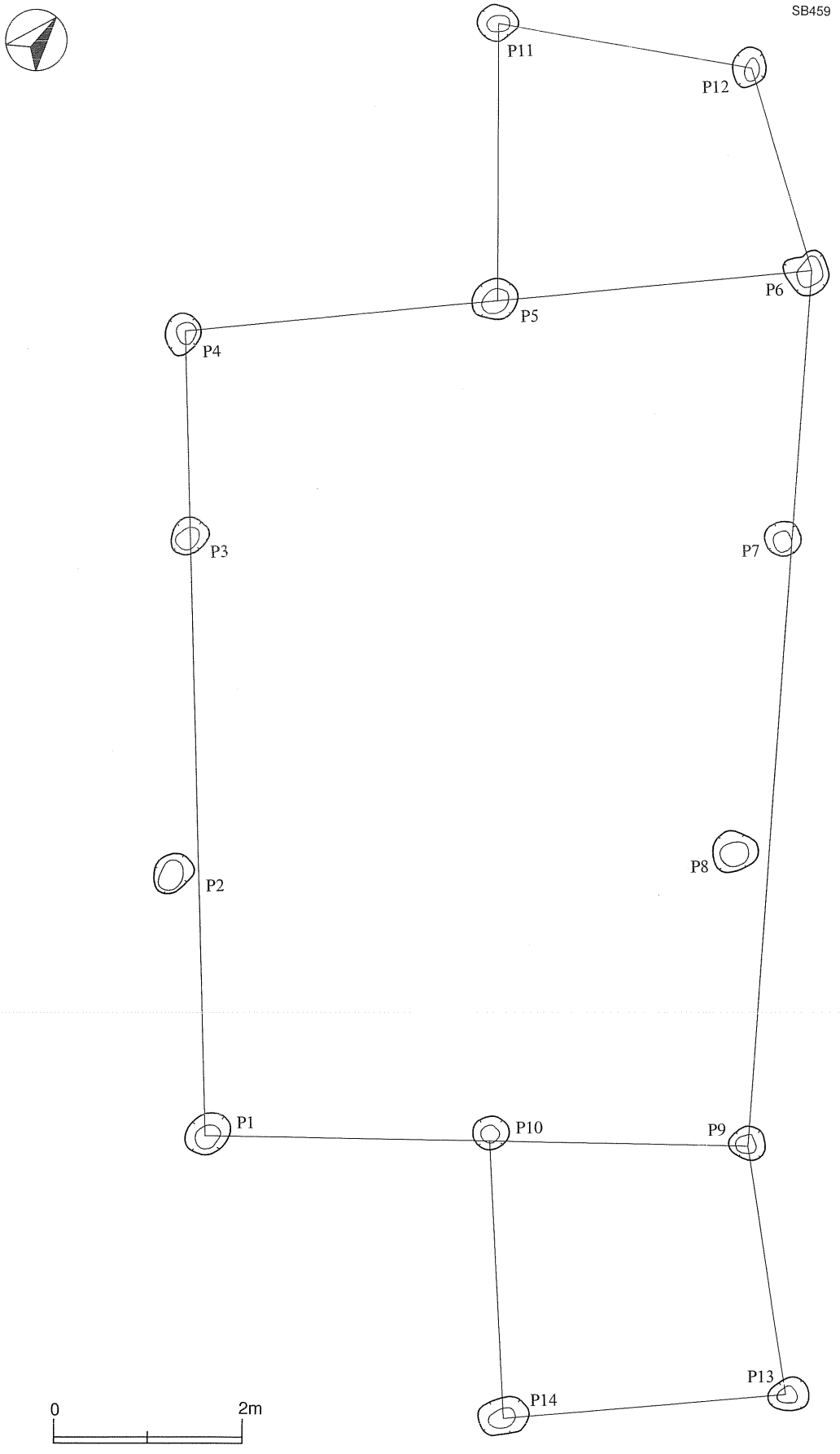
第80図　掘立柱建物跡（１）古代①ＳＢ70



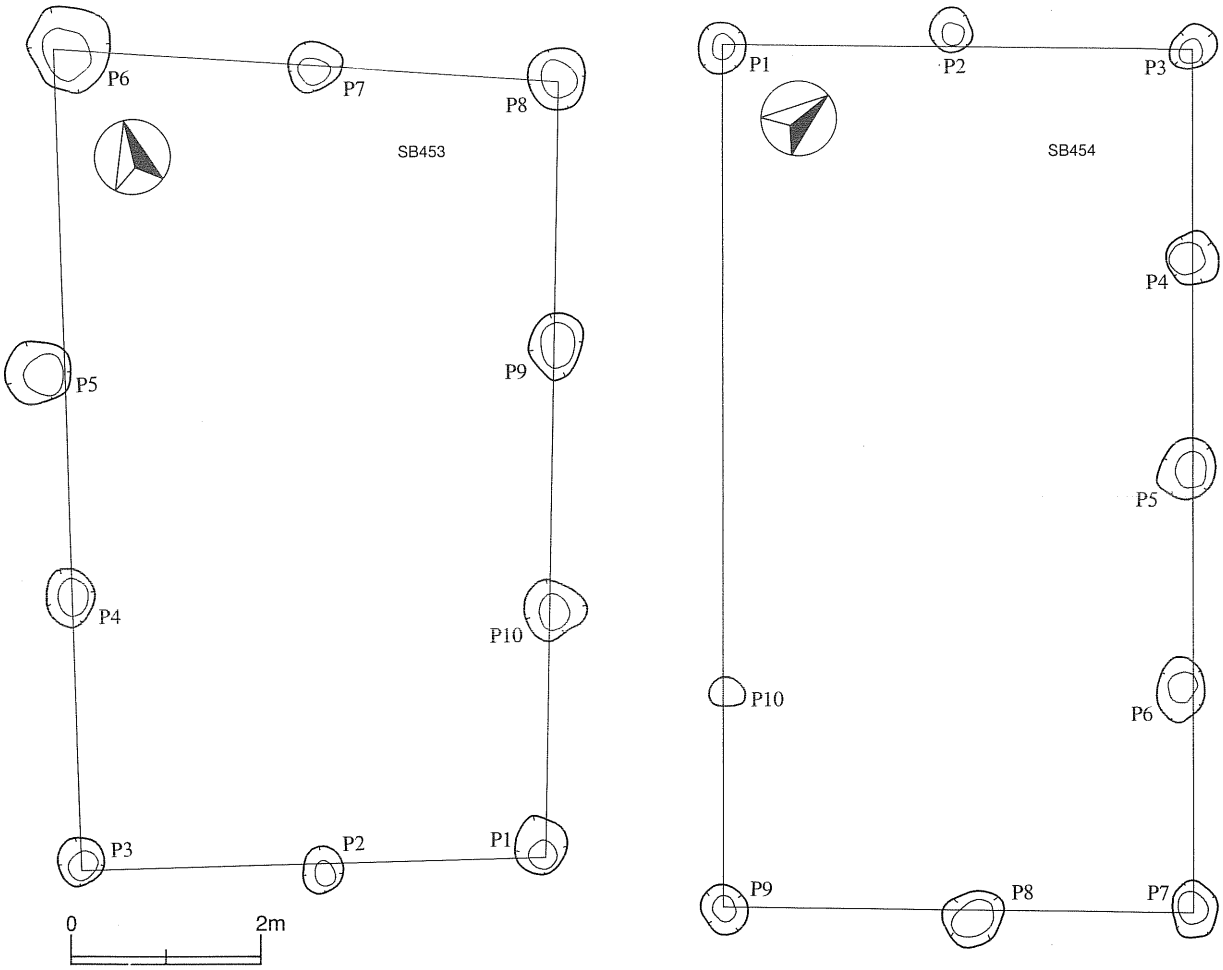
第81図　掘立柱建物跡（２）古代②ＳＢ200



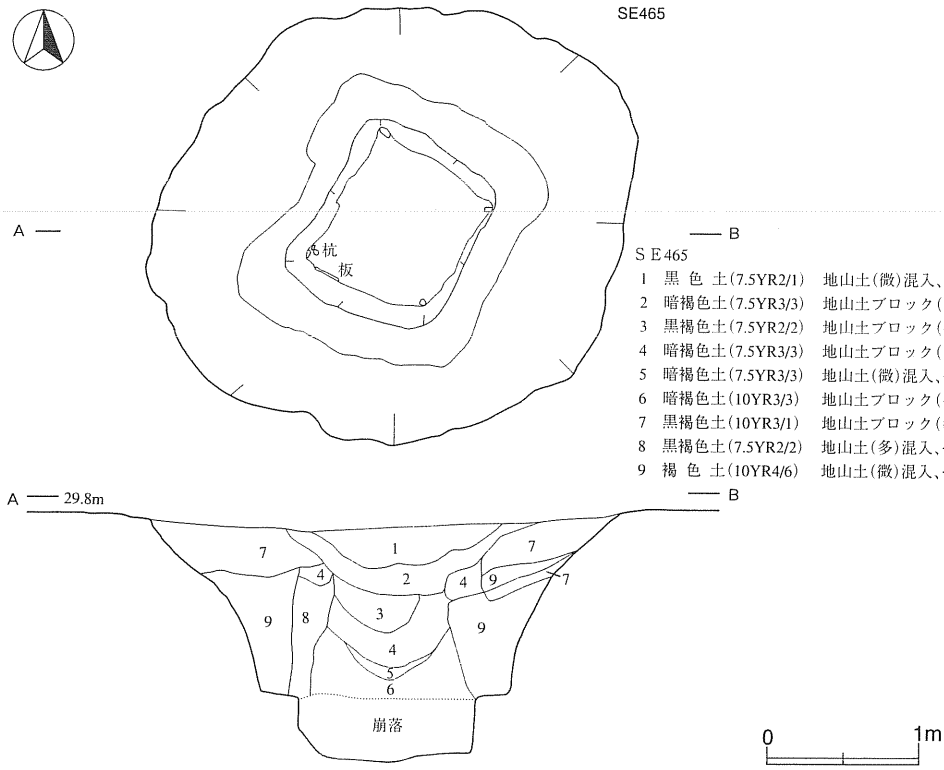
第82図　掘立柱建物跡（３）古代③ＳＢ440・450



第83図　掘立柱建物跡（４）古代④ＳＢ459



第84図　掘立柱建物跡（５） 古代⑤ＳＢ453･454



ＳＥ465

1	黒　色　土(7.5YR2/1)	地山土(微)混入、やや固質。
2	暗褐色土(7.5YR3/3)	地山土ブロック(少)混入、やや固質。
3	黒褐色土(7.5YR2/2)	地山土ブロック(少)混入、やや固質。
4	暗褐色土(7.5YR3/3)	地山土ブロック(多)混入、固質。
5	暗褐色土(7.5YR3/3)	地山土(微)混入、やや固質。
6	暗褐色土(10YR3/3)	地山土ブロック(多)混入、固質。
7	黒褐色土(10YR3/1)	地山土ブロック(多)混入、固質。
8	黒褐色土(7.5YR2/2)	地山土(多)混入、やや軟質。
9	褐　色　土(10YR4/6)	地山土(微)混入、やや固質。

第85図　井戸 古代ＳＥ465

Ａ区西端のＮＢ61区にあり、地山面で確認した。平面形は不整の楕円形で、規模は長さ2.03m×幅1.47m、深さ0.3mである。壁は湾曲して立ち上がり、西側床面は東側床面よりも0.25m窪んでいる。東側床面には凹凸がある。

ＳＫ44（第86図、図版39-３）

Ａ区西側のＭＰ・ＭＱ57区にあり、地山面で確認した。平面形は隅丸方形状で、規模は長さ1.55m×幅1.48m、深さ0.35mである。壁は湾曲して直立し、床面には細かな凹凸がある。

ＳＫ102（第86図、図版39-４）

Ａ区中央やや西側のＭＡ48区にあり、地山面で確認した。平面形は不整形で、規模は長さ1.82m×幅1.6mである。壁は南西側が緩く傾斜し、北西側は直立気味に立ち上がる。床面は中央部が最も低く、端部はやや高くなる。

ＳＫ116（第86図、図版39-５・６）

Ａ区中央やや西側のＭＣ44区にあり、地山面で確認した。北東部と東部が攪乱を受けている。平面形は隅丸長方形状で、規模は長さ2.28m×幅1.88、深さ0.36mである。壁は、南西側で直立気味に立ち上がり、北東側では緩い傾斜を示す。底面は、中央やや南西寄りが最も高い。

ＳＫ123（第87図、図版39-７）

Ａ区中央やや西側のＭＡ・ＭＢ44区にあり、地山面で確認した。平面形はやや不整の楕円形で、規模は長さ1.96m×幅1.17m、深さ0.46mである。壁はやや緩く立ち上がり、底面には僅かに凹凸がある。床面東寄りは最も高く、東西に傾斜している。

ＳＫ124（第87図、図版39-８）

Ａ区中央やや西側のＭＢ46区にあり、地山面で確認した。平面形はやや不整の楕円形で、規模は長さ1.6m×幅1.13m、深さ0.23mである。壁は直立気味に立ち上がり、他はやや緩い傾斜を示す。底面はほぼ平坦である。

ＳＫ126（第87図、図版40-１）

Ａ区中央やや西側のＭＡ46区にあり、地山面で確認した。平面形は不整の楕円形で、規模は長さ3.3m×幅3.15mである。壁は、南東側で湾曲し直立気味に立ち上がり、他は緩い傾斜を示す。底面は中央やや西側で最も高く、中央やや南側が最も低い。円形の竪穴状遺構にすべきかもしれない。

ＳＫ129（第88図）

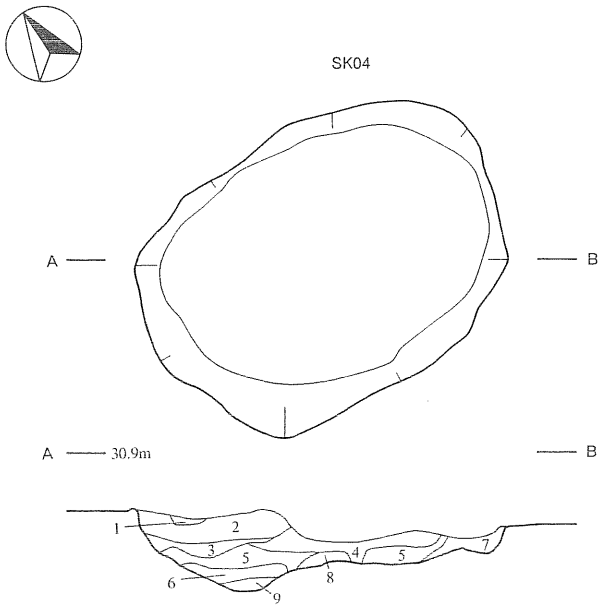
Ａ区中央やや西側のＬＴ45区にあり、地山面で確認した。平面形は不整の楕円形で、規模は長さ1.05m×幅0.81mである。壁は直立気味に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

ＳＫ366（第88図、図版40-２）

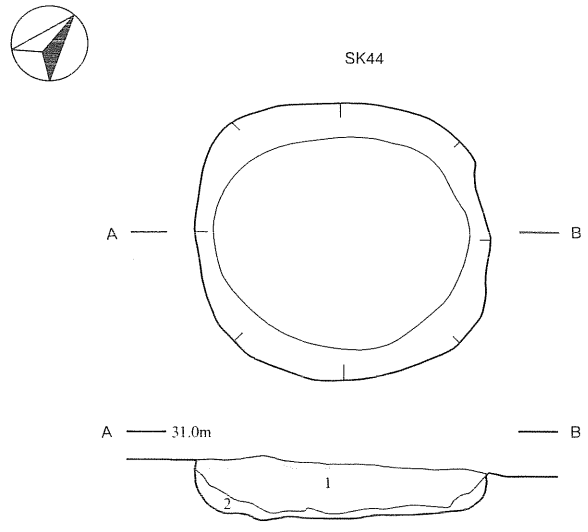
Ｂ区南東端のＮＥ63区にあり、地山面で確認した。平面形は不整の楕円形で、規模は長さ1.21m×幅0.95mである。壁は、北西側で湾曲し直立気味の立ち上がり、他は直線的に直立気味に立ち上がる。底面は中央やや南東寄りが最も低く、凹凸が激しい。

ＳＫ367（第88図、図版40-３）

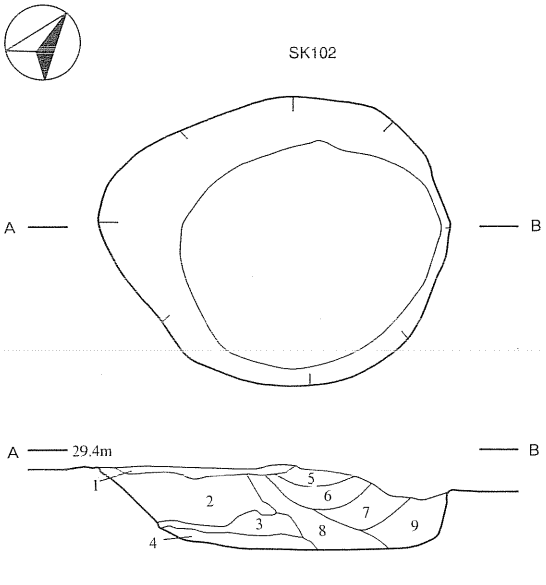
Ｂ区南東端のＮＩ61区にあり、地山面で確認した。新しいピットに切られている。平面形は楕円形と推定され、規模は長さ推定0.8m×幅0.64m、深さ推定0.45mである。壁は湾曲し直立気味に立ち上がり、底面は湾曲する。



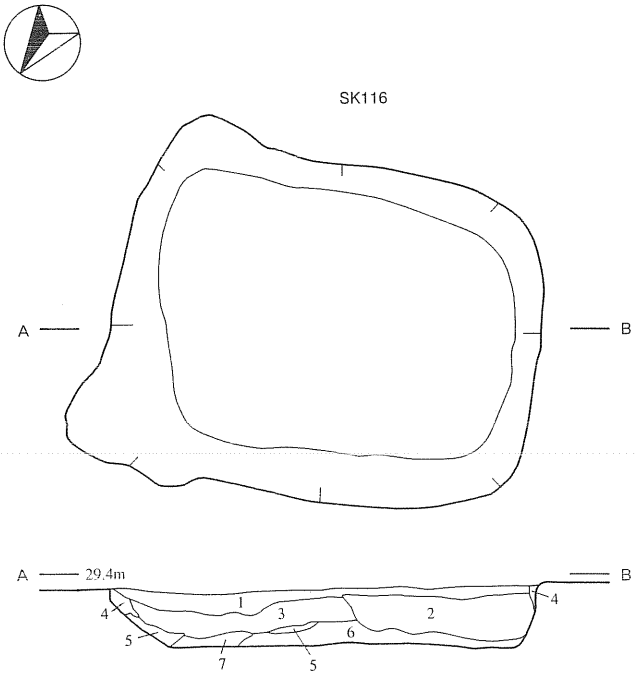
ＳＫ04
1　暗褐色土(10YR3/4)　シルト、地山土混入、やや固質。
2　黒褐色土(10YR3/2)　シルト、炭化物・地山土混入、やや軟質。
3　褐　色　土(10YR4/4)　粘土～シルト、地山土混入、やや軟質。
4　暗褐色土(10YR3/3)　シルト、炭化物・地山土混入、軟質。
5　黒褐色土(10YR2/3)　シルト、炭化物・地山土混入、軟質。
6　黄褐色土(10YR5/8)　粘土、固質。
7　褐　色　土(10YR4/4)　粘土～シルト、地山土混入、やや固質。
8　黒褐色土(10YR2/3)　粘土～シルト、地山土混入、軟質。
9　黄褐色土(10YR5/6)　粘土、やや軟質。



ＳＫ44
1　暗褐色土(10YR3/3)　シルト、地山土混入、やや固質。
2　黄褐色土(10YR5/8)　粘土、地山土混入、固質。



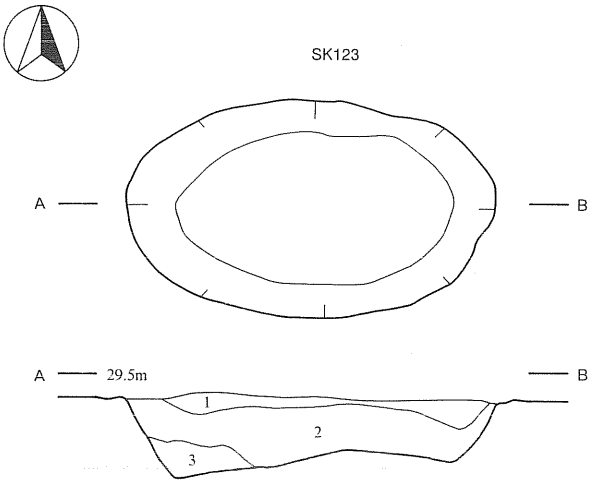
ＳＫ102
1　黒褐色土(10YR2/3)　シルト～砂、焼土混入、やや軟質。
2　暗褐色土(10YR3/3)　シルト～砂、炭化物・焼土・地山土混入、軟質。
3　暗褐色土(10YR3/3)　シルト、炭化物・地山土混入、やや固質。
4　黒褐色土(10YR3/2)　シルト、地山土混入、やや軟質。
5　赤　色　土(10R4/8)　シルト～砂、焼土混入、固質。
6　暗褐色土(10YR3/4)　シルト～砂、地山土混入、やや軟質。
7　暗褐色土(10YR3/4)　シルト、固質。
8　黄褐色土(10YR4/3)　シルト～砂、やや固質。
9　褐　色　土(10YR4/4)　シルト～砂、やや軟質。



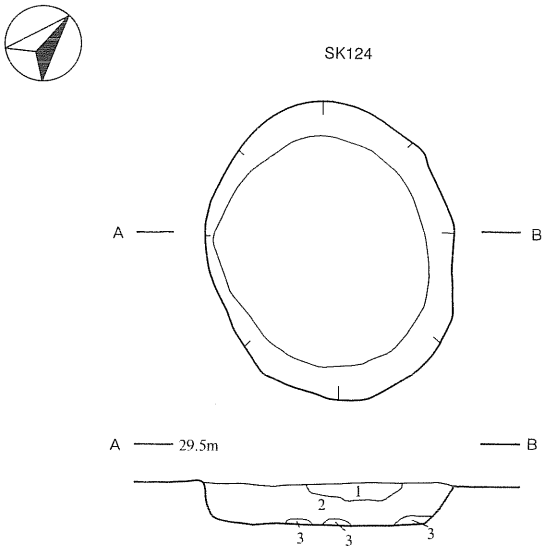
ＳＫ116
1　暗褐色土(10YR3/4)　粘土～シルト、炭化物・焼土混入、やや固質。
2　黒褐色土(10YR2/3)　粘土～シルト、炭化物・焼土混入、やや軟質。
3　暗褐色土(10YR3/4)　粘土～シルト、地山土混入、やや固質。
4　黒褐色土(10YR2/2)　粘土～シルト、地山土混入、やや軟質。
5　暗褐色土(10YR3/3)　粘土～シルト、炭化物混入、軟質。
6　褐　色　土(10YR4/4)　粘土、焼土・地山土混入、固質。
7　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　粘土、焼土・地山土混入、固質。

0　1m

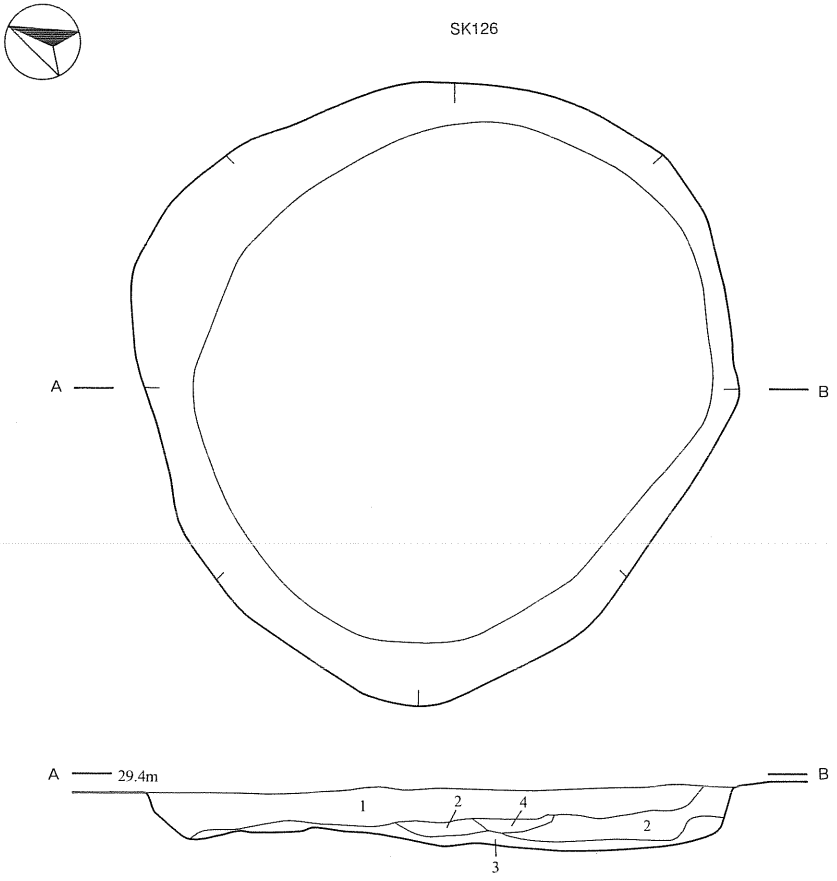
第86図　土坑(19)　古代①ＳＫ04・44・102・116



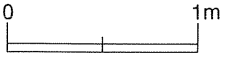
ＳＫ123
1　暗褐色土(10YR3/3)　粘土～シルト、炭化物・焼土混入、固質。
2　褐　色　土(10YR4/6)　粘土、地山土混入、固質。
3　褐　色　土(10YR4/6)　粘土、地山土混入、やや軟質。



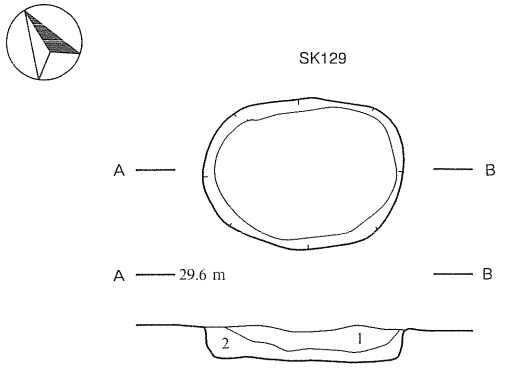
ＳＫ124
1　暗褐色土(10YR3/3)　シルト、炭化物・焼土・地山土混入、やや固質。
2　暗褐色土(10YR3/4)　シルト、地山土混入、やや軟質。
3　褐　色　土(10YR4/6)　粘土、地山土混入、固質。



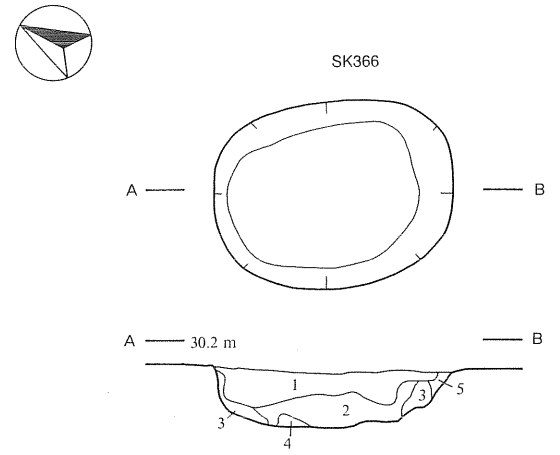
ＳＫ126
1　暗褐色土(10YR3/4)　シルト～砂、地山土混入、やや軟質。
2　褐　色　土(10YR4/6)　シルト、焼土・地山土混入、やや軟質。
3　暗褐色土(10YR3/3)　シルト、地山土混入、やや固質。
4　赤　色　土(10R4/6)　シルト、焼土混入、やや固質。



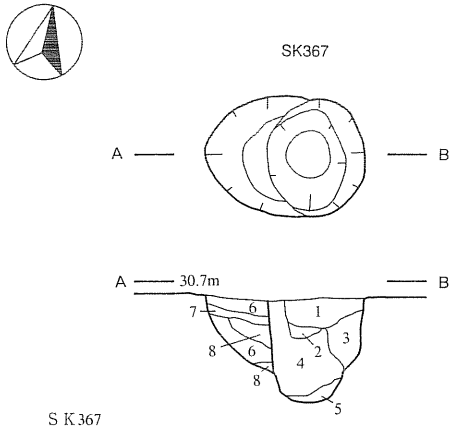
第87図　土坑(20)　古代②ＳＫ123・124・126



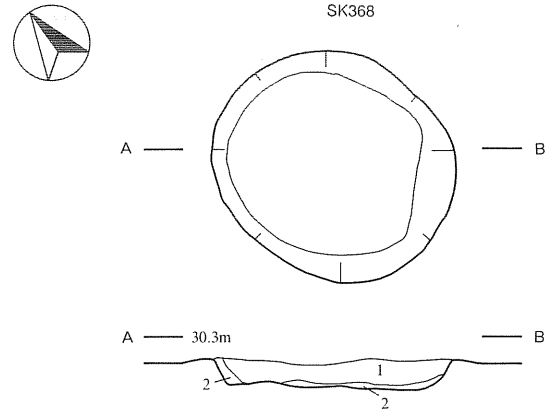
ＳＫ129
1　暗褐色土(10YR3/4)　粘土～シルト、地山土混入、やや軟質。
2　褐　色　土(10YR4/4)　粘土～シルト、地山土混入、やや固質。



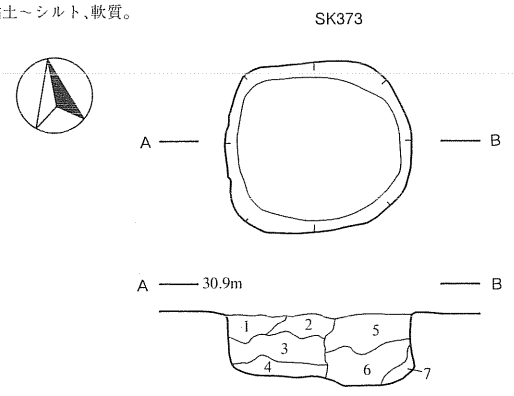
ＳＫ366
1　黒褐色土(10YR3/2)　シルト、焼土混入、やや軟質。
2　黄橙色土(10YR8/6)　粘土～シルト、焼土(多)混入、やや軟質。
3　褐灰色土(10YR4/1)　粘土、地山土混入、やや軟質。
4　にぶい黄褐色土(10YR5/4)　砂、やや軟質。
5　暗褐色土(10YR3/3)　地山土混入、やや固質。



ＳＫ367
1　黒 褐 色 土(10YR2/3)　粘土～シルト、地山土混入、やや軟質。
2　黒 褐 色 土(10YR2/3)　粘土～シルト、地山土(多)混入、やや固質。
3　黒 褐 色 土(10YR2/3)　粘土～シルト、地山土(少)混入、やや固質。
4　黒 褐 色 土(10YR2/2)　粘土～シルト、地山土(少)混入、軟質。
5　褐 灰 色 土(10YR4/1)　粘土～シルト、地山土(多)混入。
6　灰黄褐色土(10YR4/2)　粘土～シルト、地山土(多)混入、固質。
7　黒　色　土(10YR2/1)　粘土～シルト、地山土(少)混入、やや軟質。
8　黒　色　土(10YR2/1)　粘土～シルト、軟質。



ＳＫ368
1　黒 褐 色 土(10YR3/2)　粘土～シルト、焼土・炭化物混入、やや軟質。
2　灰黄褐色土(10YR4/2)　粘土、地山土混入、固質。



ＳＫ373
1　暗 褐 色 土(10YR3/3)　粘土～シルト、地山土(多)混入、やや固質。
2　黒 褐 色 土(10YR3/2)　シルト、地山土(中)混入、やや軟質。
3　黒 褐 色 土(10YR3/2)　粘土～シルト、地山土(多)混入、やや軟質。
4　褐　色　土(10YR4/6)　粘土、地山土(多)混入、固質。
5　黒 褐 色 土(10YR2/3)　シルト、焼土(微)・炭化物(少)・地山土(少)混入、軟質。
6　黒 褐 色 土(10YR3/1)　シルト、軟質。
7　灰黄褐色土(10YR4/2)　粘土～シルト、地山土(多)混入、やや軟質。

0　1m

第88図　土坑(21)　古代③ＳＫ129・366～368・373

ＳＫ368（第88図、図版40－４）

Ｂ区南東端のＮＪ59区にあり、地山面で確認した。平面形は楕円形で、規模は長さ1.3m×幅1.14mである。壁はやや緩く立ち上がる。底面には凹凸があり南側が最も低い。

ＳＫ372（第65図）

Ｂ区南東端のＮＨ60・61区にあり、地山面で確認した。北側がＳＩ362と重複し、本遺構が新しい。平面形は隅丸方形状で、規模は一辺約0.92m、深さ0.45mである。壁は湾曲して立ち上がり、底面は中央部が盛り上がる。

ＳＫ373（第88図）

Ｂ区南東端のＮＩ59区にあり、地山面で確認した。平面形は方形状の不整形で、規模は長さ0.99m×幅0.92m、深さ0.39mである。壁は湾曲し、直立気味に立ち上がる。底面は東側が最も低い。

ＳＫ376（第89図、図版40－５・６）

Ｂ区南東端のＮＧ・ＮＨ63区にあり、地山面で確認した。平面形は不整形で、規模は長さ1.94m×幅1.64m、深さ0.25m（最深部）である。断面は西側の壁が段を形成し、東側はやや直立気味に立ち上がる。底面は全体的にほぼ平坦で、中央やや東寄りが緩く窪んでいる。

ＳＫ378（第89図、図版40－７・８）

Ｂ区南東端のＮＩ62区にあり、地山面で確認した。北側と南東側が、新しいピットに切られている。平面形は不整の楕円形で、規模は長さ2.64m×幅1.9m、深さ0.26mである。壁は南側が直立気味に立ち上がり、この他は緩い傾斜を示す。底面は凹凸が著しい。

ＳＫ379（第89図）

Ｂ区南東端のＮＧ63区にあり、地山面で確認した。平面形は不整形で、規模は長さ0.77m×幅0.72m、深さ0.2mである。壁は湾曲して緩く立ち上がり、底面も湾曲する。

ＳＫ383（第89図、図版41－１・２）

Ｂ区中央のＮＬ72区にあり、地山面で確認した。ＳＫ489と重複し、本遺構が新しい。平面形は不整形で、規模は長さ1.52m×幅1.12m、深さ0.36mである。壁は北西側で緩く立ち上がり、南側では湾曲して直立気味に立ち上がる。

ＳＫ386（第90図、図版41－５）

Ｂ区南東端のＮＣ・ＮＤ63区にあり、地山面で確認した。ＳＫ387と重複し本遺構が新しい。平面形は不整形で、規模は長さ1.5m×幅1.33m、深さ0.25mである。壁は南側で緩く立ち上がり、北側ではやや緩い傾斜を示す。底面は中央が最も深く、北西側は段階的に高くなる。

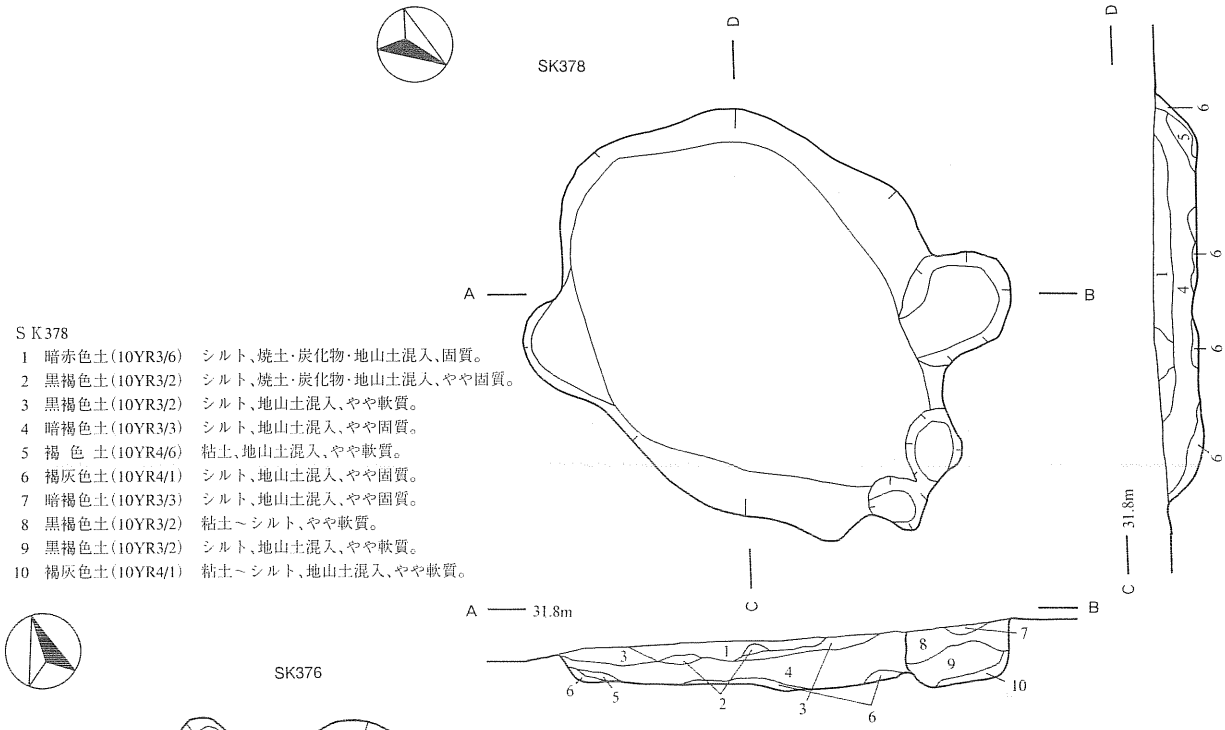
ＳＫ387（第90図、図版41－５）

Ｂ区南端のＮＤ63区にあり、地山面で確認した。ＳＫ386と重複し本遺構が旧い。平面形は隅丸正方形状で、規模は長さ約1.41m、深さ0.17mである。壁は直立気味に立ち上がり、底面には凹凸がある。

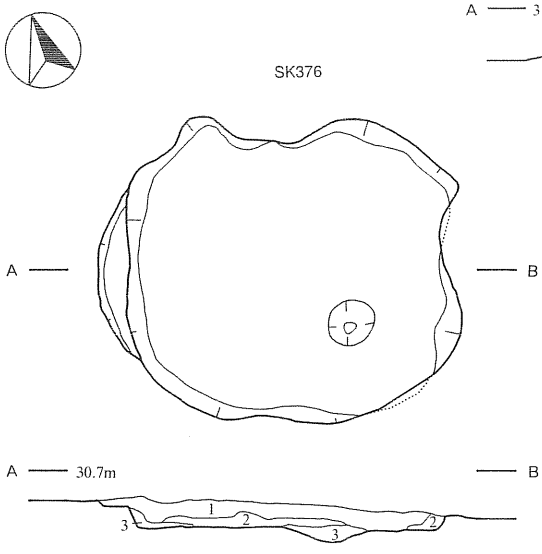
ＳＫ388（第90図、図版41－３・４）

Ｂ区中央やや北側のＮＬ・ＮＭ76区にあり、地山面で確認した。ＳＫ389と重複し本遺構が旧い。平面形は不整形で、規模は推定長さ1.6m×幅1.43m、深さ0.3mである。壁は西側が直立気味に立ち上がり、東側ではやや緩く傾斜する。底面には凹凸がある。

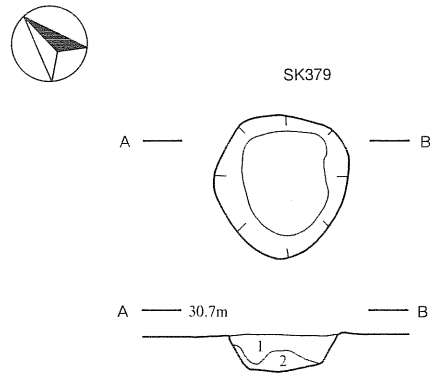
ＳＫ389（第90図、図版41－４、48）



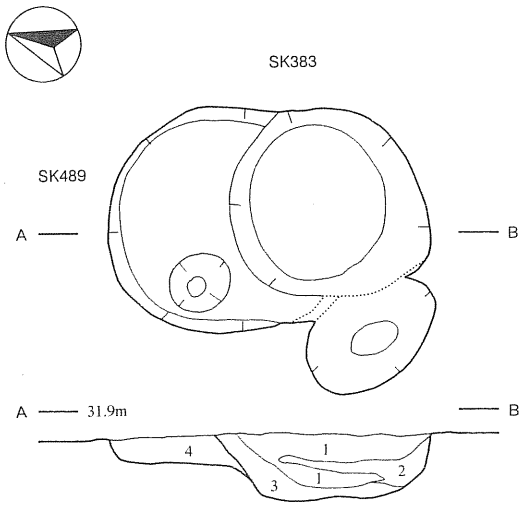
ＳＫ378
1　暗赤色土(10YR3/6)　シルト、焼土・炭化物・地山土混入、固質。
2　黒褐色土(10YR3/2)　シルト、焼土・炭化物・地山土混入、やや固質。
3　黒褐色土(10YR3/2)　シルト、地山土混入、やや軟質。
4　暗褐色土(10YR3/3)　シルト、地山土混入、やや固質。
5　褐　色　土(10YR4/6)　粘土、地山土混入、やや軟質。
6　褐灰色土(10YR4/1)　シルト、地山土混入、やや固質。
7　暗褐色土(10YR3/3)　シルト、地山土混入、やや固質。
8　黒褐色土(10YR3/2)　粘土～シルト、やや軟質。
9　黒褐色土(10YR3/2)　シルト、地山土混入、やや軟質。
10　褐灰色土(10YR4/1)　粘土～シルト、地山土混入、やや軟質。



ＳＫ376
1　暗褐色土(10YR3/3)　粘土～シルト、焼土(少)・炭化物・地山土混入、固質。
2　褐灰色土(10YR4/1)　シルト、地山土混入、やや軟質。
3　褐灰色土(10YR5/1)　粘土、地山土混入、やや固質。



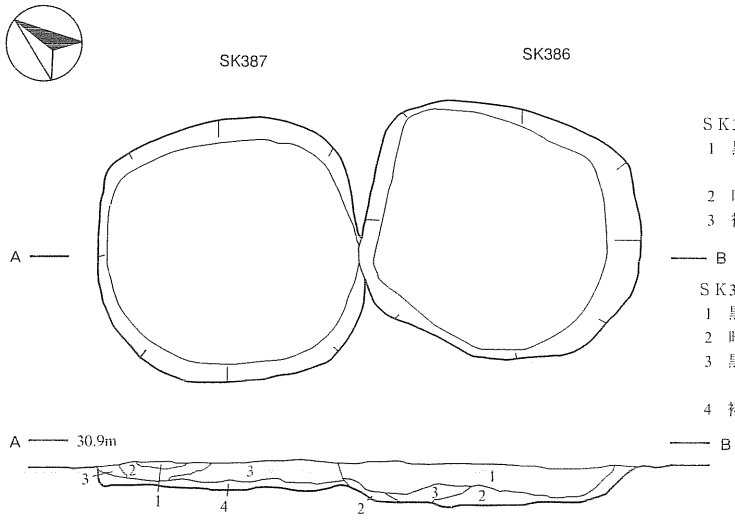
ＳＫ379
1　黒褐色土(10YR3/2)　シルト、地山土混入、やや固質。
2　褐　色　土(10YR4/6)　粘土～シルト、地山土混入、やや固質。



ＳＫ383
1　黒褐色土(10YR3/1)　シルト、炭化物・地山土混入、固質。
2　褐灰色土(10YR4/1)　粘土～シルト、地山土混入、軟質。
3　暗褐色土(10YR3/3)　粘土～シルト、焼土混入、やや固質。
4　黒褐色土(10YR2/2)　シルト、固質。

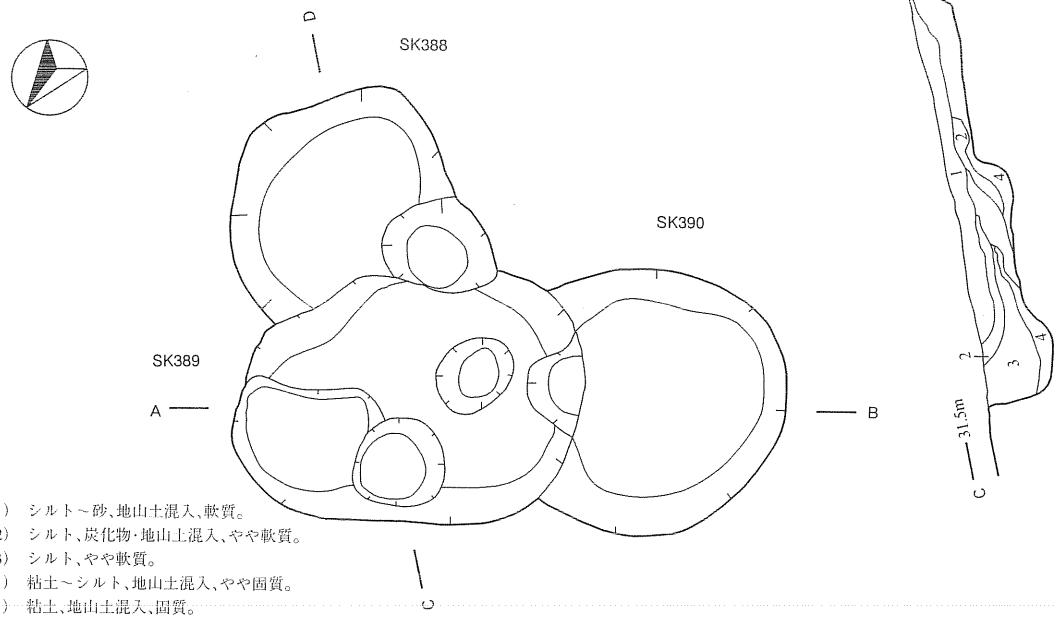
0　1m

第89図　土坑(22)　古代④ＳＫ376・378・379・383

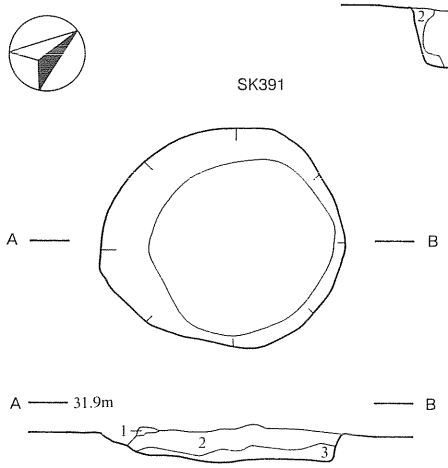


ＳＫ386
1　黒褐色土(10YR3/2)　粘土～シルト、炭化物(少)・地山土(少)混入、やや軟質。
2　暗褐色土(10YR3/3)　粘土、地山土(少)混入、やや軟質。
3　褐灰色土(10YR4/1)　粘土、地山土(中)混入、やや固質。

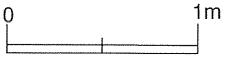
ＳＫ387
1　黒褐色土(10YR3/2)　シルト、固質。
2　暗赤色土(10YR3/6)　粘土～シルト、焼土・炭化物混入、やや軟質。
3　黒褐色土(10YR3/2)　粘土～シルト、焼土(少)・炭化物(少)混入、やや軟質。
4　褐　色　土(10YR4/6)　粘土、地山土混入、軟質。



ＳＫ388・389・390
1　黒褐色土(10YR3/1)　シルト～砂、地山土混入、軟質。
2　黒褐色土(10YR3/2)　シルト、炭化物・地山土混入、やや軟質。
3　暗褐色土(10YR3/3)　シルト、やや軟質。
4　褐灰色土(10YR4/1)　粘土～シルト、地山土混入、やや固質。
5　褐灰色土(10YR5/1)　粘土、地山土混入、固質。



ＳＫ391
1　赤　色　土(10R4/8)　粘土～シルト、焼土混入、固質。
2　黒 褐 色 土(10YR3/2)　シルト、焼土・地山土混入、やや固質。
3　灰黄褐色土(10YR4/2)　粘土、地山土混入、やや固質。



第90図　土坑(23)　古代⑤ＳＫ386～391

Ｂ区中央やや北側のＮＬ76区にあり、地山面で確認した。ＳＫ388･390と重複し、土坑では本遺構が最も新しい。平面形は不整の楕円形と考えられ、規模は長さ2.5m×幅1.34m、深さ0.39mである。壁は、北東側が直立気味に立ち上がり、南西側では緩い傾斜を示す。底面の北東と南西側には、中央部が最も低い浅く窪んだ落ち込みをもつ。

ＳＫ390（第90図、図版41-３）

Ｂ区中央やや北側のＮＬ76区にあり、地山面で確認した。ＳＫ389と重複し本遺構が旧い。平面形は不整の楕円形で、規模は推定長さ1.4m×推定幅1.2mである。壁は緩く立ち上がり、底面は平坦である。

ＳＫ391（第90図、図版41-６）

Ｂ区南東端のＮＥ58区にあり、地山面で確認した。平面形は不整の楕円形で、規模は長さ1.27m×幅1.16m、深さ0.2mである。壁は東側が直立気味に立ち上がり、南西側では緩い傾斜を示す。底面には緩い凹凸があり、東端の立ち上がり部分は角張っている。

ＳＫ407（第91図、図版41-７）

Ｂ区中央のＮＪ・ＮＫ71区にあり、地山面で確認した。平面形は不整の隅丸長方形状で、規模は長さ2.45m×幅1.05m、深さ0.36mである。北側には、浅く緩やかな不整形の落ち込みを伴う。壁は直立気味に立ち上がり、底面はほぼ平坦で南側に緩く傾斜する。

ＳＫ408（第91図）

Ｂ区南東のＮＨ63区にあり、地山面で確認した。平面形は楕円形で、規模は長さ1.29m×幅1.15m、深さ0.4mである。壁は、南側を除いて直立気味に立ち上がり、底面は中央部で最も低い。

ＳＫ409（第91図、図版41-８）

Ｂ区南東のＮＨ63区にあり、地山面で確認した。平面形はやや不整の楕円形で、規模は長さ1.47m×幅0.97m、深さ0.26mである。壁は、北西側を除いて緩く立ち上がる。底面は東壁際が最も低く、西側に向かって徐々に角度を増す。

ＳＫ411（第91図、図版42-１）

Ｂ区中央のＮＪ69･70区にあり、地山面で確認した。平面形は隅丸の平行四辺形状で、規模は長さ2.46m×幅1.02m、深さ0.7mである。壁は直立気味に立ち上がり、底面は中央部が最も低い。底面には凹凸がある。規模は、長さ2.46m×幅1.02m、深さ0.7mである。

ＳＫ414（第91図、図版42-２）

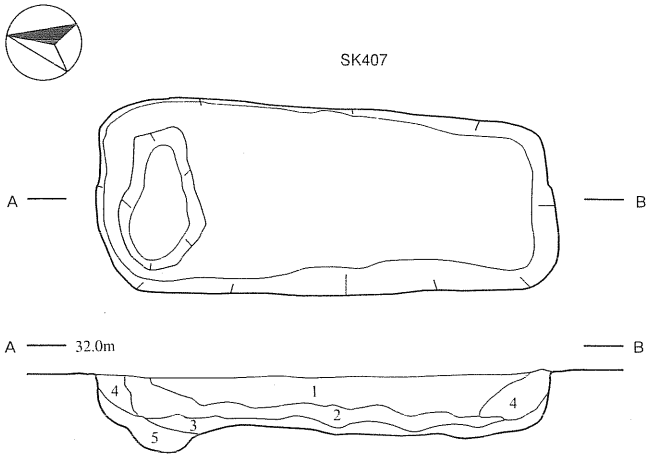
Ａ・Ｂ区の境ＮＤ・ＮＥ58区にあり、地山面で確認した。平面形は不整の楕円形で、規模は長さ1.48m×幅1.31m、深さ0.22mである。壁は北東側が直立気味に立ち上がり、南西側は緩い傾斜を示す。

ＳＫ415（第92図、図版42-３）

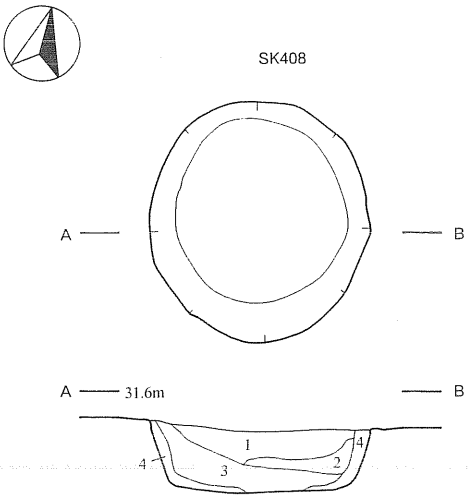
Ｂ区南東端のＮＨ59区にあり、地山面で確認した。ＳＫ416と重複し本遺跡が新しい。平面形はやや不整の楕円形で、規模は長さ1.06m×幅1m、深さ0.29mと0.51m（最深部）である。壁は直立気味に立ち上がり、底面は平坦な東側から最も低い西側に傾く。

ＳＫ416（第92図、図版42-３）

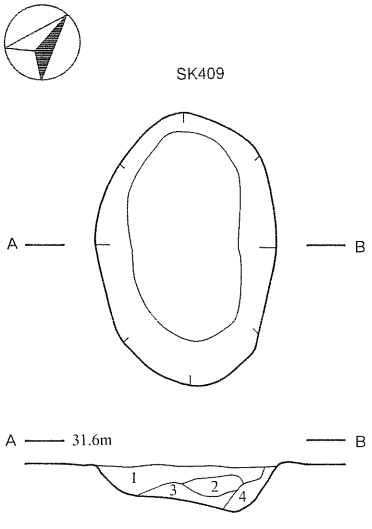
Ｂ区南東端のＮＧ・ＮＨ59区にあり、地山面で確認した。ＳＫ415と重複し本遺構が旧い。平面形は不整の楕円形で、規模は長さが1m×幅0.9m、深さ0.16mである。壁はやや緩く立ち上がり、底面には凹凸があり中央部が最も低い。



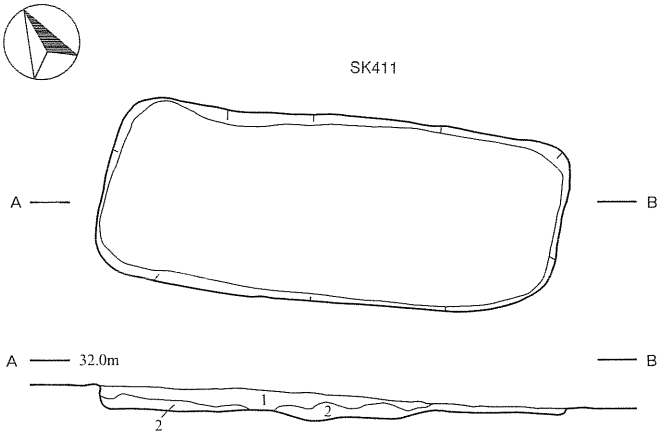
ＳＫ407
1　黒褐色土(10YR3/2)　シルト～砂、炭化物・地山土混入、やや軟質。
2　黒褐色土(10YR3/1)　シルト、固質。
3　黒　色　土(10YR2/1)　シルト、やや軟質。
4　褐灰色土(10YR4/1)　粘土～シルト、地山土混入、やや固質。
5　褐灰色土(10YR5/1)　粘土～シルト、地山土混入、やや固質。



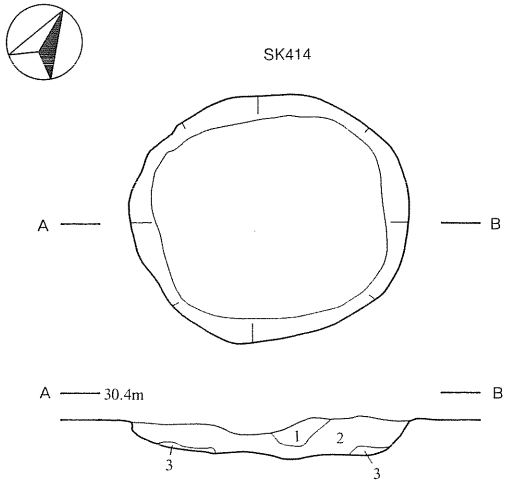
ＳＫ408
1　黒褐色土(10YR3/2)　シルト、炭化物・地山土混入、やや固質。
2　黒褐色土(10YR2/3)　粘土～シルト、地山土混入、軟質。
3　黒　色　土(10YR2/1)　シルト、地山土混入、軟質。
4　暗褐色土(10YR3/3)　粘土～シルト、地山土混入、軟質。



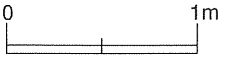
ＳＫ409
1　褐灰色土(10YR4/1)　シルト、地山土(少)混入、やや軟質。
2　褐灰色土(10YR4/1)　シルト、地山土混入、軟質。
3　褐灰色土(10YR4/1)　粘土～シルト、炭化物・地山土混入、やや軟質。
4　褐　色　土(10YR4/6)　粘土～シルト、地山土混入、固質。



ＳＫ411
1　黒褐色土(10YR3/1)　シルト、焼土混入、やや固質。
2　暗褐色土(10YR3/4)　粘土～シルト、炭化物混入、固質。



ＳＫ414
1　黒褐色土(10YR3/2)　粘土～シルト、炭化物・地山土混入、やや固質。
2　黒褐色土(10YR3/2)　粘土～シルト、焼土・地山土混入、やや軟質。
3　褐　色　土(10YR4/6)　粘土、地山土混入、やや軟質。



第91図　土坑(24)　古代⑥ＳＫ407～409・411・414

ＳＫ417（第92図、図版42-４）

Ｂ区南東端のＮＩ61･62区にあり、地山面で確認した。平面形は不整の楕円形で、規模は長さ1.54m×幅1.3m、深さ0.3mである。断面は、南北の壁が湾曲して立ち上がり、底面にはやや凹凸がある。

ＳＫ424（第92図、図版42-５）

Ｂ区南東端のＮＪ58区にあり、地山面で確認した。平面形は不整の楕円形で、規模は長さ1.2m×幅0.95m、深さ0.45mである。壁は北側が直立気味に立ち上がり、南東側ではそれより緩い傾斜を示す。底面は南東から北西にかけて傾斜する。

ＳＫ426（第92図、図版42-６）

Ｂ区南東端のＮＧ58･59区にあり、地山面で確認した。平面形は不整形で、規模は長さ1.51m×幅1.05m、深さ0.45mである。南東端に方形状の落ち込みがある。壁は直立気味に立ち上がり、北東側では「Ｓ」字状の形態を示す。底面には凹凸がある。

ＳＫ427（第93図、図版42-７）

Ｂ区南東端のＮＧ58区にあり、地山面で確認した。平面形は不整形で、規模は長さ0.94m×幅0.58m、深さ0.44mである。南側に小さな落ち込みがあり、それは床下の可能性がある。壁は、北側が湾曲し直立気味に立ち上がり、南側では直立気味に立ち上がる。底面は僅かに湾曲する。

ＳＫ428（第93図）

Ｂ区南東端のＮＦ58区にあり、地山面で確認した。ＳＤ398と重複し本遺構が旧い。東側は削平されている。平面形はやや不整の楕円形で、規模は長さ0.82m×幅0.72m、深さ0.18mである。壁は、西側でやや緩く立ち上がり、底面は西端が最も低い。

ＳＫ439（第93図、図版42-８）

Ｂ区南東端のＮＦ58区にあり、地山面で確認した。ＳＫ488と重複し本遺構が新しい。平面形は不整の楕円形で、規模は長さ2.39m×幅0.96m、深さ0.13mである。壁はやや緩く立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

ＳＫ488（第93図）

Ｂ区南東端のＮＦ58区にあり、地山面で確認した。ＳＫ439と重複し本遺構が旧い。平面形は不整の楕円形で、規模は長さ0.99m×幅0.76m、深さ0.3mである。壁は直立気味に立ち上がり、底面は北側に緩く傾斜する。

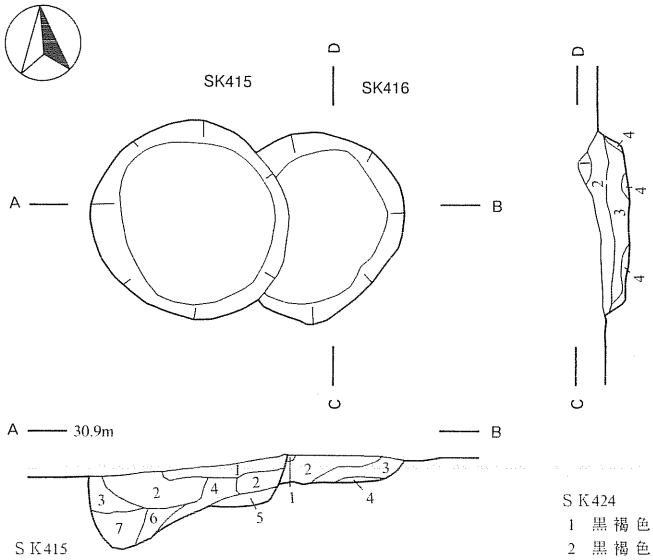
ＳＫ489（第89図）

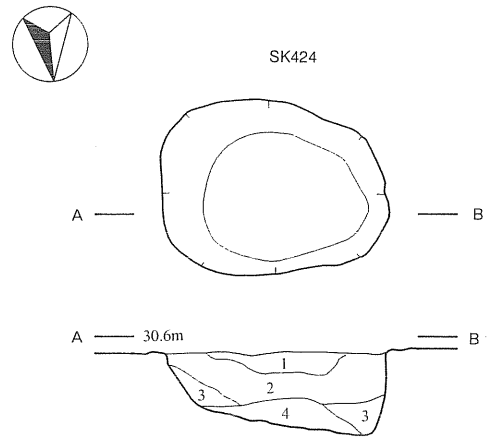
Ｂ区中央のＮＬ72区にあり、地山面で確認した。ＳＫ383と重複し本遺構が旧い。平面形は円形と推定され、規模は直径1.2m・深さ0.18mである。壁は直立気味に立ち上がり、底面には緩い凹凸がある。

６　性格不明遺構

ＳＸ393（第93図、図版43-３）

Ｂ区中央部のＮＬ68区にあり、暗褐色土で確認した。ほぼ完全形の甕が、暗褐色土の中で横倒しの状態で出土した。掘り込み面は不明であるが、褐色土や漸移層がすぐ下に存在する。このことから、暗褐色土の下限が掘り込み底面になる可能性がある。

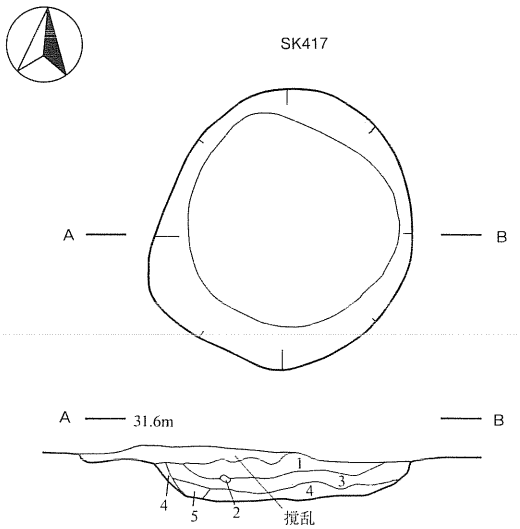


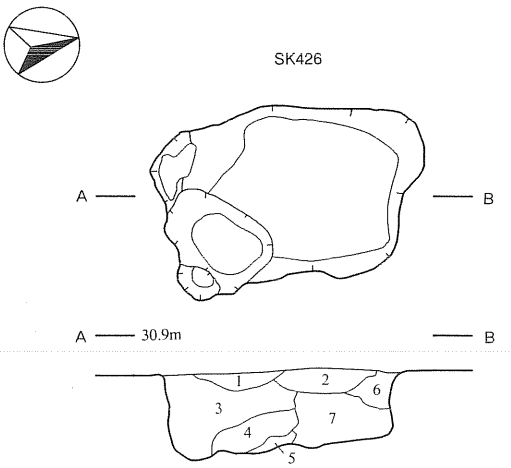


ＳＫ415
1　黒 褐 色 土(10YR3/2)　粘土～シルト、地山土(少)混入、やや固質。
2　暗 褐 色 土(10YR3/3)　粘土～シルト、地山土(少)混入、やや固質。
3　暗 褐 色 土(10YR3/3)　地山土(少)混入、やや軟質。
4　黒 褐 色 土(10YR3/2)　シルト、地山土(少)混入、やや固質。
5　黒 褐 色 土(10YR3/2)　粘土～シルト、地山土(少)混入、やや固質。
6　黒　色　土(10YR2/1)　粘土～シルト、地山土(少)混入、軟質。
7　灰黄褐色土(10YR4/2)　粘土、地山土(多)混入、やや軟質。
8　黒 褐 色 土(10YR3/2)　シルト、地山土(中)混入。
9　黒 褐 色 土(10YR2/2)　シルト、地山土(少)混入、軟質。

ＳＫ416
1　黄 橙 色 土(10YR8/8)　粘土～シルト、焼土混入、やや固質。
2　黒 褐 色 土(10YR3/2)　粘土～シルト、地山土(少)混入、やや軟質。
3　黒 褐 色 土(10YR2/3)　粘土～シルト、地山土(少)混入、やや軟質。
4　灰黄褐色土(10YR4/2)　粘土、地山土(多)混入、やや軟質。

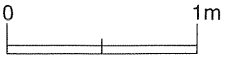
ＳＫ424
1　黒 褐 色 土(10YR3/2)　粘土～シルト、焼土(少)・炭化物(中)・地山土(中)混入、やや固質。
2　黒 褐 色 土(10YR3/2)　粘土～シルト、地山土(少)混入、やや固質。
3　灰黄褐色土(10YR4/2)　粘土、地山土(多)混入、やや軟質。
4　黒 褐 色 土(10YR2/3)　粘土～シルト、やや軟質。



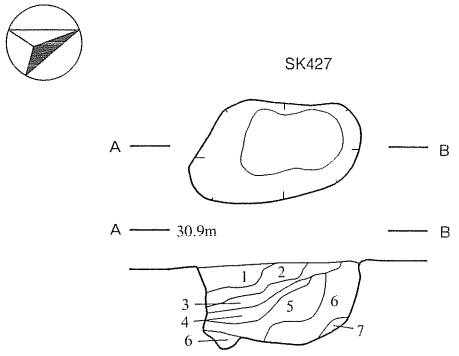


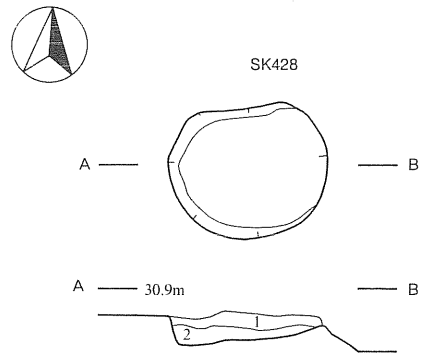
ＳＫ417
1　黒 褐 色 土(10YR3/2)　粘土～シルト、地山土(少)混入、やや軟質。
2　浅黄橙色土(10YR8/3)　粘土～シルト、焼土混入、やや軟質。
3　黒 褐 色 土(10YR2/3)　粘土～シルト、やや軟質。
4　灰黄褐色土(10YR4/2)　粘土、地山土(少)混入、やや固質。
5　黒 褐 色 土(10YR3/2)　粘土～シルト、地山土(少)混入、軟質。

ＳＫ426
1　黒褐色土(10YR3/2)　粘土～シルト、地山土(少)混入、やや固質。
2　褐　色　土(10YR4/6)　粘土、地山土(多)混入、固質。
3　褐灰色土(10YR4/1)　粘土～シルト、地山土(多)混入、やや固質。
4　黒褐色土(10YR3/2)　粘土～シルト、地山土(少)混入、軟質。
5　暗褐色土(10YR3/4)　粘土～シルト、地山土(多)混入、やや固質。
6　黒褐色土(10YR2/3)　粘土～シルト、地山土(中)混入、軟質。
7　黒褐色土(10YR2/3)　粘土～シルト、軟質。



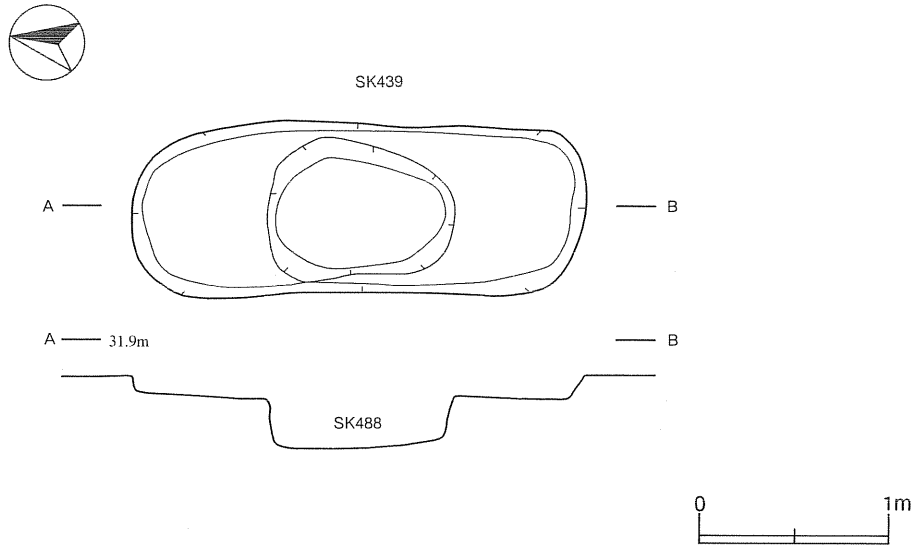
第92図　土坑(25) 古代⑦ＳＫ415～417・424・426

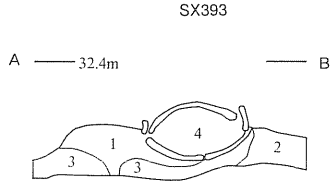


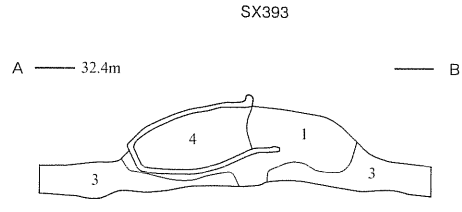


ＳＫ427
1　黒褐色土(10YR3/2)　粘土～シルト、地山土(少)混入、やや固質。
2　褐灰色土(10YR4/1)　粘土～シルト、地山土(多)混入、やや固質。
3　黒褐色土(10YR2/3)　粘土～シルト、地山土(少)混入、やや軟質。
4　褐　色　土(10YR4/6)　粘土、地山土(多)混入、軟質。
5　黒褐色土(10YR3/2)　粘土～シルト、地山土(少)混入、軟質。
6　褐灰色土(10YR4/1)　粘土、地山土(多)混入、やや軟質。
7　黒褐色土(10YR2/3)　粘土～シルト、地山土(少)混入、軟質。

ＳＫ428
1　暗褐色土(10YR3/3)　粘土～シルト、地山土混入、固質。
2　褐灰色土(10YR4/1)　粘土～シルト、地山土(多)混入、固質。







ＳＸ393
1　暗褐色土(10YR3/4)　シルト～砂、やや軟質。
2　褐　色　土(10YR4/4)　シルト～砂、地山土混入、やや軟質。
3　褐　色　土(10YR4/4)　シルト～砂、地山土混入、やや固質。
4　暗褐色土(10YR3/4)　シルト～砂、軟質。

0　50cm

第93図　土坑(26)　古代⑧ＳＫ427・428・439、性格不明遺構(1)　ＳＸ393

第４節　中世の遺構

１　郭

ＳＨ490（付図）

すでに、館の上館の第Ⅳ郭として知られている部分である。館の上館は成合台地の南端部が、空堀によって第Ⅰ郭から第Ⅳ郭まで確認されており、第Ⅳ郭はそのうち最も北にある。範囲は、ＳＤ491より東側の平坦な部分で、東西約50m×南北約20mの北にやや張り出す弓成り状の地形である。

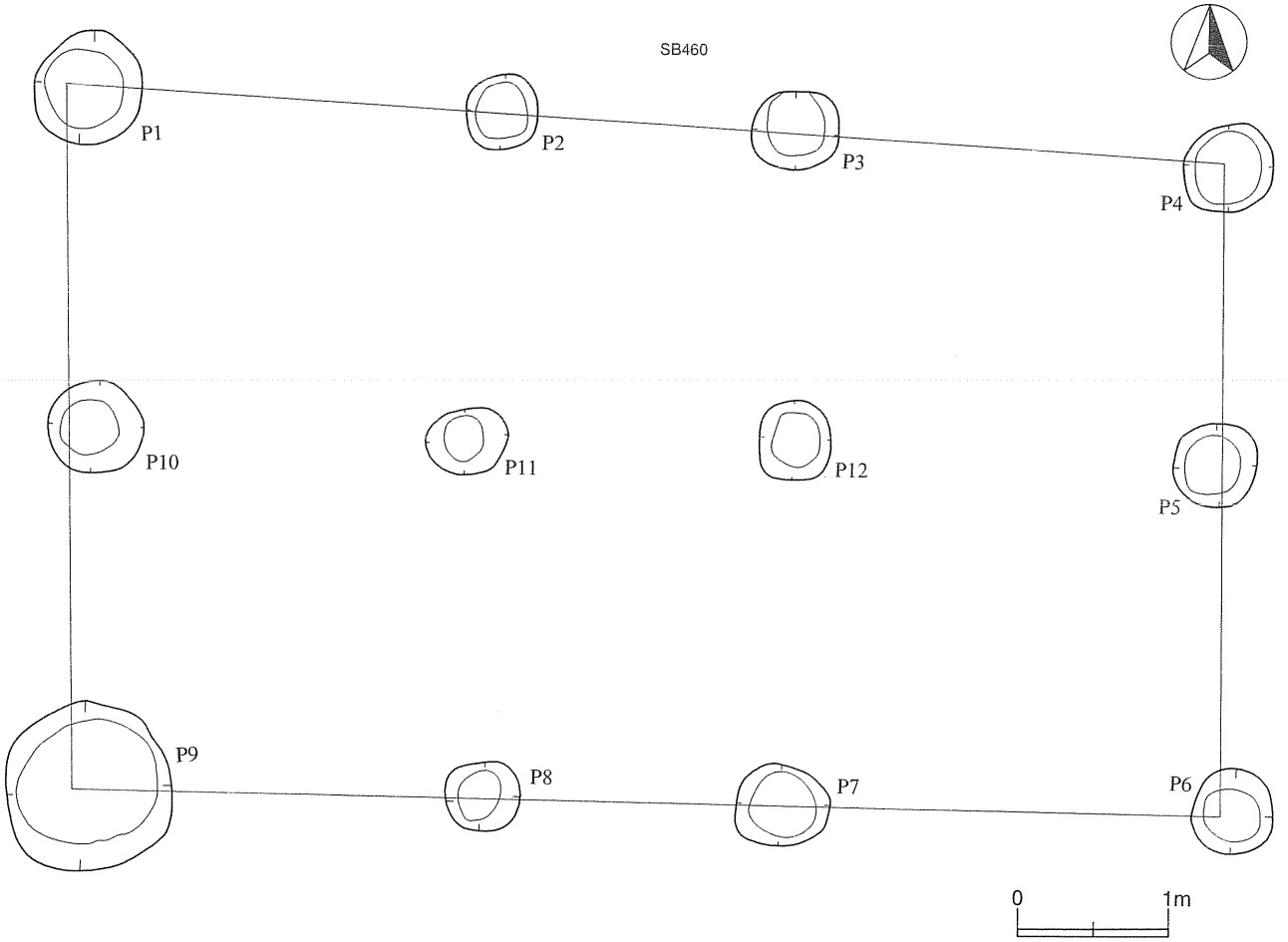
２　空堀

ＳＤ171（付図）

ＳＤ172と並行し、その西側に位置する。規模は、最大幅約3.5m×基底幅約0.5～1.5m、深さ２m前後で、長さは約15mである。形状はほぼ同じ幅で直線的であるが、南側でやや西側へ向かう。底面は、中央部より南北両方向に傾斜する。

ＳＤ172（付図）

ＳＤ171と並行し、その東側に位置する。規模は、最大幅約4.5m×基底幅約0.8～1.5m、深さ約２m前後で、長さは約18mである。形状は中央の僅か南側で少し括れ、ほぼ直線的に延びる。底面は、中央部より南北両方向に傾斜する。



第94図　掘立柱建物跡（６）ＳＢ460

第５節　時代不明遺構

１　掘立柱建物跡

ＳＢ460（第94図、図版38－３）

Ａ区東端のＫＡ・ＫＢ・ＫＣ37区などにあり、地山面でＰ１～Ｐ12まで確認し配列から掘立柱建物跡とした。柱間は桁行３間×梁行２間で、それぞれ7.52mと4.52mである。桁行は中央の間が最も長く、他の２つが共に長い。主軸方向はＮ-89°-Ｗである。ピットは、大きなＰ9が長さ1.9m×幅1.8m、小さなＰ１が長さ0.9m×幅0.7mである。

２　土坑

ＳＫ127（第95図、図版52－１）

Ａ区中央部のＭＡ46区にあり、地山面で確認した。ＳＫ128と重複し、本遺構の方が旧い。平面形は不整楕円形で、規模は推定長さ1.25m×幅1m、深さ0.18mである。壁は緩い段を形成して立ち上がり、底面には丸みがある。

ＳＫ128（第95図、図版52－１）

Ａ区中央部のＭＡ46区にあり、地山面で確認した。ＳＫ127と重複し、本遺構の方が新しい。平面形は不整形で、規模は長さ0.95m×幅0.9m、深さ0.4mである。壁は西側が緩く立ち上がり、東側は段を形成している。底面はほぼ平坦である。

ＳＫ222（第95図）

Ａ区中央やや東側のＬＨ37区にあり、地山面で確認した。平面図は紛失している。規模は、大きさが1.67m、深さ0.4mである。壁は、片側が直立気味に立ち上がり、反対側は内傾して立ち上がる。底面は、中央部が５㎜程の深さで窪んでいる。

ＳＫ265（第95図、図版52－２）

Ａ区中央やや東側のＬＤ33区にあり、地山面で確認した。平面図は紛失している。フラスコ状土坑と考えられる。規模は、大きさが1.2m、深さ0.87mである。壁は、上端から深さ約0.4mのところより上方はほぼ垂直に立ち上がり、下方では膨らんでいる。底面は片側に緩く傾く。

ＳＫ374（付図）

Ｂ区中央やや南側のＮＭ64区にあり、地山面で確認した。平・断面図とも紛失している。

ＳＫ375（付図）

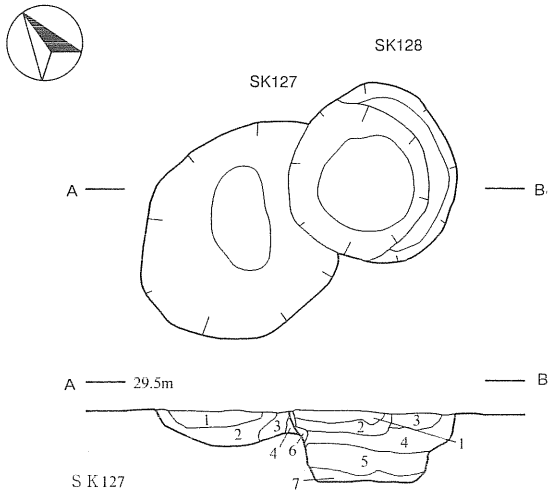
Ｂ区中央やや南側のＮＯ65区にあり、地山面で確認した。平・断面図とも紛失している。

ＳＫ384（第95図、図版52－３）

Ｂ区中央やや東側のＮＫ74・75区にあり、地山面で確認した。平面図は紛失している。規模は、大きさが1.8m、深さ0.25mである。断面は壁の両側が緩く立ち上がり、底面も緩く丸みをもつ。

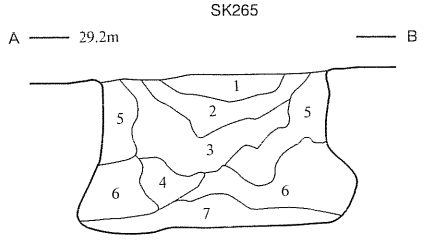
ＳＫ405（第95図）

Ｂ区中央やや東側のＮＪ76区にあり、地山面で確認した。平面図は紛失している。規模は、大きさが0.75m、深さ1.2mである。断面は、壁の片側が直立気味に立ち上がり、反対側は緩い傾斜を示す。底面はほぼ平坦である。

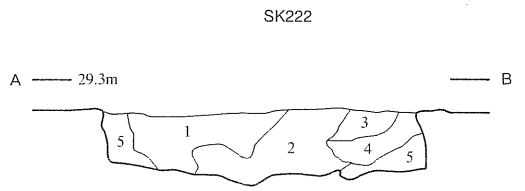


ＳＫ127
1　暗褐色土(10YR3/4)　シルト、焼土混入、やや固質。
2　黒褐色土(10YR2/3)　粘土～シルト、やや軟質。
3　暗褐色土(10YR3/3)　シルト、やや軟質。
4　褐　色　土(10YR4/4)　粘土～シルト、地山土混入、やや固質。

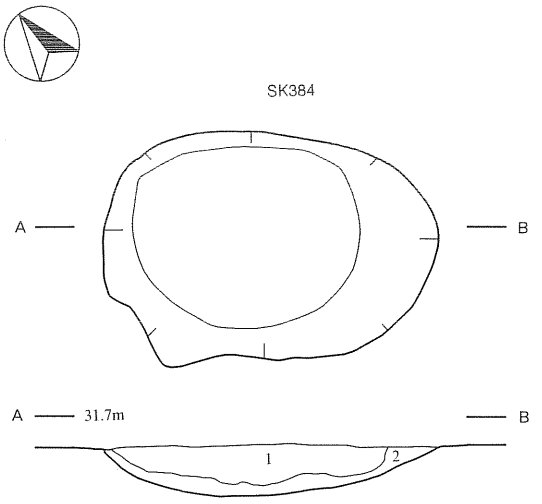
ＳＫ128
1　暗褐色土(10YR3/3)　粘土～砂、炭化物混入、軟質。
2　暗褐色土(10YR3/4)　粘土～シルト、地山土混入、やや軟質。
3　暗褐色土(10YR3/4)　粘土～シルト、地山土混入、やや固質。
4　暗褐色土(10YR3/3)　粘土～シルト、地山土混入、やや軟質。
5　黒褐色土(10YR2/3)　粘土～シルト、焼土・地山土混入、やや軟質。
6　褐　色　土(10YR4/6)　シルト、地山土混入、やや固質。
7　褐　色　土(10YR4/4)　粘土～シルト、地山土混入、やや固質。



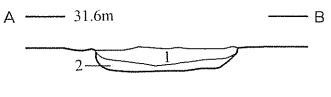
ＳＫ265
1　黒褐色土(10YR3/1)　シルト、軟質。
2　黒褐色土(10YR3/2)　シルト、地山土混入、やや軟質。
3　暗褐色土(10YR3/4)　粘土～シルト、炭化物・地山土混入、やや軟質。
4　褐　色　土(10YR4/4)　粘土～シルト、炭化物・地山土混入、やや軟質。
5　褐　色　土(10YR4/6)　粘土～シルト、地山土混入、やや固質。
6　にぶい黄褐色土(10YR5/3)　粘土～シルト、地山土混入、やや軟質。
7　褐　色　土(10YR4/4)　粘土～シルト、炭化物・地山土混入、やや固質。



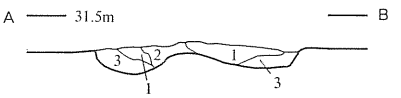
ＳＫ222
1　黄褐色土(10YR5/4)　シルト～砂、炭化物・地山土混入、やや軟質。
2　黄褐色土(10YR5/6)　粘土～シルト、炭化物・地山土混入、固質。
3　褐　色　土(10YR4/4)　シルト、地山土混入、やや軟質。
4　黄褐色土(10YR5/4)　シルト、地山土混入、やや軟質。
5　黄褐色土(10YR5/6)　粘土、地山土混入、固質。



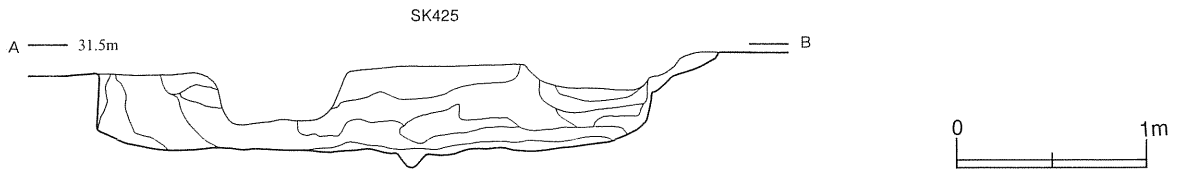
ＳＫ384
1　暗褐色土(10YR3/3)　粘土～シルト、地山土混入、やや軟質。
2　褐　色　土(10YR4/6)　シルト、地山土混入、やや固質。



ＳＫ405
1　灰黄褐色土(10YR4/2)　シルト～砂、炭化物・地山土混入、やや軟質。
2　褐　色　土(10YR4/6)　粘土～シルト、地山土混入、やや固質。



ＳＫ406
1　明　黄　褐　色　土(10YR6/8)　シルト～砂、焼土混入、軟質。
2　にぶい黄橙色土(10YR7/4)　粘土～シルト、地山土混入、固質。
3　にぶい黄橙色土(10YR7/3)　粘土～シルト、地山土混入、やや軟質。



第95図　土坑(27)　古代⑨ＳＫ127・128・222・384・406・425

ＳＫ406（第95図）

Ｂ区中央やや東側のＮＪ76･77区にあり、地山面で確認した。平面図は紛失している。規模は、大きさが1.05m、深さ1.7mである。壁は直立気味に立ち上がる。底面は中央部が大きく盛り上がり、両側とも丸みをもつ。２つの遺構が重複している可能性がある。

ＳＫ425（第95図、図版52-４）

Ｂ区中央やや南側のＮＯ65･66区にあり、地山面で確認した。ＳＤ410とＳＤ492が切り込んでいる。平面図は紛失している。規模は、大きさが3.25m、深さ0.55mである。壁は西側が直立気味に立ち上がり、東側では強い段を形成する。底面は、中央部に小さな落ち込みを認めるものの、ほぼ平坦である。

ＳＫ467（第96図、図版52-５）

Ｃ区の南区南端のＯＫ76区にあり、地山面で確認した。ＳＤ466･470と切り合い、平面で本遺構が旧いと判断した。覆土は両溝のものである。平面形は略円形で、規模は長さ2.15m×幅軸1.7m、深さ0.3mである。壁は湾曲して立ち上がるが、底面は不明である。

３　焼土遺構

ＳＮ474（第96図、図版52-８）

Ｃ区の北区東側のＰＱ116区杭中心にあり、地山面で確認した。平面形は不整形で、規模は長さ0.25m×幅0.2m、深さ0.1mである。壁はやや強く湾曲し、底面はほぼ平坦である。覆土上位には、やや希薄な焼土が堆積している。

４　溝

ＳＤ17（第97図、図版54-１・２）

Ａ区のＭＭ64区からＯＤ68区にかけて、東西方向へほぼ直線的に延びている。地山面で確認した。現状の長さは約124.8mで、Ａ-Ｂは幅0.5m、深さ0.16m、Ｃ-Ｄは幅0.42m、深さ0.16mである。

ＳＤ18（第97図、図版53-１、54-３・４）

Ａ区のＭＥ44区からＭＴ65区にかけてあり、南東-北西方向へほぼ直線的に延びる。ＳＤ17に連結し、地山面で確認した。現状の長さは約106.6mで、Ａ-Ｂは幅0.19m、深さ0.16m、Ｃ-Ｄは幅0.32m、深さ0.19m、Ｅ-Ｆは幅0.36m、深さ0.29m、Ｇ-Ｈは幅0.32m、深さ0.25m、Ｉ-Ｊは幅0.35m、深さ0.25m、Ｋ-Ｌは幅0.44m、深さ0.38mである。

ＳＤ56（付図）

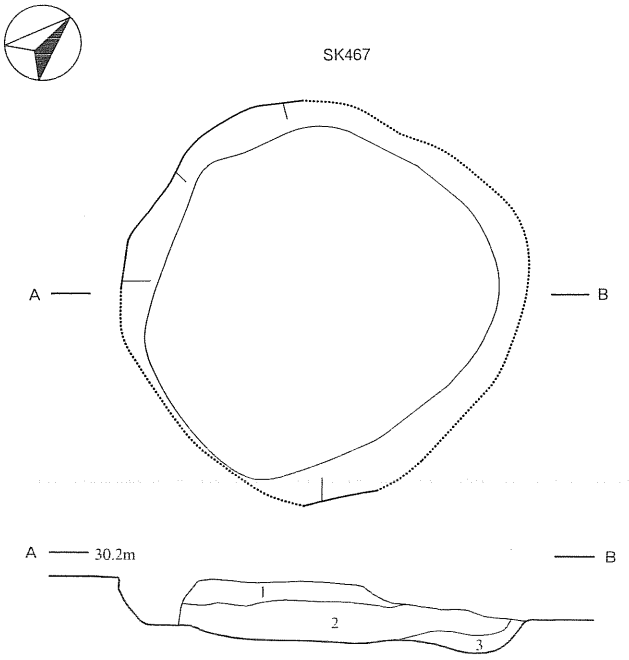
Ａ区のＭＭ60区からＭＳ56区にかけてあり、北東-南西方向へほぼ直線的に延びる。南西端は窄まって消滅する。地山面で確認した。ＳＤ64の北西端も類似するので、本来は連結して区画を形成していた可能性がある。現状の長さは約32.2mである。

ＳＤ57（付図、図版53-１）

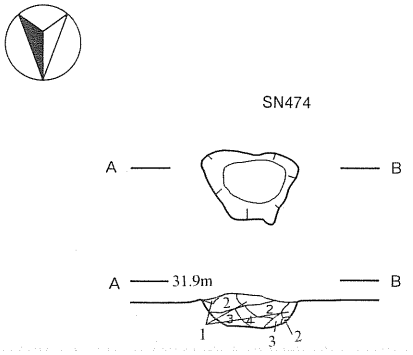
Ａ区のＭＯ61区からＮＢ54区にかけてあり、北東-南西方向へほぼ直線的に延びる。北東側で狭くなり消滅する。現状の長さは38.6mである。

ＳＤ58（第97図）

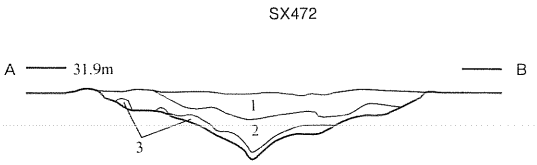
Ａ区のＭＯ54区から同ＭＳ57区にかけて、南東-北西方向へほぼ直線的に延びる。ＭＴ57区にかけて



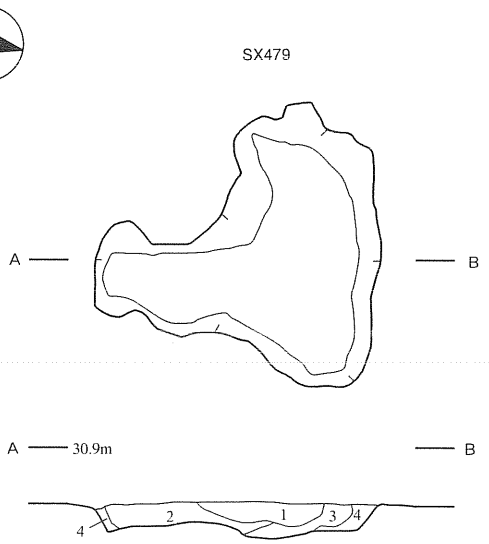
ＳＫ467
1　暗褐色土(10YR3/3)　粘土～砂、地山土混入、やや軟質。
2　暗褐色土(10YR3/4)　粘土～砂、地山土混入、やや軟質。
3　褐　色　土(10YR4/6)　シルト、地山土混入、やや固質。



ＳＮ474
1　明赤褐色土(2.5YR5/8)　焼土･褐色土混入、軟質。
2　黒　色　土(7.5YR2/1)　シルト、焼土(少)混入、軟質。
3　褐　色　土(7.5YR4/4)　黒褐色土(少)混入、軟質。
4　黒 褐 色 土(7.5YR3/2)　地山土(中)混入、軟質。



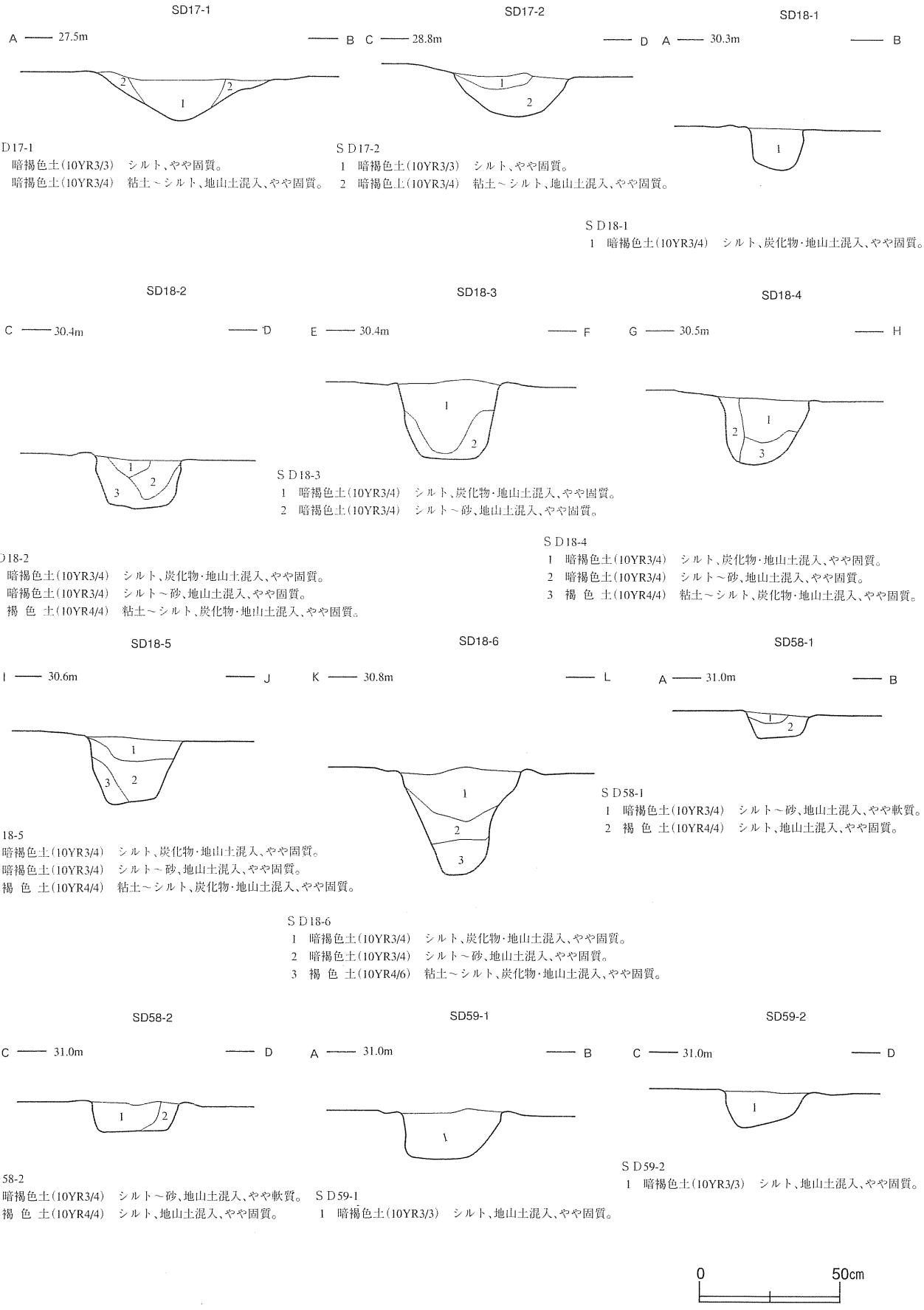
ＳＸ472
1　暗褐色土(10YR3/3)　粘土～砂、地山土混入、軟質。
2　暗褐色土(10YR3/4)　粘土～シルト、地山土混入、やや固質。
3　褐　色　土(10YR4/4)　粘土～シルト、地山土混入、やや固質。



ＳＸ479
1　褐色土(10YR4/6)　褐色土(微)混入、固質。
2　褐色土(10YR4/4)　褐色土(少)混入、固質。
3　褐色土(10YR4/6)　砂、褐色土(少)混入、やや軟質。
4　褐色土(10YR4/4)　褐色土(微)混入、やや軟質。

0　1m

第96図　土坑(28) 古代⑩ＳＫ467、焼土遺構　ＳＮ474、性格不明遺構(２)　ＳＸ472･479



ＳＤ17-1
1　暗褐色土(10YR3/3)　シルト、やや固質。
2　暗褐色土(10YR3/4)　粘土～シルト、地山土混入、やや固質。

ＳＤ17-2
1　暗褐色土(10YR3/3)　シルト、やや固質。
2　暗褐色土(10YR3/4)　粘土～シルト、地山土混入、やや固質。

ＳＤ18-1
1　暗褐色土(10YR3/4)　シルト、炭化物・地山土混入、やや固質。

ＳＤ18-3
1　暗褐色土(10YR3/4)　シルト、炭化物・地山土混入、やや固質。
2　暗褐色土(10YR3/4)　シルト～砂、地山土混入、やや固質。

ＳＤ18-2
1　暗褐色土(10YR3/4)　シルト、炭化物・地山土混入、やや固質。
2　暗褐色土(10YR3/4)　シルト～砂、地山土混入、やや固質。
3　褐　色　土(10YR4/4)　粘土～シルト、炭化物・地山土混入、やや固質。

ＳＤ18-4
1　暗褐色土(10YR3/4)　シルト、炭化物・地山土混入、やや固質。
2　暗褐色土(10YR3/4)　シルト～砂、地山土混入、やや固質。
3　褐　色　土(10YR4/4)　粘土～シルト、炭化物・地山土混入、やや固質。

ＳＤ18-5
1　暗褐色土(10YR3/4)　シルト、炭化物・地山土混入、やや固質。
2　暗褐色土(10YR3/4)　シルト～砂、地山土混入、やや固質。
3　褐　色　土(10YR4/4)　粘土～シルト、炭化物・地山土混入、やや固質。

ＳＤ58-1
1　暗褐色土(10YR3/4)　シルト～砂、地山土混入、やや軟質。
2　褐　色　土(10YR4/4)　シルト、地山土混入、やや固質。

ＳＤ18-6
1　暗褐色土(10YR3/4)　シルト、炭化物・地山土混入、やや固質。
2　暗褐色土(10YR3/4)　シルト～砂、地山土混入、やや固質。
3　褐　色　土(10YR4/6)　粘土～シルト、炭化物・地山土混入、やや固質。

ＳＤ58-2
1　暗褐色土(10YR3/4)　シルト～砂、地山土混入、やや軟質。
2　褐　色　土(10YR4/4)　シルト、地山土混入、やや固質。

ＳＤ59-1
1　暗褐色土(10YR3/3)　シルト、地山土混入、やや固質。

ＳＤ59-2
1　暗褐色土(10YR3/3)　シルト、地山土混入、やや固質。

第97図　溝状遺構（１）ＳＤ17・18・58・59

緩く湾曲する。地山面で確認した。西端はＳＤ63と連結するが、別遺構と判断される。現状の長さは約24ｍで、Ａ-Ｂは幅0.23m、深さ0.09m、Ｃ-Ｄは幅0.31m、深さ0.11mである。

ＳＤ59（第97図）

Ａ区のＭＯ54区からＭＱ57区にかけてあり、南東-北西方向へほぼ直線的に延びる。地山面で確認した。現状の長さは約15.8mで、Ａ-Ｂは幅0.36m、深さ0.18m、Ｃ-Ｄは幅0.31m、深さ0.31mである。

ＳＤ60（付図）

Ａ区のＭＭ61区からＭＱ61区にかけてあり、東西方向へほぼ直線的に延びる。地山面で確認した。現状の長さは約17mである。

ＳＤ61（付図）

Ａ区のＭＮ66区からＢ区のＮＡ67区にかけてあり、東西方向へほぼ直線的に延びる。地山面で確認した。現状の長さは約29.8mである。

ＳＤ62（第98図）

Ａ区のＭＮ64区からＭＱ63区にかけてあり、北東-南西へほぼ直線的に延びる。北東端はＳＤ17に連結し南西端は消滅する。地山面で確認した。現状の長さは約12.4mで、Ａ-Ｂは幅0.24m、深さ0.08mである。

ＳＤ63（第98図）

Ａ区のＭＴ58区からＢ区のＮＢ54区にかけてあり、北東-南西方向へほぼ直線的に延びる。一部が途切れる。地山面で確認した。現状の長さは約11.4mで、Ａ-Ｂは幅0.21m、深さ0.08mである。

ＳＤ64（付図）

Ａ区のＭＱ50区からＭＳ54区にかけてあり、南東-北西方向へほぼ直線的に延びる。北西端は窄まって消滅する。地山面で確認した。ＳＤ56の南西端も類似するので、本来は連結して区画を形成していた可能性がある。現状の長さは約20.6mである。

ＳＤ65（付図）

Ａ区のＭＱ60区からＭＲ59区にかけてあり、北東-南西方向へやや湾曲して延びる。両端は消滅する。地山面で確認した。現状の長さは約4.6mである。

ＳＤ101（付図）

Ａ区のＭＫ57区からＭＭ54区にかけてあり、北東-南西方向へ直線的に延びる。両端は消滅する。地山面で確認した。現状の長さは約14.6mである。

ＳＤ102（付図）

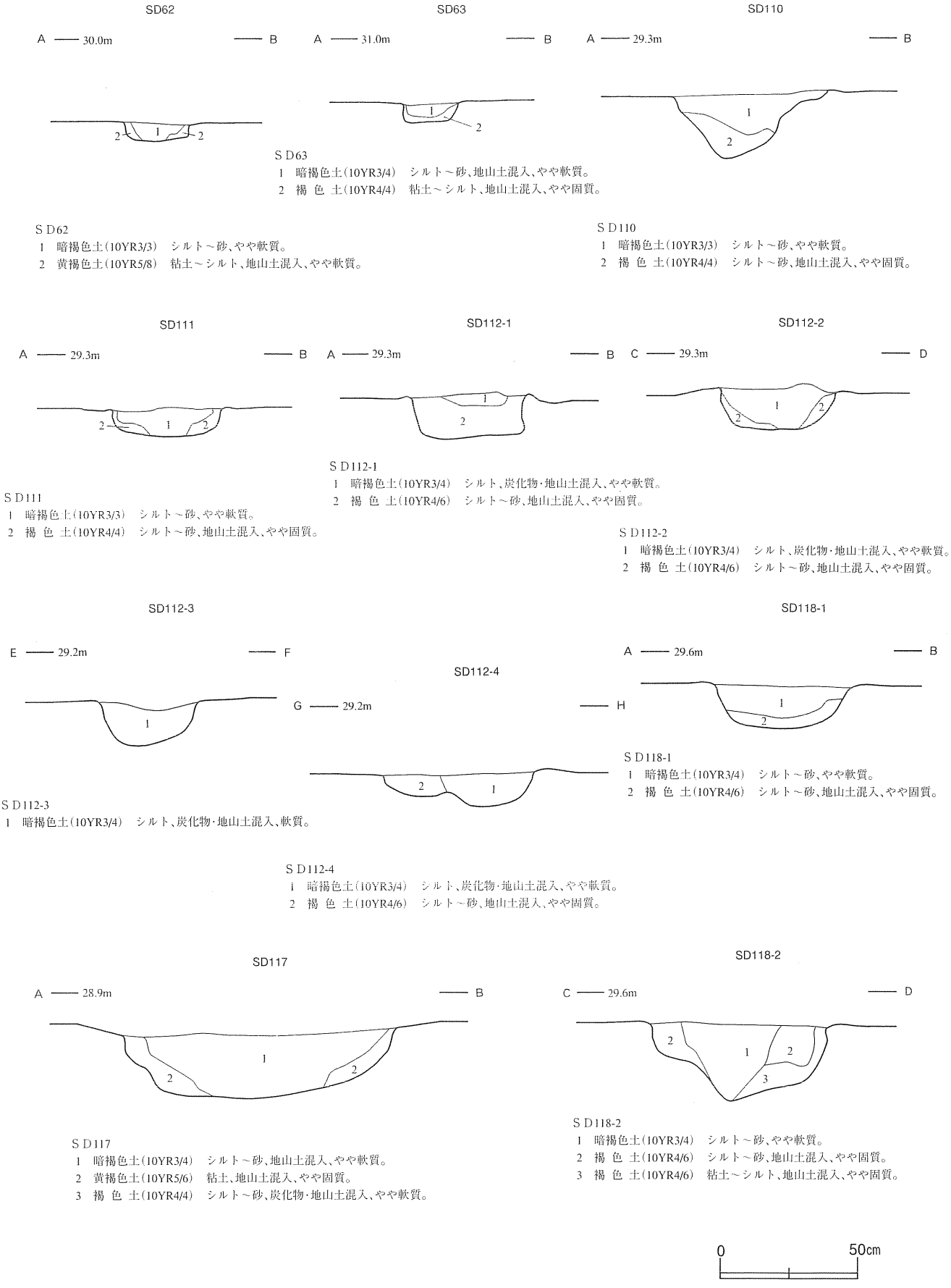
Ａ区のＭＫ57区からＭＮ55区にかけてあり、北東-南西方向へ直線的に延びる。途中が途切れ、両端も消滅している。地山面で確認した。現状の長さは約11.6mである。

ＳＤ110（第98図）

Ａ区のＬＪ41区からＬＬ37区にかけてあり、北東-南西方向へ直線的に延びる。地山面で確認した。現状の長さは約19.4mで、Ａ-Ｂは幅0.57m、深さ0.25mである。

ＳＤ111（第98図）

Ａ区のＬＫ40区からＬＭ38区にかけてあり、北東-南西方向へ直線的に延びる。地山面で確認した。北東側はＳＤ110と連結し、同溝を共用している可能性がある。現状の長さは約12mで、Ａ-Ｂは幅が0.4m、



S D62
1　暗褐色土(10YR3/3)　シルト～砂、やや軟質。
2　黄褐色土(10YR5/8)　粘土～シルト、地山土混入、やや軟質。

S D63
1　暗褐色土(10YR3/4)　シルト～砂、地山土混入、やや軟質。
2　褐 色 土(10YR4/4)　粘土～シルト、地山土混入、やや固質。

S D110
1　暗褐色土(10YR3/3)　シルト～砂、やや軟質。
2　褐 色 土(10YR4/4)　シルト～砂、地山土混入、やや固質。

S D111
1　暗褐色土(10YR3/3)　シルト～砂、やや軟質。
2　褐 色 土(10YR4/4)　シルト～砂、地山土混入、やや固質。

S D112-1
1　暗褐色土(10YR3/4)　シルト、炭化物・地山土混入、やや軟質。
2　褐 色 土(10YR4/6)　シルト～砂、地山土混入、やや固質。

S D112-2
1　暗褐色土(10YR3/4)　シルト、炭化物・地山土混入、やや軟質。
2　褐 色 土(10YR4/6)　シルト～砂、地山土混入、やや固質。

S D112-3
1　暗褐色土(10YR3/4)　シルト、炭化物・地山土混入、軟質。

S D112-4
1　暗褐色土(10YR3/4)　シルト、炭化物・地山土混入、やや軟質。
2　褐 色 土(10YR4/6)　シルト～砂、地山土混入、やや固質。

S D118-1
1　暗褐色土(10YR3/4)　シルト～砂、やや軟質。
2　褐 色 土(10YR4/6)　シルト～砂、地山土混入、やや固質。

S D117
1　暗褐色土(10YR3/4)　シルト～砂、地山土混入、やや軟質。
2　黄褐色土(10YR5/6)　粘土、地山土混入、やや固質。
3　褐 色 土(10YR4/4)　シルト～砂、炭化物・地山土混入、やや軟質。

S D118-2
1　暗褐色土(10YR3/4)　シルト～砂、やや軟質。
2　褐 色 土(10YR4/6)　シルト～砂、地山土混入、やや固質。
3　褐 色 土(10YR4/6)　粘土～シルト、地山土混入、やや固質。

第98図　溝状遺構（２）　S D62・63・110～112・117・118

深さが0.1mである。

ＳＤ112(第98図)

Ａ区のＬＬ42区からＬＮ38区にかけてあり、北東-南西方向へ直線的に延びる。地山面で確認した。南西側は、ＳＩ109を切り込んでいる。現状の長さは約15.2mで、Ａ-Ｂは幅0.41m、深さ0.18m、Ｃ-Ｄは幅0.43m、深さ0.15m、Ｅ-Ｆは幅0.37m、深さ0.16m、Ｇ-Ｈは幅0.51m、深さ0.12mである。

ＳＤ113(付図)

Ａ区のＬＰ44区からＬＳ41区にかけてあり、北東-南西方向へ直線的に延びる。地山面で確認した。南西側はＳＤ115と連結する。現状の長さは約19.4mである。

ＳＤ114(付図)

Ａ区のＬＬ42区からＬＰ39区にかけてあり、北東-南西方向へ直線的に延びる。地山面で確認した。北東側はＳＤ112と連結し、同溝を共用している可能性がある。現状の長さは約20.2mである。

ＳＤ115(付図)

Ａ区のＬＳ40区からＭＢ47区にかけてあり、南東-北西方向へ直線的に延びる。地山面で確認した。ＳＩ122とＳＫ126を切り込んでいる。現状の長さは約31.8mである。

ＳＤ117(第98図)

Ａ区のＬＴ52区からＭＪ47区にかけてあり、北東-南西方向へ直線的に延びる。ＭＥ49区とＭＦ49区でクランク状に屈曲する。地山面で確認した。ＳＫ150・153・154を切り込んでいる。現状の長さは約49.4mで、Ａ-Ｂは幅１m、深さ0.25mである。

ＳＤ118(第98図)

Ａ区のＭＢ42区からＭＧ55区にかけてあり、南東-北西方向へ緩く湾曲しながら延びる。地山面で確認した。ＳＫ154を切り込んでいる。現状の長さは約60.8mで、Ａ-Ｂは幅0.49m、深さ0.17m、Ｃ-Ｄは幅0.65m、深さ0.29mである。

ＳＤ132(付図)

Ａ区のＭＦ52区からＭＧ51区にかけてあり、北東-南西方向へ直線的に延びる。両端は消滅する。地山面で確認した。現状の長さは約７mである。

ＳＤ134(付図)

Ａ区のＭＫ48区からＭＬ49区にかけてあり、南南東-北北西方向へ直線的に延びる。ＳＤと連結している。地山面で確認した。現状の長さは約９mである。

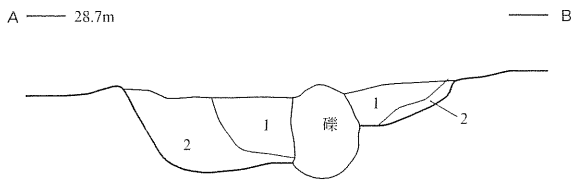
ＳＤ331(付図)

Ａ区のＫＤ41区からＫＨ40区にかけてあり、東西方向へ直線的に延びる。そして直角に屈曲して、ＫＧ37区まで南北方向へ延び、ＫＧ40区ではさらに南北方向へ延びている。地山面で確認した。現状の長さは約30mである。

ＳＤ398(第99図、図版54-５)

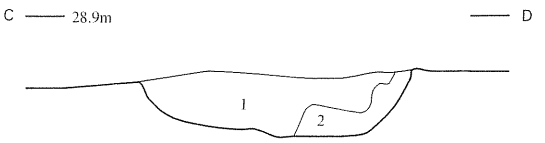
Ｂ区のＮＤ53区からＣ区のＯＦ87区にかけてあり、僅かに湾曲するもののほぼ直線的に延びる。地山面で確認した。現状の長さは約149.9mで、Ａ-Ｂは幅0.87m、深さ0.24m、Ｃ-Ｄは幅0.79m、深さ0.15m、Ｅ-Ｆは幅0.74m、深さ0.17m、Ｇ-Ｈは幅0.89m、深さ0.24m、Ｉ-Ｊは幅0.7m、深さ0.25m、Ｋ-Ｌは幅0.8m、深さ0.26m、Ｍ-Ｎは幅0.77m、深さ0.2m、Ｏ-Ｐは幅が1.02m、深さ0.12mである。

SD398-1



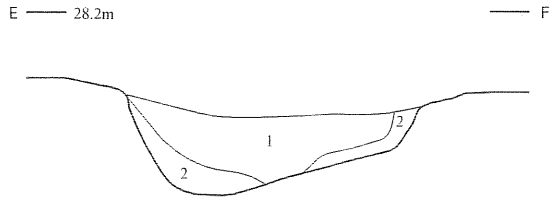
ＳＤ398-1
1　暗褐色土(10YR3/3)　シルト～砂、やや軟質。
2　褐　色　土(10YR4/4)　シルト～砂、地山土混入、やや固質。

SD398-2



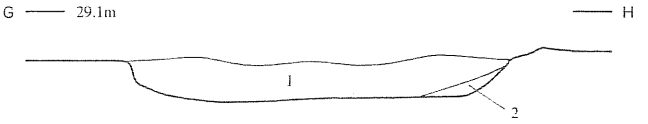
ＳＤ398-2
1　暗褐色土(10YR3/3)　シルト～砂、やや軟質。
2　褐　色　土(10YR4/4)　シルト～砂、地山土混入、やや固質。

SD398-3



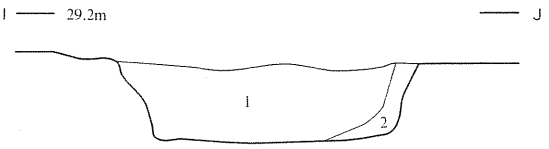
ＳＤ398-3
1　暗褐色土(10YR3/3)　シルト～砂、やや軟質。
2　褐　色　土(10YR4/4)　シルト～砂、地山土混入、やや固質。

SD398-4



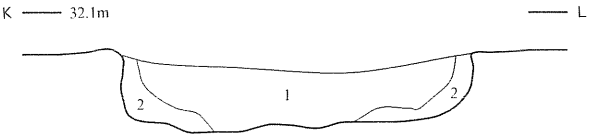
ＳＤ398-4
1　暗褐色土(10YR3/3)　シルト～砂、やや軟質。
2　褐　色　土(10YR4/4)　シルト～砂、地山土混入、やや固質。

SD398-5



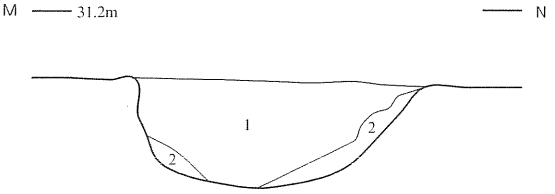
ＳＤ398-5
1　暗褐色土(10YR3/3)　シルト～砂、やや軟質。
2　褐　色　土(10YR4/4)　シルト～砂、地山土混入、やや固質。

SD398-6



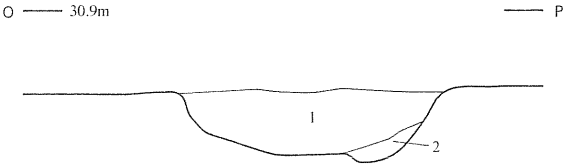
ＳＤ398-6
1　暗褐色土(10YR3/3)　シルト～砂、やや軟質。
2　褐　色　土(10YR4/4)　シルト～砂、地山土混入、やや固質。

SD398-7

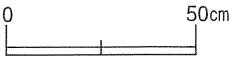


ＳＤ398-7
1　暗褐色土(10YR3/3)　シルト～砂、やや軟質。
2　褐　色　土(10YR4/4)　シルト～砂、地山土混入、やや固質。

SD398-8



ＳＤ398-8
1　暗褐色土(10YR3/3)　シルト～砂、やや軟質。
2　褐　色　土(10YR4/4)　シルト～砂、地山土混入、やや固質。



第99図　溝状遺構（３）ＳＤ398

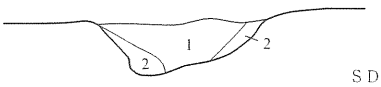
SD399-1

A —— 28.8m —— B

S D399-1
1　暗褐色土(10YR3/3)　シルト～砂、やや軟質。
2　褐　色　土(10YR4/4)　シルト～砂、地山土混入、やや固質。

SD399-3

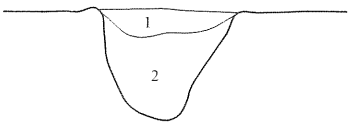
E —— 29.6m —— F



S D399-3
1　暗褐色土(10YR3/3)　シルト～砂、やや軟質。
2　褐　色　土(10YR4/4)　シルト～砂、地山土混入、やや固質。

SD399-5

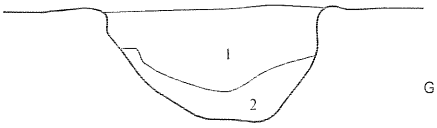
I —— 28.6m —— J



S D398-5
1　暗褐色土(10YR3/3)　シルト～砂、やや軟質。
2　褐　色　土(10YR4/4)　シルト～砂、地山土混入、やや固質。

SD399-2

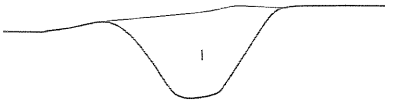
C —— 30.9m —— D



S D399-2
1　暗褐色土(10YR3/3)　シルト～砂、やや軟質。
2　褐　色　土(10YR4/4)　シルト～砂、地山土混入、やや固質。

SD399-4

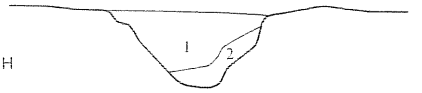
G —— 28.4m —— H



S D399-4
1　暗褐色土(10YR3/3)　シルト～砂、やや軟質。

SD399-6

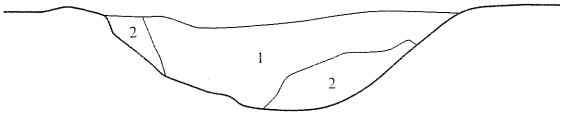
K —— 28.6m —— L



S D398-6
1　暗褐色土(10YR3/3)　シルト～砂、やや軟質。
2　褐　色　土(10YR4/4)　シルト～砂、地山土混入、やや固質。

SD408-1

A —— 30.2m —— B



S D408-1
1　暗褐色土(10YR3/3)　シルト～砂、やや軟質。
2　褐　色　土(10YR4/4)　シルト～砂、地山土混入、やや固質。

SD408-2

C —— 30.0m —— D

S D408-2
1　暗褐色土(10YR3/3)　シルト～砂、やや軟質。
2　褐　色　土(10YR4/4)　シルト～砂、地山土混入、やや固質。

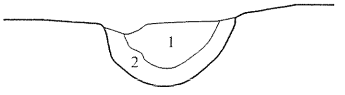
SD410-1

A —— 31.5m —— B

S D410-1
1　暗褐色土(10YR3/3)　シルト～砂、やや軟質。
2　褐　色　土(10YR4/4)　シルト～砂、地山土混入、やや固質。

SD410-2

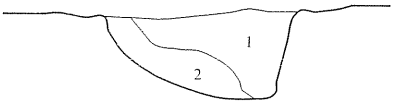
C —— 30.5m —— D



S D410-2
1　暗褐色土(10YR3/3)　シルト～砂、やや軟質。
2　褐　色　土(10YR4/4)　シルト～砂、地山土混入、やや固質。

SD410-3

E —— 30.1m —— F



S D410-3
1　暗褐色土(10YR3/3)　シルト～砂、やや軟質。
2　褐　色　土(10YR4/4)　シルト～砂、地山土混入、やや固質。

0　50cm

第100図　溝状遺構（４）　ＳＤ399・408・410

ＳＤ399（第100図、図版54-６）

Ｂ区のＮＦ55区からＮＫ62区にかけてあり、南東-北西方向へ直線的に延びる。そして直角に屈曲して、ＮＧ67区まで南西-北東へ延びる。地山面で確認した。現状の長さは約55.6mで、Ａ-Ｂは幅0.71m、深さ0.18m、Ｃ-Ｄは幅0.58m、深さ0.31m、Ｅ-Ｆは幅0.45m、深さ0.16m、Ｇ-Ｈは幅0.47m、深さ0.24m、Ｉ-Ｊは幅0.35m、深さ0.3m、Ｋ-Ｌは幅0.52m、深さ0.21mである。

ＳＤ408（第100図）

Ｂ区のＯＣ83区からＣ区のＯＪ76区にかけて直線的に延び、後に直角気味に屈曲し、さらにＣ区のＯＰ84区まで直線的に延びる。そして直角気味に屈曲し、ＯＪ91区まで直線的に延びる。現状では大きな「コ」の字状を呈する。Ａ-Ｂは幅0.95m、深さ0.26m、Ｃ-Ｄは幅1.02m、深さ0.16mである。

ＳＤ410（第100図）

Ｂ区のＮＬ64区からＣ区のＰＧ105区にかけてあり、緩く蛇行しながら南東-北西方向へ延びる。地山面で確認した。ＳＤ408に切られる。Ａ-Ｂは幅0.38m、深さ0.12m、Ｃ-Ｄは幅0.35m、深さ0.18m、Ｅ-Ｆは幅0.51m、深さ0.24mである。

ＳＤ412（第101図）

Ｂ区のＮＯ68区からＮＲ64区にかけてあり、北東-南西方向へ直線的に延びる。北東側はＳＤ17に連結する。地山面で確認した。現状の長さが約20.4mで、Ａ-Ｂは幅0.84m、深さ0.24mである。

ＳＤ434（第101図）

Ｂ区のＮＯ68区からＮＰ78区にかけてあり、南北方向へ直線的に延びる。南側はＳＤ17に連結し、北端は消滅する。地山面で確認した。現状の長さが約42mで、Ａ-Ｂは幅0.28m、深さ0.8m、Ｃ-Ｄは幅0.35m、深さ0.16m、Ｅ-Ｆは幅0.4m、深さ0.21mである。

ＳＤ462（付図、図版54-７）

Ｃ区の南区中央、やや北側のＯＬ89区からＯＭ89区にかけてあり、北東-南西方向へ直線的に延びる。両端が消滅する。現状の長さは約0.98mである。

ＳＤ463（付図）

Ｃ区の南区、北側のＰＢ97区からＰＧ106区にかけてあり、北西-南東方向へ直線的に延びる。地山面で確認した。方向性からＳＤ410と連続すると思われるが、ここでは別個に扱った。現状の長さは36mである。

ＳＤ464（付図）

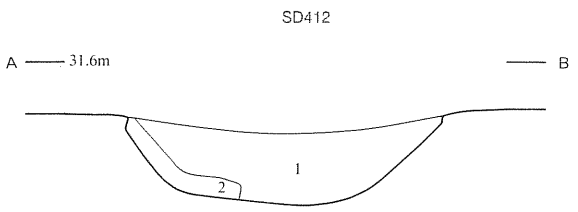
Ｃ区の南区、北西端のＰＥ100区からＰＧ105区にかけてあり、ＰＨ103区からＰＨ104区にかけて直角に屈曲する。地山面で確認し、北端はＳＤ463を切り込む。両端が消滅する。現状の長さは25.9mである。

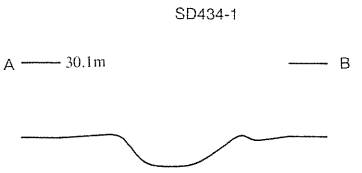
ＳＤ466（付図、図版54-８）

Ｃ区の南区、中央のＯＰ91区からＯＱ94区にかけてあり、僅かに湾曲している。地山面で確認した。ＳＤ410に切られ両端が消滅する。現状の長さは14.3mである。

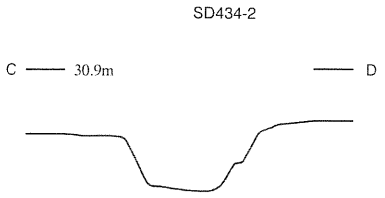
ＳＤ468（付図）

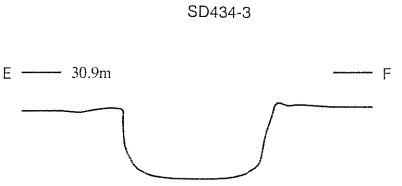
Ｃ区の南区、南東端のＯＫ76区からＯＬ75区にかけてあり、直線的に南南西-北北東方向へ延びる。地山面で確認した。ＳＫ467を切り込んでＳＤ408と連続するが、同時期かは不明である。現状の長さは4.2mである。

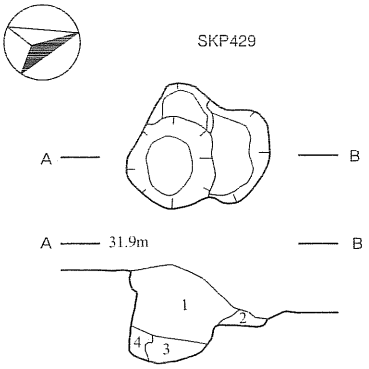


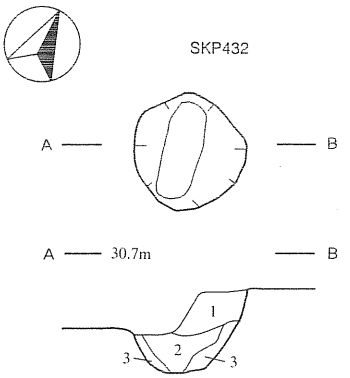


ＳＤ412
1　暗褐色土(10YR3/3)　シルト～砂、やや軟質。
2　褐 色 土(10YR4/4)　シルト～砂、地山土混入、やや固質。



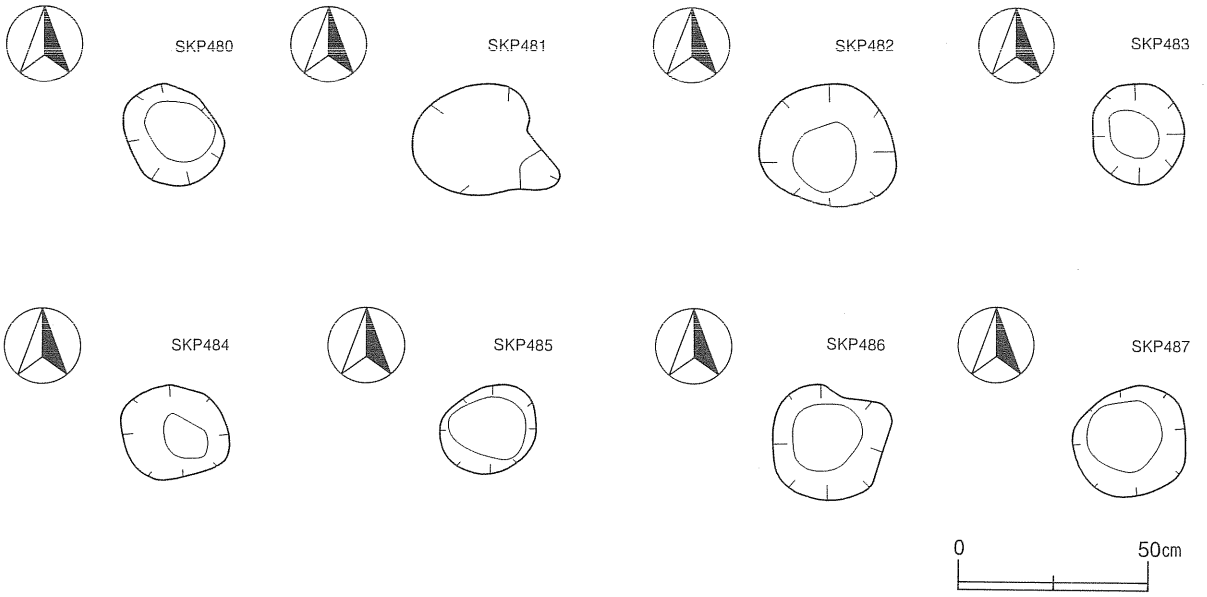






ＳＫＰ429
1　黒褐色土(10YR3/2)　粘土～シルト、地山土(多)混入、やや固質。
2　黒褐色土(10YR3/2)　粘土、地山土(少)混入、固質。
3　褐灰色土(10YR4/1)　粘土～シルト、地山土(顆)混入、軟質。
4　褐灰色土(10YR4/1)　粘土～シルト、地山土(少)混入、やや軟質。

ＳＫＰ432
1　黒褐色土(10YR3/2)　粘土～シルト、地山土(少)混入、やや固質。
2　黒褐色土(10YR2/3)　粘土～シルト、焼土(少)混入、やや軟質。
3　褐灰色土(10YR4/1)　粘土～シルト、地山土(多)混入、軟質。



第101図　溝状遺構(５)　ＳＤ412・434、柱穴様ピット　ＳＫＰ429・432・480～483・484～487

ＳＤ470(付図)

Ｃ区の北区、北端のＰＴ122区からＱＥ125区にかけてあり、直線的に北西-南東へ延びる。地山面で確認した。南側の半分以上は、農道のために未掘である。現状の長さは12.3mである。

ＳＤ492(付図)

Ｂ区中央、やや南側のＮＮ66区からＮＴ65区にかけてあり、ＮＲ67区で鈍角に屈曲する。地山面で確認した。長さは25.6mである。

ＳＤ493(付図)

Ａ区東端のＫＡ36区からＫＣ36区にかけてあり、東西に直線的に延びる。地山面で確認した。４つの弥生時代の土坑と切り合い、それらよりも新しい。現状の長さは9.1mである。

ＳＤ494(付図)

Ａ区東端のＫＧ40区からＫＧ39区にかけてあり、地山面で確認した。ＳＤ331と接続するが、新旧関係は不明である。長さは5.6mである。

ＳＤ495(付図)

Ａ区東側のＫＳ37区からＫＲ35区にかけてあり、南北方向に直線的に延びる。地山面で確認し、両端は消滅する。現状の長さは9.4mである。

ＳＤ496(付図)

Ａ区東側のＬＥ39区からＬＧ36区にかけてあり、直線的に北北東に延びる。地山面で確認した。ＳＢ200と切り合い、本遺構が新しい。現状の長さは17mである。

ＳＤ497(付図)

Ａ区北西端のＭＮ66区からＭＱ66区にかけてあり、東西に直線的に延びる。地山面で確認した。ＳＤ61と切り合うが、新旧関係は不明である。現状の長さは13.6mである。

ＳＤ498(付図)

Ｂ区西側からＣ区南端のＮＳ67区とＯＪ76区にかけてあり、直線的に北西-南東へ延びる。地山面で確認した。北西端はＳＤ408南端と接続するが、新旧関係は不明である。現状の長さは59mである。

５　柱穴様ピット

ＳＫＰ432(第101図)

Ｂ区南東端のＮＩ60区にあり、地山面で確認した。規模は、長さ0.63m×幅0.4m、深さ0.45mである。

ＳＫＰ429(第101図)

Ｂ区南東端のＮＦ59区にあり、地山面で確認した。規模は、長さ0.5m×幅0.48m、深さ0.49mである。

ＳＫＰ480(第101図)

Ｃ区の南区、北西側のＰＦ99区にあり、地山面で確認した。規模は、長さ0.29m×幅0.25m、深さ0.31mである。

ＳＫＰ481(第101図)

Ｃ区の北区、東側のＰＱ116区にあり、地山面で確認した。規模は、長さ0.4m×幅0.2m、深さ0.31mである。

ＳＫＰ482(第101図)

Ｃ区の北区、東側のＰＱ116区にあり、地山面で確認した。規模は、長さ0.38m×幅0.33m、深さ0.21mである。

ＳＫＰ483（第101図）

Ｃ区の北区、東側のＰＱ115区にあり、地山面で確認した。規模は、長さ0.28m×幅0.25m、深さ0.17mである。

ＳＫＰ484（第101図）

Ｃ区の南区南東側のＯＦ87区にあり、地山面で確認した。規模は、長さ0.3m×幅0.27m、深さ0.21mである。

ＳＫＰ485（第101図）

Ｃ区の南区南東側のＯＥ86区にあり、地山面で確認した。規模は、長さ0.27m×幅0.23m、深さ0.1mである。

ＳＫＰ486（第101図）

Ｃ区の南区、南東側のＯＤ85区にあり、地山面で確認した。規模は、長さ0.34m×幅0.33m、深さ0.25mである。

ＳＫＰ487（第101図）

Ｃ区の南区、南東側のＯＤ85区にあり、地山面で確認した。規模は、長さ0.32m×幅0.3m、深さ0.26mである。

6　性格不明遺構

ＳＸ472（第96図、図版52-6）

Ｃ区の北区、中央やや東側のＱＡ117区にあり、地山面で確認した。平面図は紛失している。平面形は不整の円形で、規模は大きさが0.88m、深さ0.2mである。壁は緩く立ち上がり、底面は中央部が部分的に窪む。

ＳＸ479（第96図、図版52-7）

Ｃ区の北区、西端のＱＬ118区にあり、地山面で確認した。平面形は不整形で、規模は大きさが0.75m×0.5m、深さ0.2mである。断面は壁が直立気味に立ち上がり、底面は大きく凹凸がある。

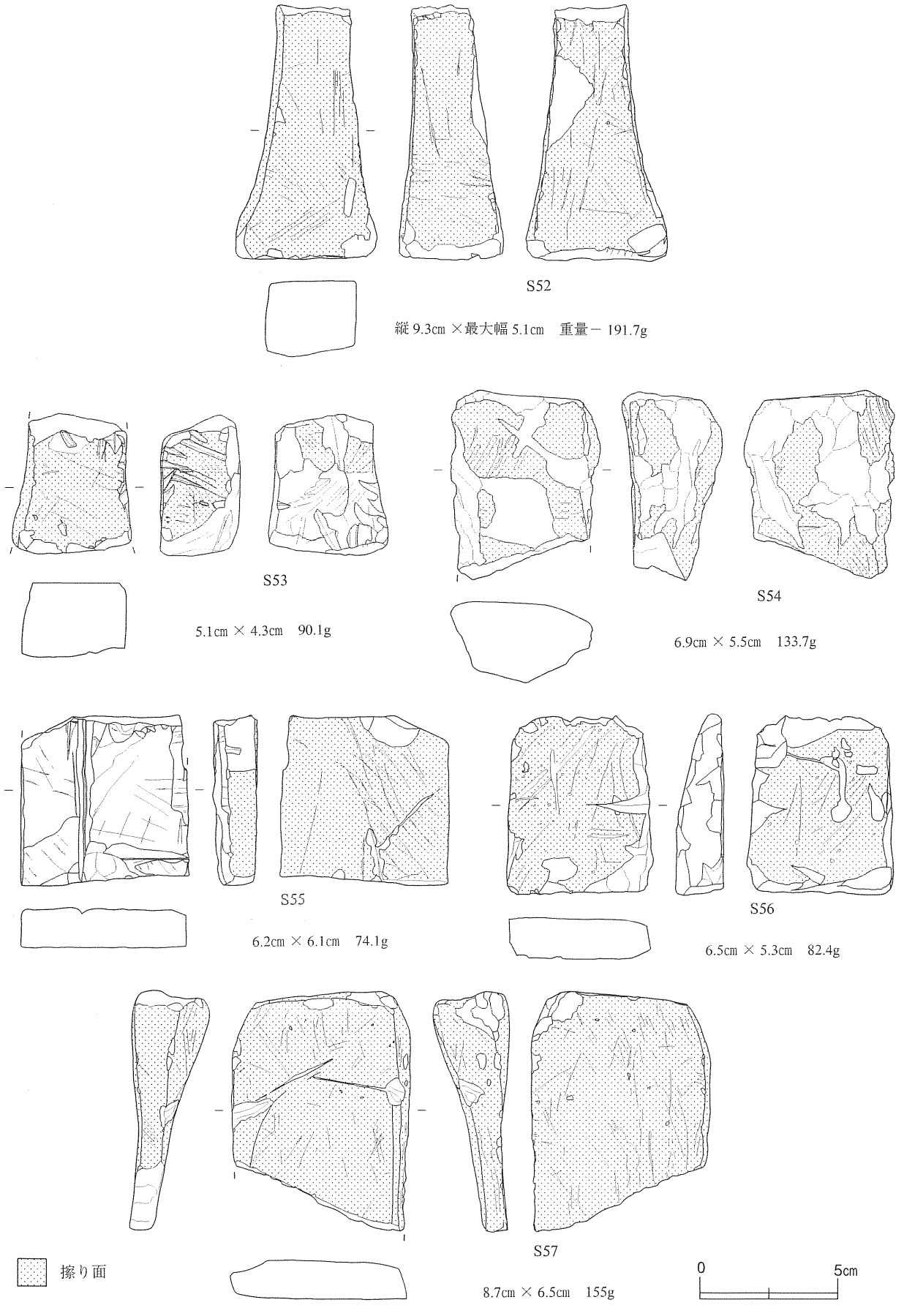
第６節　時代不明の遺構外出土遺物

1　石製品（第102図）

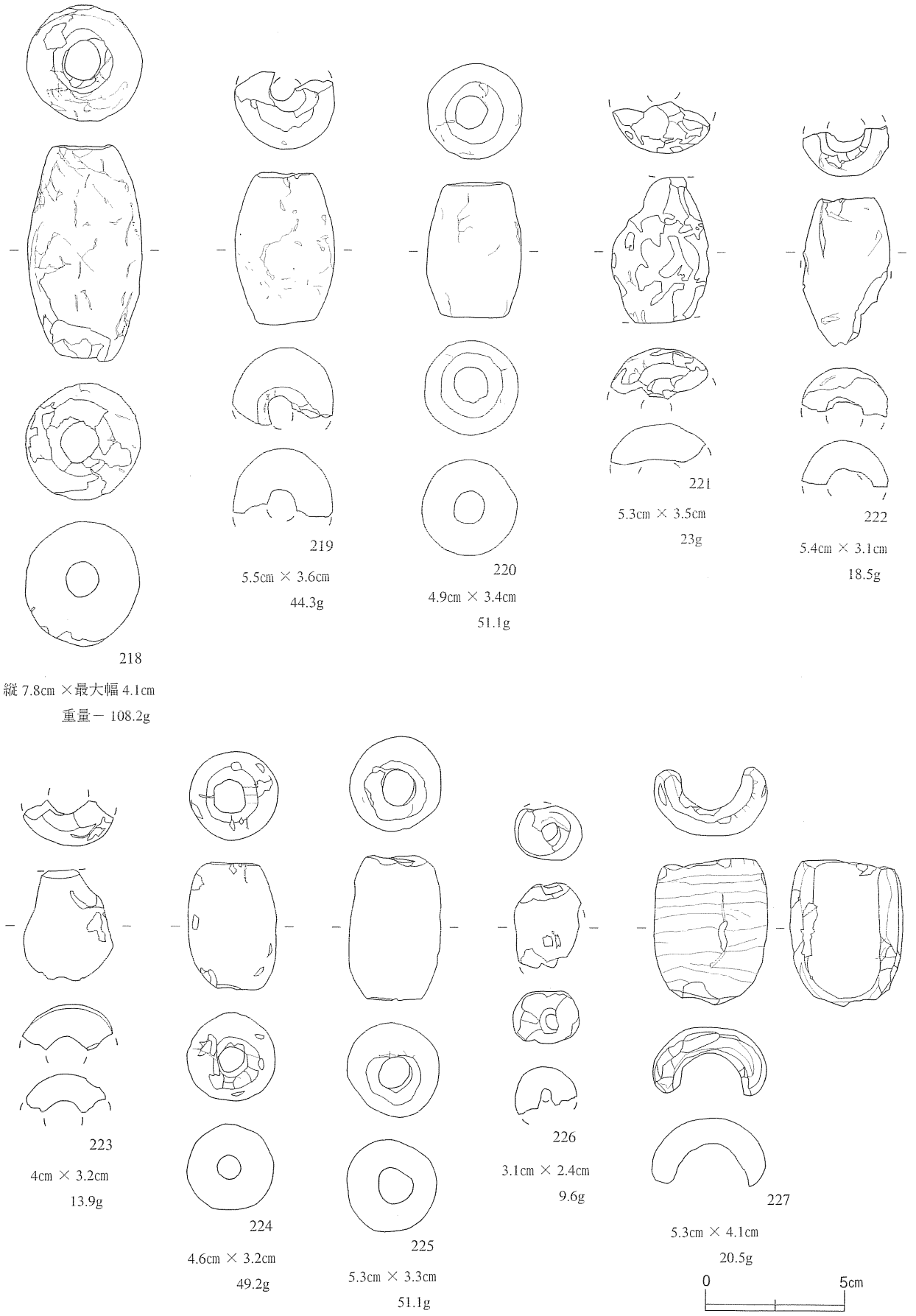
６点の砥石が出土した。厚みのあるもの（Ｓ52・Ｓ53・Ｓ54）と薄いもの（Ｓ55・Ｓ56・Ｓ57）があり、殆どが表裏面以外の側面も利用している。Ｓ57は上面を利用している。

2　土製品（第103図）

11点の土錘が出土した。上下端部が平坦な紡錘形が殆どで、227の俵形も見られる。227については、破損面を丁寧に磨いており、当初から用途が違うかもしれない。表面にもナデの痕跡が明瞭である。すべて硬質で、219・220・224・225は赤褐色、221は暗灰色、他は黄褐色を呈する。



第102図　遺構外出土石器（６）　Ｓ52～Ｓ57



第103図　遺構外出土土製品 218～227

第５章　自然科学的分析

第１節　館の上遺跡から出土した遺構、遺物に残存する脂肪の分析

帯広畜産大学生物資源化学科　中野益男
(株)ズコーシャ総合科学研究所　中野寛子　長田正宏

動植物を構成している主要な生体成分にタンパク質、核酸、糖質(炭水化物)および脂質(脂肪・油脂)がある。これらの生体成分は環境の変化に対して不安定で、圧力、水分などの物理的作用を受けて崩壊して行くだけでなく、土の中にすんでいる微生物による生物的作用によっても分解していくこれまで生体成分を構成している有機質が完全な状態で遺存するのは、地下水位の高い低地遺跡、泥炭遺跡、貝塚などごく限られた場所にすぎないと考えられてきた。

最近、ドイツ新石器時代後期にバター脂肪が存在していたこと(１)、古代遺跡から出土した約２千年前のトウモロコシ種子(２)、約５千年前のハーゼルナッツ種子(３)、に残存する脂肪の脂肪酸は安定した状態に保持されてるのがわかった。このように脂肪は微量ながら比較的安定した状態で千年・万年という長い年月を経過しても変化しないで遺存することが判明した(４)。

脂質は有機溶媒に溶けて、水に溶けない成分を指している。脂質はさらに構造的な違いによって誘導脂質、単純脂質および複合脂質に大別される。これらの脂質を構成している主要なクラス(種)が脂肪酸であり、その種類、含量ともに脂質中では最も多い。その脂肪酸には炭素の鎖がまっすぐ延びた飽和型と鎖の途中に二重結合をもつ不飽和型がある。動物は炭素数の多い飽和型の脂肪酸、植物は不飽和型の脂肪酸を多く持つというように、動植物の種ごとに固有の脂肪酸を持っている。ステロールについても、動物性のものはコレステロール、植物性のものはシトステロール、微生物はエルゴステロールというように動植物に固有の特徴がある。従って、出土遺物の脂質の種類およびそれらを構成している脂肪酸組成と現生動植物のそれとを比較することによって、目に見える形では遺存しない原始古代の動植物を判定することが可能である。

このような出土遺構・遺物に残存する脂肪を分析する方法を「残存脂肪分析法」という。この「残存脂肪分析法」を用いて館の上遺跡から出土した土坑・土器棺・甕・住居址の性格を解明しようとした。

１　土壌試料

秋田県山本郡八竜町に所在する館の上遺跡から出土した土坑、土器棺、甕、住居址内の土壌資料を分析した。土坑ＳＫ220・ＳＫ221・ＳＫ227・ＳＫ235～ＳＫ237・ＳＫ239～ＳＫ243・ＳＫ245～ＳＫ248・ＳＫ251～ＳＫ258・ＳＫ261～ＳＫ263・ＳＫ266・ＳＫ268・ＳＫ270～ＳＫ272・ＳＫ274～ＳＫ277・ＳＫ279・ＳＫ280・ＳＫ282～ＳＫ288は縄文時代晩期終末から後続期にかけてのもの、土坑ＳＫ289・ＳＫ290・ＳＫ323～ＳＫ327・ＳＫ329・ＳＫ334～ＳＫ340・ＳＫ343・ＳＫ346・ＳＫ348・ＳＫ407・ＳＫ411・ＳＫ388～ＳＫ390・ＳＫ366・ＳＫ426・ＳＫ427・ＳＫ424・ＳＫ383と土器棺ＳＲ188・ＳＲ190・ＳＲ192・ＳＲ193・ＳＲ195～ＳＲ199・ＳＲ298・ＳＲ300～ＳＲ303・ＳＲ309・ＳＲ311・ＳＲ313、甕ＳＸ393・住居址ＳＩ377・ＳＩ365は平安時代のものと、それぞれ推定されている。

２　残存脂肪の抽出

土壌試料182～614ｇに３倍量のクロロホルム－メタノール（２：１）混液を加え、超音波浴槽中で30分間処理し残存脂肪を抽出した。処理液を濾過後、残渣に再度クロロホルム－メタノール混液を加え、再び30分間超音波処理をする。この操作をさらに２回繰り返して残存脂肪を抽出した。得られた全抽出溶媒に１％塩化バリウムを全抽出溶媒の４分の１容量加え、クロロホルム層と水槽に分配し、下層のクロロホルム層を濃縮して残存脂肪を分離した。残存脂肪の抽出量を表７-１～７-５に示す。抽出率は0.0009％～0.1401％、平均0.0139％であった。この平均抽出率の値は全国各地の遺跡から出土した土壌、石器、土器等の試料の平均抽出率0.0010％～0.0100％よりも若干高いものであった。

残存脂肪をケイ酸薄層クロマトグラフィーで分析した結果、脂肪は単純脂肪から構成されていた。このうち遊離脂肪酸が最も多く、次いでグリセロールと脂肪酸の結合したトリアシルグリセロール（トリグリセリド）、ステロールエステル、ステロールの順に多く、微量の長鎖炭化水素も存在していた。

３　残存脂肪の脂肪酸組成

分離した残存脂肪の遊離脂肪酸とトリアシルグリセロールに５％メタノール性塩酸を加え、125℃封管中で２時間分解し、メタノール分解によって生成した脂肪酸メチルエステルを含む画分をクロロホルムで分解し、さらにジアゾメタンで遊離脂肪酸を完全にメチル化してから、ヘキサン－エチルエーテル－酢酸(80:30:１)またはヘキサン－エーテル(85:15)展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで精製後、ガスクロマトグラフィーで分析した（５）。

残存脂肪の脂肪酸組成を図104-１～104-21に示す。残存脂肪から10種類の脂肪酸を検出した。このうちパルミチン酸（C16:０）、ステアリン酸（C18:０）、オレイン酸（C18:１）、リレール酸（C18:１）、アラキジン酸（C20:０）、エイコサモノエン酸（C20:１）、ベヘン酸（C22:０）、リグノセリン酸（C24:０）の８種類の脂肪酸をガスクロマトグラフィー－質量分析により同定した。各試料中での単素数18までの中級脂肪酸の脂肪酸組成パターンを見ると、殆どの試料中で主要な脂肪酸はオレイン酸で、次いでパルミチン酸、ステアリン酸の順であった。試料№21・№56・№126・№128・№129・№133・№135・№146～№149・№151・№162・№181・№185～№189・№19・№195・№196・№198～№201では主要な脂肪酸がパルミチン酸で、次いでオレイン酸、ステアリン酸の順か、もしくはパルミチン酸とオレイン酸がほぼ同程度分布していた。一般に考古遺物にはパルミチン酸が多く含まれている。これは長い年月の間にオレイン酸、リノール酸といった不飽和脂肪酸の一部が分解し、パルミチン酸が生成するためで、主として植物遺体の土壌化に伴う腐植物から来ていると推定される。オレイン酸の分布割合の高いものとしては、動物性脂肪と植物性脂肪の両方が考えられ、植物性脂肪では特に根、茎、種子に多く分布しているが、動物脂肪の方が分布割合が高い。ステアリン酸は動物体脂肪や植物の根に比較的多く分布している。リノール酸は主として植物種子。葉に多く分布する。

一方、高等動物、特に高等動物の臓器、脳、神経組織、血液、胎盤に特徴的にみられる炭素数20以上のアラキジン酸、ベヘン酸、リグノセリン酸などの高級脂肪酸はそれら３つの合計含有率が試料№130・№134・№174・№190・№192・№194で10％以下であった他は、すべての試料中で約11～約44％であった。通常の遺跡出土土壌中でのアラキジン酸、ベヘン酸、リグノセリン酸の高級脂肪酸３つの合計含有率は約４～10％であるから、試料№130・№134・№174・№190・№192・№194中での高級脂肪酸含有量は通常の遺跡出土土壌中の植物腐植土並みであった。他のすべての試料中での高級脂肪酸含有率はやや高めから

非常に高いものまでがあった。また、土坑内から複数点数の試料を採取しているが、この試料採取方法で見る限りは、特に高級脂肪酸含有量が多い地点の方位に規則性があるということはなかった。試料採取地点が土坑の両端ばかりではなく、中心部からも採取して数を増やしていけば規則性が出るのかもしれない。高級脂肪酸含有量が多い場合としては、試料中に高等動物の血液、脳、神経組織、臓器等の特殊な部分が含まれている場合と、植物の種子・葉などの植物体の表面を覆うワックスの構成分として含まれている場合とがある。

以上、館の上遺跡の土坑ＳＫ240の試料№21、ＳＫ257の№56、ＳＫ335の№126、ＳＫ336の№128・№129、ＳＫ338の№133、ＳＫ339の№135、ＳＫ389の№181、住居址ＳＩ377の№185～№187、土坑ＳＫ366の№188・№189、ＳＫ426の№191、ＳＫ427の№195、住居址ＳＩ365の№196・№198、土坑ＳＫ424の№199～№201、土器棺ＳＲ188の試料№148、ＳＲ190の№149、ＳＲ192の№151、ＳＲ303の№162では主要な脂肪酸がパルミチン酸で他のすべての試料中では主要な脂肪酸はオレイン酸であることがわかった。また、土坑ＳＫ337の試料№130、ＳＫ339の№134、ＳＫ411の№174、ＳＫ366の№190、ＳＫ426の№192、ＳＫ427の№194でのアラキジン酸、ベヘン酸、リグノセリン酸の高級脂肪酸３つの含有量は通常の遺跡出土土壌中の植物腐植土並みであったが、他のすべての試料中での高級脂肪酸含有量はやや多めか非常に多かった。

４　残存脂肪のステロール組織

残存脂肪のステロールをヘキサン－エチルエーテル－酢酸(80:30:１)を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで分離・精製後、ピリジン－無水酢酸(１：１)を窒素気流下で反応させてアセテート誘導体にしてから、もう一度同じ展開溶媒で精製し、ガスクロマトグラフィーにより分析した。残存脂肪の主なステロール組成を図105-１～105-13に示す。残存脂肪から20～23種類のステロールを検出した。このうちコプロスタノール、コレステロール、エルゴステロール、カンペステロール、スチグマステロール、シトステロールなど８種類のステロールをガスクロマトグラフィー－質量分析により同定した。

試料中のステロール組成をみると、動物由来のコレステロールは試料№122・№126・№134・№154に約７～11％分布していた他は、すべての試料中に6％以下しか分布していなかった。通常一般的な植物腐植土中にはコレステロールは２～６％分布している。従って、コレステロール含有量は試料№122・№126・№134・№154でもさほど多くはなく、すべての試料中でほぼ通常の遺跡出土土壌中の植物腐植土並みであった。

植物由来シトステロールはすべての試料中に約14～50％分布していた。通常の遺跡出土土壌中には、シトステロールは30～40％、もしくはそれ以上に分布している。従って、試料中でのシトステロール含有量は通常の遺跡出土土壌中の植物腐植土並みか少なめであった。

クリ・クルミ等の堅果植物由来のカンペステロール、スチグマステロールは、カンペステロールが試料№99・№122で検出されず、№185に約13％、他のすべての試料中に10％以下分布していた。スチグマステロールは試料№122で検出されず、№82に約11％、№192に約28％、他のすべての試料中に10％以下分布していた。通常の遺跡出土土壌中にはカンペステロール、スチグマステロールは1～10％分布している。従って、試料中に含まれているカンペステロール、スチグマステロールは試料№185に若干多く、№192にかなり多い他は、すべて通常の遺跡出土土壌中の植物腐植土並みでシトステロール、カンペステ

ロール、スチグマステロールといった植物性ステロール含有量はすべて、通常の遺跡出土土壌中の植物腐植土並みか少なめであった。

微生物由来のエルゴステロールは検出されない試料もあったが、検出されるものにも約３％しか分布していなかった。これは土壌微生物の存在による結果と思われる。

哺乳動物の腸および糞便中に特異的に分布するコプロスタノールは、検出されない試料もあったが、試料№50・№64・№93・№95・№102・№126・№154に約６～10％、他のすべての試料中に4％以下分布していた。コプロスタノールは通常の遺跡出土土壌中には分布していないが、１％程度の量は検出されることがある。また、コプロスタノールが10％以上含まれていると、試料中に残存している脂肪の動物種や性別、また遺体の配置状況などが特定できる場合があるが（６）、今回は含まれていても10％以下の量であるため、それらの判定はできなかった。しかし、多くはないがコプロスタノールが残存しているということは、試料中に哺乳動物の脂肪が残存していると推測できる。

一般に動物遺体の存在を示唆するコレステロールとシトステロールの分布比の指標値は土壙で0.6以上（７）、土器、石器、石製品で0.8～23.5をとる。（８、９）試料中のコレステロールとシトステロールの分布比を表８-１～８-５に示す。表からわかるように、分布比はすべての試料中で0.6以下であった。このことは、試料中には動物遺体または動物由来の脂肪が少ないことを示唆している。以上、館の上遺跡の試料中のすべてのステロール類の含有量は、各ステロール類が若干多めに含まれている試料や検出されない試料もあったが、それ以外はすべて通常の遺跡出土土壌中の植物腐植土並みか少なめであることがわかった。コレステロールとシトステロールの分布比はすべての試料中で0.6以下で、試料中に動物遺体または動物由来の脂肪が少ないことを示唆していた。従って、脂肪酸分析で多く含まれていた高級脂肪酸は植物体の表面を覆うワックスの構成分由来のものも混合していると考えられる。

５　脂肪酸組成の数理解析

残存脂肪の脂肪酸組成をパターン化し、重回帰分析により各試料間の相関係数を求め、この相関係数を基礎にしてクラスター分析を行って各試料の類似度を調べた。同時に同じ秋田県内の遺跡で、土器埋設遺構や土坑にヒト遺体が直接埋葬されていたと判定した虫内Ⅰ遺跡(10)、桂の沢遺跡(11)、虫内Ⅲ遺跡(12)、出土土壙を土壙墓と判定した兵庫県寺田遺跡(13)、出土土器を幼児埋葬用甕棺と判定した静岡県原川遺跡(14)ヒトの体脂肪、出土土器に人の骨のみを埋納したと判定した秋田県片野Ⅰ遺跡(15)、出土土壙を再葬墓と判定した宮城県摺萩遺跡(16)、ヒトの骨油試料など、各種遺跡試料や現生試料の脂肪酸の類似度とも比較した。今回は検体数が200点以上と、非常に多いので、番号順に遺構や遺物を分けてクラスター分析を行い、各試料の類似度を調べた。あらかじめデータベースの脂肪酸組成と試料中のそれとでクラスター分析を行い、その中から類似度の高い試料を選び出し、再びクラスター分析によりパターン間距離にして表したのが図106-１～106-４である。図106-１、106-２、106-４の土坑および住居址関係の試料を見てみると、試料№１・№21・№56が虫内Ⅲ遺跡の試料と共に相関行列距離0.05以内の所にあり、非常によく類似していた。試料№198はヒト遺体を直接埋葬したことに関わる虫内Ⅲ遺跡、桂の沢遺跡の試料と共に相関行列距離0.1以内の所にあり、よく類似していた。これら以外のすべての土壙関係の試料はヒトの骨のみを埋葬したことに関わる片野Ⅰ遺跡、摺萩遺跡、ヒトの骨油試料と共に相関行列距離0.2以内の所にあり、類似していた。上記の虫内Ⅰ遺跡、虫内Ⅲ遺跡、桂の沢遺跡の試料と類似していた試料のうち図106－２の試料№126・№128・№129・№135・№146・№147以外もすべてこれら片

野Ｉ遺跡、摺萩遺跡、ヒトの骨油試料と共に相関行列距離約0.2の所にあり、類似していた。試料№126のように哺乳動物特有のコプロスタノールが約９％も含まれている試料があることから、試料№126・№128・№129・№135・№146・№147はヒトの骨以外に遺体そのものを埋葬した可能性をも示している。

第106図-３の土器棺および甕関係の資料を見てみると、試料№148は虫内Ｉ遺跡の試料と共に相関行列距離0.05以内の所にあり、非常によく類似していた。他のすべての試料№149～№169は片野Ｉ遺跡、摺萩遺跡、ヒトの骨油試料と共に相関行列距離0.15以内の所にあり、類似していた。試料№148も他のすべて試料と共に相関行列距離0.15以内の所にあり、類似していた。

以上、館の上遺跡の試料のうち土坑および住居址試料に残存する脂肪は、土坑ＳＫ335の試料№126・ＳＫ336の№128・№129、ＳＫ339の№135、ＳＫ348の№146・№147を除き、すべてヒトの骨のみを埋葬したことに関わる遺跡の試料やヒトの骨油試料に残存する脂肪と類似していることがわかった。土坑ＳＫ335・ＳＫ336・ＳＫ339・ＳＫ348の試料に残存する脂肪はヒト遺体を直接埋葬したことに関わる試料に残存する脂肪とも類似していたが、他の試料同様ヒトの骨のみを埋葬したことに関わる試料と類似していた土坑ＳＫ335・ＳＫ336・ＳＫ339・ＳＫ348の試料中のステロール類は試料№126にコプロスタノールが他より若干多く含まれている以外は特に他の試料と異なる傾向は見られなかったが、脂肪酸組成パターンはこれらの試料中では主要な脂肪酸がパルミチン酸であるものばかりであった。土器棺や甕試料に残存する脂肪は、土器棺ＳＲ188の試料№148がヒト遺体を直接埋葬したことに関わる遺跡の試料に類似しているが、この試料№148を含めて、すべてヒトの骨のみを埋葬したことに関わる遺跡の試料に残存する脂肪と類似していることがわかった。

６　脂肪酸組成による種特異性相関

残存脂肪の脂肪酸組成から種を特定するために、中級脂肪酸（炭素数16のパルミチン酸から炭素数18のステアリン酸、オレイン酸、リノール酸まで）と高級脂肪酸（炭素数20のアラキジン酸以上）との比をＸ軸に、飽和脂肪酸と不飽和脂肪酸との比をＹ軸にとり種特異性相関を求めた。この比例配分により第２象限の原点から離れた位置に高等動物の血液、脳、神経組織、臓器等に由来する脂肪、第1象限から第２象限の原点から離れた位置にヒトの胎盤、第２象限の原点から離れた位置に高等動物の体脂肪、骨油に由来する脂肪がそれぞれ分布する。第２象限から第3象限にかけての原点付近に植物と微生物、原点から離れた位置に植物腐植、第３象限から第４象限にかけての原点から離れた位置に海産動物に由来する脂肪が分布する。

土壌試料の残存試料から求めた相関図で図107-１～107-５からは土坑および住居址関係の試料は第１象限、第２象限、第３象限内の様々な位置に分布することがわかった。第１象限内に分布した試料中にはコレステロールがさほど含まれていないことから、高等動物の血液、脳、神経組織、臓器等の特殊な部分の由来の脂肪だけではなく、植物体の表面に覆うワックスの構成分由来の脂肪が、第２象限内に分布した試料中には高等動物の体脂肪や骨油に由来する第３象限内に分布した試料中には植物腐植土由来の脂肪が、それぞれ残存していることがわかった。図107-４からは土器棺および甕関係の試料は主として第１象限と第３象限に分布することがわかった。第１象限内に分布した試料中には土坑関係の試料同様コレステロールがさほど含まれていないことから、高等動物の血液、脳、神経組織、臓器等の特殊な部分由来の脂肪と植物体のワックスの構成分由来の脂肪が、第３象限に分布した試料中には植物腐植土由来の脂肪が、それぞれ残存していることがわかった。

7　総括

館の上遺跡から出土した土坑、土器棺、甕、住居址の性格を判定するために、それらの遺構、遺物内の土壌試料の残存脂肪分析を行った。残存する脂肪酸分析の結果、土坑ＳＫ240・ＳＫ257・ＳＫ335・ＳＫ336・ＳＫ338・ＳＫ339・ＳＫ389・ＳＫ366・ＳＫ426・ＳＫ427・ＳＫ424、住居址ＳＩ377・ＳＩ365、土器棺ＳＲ188・ＳＲ190・ＳＲ192・ＳＲ303の試料中には主要な脂肪酸がパルミチン酸であるものがあり、他の土坑や同じ土坑内でも採取地点の異なる試料中には主要な脂肪酸がオレイン酸であるものがあることがわかった。また、一部の土坑内試料を除き、殆どの試料中で高級脂肪酸もやや多めか非常に多く含まれていることもわかった。

脂肪酸組成の分布に基づく数理解析の結果、クラスター分析からは土坑ＳＫ335・ＳＫ336・ＳＫ339・ＳＫ348の試料中に残存している脂肪はヒト遺体を直接埋葬したことに関わる遺跡の試料に残存する脂肪と類似していたが、それら以外の試料中に残存している脂肪はヒト遺体を直接埋葬したことに関わる遺跡の試料に類似しているものもあったが、全般的にはヒトの骨のみを埋葬したことに関わる遺跡の試料に残存する脂肪と類似していることがわかった。種特異性相関からは、土坑および住居址関係の試料中に残存する脂肪は第1象限から第３象限にかけての広い範囲に分布した試料の脂肪はステロール分析の結果も考え合わすと、高等動物の血液、脳、神経組織、臓器等の特殊な部分に由来するものではなく、植物体のワックスの構成分由来のものも混合していると推定できるため、高等動物の体脂肪や骨油、植物腐植土由来の脂肪が残存していることがわかり、土器棺および甕関係の試料中に残存していることがわかった。

残存するステロール分析の結果、試料中のすべてのステロール類の含有量は、各ステロール類が若干多めに含まれている試料や検出されない試料もあったが、それ以外はすべて通常の遺跡出土土壌中の植物腐植土並みか少なめであることがわかった。多くはないが、コプロスタノールが残存している試料中には、哺乳動物の脂肪が残存していることも推測された。しかし、コレステロールとシトステロールの分布比はすべての試料中で0.6以下で、試料中に動物遺体または動物由来の脂肪が少ないことを示していた。

以上の成績から、館の上遺跡から出土した土坑、土器棺、甕に残存する脂肪はヒトの骨のみを埋葬した場合に残存する脂肪と類似していることがわかった。住居址に残存する脂肪も動物、ヒトの脂肪と類似していた。しかし、哺乳動物特有のコプロスタノールの含有量が、少ない試料もあるが多くの試料中にコプロスタノールが残存していることから、動物遺体やヒト遺体そのものが分布していた可能性も考えられる。また、同一遺構内から複数点数採取した試料についても、採取位置により脂肪酸やステロールの含有量などに特別に差はなかった。今回は試料の採取方法として遺構外の対照試料がなく、また、土坑内の採取位置も土坑底面の両端すぎる試料が多く、試料採取地点もさほど多くないことから、あまり正確に遺構の性格を判定できなかった。今後試料を少なくとも３点以上にするか、２点の場合はもう少し中央に近づけて、層位に沿って採取するなどして、採取方法を改善してみる必要がある。

参考文献

(1)R.C.A.Rottländer and H.Schlichtherle:「Food indentification of samples from archaeological sities」、『Archaeo Physika』、10巻、1979、pp260。

(2)D.A.Priestley、W.C.Galinat and A.C.Leopold:「Preservation of polyunsaturated fatty acid in ancient Amasazi maize seed」、『Nature』、292巻、1981、pp146。

(3)R.C.A.Rottländer and H.Schlichtherle:「Analyse frühgeschichtlicher Gefαβ－inhalte」、『Naturwissenschaften』、70巻、1983、pp33。

(4)中野益男:「残存脂肪分析の現状」、歴史公論、第10巻(6)、1984、pp 124。

(5)M.Nakano and W.Fischer:「The Glycolipids of Lactobacillus casei DSM 20021」、『Hoppe－Seyler's Z.Physiol.chem.』、358巻、1977、pp1439。

(6)中野益男:「残留脂肪酸による古代復元」、『新しい研究方法は考古学になにをもたらしたか』、田中　琢、佐原　眞編、クバプロ、1995、pp 148。

(7)中野益男、伊賀　啓、根岸　孝、安本教傳、畑　宏明、矢吹俊夫、佐原　眞、田中　琢:「古代遺跡に残存する脂肪の分析」、『脂質生化学研究』、第26巻、1984、pp 40。

(8)中野益男:「真脇遺跡出土土器に残存する動物油脂」、『真脇遺跡－農村基盤総合設備事業能都東地区真脇工区に係わる発掘調査報告書』、能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団、1986、pp 401。

(9)中野益男、根岸　孝、長田正宏、福島道広、中野寛子:「ヘロカルウス遺跡の石器製品に残存する脂肪の分析」、『ヘロカルウス遺跡』、北海道文化財研究所調査報告書、第３集、1987、pp 191。

(10)中野寛子、明瀬雅子、長田正宏、中野益男:「虫内Ⅰ遺跡から出土した遺構に残存する脂肪の分析」、『虫内Ⅰ遺跡－東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅲ－』本文編、秋田県文化財調査報告書第274集、1998、pp 210。

(11)中野寛子、明瀬雅子、長田正宏、中野益男:「桂の沢遺跡の配石遺構に残存する脂肪の分析」、『桂の沢遺跡発掘調査報告書－小滝阿仁前田停車場線地方道改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査－』、秋田県文化財調査報告書第247集、1994、pp 118。

(12)中野寛子、明瀬雅子、長田正宏、中野益男:「虫内Ⅲ遺跡から出土した遺構に残存する脂肪分析」、『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅶ－虫内Ⅲ遺跡－』、秋田県文化財調査報告書第242集、1994、pp 189。

(13)中野益男、中野寛子、福島道広、長田正宏:「寺田遺跡土壙墓状遺構に残存する脂肪の分析」、兵庫県芦屋市教育委員会。

(14)中野益男、幅口　剛、福島道広、中野寛子、長田正宏:「原川遺跡の土器棺に残存する脂肪分析」、『原川遺跡Ⅰ－昭和62年度袋井バイパス(掛川地区)埋蔵文化財発掘調査報告書』、第17集、(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所、1988、pp79。

(15)中野寛子、明瀬雅子、長田正宏、中野益男:「片野Ⅰ遺跡から出土した土器に残存する脂肪の分析」、『秋田外環状道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ－片野Ⅰ遺跡－』、秋田県文化財調査報告書第265集、1996、pp287。

(16)中野益男、福島道広、中野寛子、長田正宏:「摺萩遺跡の遺構に残存する脂肪の分析」、宮城県教育委員会。

第７-１表　土壌試料の残存脂肪抽出量

試料No.	採取地点	湿重量(g)	全脂質(mg)	抽出率(%)
1	SK220 埋土下部(D)	509.0	43.4	0.0085
2	〃 〃 (F)	408.8	37.7	0.0092
3	SK221 〃 (G)	373.7	45.9	0.0123
4	〃 〃 (I)	404.1	48.6	0.0120
5	SK227 〃 (D)	485.9	64.7	0.0133
6	〃 〃 (E)	431.9	106.5	0.0247
7	〃 〃 (F)	393.9	44.9	0.0114
8	〃 〃 (G)	445.6	50.2	0.0113
9	〃 〃 (H)	404.1	57.0	0.0141
10	〃 〃 (I)	381.7	90.4	0.0237
11	SK235 〃 (D)	488.3	95.0	0.0195
12	〃 〃 (F)	511.8	79.5	0.0155
13	SK236 〃 (D)	482.7	123.7	0.0256
14	〃 〃 (F)	398.3	120.5	0.0301
15	SK237 〃 (G)	284.0	55.7	0.0196
16	〃 〃 (I)	390.3	46.1	0.0118
17	SK239 〃 (G)	529.6	50.7	0.0096
18	〃 〃 (I)	525.4	50.6	0.0096
19	SK240 〃 (G)	434.4	32.9	0.0076
20	〃 〃 (H)	393.5	34.3	0.0087
21	〃 〃 (I)	388.0	45.1	0.0116
22	SK241 〃 (G)	489.8	25.2	0.0051
23	〃 〃 (I)	524.4	26.2	0.0050
24	SK242 〃 (G)	384.4	37.5	0.0098
25	〃 〃 (I)	499.2	45.6	0.0091
26	SK243 〃 (G)	377.5	36.0	0.0095
27	〃 〃 (I)	382.8	31.3	0.0082
28	SK245 〃 (G)	397.9	51.6	0.0130
29	〃 〃 (I)	440.2	31.8	0.0072
30	SK246 〃 (D)	514.0	80.4	0.0156
31	〃 〃 (E)	498.3	65.3	0.0131
32	〃 〃 (F)	445.0	64.7	0.0145
33	〃 〃 (G)	520.1	47.3	0.0091
34	〃 〃 (H)	493.7	46.3	0.0094
35	〃 〃 (I)	511.8	37.4	0.0073
36	SK247 〃 (G)	570.0	28.6	0.0050
37	〃 〃 (I)	491.0	38.3	0.0078
38	SK248 〃 (G)	412.5	48.7	0.0118
39	〃 〃 (I)	518.7	53.2	0.0103
40	SK251 〃 (G)	349.5	40.1	0.0115
41	〃 〃 (I)	530.4	48.0	0.0090

第７-２表　土壌試料の残存脂肪抽出量

試料No.	採取地点	湿重量(g)	全脂質(mg)	抽出率(%)
42	SK252 埋土下部(D)	341.9	124.3	0.0364
43	〃 〃 (E)	362.1	75.8	0.0209
44	〃 〃 (F)	331.6	73.7	0.0222
45	〃 〃 (G)	439.1	77.5	0.0176
46	〃 〃 (H)	377.3	112.8	0.0299
47	〃 〃 (I)	268.9	49.3	0.0183
48	SK253 〃 (G)	390.3	63.7	0.0163
49	〃 〃 (I)	468.2	101.3	0.0216
50	SK254 〃 (G)	359.2	54.3	0.0151
51	〃 〃 (I)	370.6	55.9	0.0151
52	SK255 〃 (G)	495.6	48.9	0.0099
53	〃 〃 (I)	434.6	34.0	0.0078
54	SK256 〃 (G)	340.3	33.2	0.0098
55	〃 〃 (I)	353.3	43.4	0.0123
56	SK257 〃 (G)	409.8	32.4	0.0079
57	〃 〃 (I)	393.3	37.2	0.0095
58	SK258 〃 (G)	511.0	29.2	0.0057
59	〃 〃 (I)	426.9	22.2	0.0052
60	SK261 〃 (G)	345.7	40.5	0.0117
61	〃 〃 (I)	314.6	54.2	0.0172
62	SK262 〃 (G)	595.7	38.6	0.0065
63	〃 〃 (I)	525.9	70.5	0.0134
64	SK263 〃 (G)	506.3	66.3	0.0131
65	〃 〃 (I)	594.6	43.1	0.0072
66	SK266 〃 (G)	569.5	40.2	0.0071
67	〃 〃 (I)	579.8	139.8	0.0241
68	SK268 〃 (G)	488.5	193.1	0.0395
69	〃 〃 (I)	489.5	20.8	0.0042
70	SK270 〃 (D)	540.6	176.5	0.0326
71	〃 〃 (F)	424.5	192.4	0.0453
72	SK271 〃 (G)	335.3	184.4	0.0550
73	〃 〃 (I)	432.6	65.1	0.0150
74	SK272 〃 (D)	428.3	210.7	0.0492
75	〃 〃 (F)	490.4	81.6	0.0166
76	SK274 〃 (A)	435.3	609.8	0.1401
77	〃 〃 (C)	387.8	119.8	0.0309
78	SK275 〃 (G)	348.7	126.4	0.0362
79	〃 〃 (I)	414.5	84.2	0.0203
80	SK276 〃 (D)	310.3	32.6	0.0105
81	〃 〃 (F)	390.2	39.9	0.0102

第７-３表　土壌試料の残存脂肪抽出量

試料No.	採取地点	湿重量(g)	全脂質(mg)	抽出率(%)
82	SK277 埋土下部(D)	522.6	83.6	0.0160
83	〃 〃 (F)	511.3	68.8	0.0135
84	SK279 〃 (D)	335.9	137.3	0.0409
85	〃 〃 (F)	359.6	103.3	0.0287
86	SK280 〃 (G)	317.0	188.2	0.0594
87	〃 〃 (I)	353.0	92.3	0.0261
88	SK282 〃 (G)	405.3	42.8	0.0106
89	〃 〃 (I)	448.3	79.4	0.0177
90	SK283 〃 (D)	392.3	31.6	0.0081
91	〃 〃 (E)	465.7	85.9	0.0184
92	〃 〃 (F)	464.8	80.2	0.0173
93	SK284 〃 (G)	241.6	39.8	0.0165
94	〃 〃 (I)	233.6	57.5	0.0246
95	SK285 〃 (D)	517.3	144.7	0.0280
96	〃 〃 (E)	533.9	273.2	0.0512
97	〃 〃 (F)	445.3	129.1	0.0290
98	SK286 〃 (G)	299.3	59.4	0.0198
99	〃 〃 (I)	257.8	96.7	0.0375
100	SK287 〃 (D)	451.8	197.5	0.0437
101	〃 〃 (F)	423.0	209.3	0.0495
102	SK288 〃 (D)	483.8	246.0	0.0508
103	〃 〃 (F)	432.3	48.1	0.0111
104	SK289 〃 (G)	397.0	93.9	0.0237
105	〃 〃 (I)	316.8	82.2	0.0259
106	SK290 〃 (A)	325.0	30.1	0.0093
107	〃 〃 (C)	450.0	42.7	0.0095
108	SK323 〃 (G)	350.0	11.7	0.0033
109	〃 〃 (I)	329.1	11.8	0.0036
110	SK324 〃 (G)	469.5	28.5	0.0061
111	〃 〃 (I)	548.3	12.7	0.0023
112	SK325 〃 (D)	521.4	23.1	0.0044
113	〃 〃 (F)	528.4	52.7	0.0100
114	SK326 〃 (G)	368.0	14.7	0.0040
115	〃 〃 (I)	283.7	31.8	0.0112
116	SK327 〃 (G)	425.8	32.1	0.0075
117	〃 〃 (I)	614.4	29.6	0.0048
118	SK329 〃 (D)	415.6	29.7	0.0071
119	〃 〃 (E)	319.3	115.0	0.0360
120	〃 〃 (F)	375.5	43.6	0.0116
121	〃 〃 (G)	364.3	32.0	0.0088
122	〃 〃 (H)	421.2	20.6	0.0049
123	〃 〃 (I)	327.6	54.5	0.0166

第７-４表　土壌試料の残存脂肪抽出量

試料No.	採取地点	湿重量(g)	全脂質(mg)	抽出率(%)
124	SK334 埋土下部(G)	528.4	37.4	0.0071
125	〃 〃 (I)	425.9	39.7	0.0093
126	SK335 〃 (D)	356.0	78.4	0.0220
127	〃 〃 (F)	312.8	21.1	0.0067
128	SK336 〃 (G)	529.4	18.6	0.0035
129	〃 〃 (I)	500.5	15.8	0.0032
130	SK337 〃 (G)	526.2	16.1	0.0031
131	〃 〃 (I)	528.3	14.5	0.0027
132	SK338 〃 (G)	319.7	15.4	0.0048
133	〃 〃 (I)	338.8	14.5	0.0043
134	SK339 〃 (G)	582.1	15.7	0.0027
135	〃 〃 (I)	535.8	14.2	0.0027
136	SK340 〃 (D)	474.2	50.7	0.0107
137	〃 〃 (E)	510.6	54.8	0.0107
138	〃 〃 (F)	522.2	67.3	0.0129
139	〃 〃 (G)	530.9	30.5	0.0057
140	〃 〃 (H)	520.4	54.7	0.0105
141	〃 〃 (I)	450.3	25.5	0.0057
142	SK343 〃 (G)	542.3	97.9	0.0181
143	〃 〃 (I)	495.2	73.2	0.0148
144	SK346 〃 (G)	465.7	20.8	0.0045
145	〃 〃 (I)	353.1	10.6	0.0030
146	SK348 〃 (G)	473.7	17.9	0.0038
147	〃 〃 (I)	474.7	26.5	0.0056
148	SR188 棺内下部	528.5	36.3	0.0069
149	SR190 棺内上部	309.0	52.7	0.0171
150	〃 棺内下部	302.6	18.9	0.0062
151	SR192 〃	309.6	53.8	0.0174
152	SR193 〃	262.0	81.4	0.0311
153	SR195 〃	316.7	88.4	0.0279
154	SR196 〃	353.3	107.5	0.0304
155	SR197 〃	360.1	77.3	0.0215
156	SR198 〃	259.8	14.3	0.0055
157	SR199 〃	347.8	24.9	0.0072
158	SR298 〃	471.2	227.3	0.0482
159	SR300 〃	225.9	11.6	0.0051
160	SR301 〃	433.8	25.7	0.0059
161	SR302 〃	355.9	24.3	0.0068
162	SR303 〃	181.7	18.0	0.0099
163	SR309 〃	227.6	73.7	0.0324
164	SR311 〃	343.3	50.9	0.0148

第７-５表　土壌試料の残存脂肪抽出量

試料No.	採取地点	湿重量(g)	全脂質(mg)	抽出率(%)
165	SK313 棺内上部	247.0	24.4	0.0099
166	SK313 棺内下部	232.3	10.3	0.0044
167	SX393 甕内土	252.6	40.5	0.0160
168	〃 甕内土	313.5	42.3	0.0135
169	〃 甕下土	280.9	34.4	0.0122
170	SK407 埋土下部(A)	498.8	7.2	0.0014
171	〃 〃 (B)	459.7	12.0	0.0026
172	〃 〃 (C)	439.7	18.9	0.0043
173	SK411 〃 (A)	505.7	22.0	0.0044
174	〃 〃 (B)	484.8	7.0	0.0014
175	〃 〃 (C)	476.8	26.6	0.0056
176	SK388 〃 (A)	495.3	8.0	0.0016
177	〃 〃 (B)	495.8	10.7	0.0022
178	〃 〃 (C)	481.7	14.4	0.0030
179	SK389 〃 (D)	432.7	7.2	0.0017
180	〃 〃 (E)	437.3	4.7	0.0011
181	〃 〃 (F)	453.7	5.4	0.0012
182	SK390 〃 (A)	431.1	9.5	0.0022
183	〃 〃 (B)	436.1	8.0	0.0018
184	〃 〃 (C)	412.3	7.1	0.0017
185	S1377 〃 (C)	480.1	12.1	0.0025
186	〃 〃 (D)	432.6	7.4	0.0017
187	〃 〃 (H)	413.7	7.2	0.0017
188	SK366 〃 (A)	500.2	9.4	0.0019
189	〃 〃 (B)	488.5	4.4	0.0010
190	〃 〃 (C)	442.7	4.1	0.0009
191	SK426 〃 (A)	473.6	9.0	0.0019
192	〃 〃 (B)	444.7	9.0	0.0020
193	〃 〃 (C)	435.9	29.0	0.0067
194	SK427 〃 (A)	456.9	7.8	0.0017
195	〃 〃 (B)	444.5	8.7	0.0020
196	S1365 〃 (D)	479.9	13.4	0.0028
197	〃 〃 (E)	451.7	16.9	0.0037
198	〃 〃 (F)	449.0	20.8	0.0046
199	SK424 〃 (A)	459.2	28.5	0.0062
200	〃 〃 (B)	487.6	21.2	0.0043
201	〃 〃 (C)	479.3	8.6	0.0018
202	SK383 〃 (A)	480.4	5.8	0.0012
203	〃 〃 (B)	490.2	8.5	0.0017
204	〃 〃 (C)	466.3	5.3	0.0011

第８-１表　試料中に分布するコレステロールとシトステロールの割合

試料No.	コレステロール(%)	シトステロール(%)	コレステロール／シトステロール
1	3.47	19.37	0.18
2	2.73	23.61	0.12
3	3.46	23.26	0.15
4	2.89	15.62	0.19
5	2.36	21.73	0.11
6	2.64	18.85	0.14
7	2.98	20.15	0.15
8	3.49	18.92	0.18
9	2.45	20.71	0.12
10	2.75	17.23	0.16
11	2.30	27.05	0.09
12	2.11	25.20	0.08
13	4.89	18.59	0.26
14	3.17	19.13	0.17
15	3.44	43.99	0.08
16	2.57	28.98	0.09
17	3.03	26.56	0.11
18	4.08	22.64	0.18
19	3.11	29.17	0.11
20	3.32	29.09	0.11
21	3.15	20.92	0.15
22	2.91	26.26	0.11
23	2.99	25.03	0.12
24	3.84	22.76	0.17
25	2.41	25.82	0.09
26	2.09	19.25	0.11
27	2.31	24.15	0.10
28	2.26	19.94	0.11
29	2.72	17.37	0.16
30	3.59	24.33	0.15
31	6.44	20.93	0.31
32	4.38	24.96	0.18
33	2.55	31.48	0.08
34	3.07	29.41	0.10
35	2.91	31.68	0.09
36	2.38	28.59	0.08
37	2.40	29.34	0.08
38	2.71	31.98	0.08
39	2.94	27.65	0.11
40	3.78	14.48	0.26
41	3.24	22.66	0.14

第８-２表　試料中に分布するコレステロールとシトステロールの割合

試料No.	コレステロール(%)	シトステロール(%)	コレステロール／シトステロール
42	2.98	16.90	0.18
43	3.06	24.75	0.12
44	2.70	21.28	0.13
45	3.14	24.58	0.13
46	2.20	17.27	0.13
47	3.53	24.25	0.15
48	3.47	21.36	0.16
49	3.69	19.81	0.19
50	2.68	26.72	0.10
51	2.31	42.67	0.05
52	4.51	22.80	0.20
53	3.52	25.52	0.14
54	3.26	35.35	0.09
55	3.31	23.35	0.14
56	2.85	25.98	0.11
57	3.21	32.54	0.10
58	4.56	21.15	0.22
59	6.68	26.64	0.25
60	2.95	34.96	0.08
61	3.51	27.43	0.13
62	3.62	23.93	0.15
63	4.11	21.12	0.19
64	4.39	26.82	0.16
65	3.46	33.78	0.10
66	3.07	25.17	0.12
67	3.26	32.24	0.10
68	4.55	29.31	0.16
69	4.39	21.16	0.21
70	2.36	26.84	0.09
71	3.15	23.19	0.14
72	3.51	26.98	0.13
73	3.56	26.59	0.13
74	4.70	24.24	0.19
75	3.10	23.40	0.13
76	3.59	28.47	0.13
77	3.33	19.20	0.17
78	4.11	14.98	0.27
79	4.12	23.13	0.18
80	3.44	28.86	0.12
81	4.31	26.45	0.16

第８-３表　試料中に分布するコレステロールとシトステロールの割合

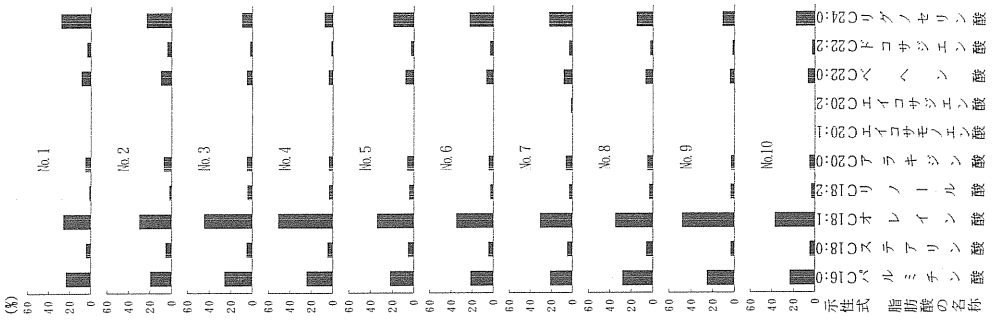
試料No.	コレステロール(%)	シトステロール(%)	コレステロール／シトステロール
82	3.02	39.55	0.08
83	3.73	24.41	0.15
84	4.34	35.35	0.12
85	3.18	19.24	0.17
86	2.83	25.45	0.11
87	2.51	27.48	0.09
88	2.45	32.56	0.08
89	3.06	26.74	0.11
90	2.29	41.72	0.05
91	2.51	25.08	0.10
92	3.02	26.80	0.11
93	2.79	24.42	0.11
94	4.64	24.54	0.19
95	3.94	20.79	0.19
96	3.72	17.76	0.21
97	4.76	23.78	0.20
98	2.52	50.16	0.05
99	5.37	41.73	0.13
100	3.60	18.41	0.20
101	5.91	23.25	0.25
102	2.66	30.84	0.09
103	2.60	28.77	0.09
104	3.92	29.42	0.13
105	3.21	31.15	0.10
106	2.87	29.19	0.10
107	5.21	26.64	0.20
108	3.22	44.25	0.07
109	3.60	36.54	0.10
110	3.40	20.48	0.17
111	3.91	26.46	0.15
112	3.95	31 58	0.13
113	3.11	34.70	0.09
114	4.92	30.54	0.16
115	3.34	14.69	0.23
116	5.95	27.20	0.22
117	4.74	25.11	0.19
118	3.84	25.82	0.15
119	5.41	23.39	0.23
120	5.24	23.10	0.23
121	3.91	21.81	0.18
122	7.10	46.65	0.15
123	3.37	19.15	0.18

第8-4表　試料中に分布するコレステロールとシトステロールの割合

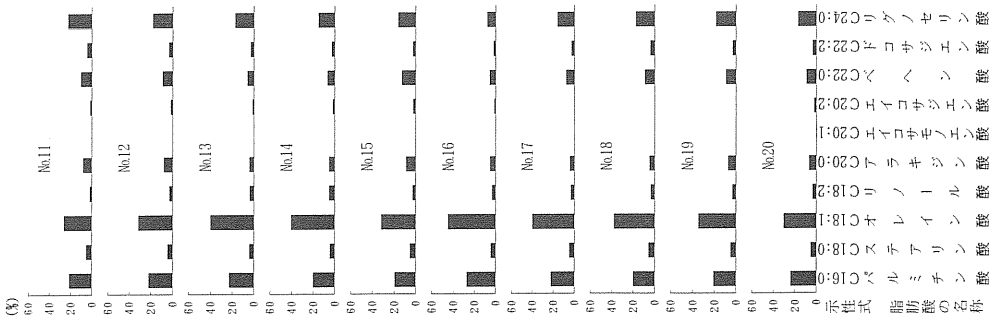
試料No.	コレステロール(%)	シトステロール(%)	コレステロール／シトステロール
124	5.09	32.06	0.16
125	3.09	23.44	0.13
126	10.55	27.09	0.39
127	4.35	27.79	0.16
128	3.77	27.69	0.14
129	6.06	31.97	0.19
130	5.11	18.50	0.28
131	7.50	20.88	0.36
132	7.22	32.38	0.22
133	6.66	27.31	0.24
134	9.23	24.72	0.37
135	6.83	21.16	0.32
136	5.15	30.85	0.17
137	3.10	21.21	0.15
138	3.19	19.60	0.16
139	6.65	19.04	0.35
140	3.20	29.32	0.11
141	4.71	16.36	0.29
142	4.07	12.81	0.32
143	3.79	15.90	0.24
144	4.45	27.05	0.16
145	4.98	38.05	0.13
146	5.74	38.57	0.15
147	3.33	40.90	0.08
148	4.64	30.86	0.15
149	3.73	23.90	0.16
150	2.67	32.74	0.08
151	3.87	23.09	0.17
152	2.66	38.76	0.07
153	5.35	43.84	0.12
154	9.67	31.10	0.31
155	3.13	30.98	0.10
156	3.77	30.80	0.12
157	2.93	45.58	0.06
158	2.81	31.46	0.09
159	5.22	15.02	0.35
160	2.36	36.11	0.07
161	2.18	28.50	0.08
162	1.48	34.49	0.04
163	2.53	19.38	0.13
164	3.13	29.78	0.11

第8-5表　試料中に分布するコレステロールとシトステロールの割合

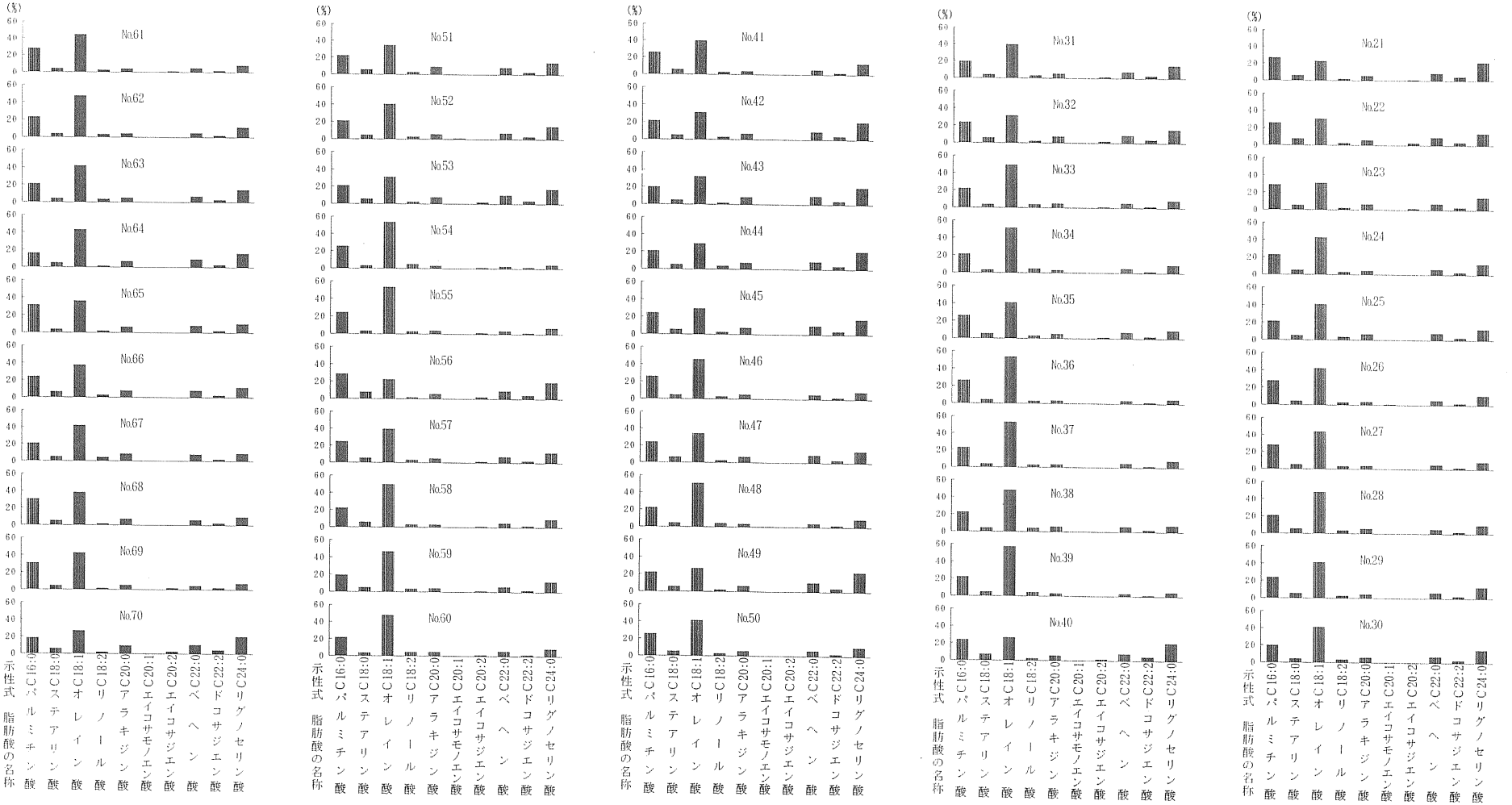
試料No.	コレステロール(%)	シトステロール(%)	コレステロール／シトステロール
165	1.90	22.59	0.08
166	2.38	29.48	0.08
167	2.55	44.42	0.06
168	3.35	38.96	0.09
169	3.05	40.98	0.07
170	6.12	24.09	0.25
171	6.77	25.18	0.27
172	4.57	30.86	0.15
173	3.86	36.85	0.10
174	5.00	37.21	0.13
175	2.87	33.26	0.09
176	4.18	28.66	0.15
177	4.72	27.26	0.17
178	5.21	29.85	0.17
179	4.34	40.30	0.11
180	5.84	42.70	0.14
181	5.44	41.54	0.13
182	3.86	39.52	0.10
183	4.24	43.76	0.10
184	5.61	44.62	0.13
185	3.93	35.98	0.11
186	4.38	24.99	0.18
187	4.60	22.27	0.21
188	3.46	14.26	0.24
189	5.15	15.85	0.32
190	5.72	19.95	0.29
191	4.84	18.89	0.26
192	6.12	29.05	0.21
193	4.93	29.25	0.17
194	5.66	21.27	0.27
195	4.63	21.10	0.22
196	4.06	20.36	0.20
197	3.28	32.75	0.10
198	2.63	22.85	0.12
199	3.86	36.48	0.11
200	3.13	26.06	0.12
201	5.74	33.51	0.17
202	5.28	31.31	0.17
203	3.74	30.95	0.12
204	5.76	26.77	0.22



第104図-1　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成



第104図-2　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成



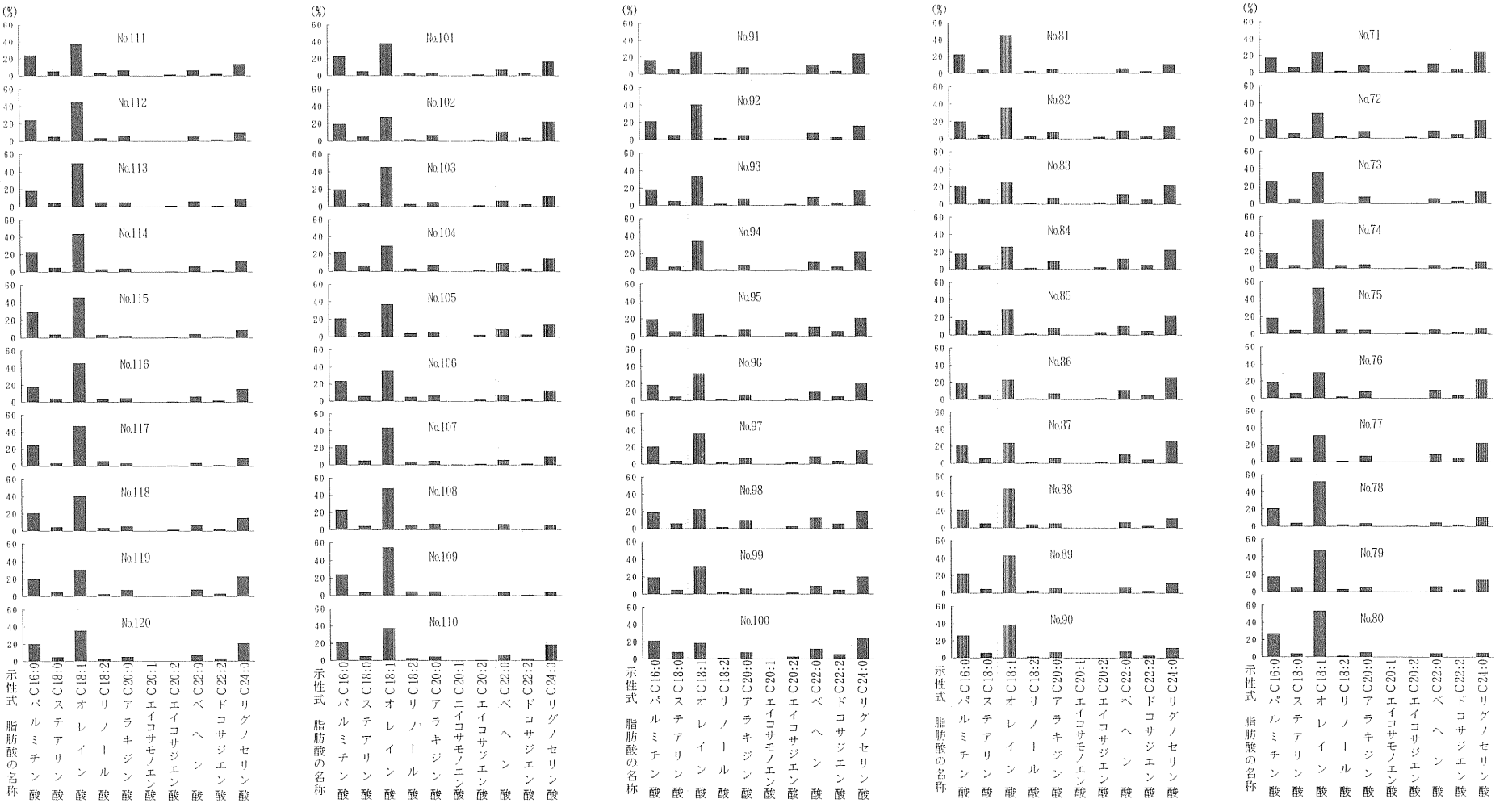
第104図-3　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成

第104図-4　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成

第104図-5　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成

第104図-6　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成

第104図-7　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成



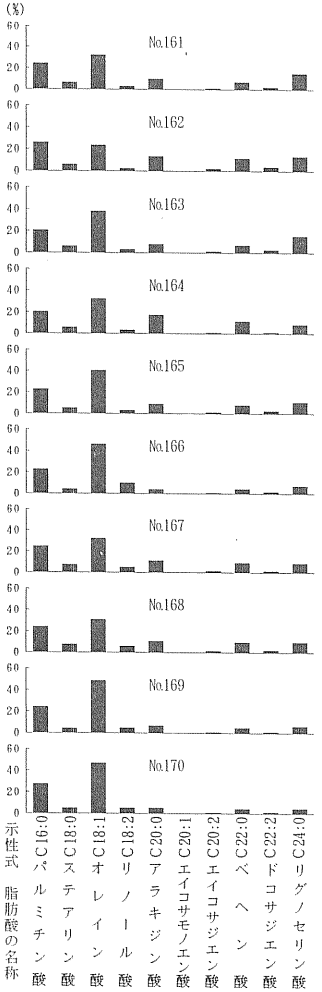
第104図-8　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成

第104図-9　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成

第104図-10　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成

第104図-11　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成

第104図-12　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成



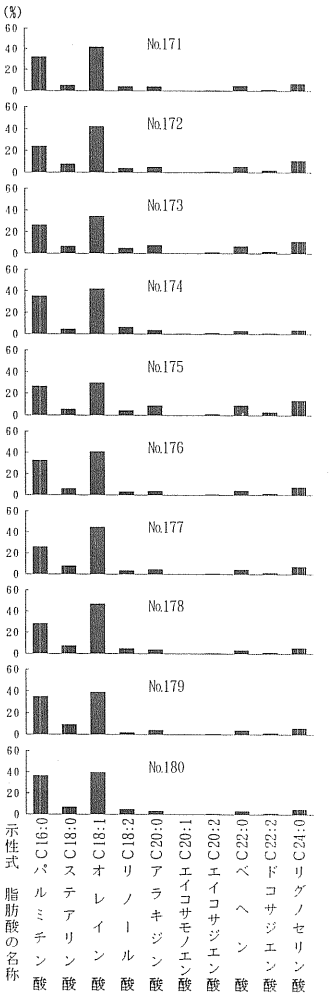
第104図-13　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成

第104図-14　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成

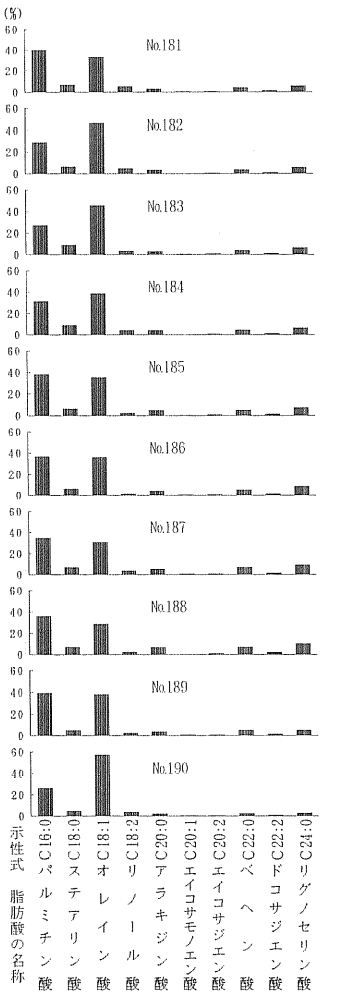
第104図-15　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成

第104図-16　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成

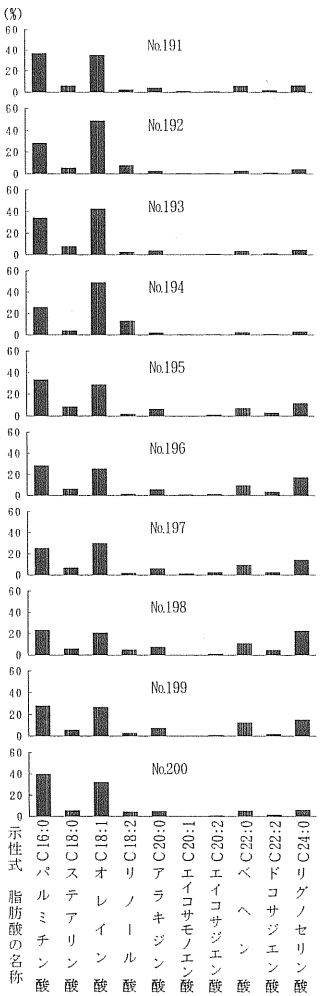
第104図-17　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成



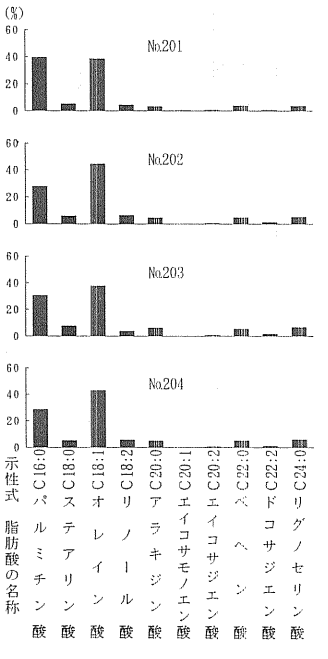
第104図-18　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成



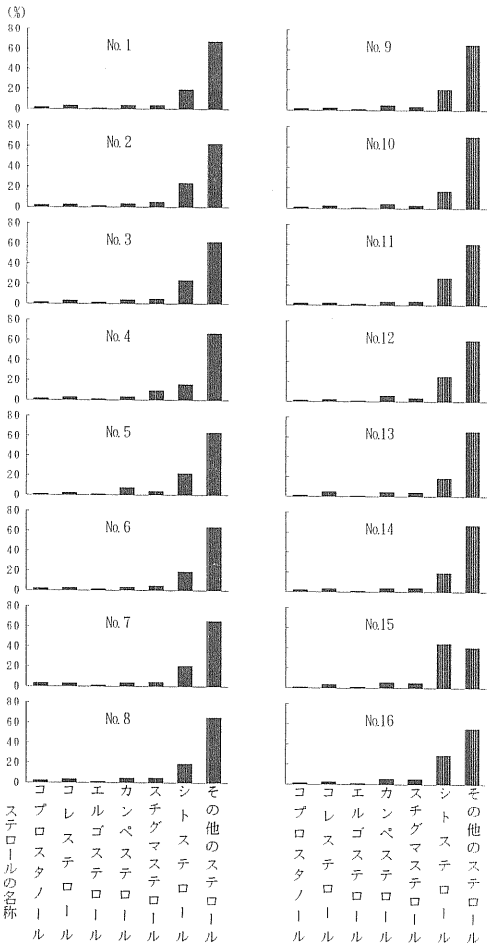
第104図-19　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成



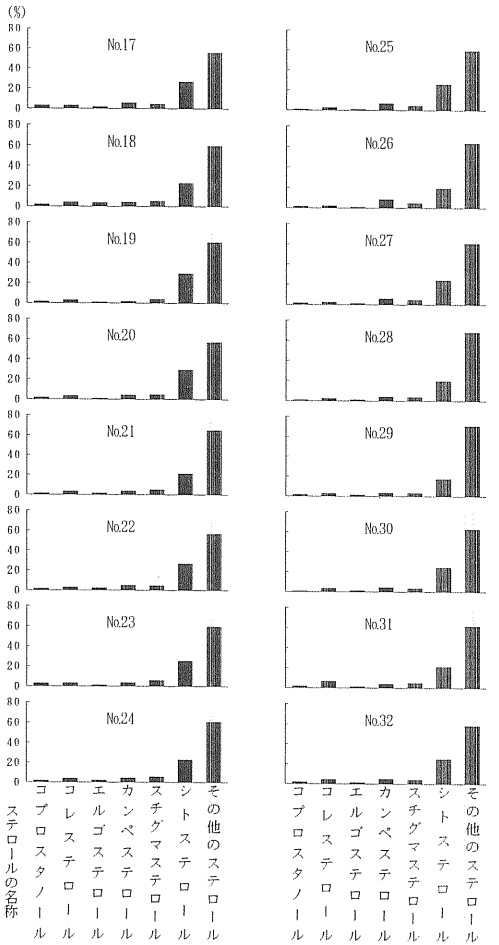
第104図-20　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成



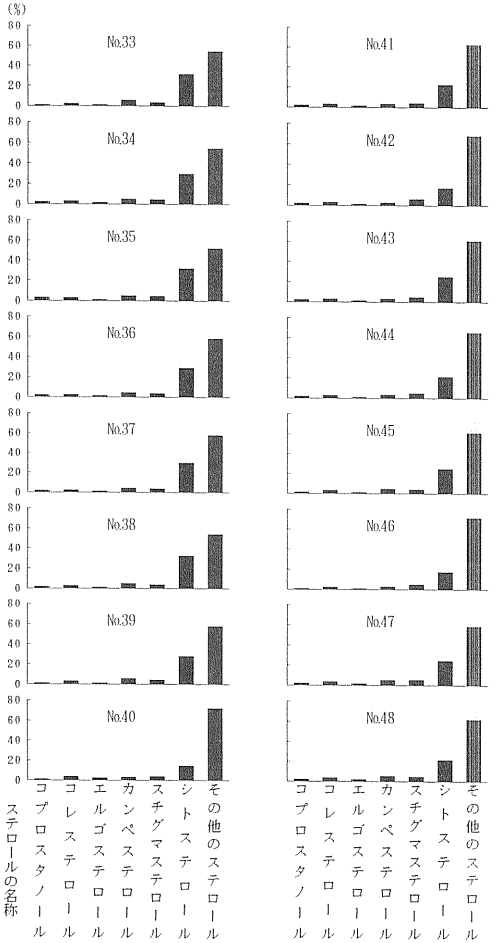
第104図-21　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成



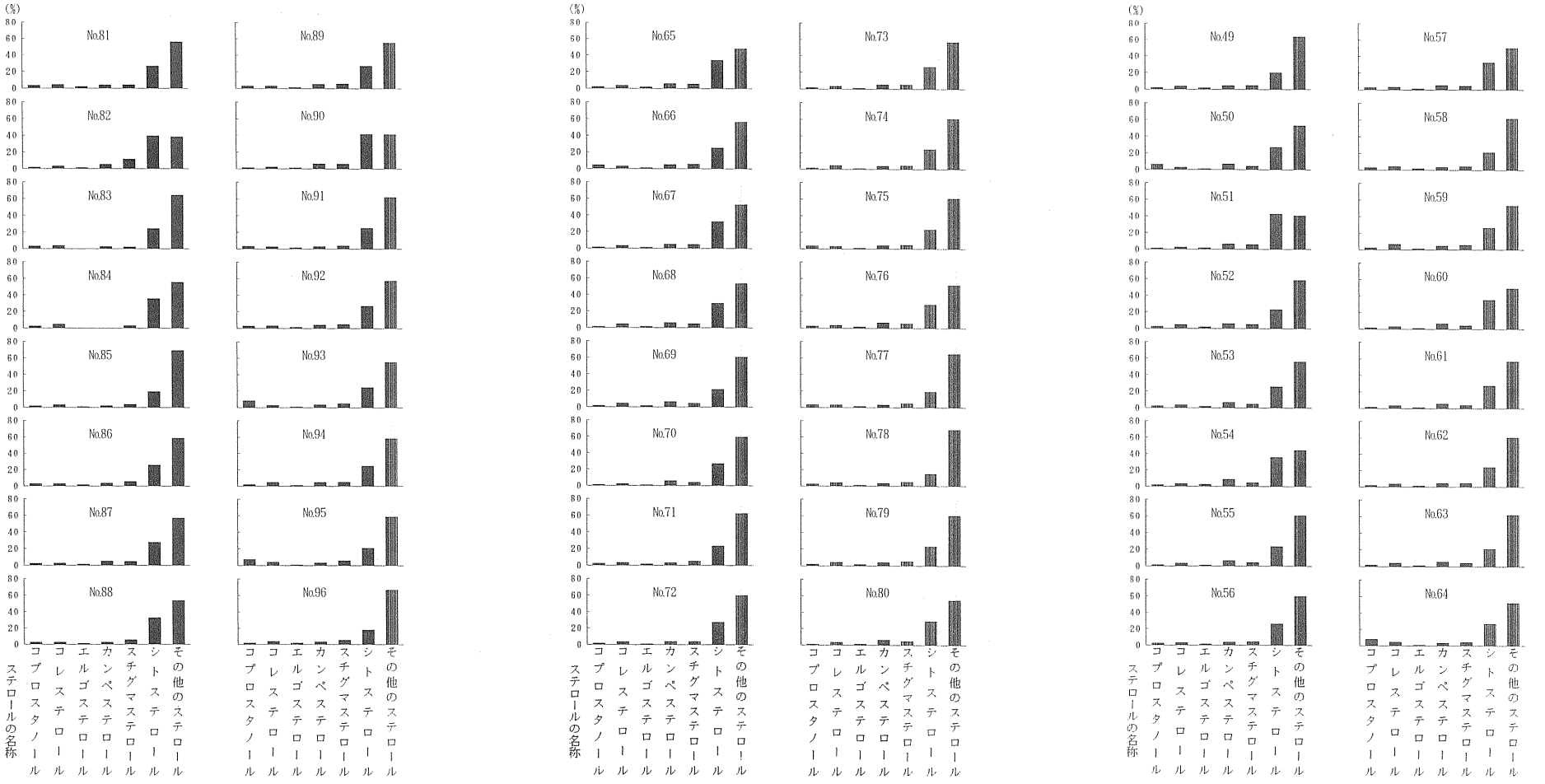
第105図-1　試料中に残存する脂肪のステロール組成



第105図-2　試料中に残存する脂肪のステロール組成



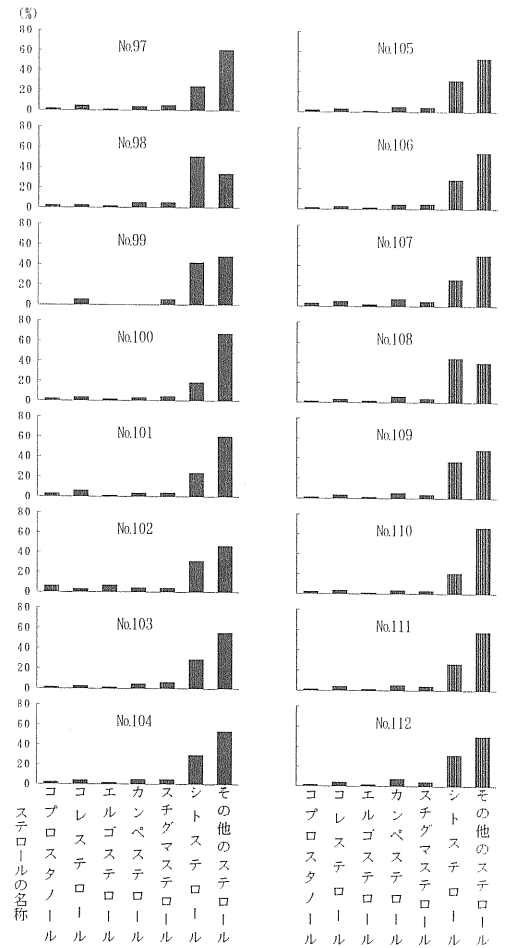
第105図-3　試料中に残存する脂肪のステロール組成



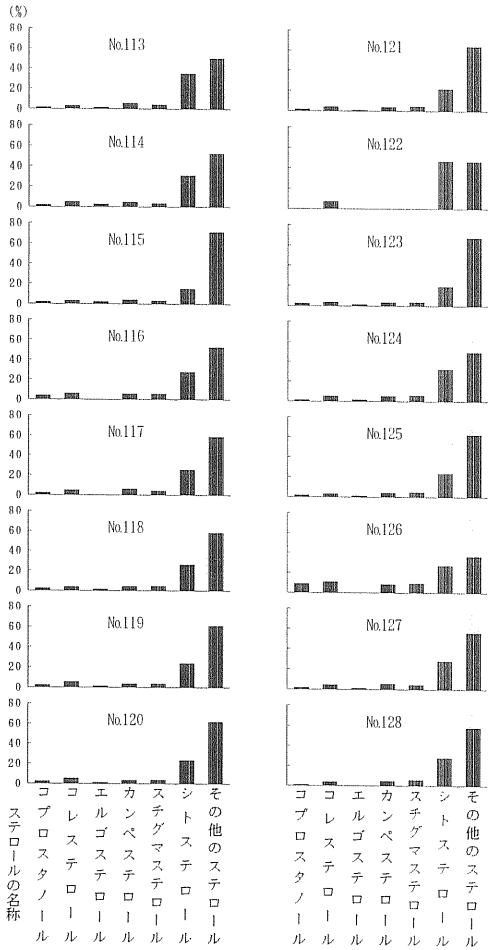
第105図-4　試料中に残存する脂肪のステロール組成

第105図-5　試料中に残存する脂肪のステロール組成

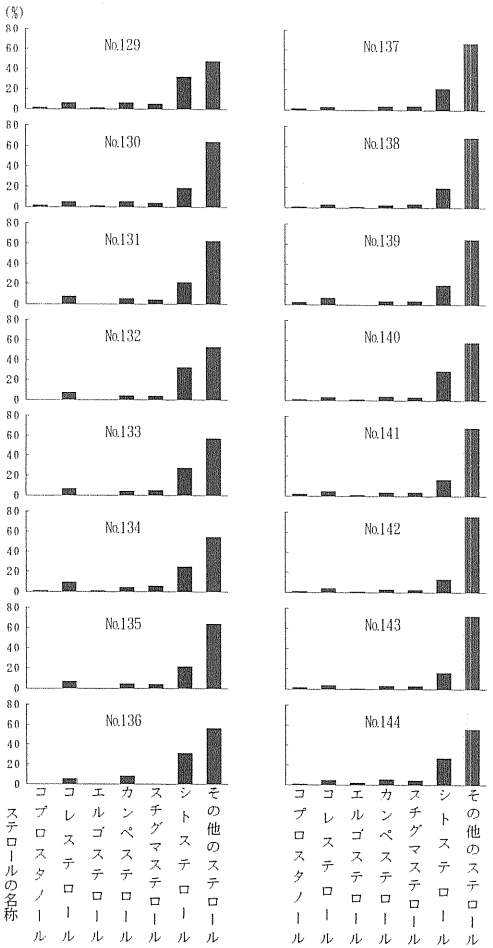
第105図-6　試料中に残存する脂肪のステロール組成



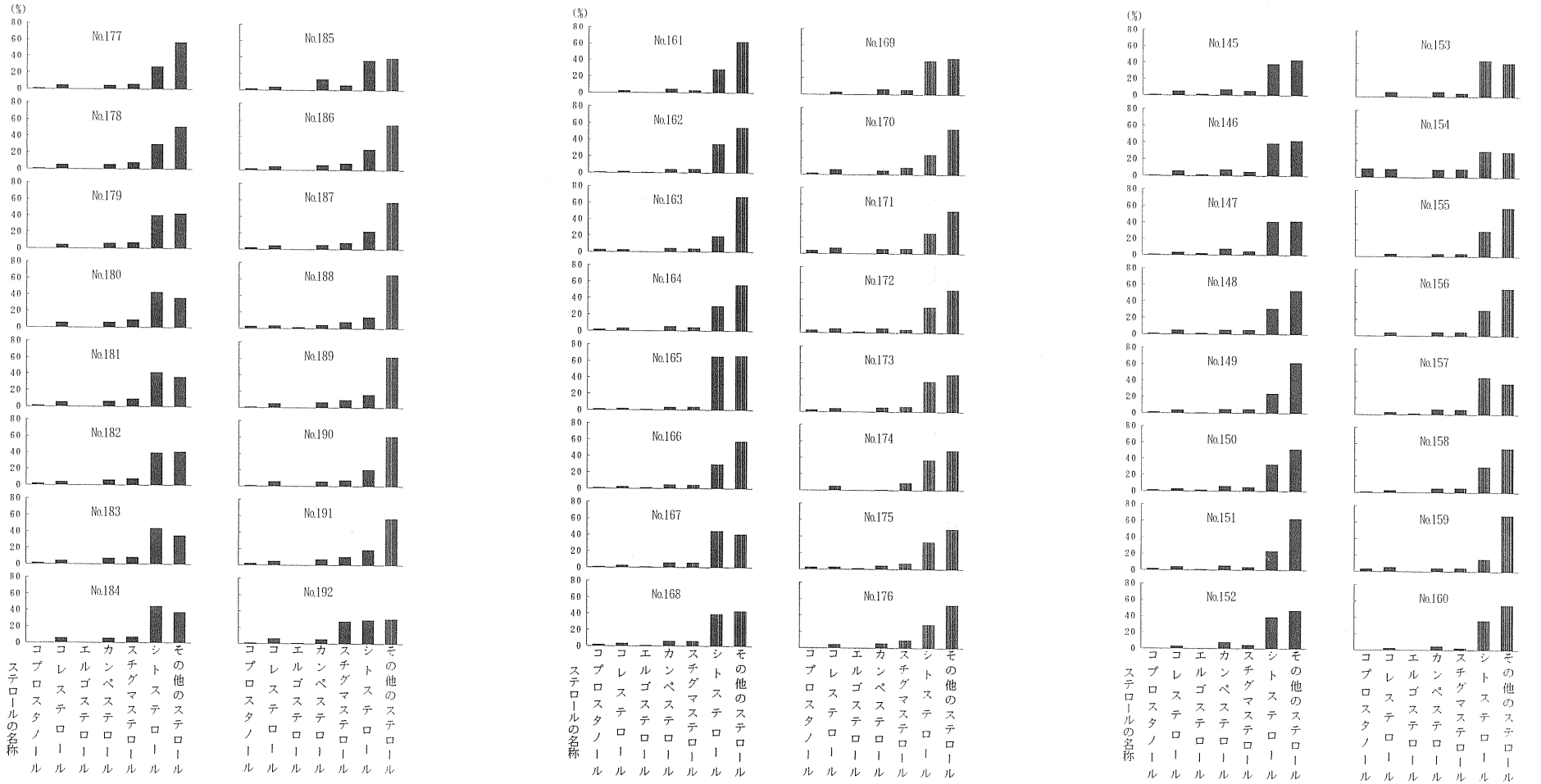
第105図-7　試料中に残存する脂肪のステロール組成



第105図-8　試料中に残存する脂肪のステロール組成



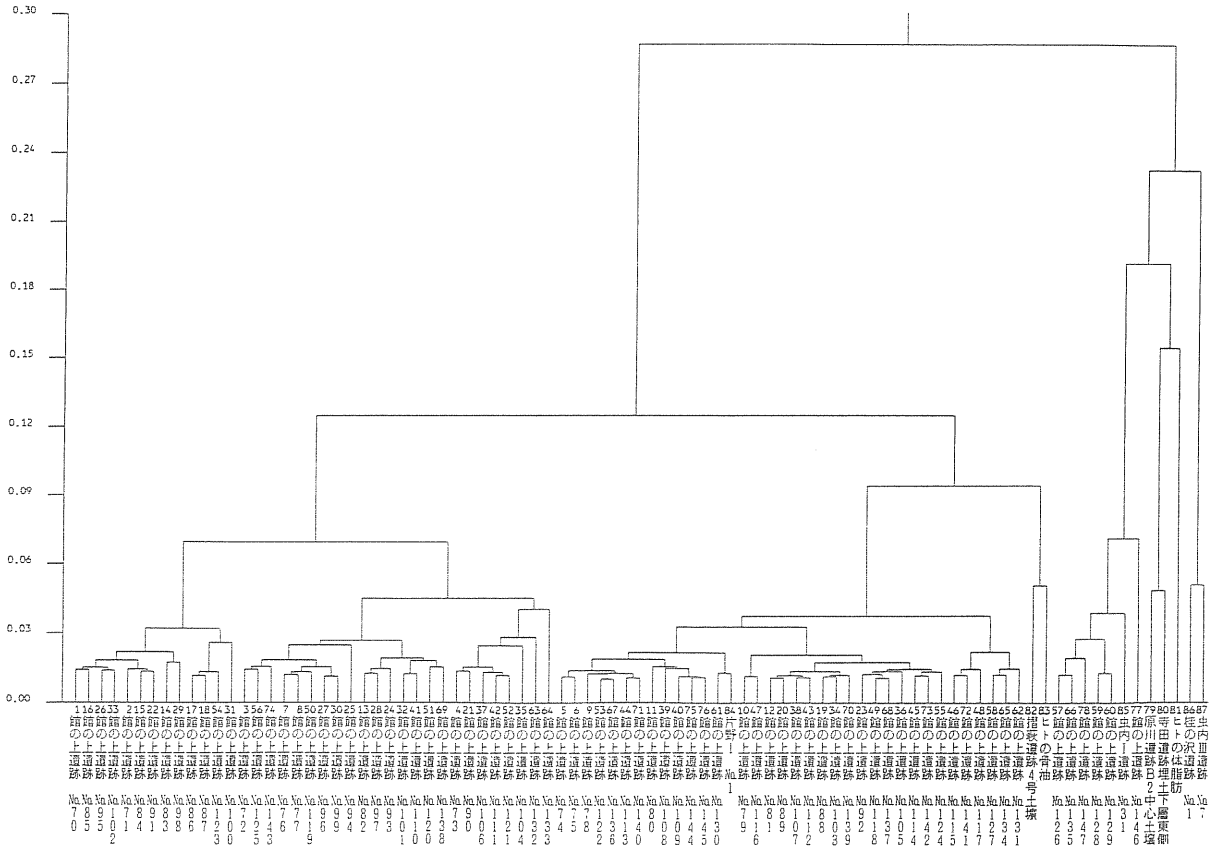
第105図-9　試料中に残存する脂肪のステロール組成



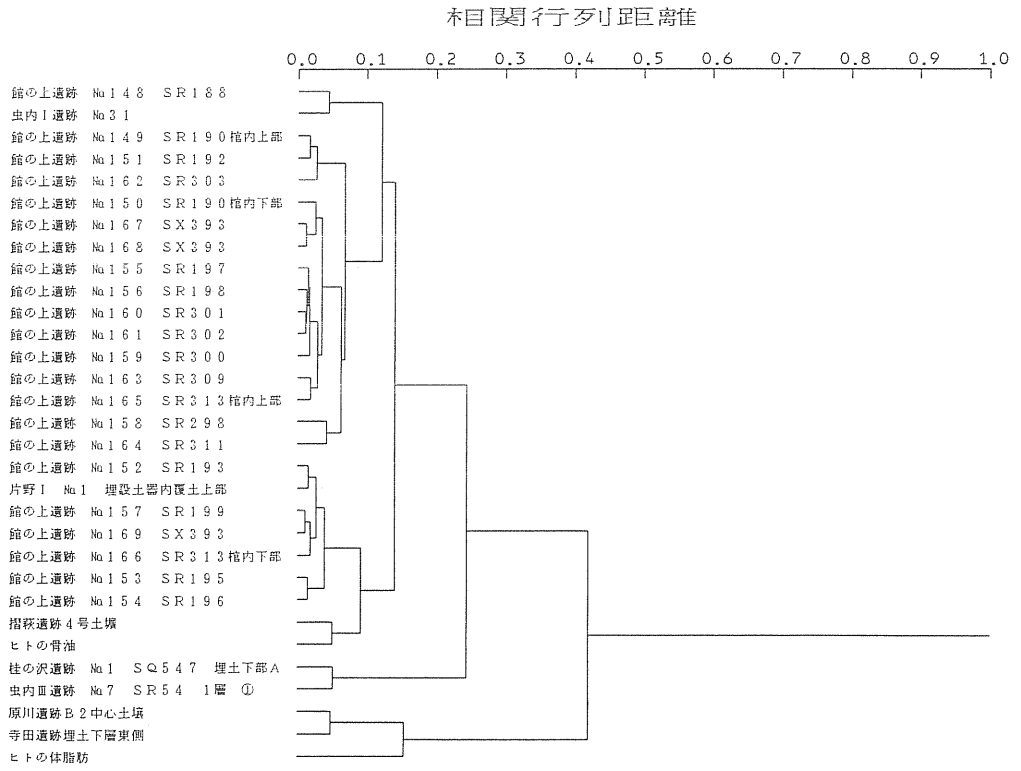
第105図-10　試料中に残存する脂肪のステロール組成

第105図-11　試料中に残存する脂肪のステロール組成

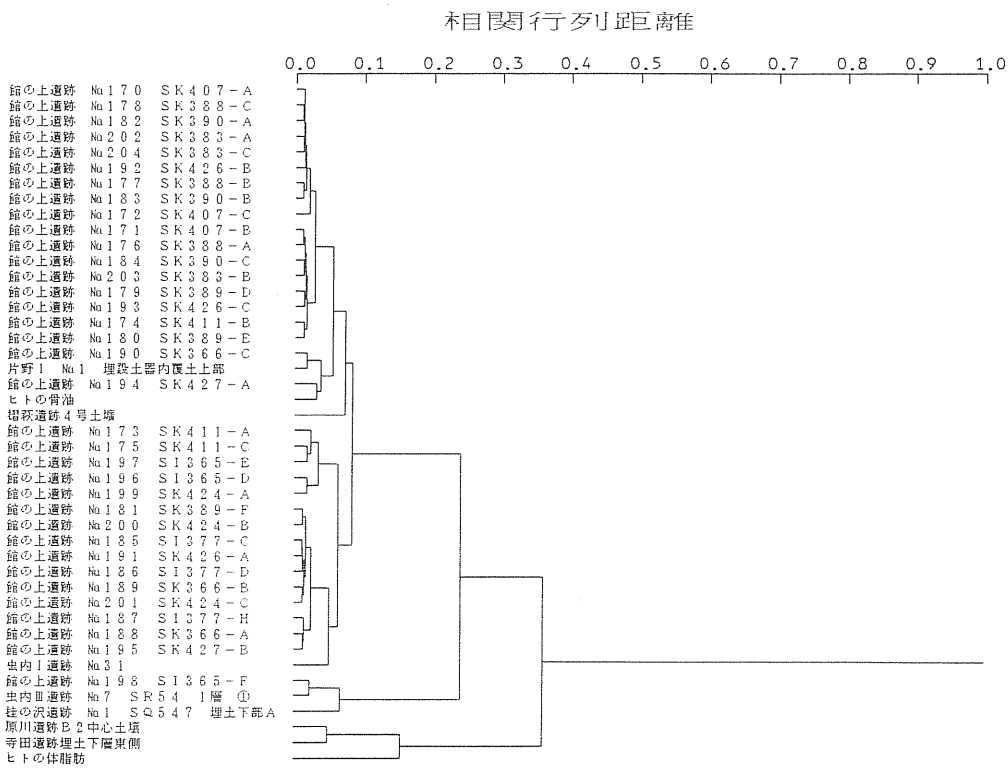
第105図-12　試料中に残存する脂肪のステロール組成



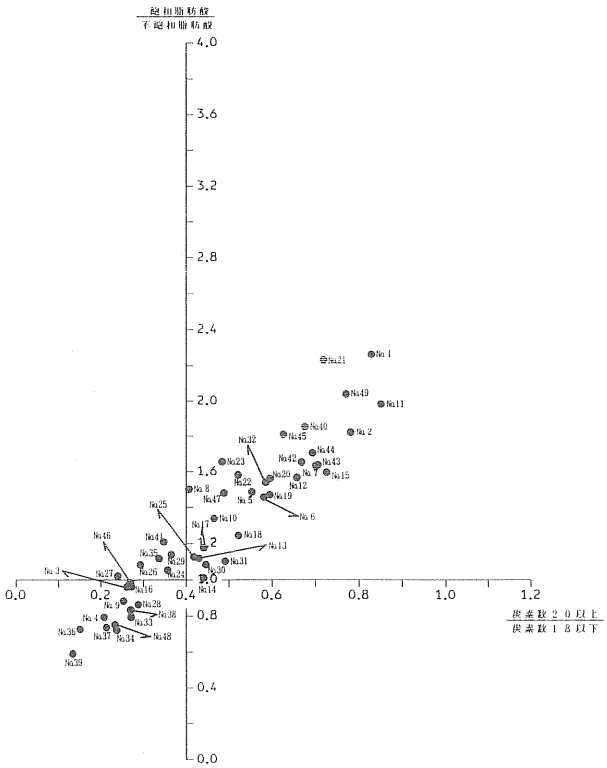
第106図-2　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図



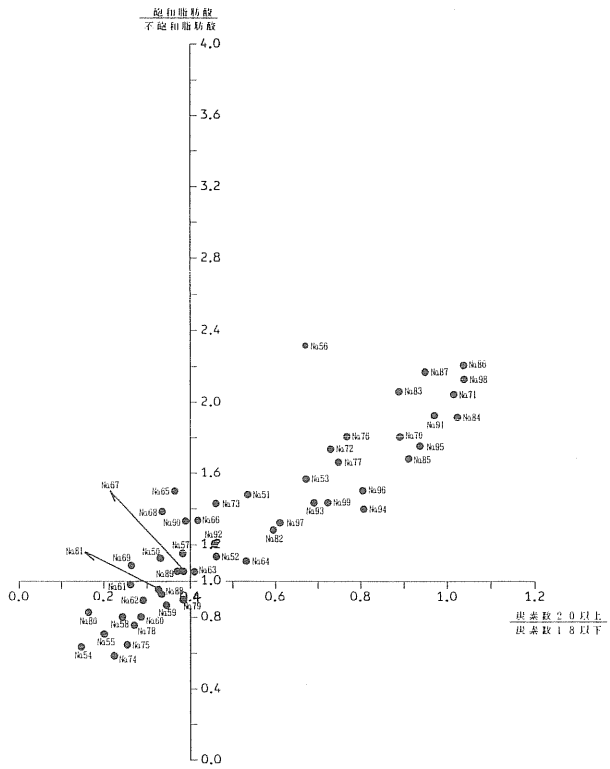
第106図-3　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図



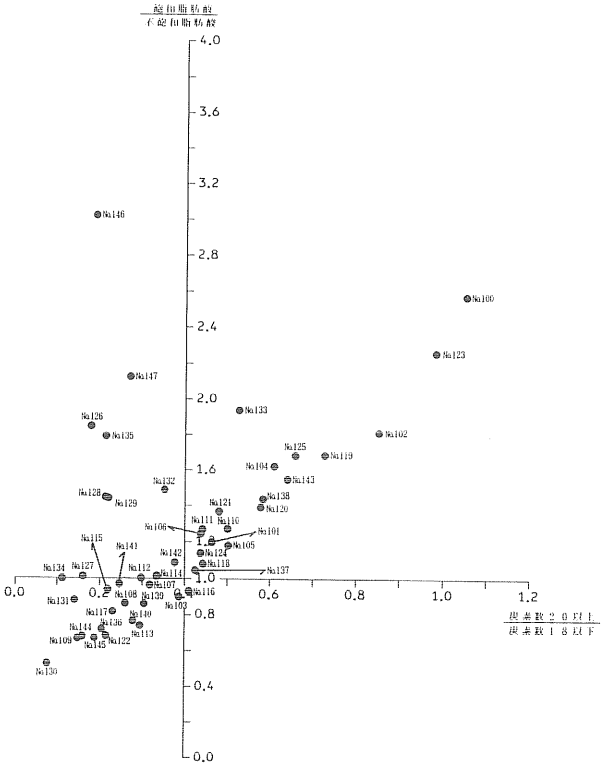
第106図-4　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図



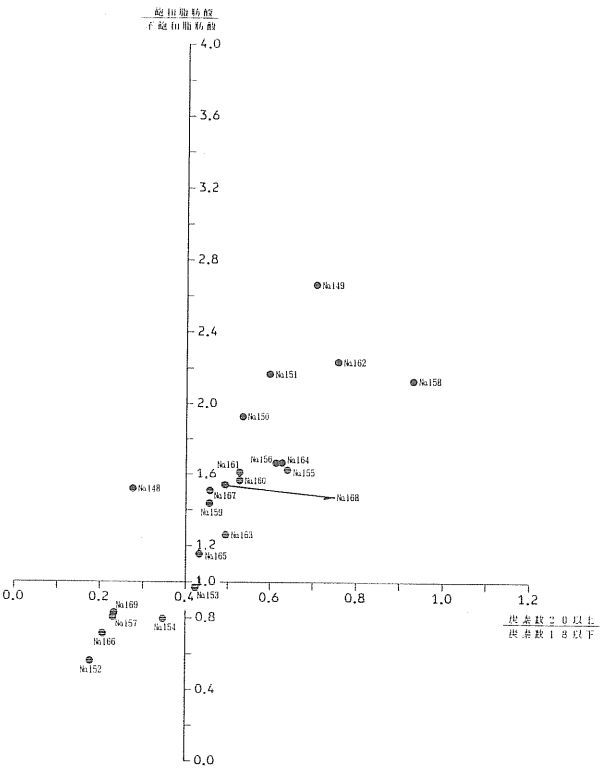
第107図-1　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関



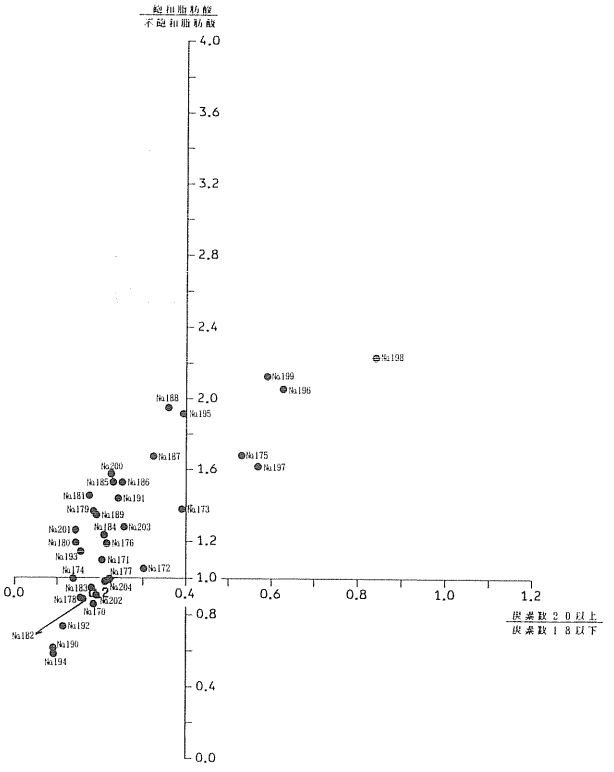
第107図-2　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関



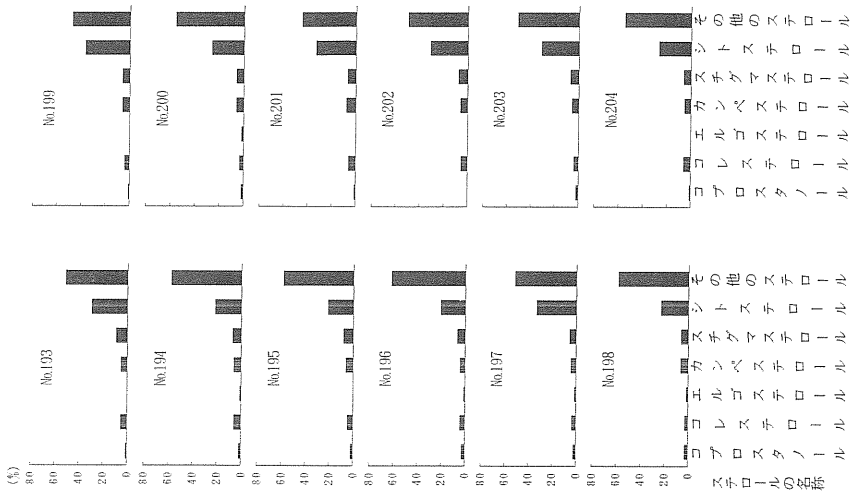
第107図-3　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関



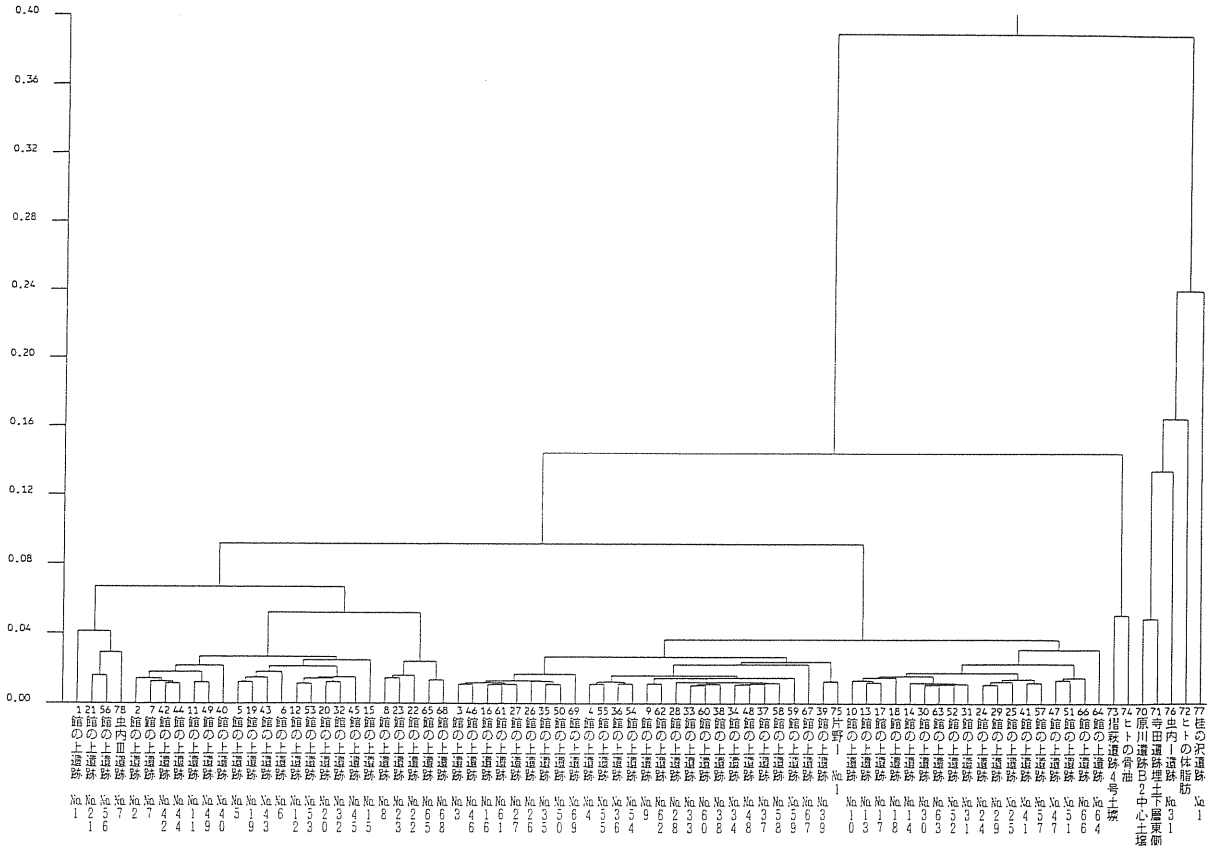
第107図-4　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関



第107図-5　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関



第105図-13　試料中に残存する脂肪のステロール組成



第106図-1　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図

第２節　秋田県、館の上遺跡出土土器胎土の植物珪酸体分析

株式会社古環境研究所

１　はじめに

植物珪酸体は、ガラスの主成分である珪酸(SiO_2)が植物の細胞内に蓄積したものであり、植物が枯死した後も微化石(プラント・オパール)となって土壌中に半永久的に残っている。この微化石は植物によりそれぞれ固有の形態的特徴を持っていることから、これを土壌中や土器の胎土中より検出してその組成や量を明らかにすることで過去の植生環境の復原に役立てることができる。植物珪酸体(プラント・オパール)分析と呼ばれるこの方法は、とくに埋蔵水田跡の確認や探査において極めて有効である。

この調査は、山本郡八竜町館の上遺跡より出土した土器について、稲作の痕跡を探る目的で植物珪酸体分析を行ったものである。

２　試料

分析に供した土器は表９に示す22点である。

第９表　供試試料一覧

土器番号	試料内容	土器番号	試料内容
1	ＳＲ118	12	ＳＲ299
2	ＳＲ190外	13	ＳＲ300
3	ＳＲ190内	14	ＳＲ301
4	ＳＲ192	15	ＳＲ302
5	ＳＲ193	16	ＳＲ303
6	ＳＲ195	17	ＳＲ309
7	ＳＲ196	18	ＳＲ311
8	ＳＲ197	19	ＳＲ312
9	ＳＲ198	20	ＳＲ313
10	ＳＲ199	21	ＳＲ342
11	ＳＲ298	22	№1500

３　方法

植物珪酸体の抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法(藤原、1976)」および「プラント・オパール土器胎土分析法(藤原、1982)」をもとに、次の手順で行った。

１)土器の分割　２)土器表面の研磨により異物除去　３)洗浄　４)煮沸および超音波照射により柔軟化　５)圧砕により土壌化　６)試料土の絶乾(105℃・24時間)　７)試料土約1ｇを秤量、ガラスビーズ添加(直径約40μｍ、約0.02ｇ)　８)電気炉灰化法により脱有機物処理　９)超音波により分散(300W・42ＫＨｚ・10分間)　10)沈底法により微粒子(20μｍ以下)除去、乾燥　11)封入剤(オイキット)中に分散プレパラート作成　12)検鏡・計数

検鏡は、機動細胞珪酸体に由来する植物珪酸体を同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が4000以上(土壌試料の分析では400個程度)になるまで行った。これはプレパラート10枚分の精査に相当する。

検鏡結果は、計数値を試料１ｇ中の植物珪酸体個数(試料１ｇあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズの個数の比率を乗じて求める)に換算して示した。

４　結果

植物珪酸体分析の結果を表10に示す。

第10表　館の上遺跡出土土器の植物珪酸体分析結果

検出密度(単位：×100個/ｇ)

試料番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
分類群 ＼ 試　料	188	190外	190内	192	193	195	196	197	198	199	298	299	300	301	302	303	309	311	312	313	342	1500
イネ																						
キビ族(ヒエ属など)																						
ヨシ属											2							2		2	2	
ウシクサ族(ススキ属など)					2																	
タケ亜科(おもにネザサ節)	2	25	44	31	21	10	20	24	8	20	22	18	13	119	72	224	5	55	26	30	10	44

推定生産量(単位：kg/㎡・cm)

イネ																						
(イネ籾)																						
キビ族(ヒエ属など)																						
ヨシ属											0.12							0.13		0.14	0.11	
ウシクサ族(ススキ属など)					0.03																	
タケ亜科(おもにネザサ節)	0.01	0.12	0.21	0.15	0.10	0.05	0.10	0.11	0.04	0.09	0.10	0.08	0.06	0.57	0.35	1.08	0.02	0.26	0.13	0.15	0.05	0.21

土器試料22点について分析を行った。その結果、イネの植物珪酸体はいずれの試料からも検出されなかった。検出された植物珪酸体のうち同定可能な分類群は、ヨシ属、ウシクサ族、タケ亜科のみであった。このうち、ヨシ属とウシクサ族については非常に低い検出密度であった。

5　所見

土器の胎土からイネの植物珪酸体が検出された場合、その要因として次のことが考えられる。すなわち、①土器の原料である粘土中にイネの植物珪酸体が含まれていた、②土器製作の過程において人為的に稲藁を混入させた、③土器の製作中、偶然、イネの植物珪酸体が混入した等である。

今回分析を行った土器については、いずれにおいてもイネの植物珪酸体は検出されなかった。このことは、少なくともこれらの土器の原料(粘土)にはイネの植物珪酸体は含まれておらず、なおかつ、土器の製作過程においてもイネの植物珪酸体の混入はなかったことを示している。したがって、原料とされた土壌(粘土)が採取された地点およびその近辺においては、稲作が行われていた可能性は考えにくい。

なお、植物珪酸体組成ならびに検出密度をそれぞれの試料について比較してみると、全体に植物珪酸体の検出密度は低いものの、試料301・303の２点については、他の試料に比べタケ亜科の密度が非常に高い値である。このことのみで判断するのは正確さに欠けるものの、両試料の原料となった土壌は、他の土器とは異なる地点のものである可能性が考えられる。

6　まとめ

館の上遺跡より出土した土器22点について植物珪酸体分析を行い、当時における稲作の可能性について検討をおこなった。その結果、いずれの土器からもイネの植物珪酸体は検出されず、今回の試料からは稲作の痕跡は認められなかった。

参考文献

藤原宏志(1976)プラント・オパール分析法の基礎的研究(１)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－。考古学と自然科学、9：p.15-29。

藤原宏志(1982)プラント・オパール分析法の基礎的研究(４)－熊本地方における縄文土器胎土に含まれるプラント・オパールの検出－。考古学と自然科学、14：p.55-65。

第6章　まとめ

1　遺構について

館の上遺跡の調査では、縄文時代から近世までの遺構や遺物を検出した。以下、各時代毎に遺構を概観した後に、弥生時代の土器を中心に記述する。

検出した遺構は、縄文時代では陥し穴状土坑３基、フラスコ状土坑11基、土坑12基、集石遺構１基、弥生時代では土器埋設遺構24基、土坑56基、平安時代では竪穴住居跡13軒、竪穴状遺構４基、掘立柱建物跡７棟、井戸１基、土坑38基、性格不明遺構１基、中世では郭１カ所、空堀２条である。他に時代の不明なものとして、掘立柱建物跡１棟、土坑11基、焼土遺構１基、溝44条、柱穴様ピット10基、性格不明遺構２基を検出しており、合計の遺構数は243基である。また、近世の陶磁器も出土した。なお、土坑は出土遺物や覆土の性質形状などで、縄文時代・弥生時代・平安時代・時代不明とに時代区分した。

縄文時代の陥し穴状土坑や土坑は、一部を除きＡ区の西側とＣ区北区に集中する。フラスコ状土坑は、両地区の斜面際に立地する。陥し穴状土坑は、Ａ区ではＴピットを、Ｃ区では深い土坑を検出した。

弥生時代の土器埋設遺構は、体部下半の深鉢や甕を数例含むため、敢えて土器埋設遺構として扱った。これらは、土器より僅かに大きな掘り方に、土器を正位に埋設したものが殆どである。底部に穿孔のある土器が多く、土器棺墓と判断される。

土器埋設遺構は、Ａ区の東側で東西に延びる舌状地形の括れ部分を境に、その両側に集中する。その範囲は、南北幅約25m、東西幅135mの範囲である。痩せ尾根部に１基、東側の先端側に17基、西側には６基存在した。このうち、痩せ尾根部のＳＲ197からは玉が１点、東側のＳＲ194とＳＲ311の２カ所からは玉と石鏃が１点ずつ出土した。

弥生時代の土坑は、土器埋設遺構と混在しており、共に墓域を形成していたものと考えられ、やはり括れ部分の両側に纏まりがある。東側では、ＳＫ346から石鏃３点が、ＳＫ282から玉１点が出土した。西側では、ＳＫ248から石鏃１点が、ＳＫ247・252・255・261・325・327からは玉が１点ずつ出土した。

これら弥生時代の遺構は、東側の掘立柱建物跡と空堀の位置する部分には認められないが、中世の郭や空堀の掘削地業で消滅したものの存在も想定される。

平安時代の竪穴住居跡と竪穴状遺構は、主にＡ区の中央からＢ区の東側にかけて位置している。これらの相違は、主に竈の有無を基準に置いた。攪乱や溝など後世の掘削が多く認められるので、竪穴状遺構には竈の消滅した竪穴住居跡を含む可能性がある。掘立柱建物跡や土坑も、竪穴住居跡や竪穴状遺構と隣接して存在した。掘立柱が太く建物跡が立派なことや、墨書土器が出土したこと、集落が更に南に拡大することから、当該地域では比較的中心的な集落跡と想定される。遺物は９世紀代が殆どである。

中世では郭と空堀が存在した。調査区外の南側には、第Ⅰ郭から第Ⅲ郭までが纏まってあり、沢を隔てて北側のＡ区東端に第Ⅳ郭が位置する。第Ⅳ郭の西端は空堀によって区画されていた。平成４年度の館の上館遺跡の調査では、中国産の青磁碗の破片なども出土している。

この他明確な遺構は確認できないが、肥前系の陶磁器が比較的多く出土しており、時代不明とした遺構には、近世以降の溝などが含まれるものと考えられる。

遺跡全体で見ると、特に遺構や遺物が集中したＡ区やＢ区東端は台地北側の縁辺部に当たる。そのた

め、その路線部南側に広がる平坦部には、弥生時代の土坑墓群に対応する住居跡群が想定されるし、平安時代の未調査区域に延びる大型竪穴住居跡の存在からも、同時代の集落が連続すると考えられる。

Ａ区西端やＣ区北区で検出された縄文時代の土坑は、互いに離れて台地縁辺から見つかっているが、Ｂ区北側付近の台地縁辺にも、フラスコ状土坑の存在が期待される。また、時期が明確でなかった溝跡は、さらに広範な配置を示し、土地の区画溝、排水溝、板塀などに関わる可能性がある。

2　弥生時代の土器について

本書の弥生時代の土器は、第４章第２節で扱った土器埋設遺構、土坑、遺構外出土土器を指している。これらには大型の壺や甕が多く、調整がハケメ主体で文様は平行沈線文や列点文を多用するなど、遠賀川系土器の特徴を備えた土器が主体を占めている。遠賀川系土器など大型製品以外の土器、浅鉢・深鉢・壺など小振りな土器は、弥生時代初頭の砂沢式土器の範疇と考えられる。本遺跡からは縄文晩期末葉の土器も出土しており、遠賀川系土器は、全体的に砂沢式もしくはそれに併行する時期と捉えている。

遺跡からは、壺・甕・浅鉢・鉢・小型の壺・小型の浅鉢の各器種が出土したが、高坏・蓋・無頸壺は見つかっていない。本県の遠賀川系土器のうち、全体の器形や文様構成が摘出できる大型の壺や甕を出土した遺跡としては、秋田市地蔵田Ｂ遺跡や湯の沢Ａ遺跡、若美町横長根Ａ遺跡がある。ここでは、広口で体部に最大径をもつ壺や甕（大型の遠賀川系土器とその要素をもつ大型の土器：１・２・７～９・15・17・18・22・24・27）を中心に、文様を主体として大雑把に纏めてみたい。

ａ類：全体にミガキを施し、無文である。２や９が該当する。

ｂ類：地文がミガキの無文で、頸部に横位の平行沈線がある。22や３が該当する。22は平行沈線文に沿って列点文を施す。

ｃ類：地文がミガキの無文で、頸部と体部に横位の平行沈線文を配し区画帯を作る。１が該当する。１は、体部の平行沈線に沿って列点文を施す。

ｄ類：頸部と体部にある、横位の平行沈線による区画帯を、縦位の平行沈線文で更に区画する。体部の平行沈線文より下方には、全面に縄文を施す。５・７・８・18が該当する。８と18は、上下の平行沈線文に沿って列点文を施す。

ｅ類：体部の全面に縄文がある。４・11・15・24が該当する。４・11は口縁部に縄文を施す。

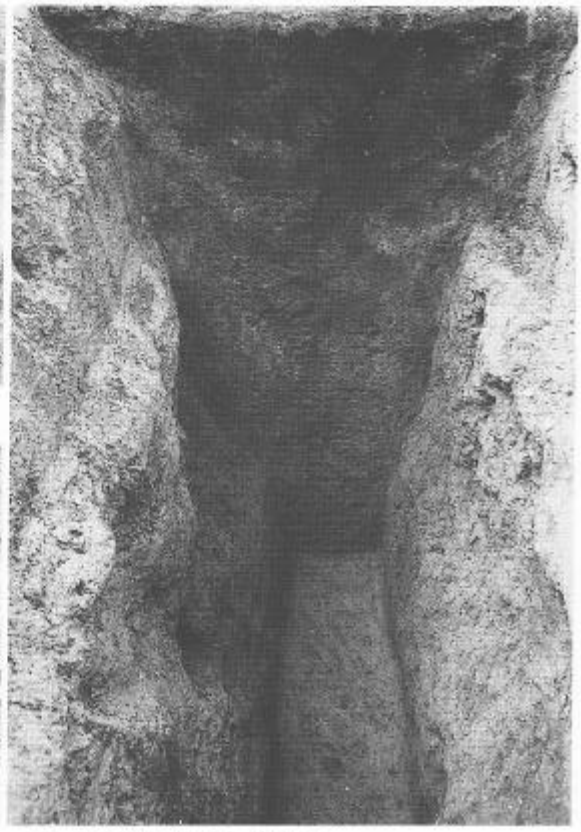
ｆ類：体部の全面に縄文があり、頸部に横位の平行沈線文を施す。13・14・17・27が該当する。13と17は、平行沈線文に沿った列点文を施す。

以上は、主に地文や縦横位の平行沈線文の在り方に注目して、分類したものである。本文では、地文が無文の場合を精製土器（ａ～ｃ類）、地文が縄文の場合を粗製土器（ｅ・ｆ類）、地文が両方の特徴をもつ場合を半精製土器（ｄ類）として扱った。

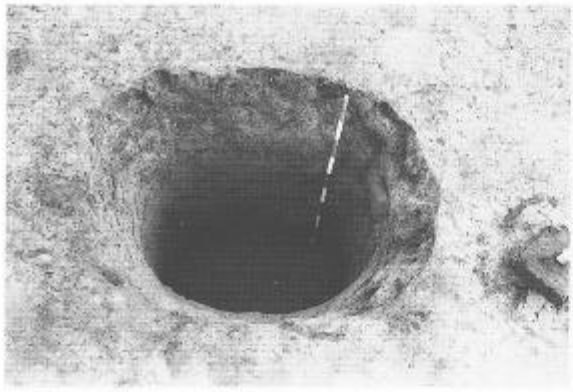
遠賀川系土器の製作技法・文様要素は、ハケメ・ヘラミガキ・黒斑・沈線文・列点文など様々である。一般的には、広口の口縁部が外反し体部中央から肩部に最大径をもつ器形で、上記の諸要素を含んだ土器を指す。このうち、縦位の平行沈線文による区画帯（四辺形）の形成は、西日本遠賀川式土器の赤彩文などに見られる縦位区画線文などの流れを汲む重要な要素と考えている。この意味から、ａ～ｄ類の精製・半精製土器は文様の在り方から見て典型的な遠賀川系土器、ｅ・ｆ類の粗製土器は文様ではより在地的とも見えるが、遠賀川系土器の煮沸形態に通じるものと評価したい。

図版1　縄文時代の土坑(1)

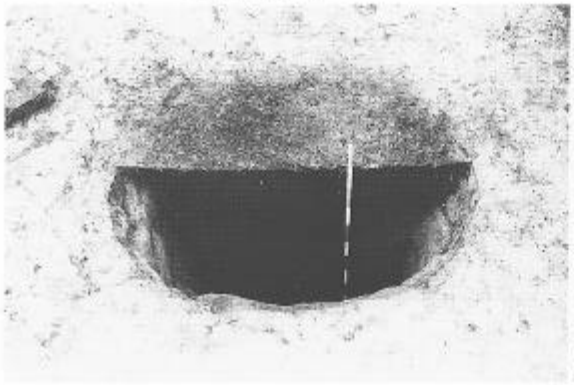
1　ＳＫＴ106断面（北西▷）



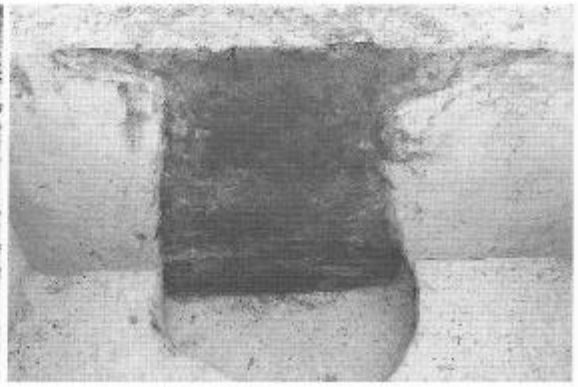
2　ＳＫＴ166断面（南▷）



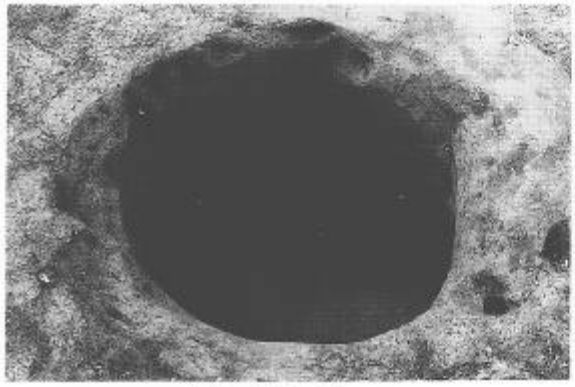
3　ＳＫＴ471完掘（西▷）



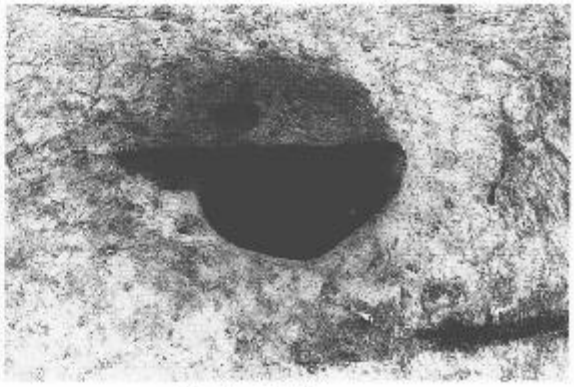
4　ＳＫＴ471断面（南東▷）



5　ＳＫ396断面（東▷）



6　ＳＫＦ473完掘（北東▷）



7　ＳＫＦ473断面（西▷）